女學世界

世渡り上手

第十巻第七號



治三十三年十二月廿[illegible]日第三種郵便物認可

治四十三年五月十三日増刊印刷納本（毎月一回廿六[illegible]

博文館

女學生讀むべからず

◎恩は身の仇

▲先には女學校御卒業の方々の花嫁の御試驗準備にと思ひまして化粧法の大要を申述べましたが、未だ御在學中の女學生並に新入學の御方々は斯る化粧法などは餘り御研究にならぬ方がお宜敷きかと存じます。實は此の間、或女學校校長の御談に、顏の美しい學生は比較的成績が惡くて困ると申されました。

▲さすれば在學中の女學生方は乳白化粧水**レート**若くは**クレームレート**などは忘れても御使用になつては不可ません、夫れは御顏が美しくなり過ぎるからであります。

▲廣い日本には名あつて實の無い、如何はしい化粧品も澤山ありますが、其んな品なら兎も角、乳白化粧水**レート**や**クレームレート**なんどは實際、確實に其の効能が現れるのですから堪りません。さればいろは譬にも、恩は身の仇とありますが弊店の化粧品は則ち御爲めに成り過ぎて却て御身の仇となる譯であります。

▲又平凡な言ですけれども「女學生は女學生らしかるべし」と申してあります通り、在學中は在中學のやうに、又、卒業後は卒業後のやうに、自から萬事に御心懸も違はねばなりません、從つて令夫人らしい女學生、藝者らしい女學生などが若しありましたならば其んな方は必ず學校內では注意女學生の部に編入され、世間では又必ず不審紙付の女學生の內に數へるに相違ありません。

▲然るに**レート**の如きは顏につけたからとて格別目に立たぬ樣でホンノリとした櫻色が出る位ですから、是ならば野暮な先生方はお氣が付まいと思つてうつかり御使用になると何時の間にか粹の粹の藝者も及はぬやうな美人となれるのですから大變です、忽ち某女學校長の談のやうに大事の學科に惡い影響が及ましては皆さんに對して御氣の毒である計りか、御父兄に對しては勿論、學校に對しても寔に不本意千萬に存ずるのであります。

▲皆さん能くお分りに成ましたか、若し誤解でも遊ばされては皆さんの御爲を思つて親切が仇に成ますよ、ですから平尾贊平製の乳白化粧水**レート**若くは**クレームレート**の二品は忘れても御使用遊ばしては不可ません特に**極內證**で御使用遊ばすなどは女學生の方々には以ての外でありますよ。

乳白化粧水レート
クレームレート　發賣元　平尾贊平商店

是非三越へ御注文被下度候

左に最も氣の利いた帯留と指輪とを御覧に入れ申候。御望み通りの御品、御仰付通り如何樣にも御調製可申上候。

東京駿河町

三越呉服店

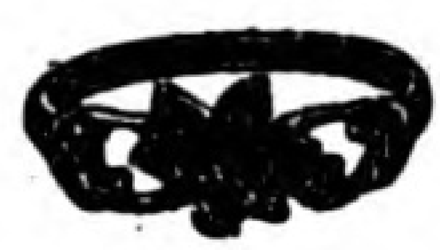
御注文案内書は御申込次第進呈仕候



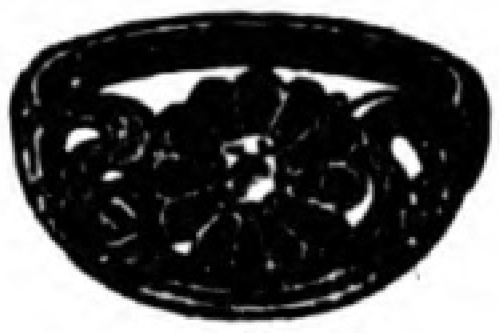
（二十五號帯留）十八金白金交トザ鏡透彫　十二円五十錢位



（二十六號帯留）十八金白金交光琳松透彫　十一円位



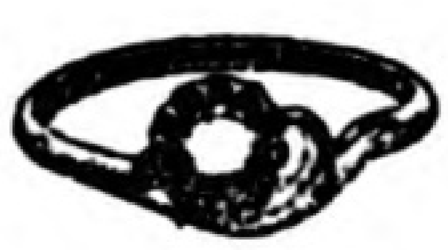
四十九號十八金
龍田川透彫
六円三十錢也



五十三號十八金
菊水ダイヤ入
三十円以上



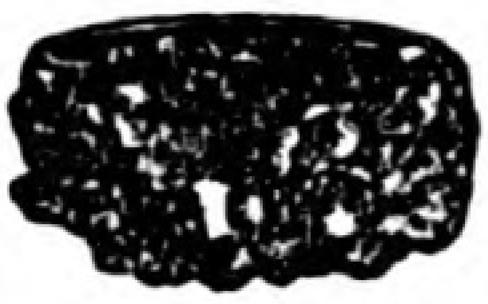
五十七號十八金
櫻にダイヤ入
二十五円以上



五十號　十八金
眞珠一個入
十　円以上



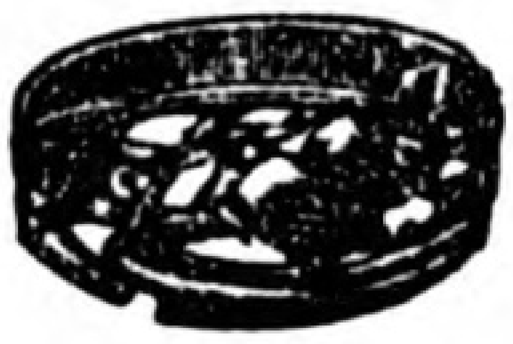
五十四號十八金
眞珠二ツ入
二十五円以上



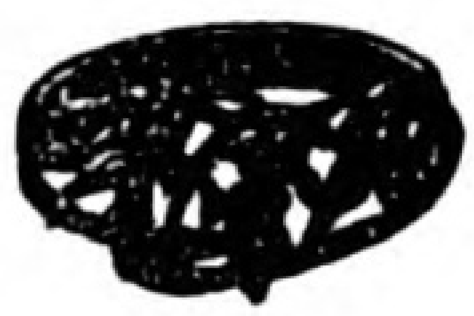
五十八號二十金
白金入櫻の高彫
二十　円位



五十一號十八金
ルビー入
六　円也



五十五號廿二金
芦に鷺（但し鷺は白金）
十五円位



五十九號廿二金
稲穂に水眞珠入
十四円以上



五十二號十八金
眞珠入
十五円以上



五十六號廿二金
白金交
鷺の高彫
二十円位



六十號　十八金
白金入枝櫻の透彫
五円五十錢

世渡り

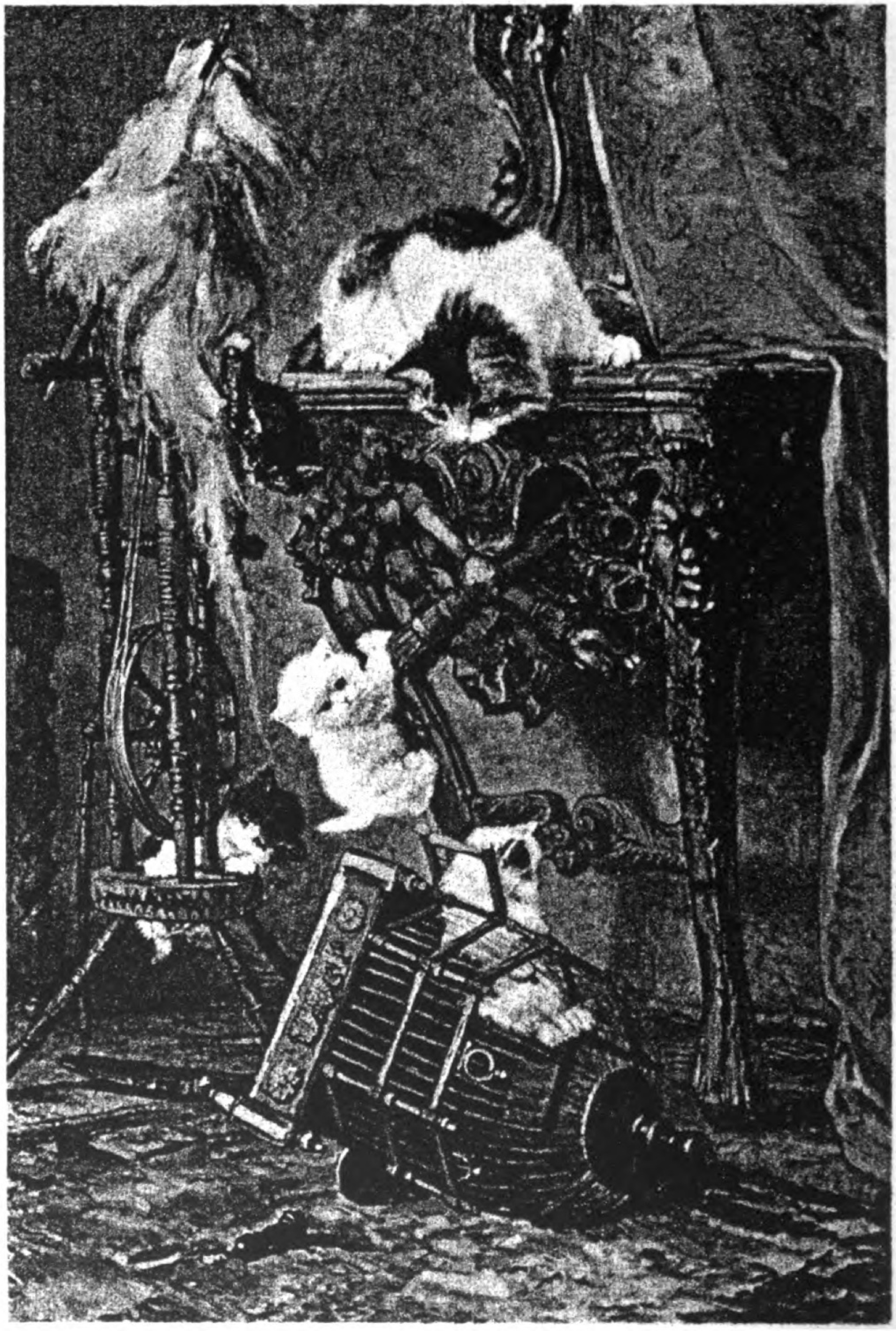
女學世界定期增刊





上手　第十巻第七號　目次

戯れ



田中製版所製

女子文壇第二增刊

都會の婦人

表紙口繪插畫 竹久夢二氏筆

五月十五日發行

定價金貳拾錢 郵稅壹錢五厘

女の見たる東京印象記……執筆婦人十餘名

日比谷公園、上野、不忍、神田、神樂坂、芝公園、西片町、根津、洲崎、谷中、銀座、魚河岸……其他

都會の渦捲に漂はされつゝある若き女の眞情……數十篇

長曾我部菊子の入京記を初めとして、冥想的なるもの、思索的なるもの、反抗的なるもの、暗黒的なるもの、實際的なるもの、凡て都會の壓迫と刺戟とに堪へかれて自ら表白し來れる眞情の叫び聲なり

都會生活の實際的方面……十數篇

生活の階級、花やかなるバザーの日、卒業式の前、欺かれたる工女の懺悔、某子爵邸に遊ぶ、お孃樣のお供、東京の女が著しく眼に着く點など各自其人の實驗を書せり

東京の地と東京の女……諸大家談

▲上京する女學生の注意……與謝野晶子

▲暗愁に囚はれたる女性……澤村文學士

▲詩に表はれたる都會……河井醉茗

▲衆議院傍聽記……さわらび

▲東海道線……一色醒川

▲西の郊外より……水野千枝子

▲南の郊外より……荒川澄子

創作

小說、散文、詩、和歌、俳句

都會を歩いてゐる女の印象

北原白秋、森川葵村、吉井勇、木下杢太郎、水野葉舟、前田夕暮、其他青年文士諸氏執筆

日比谷大神宮結婚式の記事……

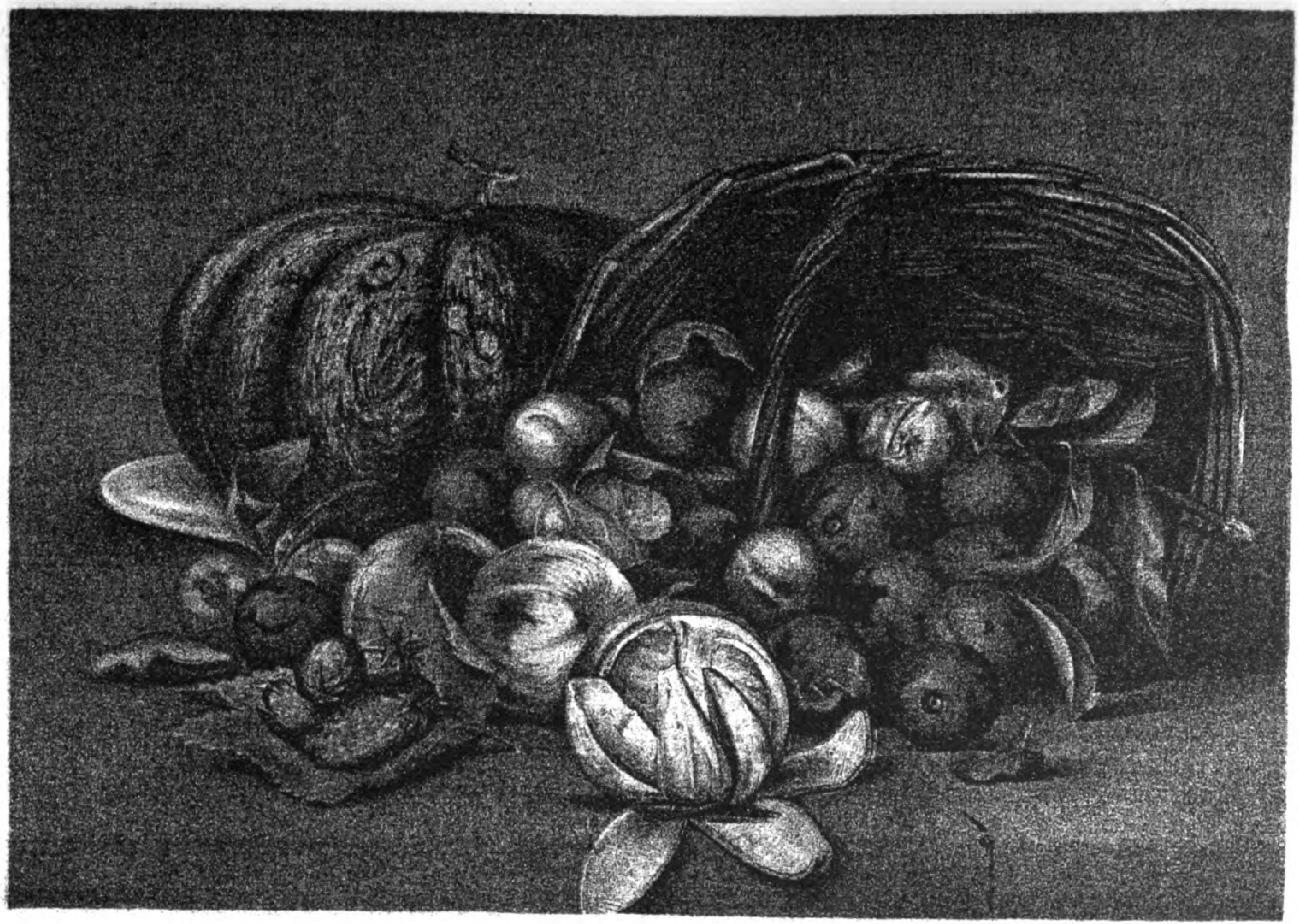
東京市京橋大鋸町 女子文壇社發行 (振替口座東京壹七貳九)

賣捌 全國雜誌書店

女(いの三)

女(いの四)

顆々清鮮



新輸入 肉體美容料 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても平素之を用ゆれば漸次肉體**純白色**に**變化**し肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物を治し艶美の容貌となる驚くべき効果を有す世上種々雑多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の美容新劑價並製壹圓廿錢特別製壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

飲んで色白くなる特効新藥 サーサパリラ

價壹劑貳圓七拾錢參劑七圓五拾錢五劑拾貳圓貳拾錢也

英國ロンドン「バーゴイン」製**清血劑**にして頑强なる皮膚病、猛惡の「サーサパリラ」は峻烈なる慢性梅毒、痳毒リウマチス等の病毒及び男女體內の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艷美**ならしむる奇効顯著の內服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候) 色白新劑と「サーサパリラ」と內外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

色白特効 ペーアス石鹸

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹸は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を擧げん**皮膚**を**潤澤軟密**にし**色**を**白**くし、**粗糙質**を治するは此石鹸獨特の靈効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する內國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を乞ふ)

血塊流下 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も迅速安全に**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を連用せば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず完全に流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑及び以上各藥の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似偽藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭 根治確證新發見藥

從來醫療實驗其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者に速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脱せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば**誓って根治**することを確證す殊に本劑にて一旦全治せば决して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる類藥と異なる處の本劑一種獨特の靈効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌せる病根を斷絕せよ實に不思議の新發見奇劑なり▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲(藥價)輕症根治分藥價送料共六拾錢▲重症根治分同上壹圓貳拾錢▲頑固慢性症根治分同上貳圓參拾錢▲切手代用は必ず二割增しの事▲着金即刻送藥す

以上五藥 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**

女（ろの三）



宮内省御用達
内外國金銀
名譽賞牌受領
米國アラスカ、ユーコン
太平洋博覧會に於て
名譽大賞牌受領
最上醤油之元祖
開業貳百六拾六年
上
千葉縣銚子町
釀造元 濱口合名會社
電話銚子十二番

女(ろの四)

緑のかげ



平福百穂筆

專賣特許

エンゼル香油

田原藥學博士の實驗御證明 清浦子爵 高山三山兩博士の實驗有効御證明 東京美術學校千頭教授の實驗有効御賞賛狀其他大家より多大の高評を以て迎られたる特許エンゼル香油は毛髪を黒化漆の如き光艶を出し且毛根を養ふ偉大の特効ある最新發見の高等香油にて殊に本品には目下歐米にて最も流行せる『ヘリオトロープ』『バイオレット』『ホワイトリリー』等の高雅な芳る香※

※を有し御使用後は馥郁として長時間保ちます故別に他の香水等御用の必要は有ません

見よ!!



又**くせ毛**の方はB號エンゼル香油御使用有れば如何なる天性の縮れ毛にても自然に矯正する不思議の特許品で有升

◉實價は小壜六十錢中壜壹圓大壜壹圓八十錢と天性難毛用特製三圓五十錢の四種で送費は市內は何れも四錢內地は小中壜迄は八錢大壜及び特製は十二錢です

東京市本鄉區東片町十五番地

電話 下谷二五六九番

振替東京二〇七四三番

エンゼル商會

天下一品

最上醬油

萬

釀造元 千葉縣野田町 茂木佐平治

賣捌所は各地とも有名なる酒醬油店に有之候

女(はの一)

世界無比

最新發明薬

あざ

入墨は廿日 ほくろ そばかす、なまず いぼは拾日

目に必ず美麗に除去す **痕跡**を殘さず

ろこと**保険附**新發明薬にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて**美質**を完うせよ來館者へは山の如き全治者の**感謝状**及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に天然の**世界唯一**の新薬也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なます、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する薬を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割増し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを徳用とす）着金即刻小包郵送す

らい病根治新劑

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多研究を重ね數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始めて完成發明したる最新薬にして其效力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似薬の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無效舊式賣薬に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚説に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絶し生涯永久の榮華を完ふせよ、本劑は輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

薬價送料共壹劑五圓拾錢特別製拾圓拾錢

毛の必ず生る確證薬

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生薬なり、即ち男女共腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、其他に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮蒼々と發生する特效あること確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はゑ薬とは其效勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付孝に玉瓦混同視すること勿れ

藥價特別製分五圓卅錢▲大瓶貳圓卅錢▲中瓶壹圓廿錢

奏効確證 美容新劑 やせる薬

本劑（薬名ヨードチリン錠）は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり。顔赤くほてり。のぼせ症。卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脱し美容健康を保ち程よくやせる特效薬なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇效を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢着金即刻送薬す

美き聲の出る新薬

▲薬名……ウエーヌス

▲聲美くしくして…淑女は窈窕たり▲聲麗しくして…男子は威嚴あり▲聲は人格を高尚ならしむる要素なり…謠曲家、演説家、音樂家、藝人は聲音即ち其人の生命なり。發聲薬は古來世に甚だ多し然れども其確效あるものは恐らくは疑はし。獨り此「ウエーヌス」の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり。「ウエーヌス」は實に無上の發聲薬として千古未曾有世界唯一の靈劑なり。特別製分を服すれば直に充分なる美聲を發すること確證す。

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓廿五錢

腦病を根治し記臆力を増進する靈劑

滋腎 回春 **記臆増進丸**

（薬價）七週分四圓五拾錢五週分三圓六拾錢參週分二圓三拾錢壹週分八拾錢（送料）各拾錢宛

本劑は獨逸大醫スクリーボロト氏の新處方に基き醫學的の元理に徵し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば**腦病、神經病**を根本的に**根治**し精神爽快智力活潑となり**記臆力大**に**増進**し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特效ありて如何程の健忘者記臆力缺乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記臆力大に増進すること嘗て確證する所なり論より證據實試一番速に其卓絶顯著なる奇效を知れ

以上六薬**專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館薬房**

河崎醉雨君著　名和永年畵伯畵

▲近刊▼

少女小說

花子の行衛

花子は春野子爵が秘藏の令孃也、一日父母に從ふて野外に遊び、忽然其の姿を失ふ、不思議、不思議！魔に魅まれしか、猛獸毒蛇の口に罹りしか、忽ち世の疑問となり、玆に一場の悲劇を惹き起しゝが、堅忍不拔の一少女あり、單身以て山河を跋涉し、遂に其の行衛を探り得て歸る、作中また一狂婦人ありて躍動神魔の如く、波瀾萬疊、實に血あり淚ある一物語たるを疑はず。

洋裝四六判
裝幀頗美本
挿畵數葉拾

東京日本橋本町三丁目　博文館　振替口座東京二四〇番

增訂五版

東京苦學成功案內

見よ!!! 現時成功者の大半は皆自活的苦學生也

苦學立身成功を望む者は速かに本書を見よ!!! 本書は著者が數年の實驗に依り公にせるものにして即ち學資なき者の爲め獨立自活以て勉學成功の方法を詳記して些の遺憾なきものなり

目次

●緒論●金満學生の無能●最後の勝利は苦學生也●出京の準備●出京の注意●苦學の門戶●周旋業の內幕●注意すべき事務員募集●欺かれ易き市內の惡魔●苦學の方法●下宿生活●自炊生活●苦學に最も適當なる職業：：二拾種●苦學に最も適當なる有望の學校：：十三種●金を吳れる學校●貸費で養成する學校●其他の學校●諸種就職の手續●成功の秘訣●結論●著者一言●外數項▲增補：：：：數項

定價一冊(送料共)金貳拾七錢
切手代用三拾錢、振替送金貳拾八錢

高評新刊

立志成功　東京生活

東京にて成功せんとする者は速かに本書を讀め!!!

目次

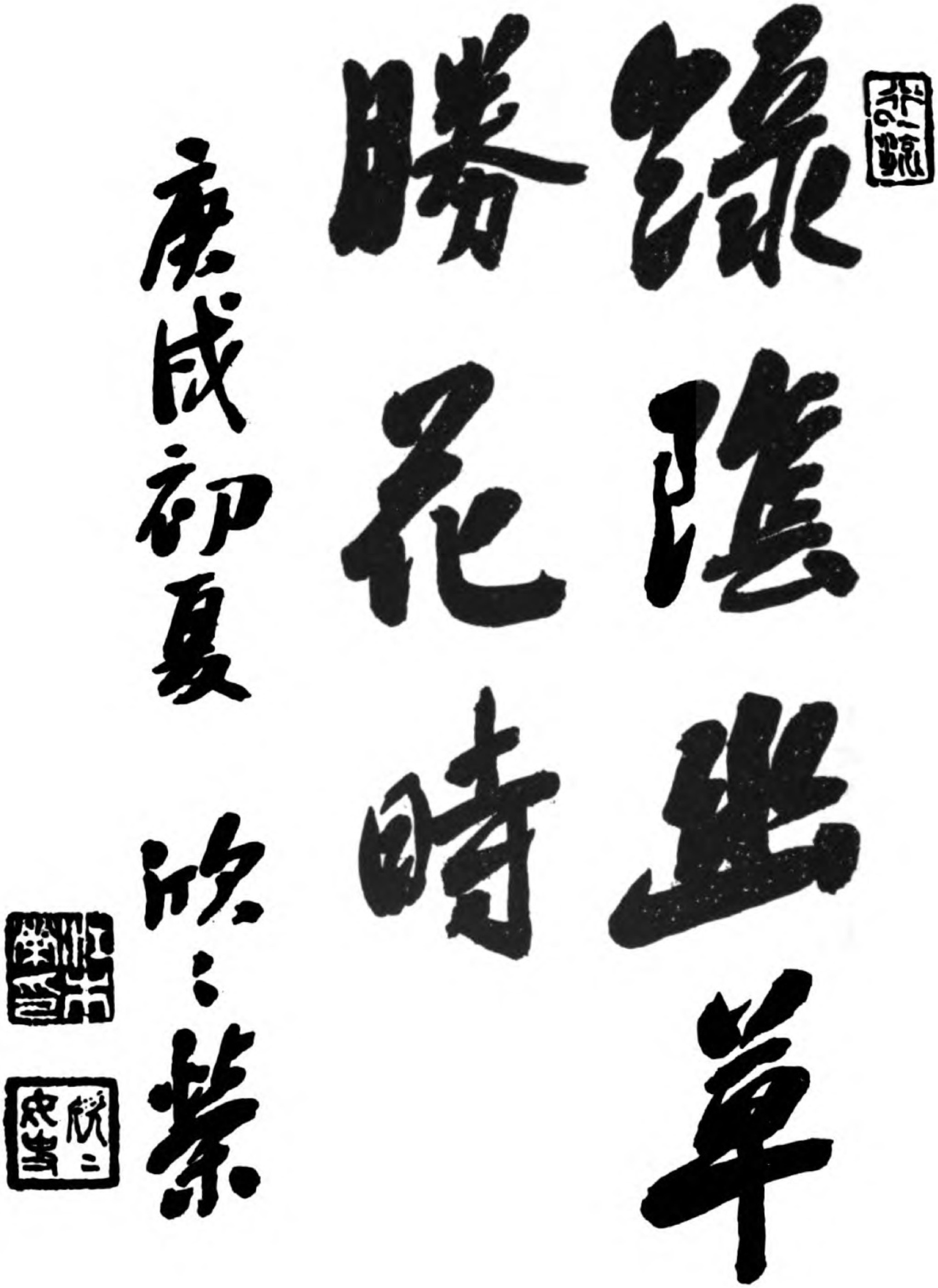
緒言●成功と東京●地方人は何故に成功速かなる東京を危ぶむか●地方人出京の注意●成功を期する出京者は斯の如き準備を要す●：：：五項●出京第一探るべき方法は何か●資本なき者は如何にして生活すべきか●東京に於ける生活は斯の如き注意を要す●東京に於ける職業は斯の如き注意を要す●東京に於て成功を期する者は斯の如き方法を採れ●無資本にて出京し僅か半年にして數千の富を得たる實例及其生活の方法●資本ある者の採るべき生活方法●結論

一冊送料共金貳拾七錢　切手三十錢振替廿八錢

發兌　東京神田區西小川町二ノ九番　振替口座東京二〇四五五　盛文社

女(はの三)

文（はの四）



栄欣々女史筆

雲雀



平福百穂筆

五月一日より

夏季新柄大陳列

●特製中形浴衣地
●新輸入洋服地類
●流行洋傘夏帽子
●よせ切見切切反物

東京日本橋

⌂白木屋呉服店

(にの一)

婦女界に於いて新智識の涵養を努めつゝあるは本講義也

諸孃は躊躇せず此際迅速に御入會せられよ

▼內容見本殘部少數あり至急申込あれば進呈す▲

女子大學講義

月刊雜誌家庭は學藝と家政との調和を計り加ふるに新教育を基に編輯せる雜誌にて會員に限り毎月無代配布す

編輯所 日本女子大學櫻楓會

發行所 東京小石川區 精美堂

卒業期貳年

女(にの二)

女(にの三)



簞笥目錄 送呈仕候
商品切手 調進仕候

鶯塚高等簞笥店

TRADE 清 MARK

東京市京橋區金六町角
電話新橋五百七十一番

階上階下
大陳列場
正札販賣



佐々木信綱先生 渥美雅子女史共著

新撰女子用文

（第六版）
正價三十錢 郵税六錢

東京府女子師範學校長 林吾一先生題辭
前女子師範學校禮法講師 中島義弌先生著

新撰女子作法書

正價廿五錢 郵税四錢

——((發兌元))——
東京本町 博文館
東京神田 東京堂

美術造花

通信教授

二ヶ月卒業▲遠國の自宅で男女誰にでも和洋造花、花輪、花簪等美麗に出來る卒業後は就職に便あり▲案內書付製品見本は郵券十錢送れば直に呈す

東京四谷區麴町十二ノ九
美術造花傳習所



模造果實通信講義錄

此講義錄は六十種の果菜を**新工夫**の彩色法、製作法にて丁寧に圖解入にて說明しあれば遠國の自宅にても直接教師に習ふと大差なく**美麗**に出來る**保證**す▲二ヶ月卒業、每月二回發行
會費全部で僅に六拾錢委しき事は案內書にあり郵券二錢送れば直に呈す

女(にの四)

富美宮泰宮兩内親王殿下



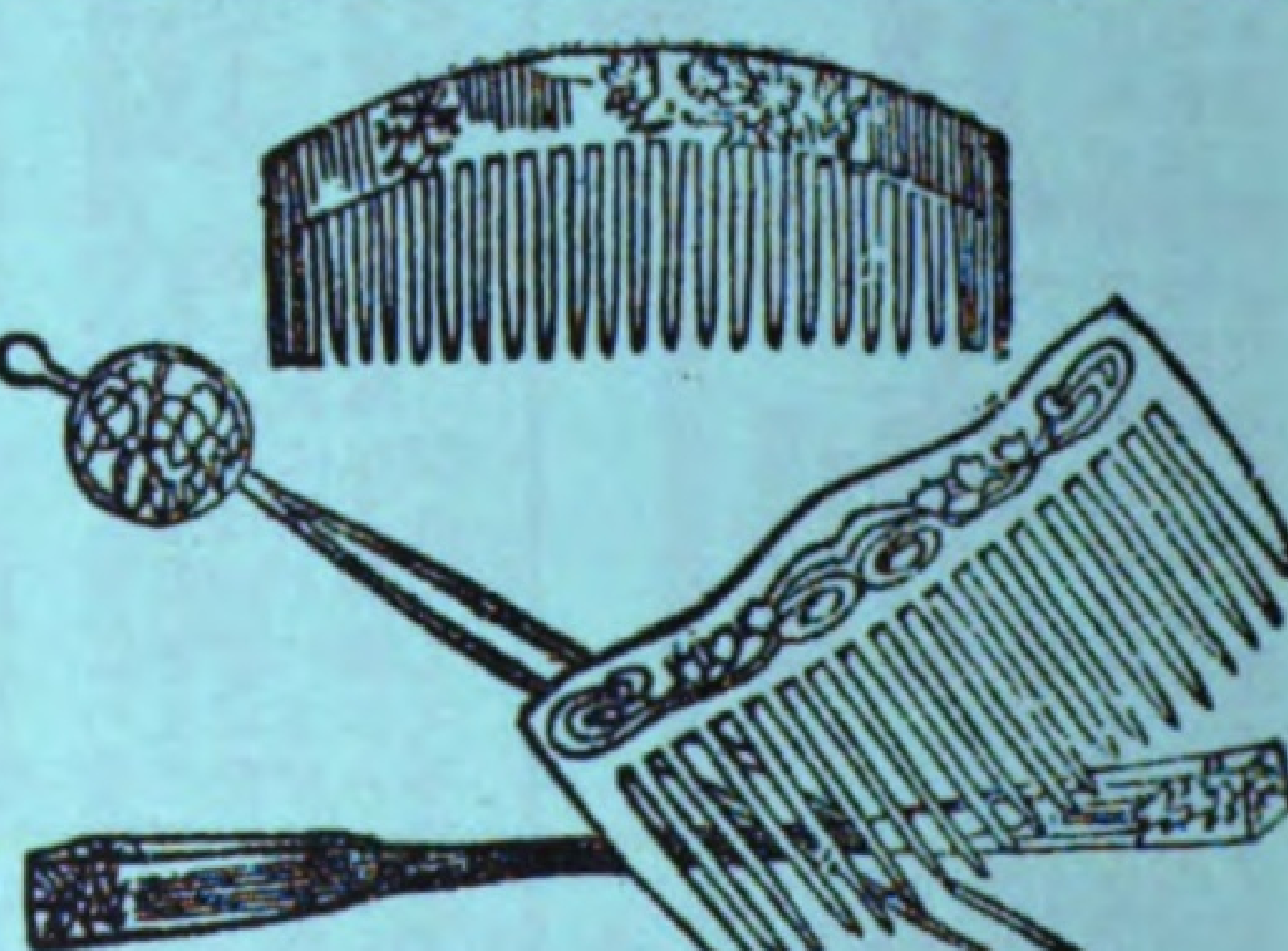
山階宮安子女王殿下



山階宮安子女王殿下は東寺なる叔父宮　父宮殿下の御位牌御參拜の爲去月四日京都に成らせられしが、この寫眞は即ち其の折御邸御出門の光景なり

社友京都今尾掬翠撮影





儀式用鼈甲櫛笄
象嵌蒔絵櫛中差
金銀寶石入簪指環帯留
繡縫珍取紙入手提
花簪
化粧具

巴里府の生粋を直輸する高尚なるリボン
ハイカラの櫛べーアピンは尤も市内女學
校の諸孃方の御愛顧を忝ふす

東京市神田須田町電車乗換場

婦人装飾小間物商 三井屋本店

電話本局二〇七六番
振替貯金口座東京二一八一番

新橋際博品館内支店　神保町東明館内支店

破格の正札廉價なるは他店に不讓地方の御註文
多く代金引換小包にて送荷しつゝあり

文(ほの一)

醫學士 石原喜久太郎君編

新編家庭衞生

本書前篇「緒論の部」は衞生に關する汎論にして、後篇「各論の部」は○住居の衞生○衣服と飲食物○季候と衞生○旅行と轉地○子供○姙娠と產褥○病氣の七章よりなり衞生上の諸題目を凡て是等各項内に網羅して最大漏さず殊に行文は平易通俗論者は實地應用を主とし叙事明晰說明懇篤を極む之を家庭に備ふれば一家衞生の眞指針たり加ふるに又醫師醫學生の眞友諸學校衞生教科の參考書たるに適すべし

菊判洋裝總クロース
紙數五百五十頁
正價壹圓廿錢送料八錢

米國醫學博士アイ、ピー、デーヴィス氏原著
海軍大軍醫 隱岐敬次郎君譯述

女子衞生學
附 結婚論

女子衞生學は米國の大醫アイ、ピー、デーヴィス氏の著にして譯者米國漫遊の砌特に著者の委囑に依て譯述を約せしの珍書なり其說く所世の年少婦人特に妙齢の女學生の爲に懇切叮嚀を極め、片言隻句皆な衞生の原則、人道の眞理ならざるなし、且つ米日素と國俗風習を異にし女尊男卑の淵源たる米人の所說なるにも拘はらず或點までは主張の頗る孔孟主義（實に女大學）に近邇し又た文明の粹華を訓ふるに拘はらず反つて東洋の教義に則とれるが如きは最も東西折衷主義を能く發揮して毫も餘蘊なしと謂ふべし尙附錄とする結婚論は文學家として有名なる英國のハーディー氏が世の青年男女の爲めに書かれたる趣味豐多の珍書にして着眼の奇警なる將た觀察の妥當なる讀者をして不覺通讀の妙を得せしむ。

洋裝袖珍總クロース
頗美本紙數約三百頁
正價三十錢郵稅六錢

千葉勝景君 鹿島櫻巷君共編

家庭衞生訓

健兒は健全なる家庭より造り出さるゝなり、我日本が有史以來未曾有の大捷を博したるも、その健全なる家庭に出でたる健兒が力に歸せざるべからず而して健兒の養成は戰捷國の急務なり、本書は著者が多年家庭に於て經驗したる衞生上の注意を記述したるものにして節々句々悉く健全なる家庭を造るべき要素を指示し其文頗る平明にして一讀誰人にも能く了解し得べき家庭必備の寶鑑なり

洋裝菊判半截
紙數四百〇八頁
正價卅五錢郵稅六錢

東京本町 博文館

女（ほの二）

宮本桂仙君著

西洋男女交際法

全一冊 袖珍美本 紙數 三百三十頁

正價金廿五錢 郵稅六錢

我國由來禮儀の國と稱するも唯從來の作法を其儘今日應用すべきにあらず須らく日進の文化に伴ふて必要の變化を加へざるべからず著者久しく歐米の禮式を研究し其實驗に基き今後日本社會に必要なる日常の作法を青年士女に懇示し併せて日本禮式と交際法の連絡を適融す實に新日本人士が必ず一本を机右に備ふる要書といふべし。

東京美術學校教授 白井雨山君校閱

同校得業士鈴木、森田、牧野、三君合著

應用家庭美術

全一冊洋裝中判 並製三百廿六頁

正價金四拾錢 郵稅六錢

◉緒言研究の順序◉日本畫△沿革△畫筆及刷毛の種類外九目◉西洋畫△沿革△研究の順序△鉛筆畫の用器外二十二目◉彫刻△沿革△木彫の用具外八目◉象牙彫刻△用具△象牙の種類外二目◉彫金△鏨の製作法△象眼の方法外二目◉大理石彫刻△用具△錐揉の方法△大理石彫刻の應用◉塑像△油土と用具△塑像の用具△陶土原型の作法外九目◉鑄金△型土の製法△挽型の作法外八目◉蒔繪△沿革△用具△材料外九目◉陶磁器△沿革△陶土の製法外十目◉造花△用具△材料△順序外二目

近藤正一君著

女子職業案內

全一冊三六判洋裝並製 紙數四百五十八頁

正價四拾五錢 郵稅六錢

女子の生活●女子の獨立●女子の職業●小學校敎員●中等敎員●家庭敎師●保姆●閨秀文學家●女記者●閨秀畫家●音樂家●寫眞師●割烹敎師●茶道敎師●挿花の指範●女醫●看護婦●產婆●東京郵便局の事務員●電話交換手●日本銀行女子事務員●通信局電務課員●女子の商店員●三越呉服店の女店員●速記業●婦人の謠曲師範●編物師と編物敎師●裁縫敎師と裁縫師●繡工●女工

東京本町 博文館 振替口座東京二百四十番

女(ほの三)

女（ほの四）

名流小照



徳川伯爵（田安家）夫人知子（島津忠重公の令姉）



戸田伯爵夫人極子（故岩倉公爵令妹）

名家の令孃



上圖、秋山きく子（前大審院判事秋山源藏　令孃）
中圖、土方貞子（法學博士土方寧氏令姪）
下圖、原田年子（故大審院部長原田種成氏令孃）

女（への二）

婦女必讀の大全書

第九編　禮式と作法
女子高等師範學校教授　佐方鎭子女史著

第十編　惣菜料理
赤堀吉松君、赤堀峰吉君、赤堀菊子女史共著

第十一編　編物指南
女子技藝實踐學校編物科主任　三木とみ子女史著

第廿編　家庭遊戲法
高橋忠次郎君、松浦政泰君共著

第廿一編　書道手引
歌道書道專攻大和會々長　井田秀生君著

第廿二編　歌の手引
大和田建樹君著

第廿三編　刺繡術指南
刺繡術專門　磯村大次郎君著

第廿四編　摘み細工指南
山田興松君著

第廿五編　新式化粧法
藤波芙蓉君著

●序説（化粧の第一義：外四項）●顔容美化の基礎的方法（皮膚美の攝養：外十一項）●化粧美術（通道と別道：外十三項）●化粧美化の美術の方式：△美的沐浴法（七項）△肌膚美攝養（十三項）▽扮飾美化の手段（卅二項）●手足美育成の方途（等閑視去られたる手足美の育成：外八項）●毛髪美養の秘訣（毛髪と人體美：外廿七項）●化粧品の選擇と調製（扮飾美化と化粧品との關係：外十二項）●歸結（顔容美と服裝美との關係に就て、化粧と鏡臺）

第廿六編　室內裝飾法
近藤正一君著

【第一章】總論（室内裝飾の要旨●家屋の構造と室内裝飾の關係●裝飾の四季外十六項）【第二章】四季の座敷飾の一（春の室内裝飾●初春の書院飾●初春の廣間飾外八項【第三章】四季の座敷飾の二●夏の廣間飾（夏の室内裝飾●首夏の廣間飾の二外九項）【第四章】四季の座敷飾の三（秋の室内裝飾●初秋の書院飾●初秋の廣間飾外七項）【第五章】四季の座敷飾の四（冬の室内裝飾●初冬の書院飾●初冬の廣間飾外七項）【第六章】器具調度の配置とその飾り方（床の間の飾り方●床脇違ひ棚の裝飾●床脇地袋棚の裝飾外二十七項）、第七章、各室特殊の裝飾法（日本式座敷飾●書院は如何に裝飾すべきか外三十一項）

第廿七編　衣服の調整
石崎篁園君著

本町三丁目　**博文館**　振替貯金口座東京二四〇番

女（への三）

文學博士坪内逍遙君序　文學博士上田萬年君序

文學士佐々醒雪君著

俗曲評釋

近世三百年の歌謠、俗曲中の名篇は悉くこゝに網羅せられたり、著者は現代唯一の俗曲研究家にして且つ頗る近世の文藝に精し、況や各篇近代の風俗に精通せる諸方が百方考證を重ねたる艶麗なる挿畫あり乞ふ、世間の片々たる評釋書とは同一視せられざらんことを

第一編　江戸長唄　全一册

四六判洋裝總布　美本挿畫十數葉　定價五拾五錢　郵税金六錢

杵屋が一流は俗曲中の上品なるものとして今や中流以上の家庭にも入れり世人は道成寺といひ草摺引といひ勸進帳といふ名をのみ熟知すべししかもその構造や變遷や意義や總て茫乎として捕捉し得ざるにあらずやこれ等が「專ら專門家や通人側の專有に歸して新代とまるきり沒交渉となり行かんとすることは我國樂の前途の爲恐くは容易ならぬ損失らし」とは坪内博士が本書の爲めの一節なり新代の文藝に關與するもの亦一讀せざるべからず

第二編　箏唄　全一册

四六判洋裝總布　美本挿畫十數葉　定價五拾五錢　郵税金六錢　【新刊】

琴曲の註釋は古來屢々上梓せられたり然もよくその眞相の説明を盡して餘蘊なきものは獨り本書なるべし殊に平易通俗の文を以て組唄の全曲及び生田流山田流の名曲を丁寧親切に註解したれば婦女童幼にも難解の患なかるべく苟も箏唄を學ぶ者琴歌を聞くものは一本を備へざるべからず且つや箏の組歌は我邦の歌謠史中最も特色ある者にして中古の今様より生れ出でゝ明治の新體詩の祖たりとすれば本書は亦蓋し新詩人の一顧に値するに足るべし

第三編　河東　全一册

四六判洋裝總布　美本挿畫十數葉　定價五拾五錢　郵税金六錢　【近刊】

江戸文藝を知る者は團十郎が助六の名を記憶せん、助六の名を知るものは河東節を忘るべからざるなり團十郎と助六と河東節と、これ江戸隨一の名物にして而して河東節は實に近世歌謠の粹として蜀山人の激賞せし所今著者は江戸時代に對する蘊蓄を傾倒して俗曲の至粹を評隲する者世間の讀書子豈等閑に附して可ならんや

續刊……▼第四編 上方唄　▼第五編 常磐津　▼第六編 端唄

發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館

女(への四)

令孃かゞみ



右側（1）大森後藤芳子（2）麹町高木いよ子（3）麻布山田ゆり子（中央）麻布金子たつ子

左側（1）芝小澤やす子（2）同平井絹子（3）麻布山田孃

新郎と新婦





右は日本郵船會社長近藤廉平氏令孃と新郎、左は仁壽保險會社重役長鄉泰輔氏令息と新夫人

醫學博士井上通泰先生監修

第一篇以下數版

家庭衛生叢書

全部完成

全部二十冊洋裝菊判美本〇正價一冊貳拾錢郵税六錢宛

第壹編

口繪 北里、長與、金杉、土肥の四博士(肖像)
▲傳染病の話…北里博士
▲胃の攝生法…長與博士
▲眼科衛生談(第一)…井上博士
▲血族結婚と聾啞との關係…金杉博士
▲淋疾と家庭〜土肥博士
雜錄 患者を生じたる時の注意(第一)

第貳編

口繪 宮本學士 木下博士(肖像)
▲膓窒扶斯に就て…宮本學士
▲婦人の衛生一般…木下博士
▲婦人及小兒の眼の衛生 桐淵博士
▲眼科衛生談…井上博士
雜錄…七項

第參編

口繪 三輪、井上、緒方、富士川四博士(肖像)
▲室内空氣に就て…緒方博士
▲眼科衛生談…井上博士
▲小兒科一般…三輪博士
▲小兒の衛生に就て…弘田博士
▲遺尿症に就て…朝倉博士
雜錄…六項

第四編

口繪 博倉博士 井上博士(肖像)
▲膓胃の話…井上博士
▲耳の攝生…岡田博士
▲乳兒の衛生に就て…緒方博士
▲狐憑とヒステリーとの關係…吳博士
▲眼鏡の話…井上博士
雜錄…六項

第五編

口繪 三輪博士 岡村博士(肖像)
▲創傷の話…三輪博士
▲神經の攝生に就て…吳博士
▲ヂフテリアの話…宮本學士
▲皮膚の衛生に就て…岡村博士
雜錄 肺結核豫防法…二件

第六編

口繪 大澤博士 三島博士(肖像)
▲ペストの話…宮本學士
▲身心の養生…大澤博士
▲家庭に於て注意すべき二三の學校衛生…三島博士
▲産時の創傷傳染…木下博士
雜錄 肺結核雜話…十五件

第七編

口繪 遠山博士 筒井博士(肖像)
▲黴毒に關する家庭の注意…筒井學士
▲家庭と黴菌…遠山博士
▲姙娠中の攝生 緒方博士
▲便秘の話…井上博士
雜錄 花柳病の雜話…十八件

第八編

口繪 木村博士 緒方博士(肖像)
▲婦人姙孕力の話…伊庭博士
▲肝臓の話…木村博士
▲分娩時の攝生 緒方博士
▲色盲の話…井上博士
▲小兒の身體上の監視井
に感冒の話…瀨川博士
人工滋養品の
雜錄 話

第九編

口繪 瀨川博士 伊庭博士(肖像)
▲肺癆の話…井上博士
▲婦人姙孕力の話(第二)…伊庭學士
▲小兒の蟲及癇の話…瀨川博士
▲産後の攝生…緒方博士
雜錄…五項

第十編

口繪 林博士(肖像)
▲飲酒血族の退化…林博士
▲不姙症の話…伊庭博士
▲生殖の話…大澤博士
▲消毒法の大意 遠山博士
雜錄…三項

第十一編

口繪 吳博士、楠田謙藏先生(肖像)
▲癲狂村の話(上)吳博士
▲最適當なる日本婦人の結婚年齡…楠田先生
▲消毒法…遠山博士
▲葡萄酒の話…林博士
雜錄…八項

第十二編

口繪 陸軍々醫監 賀古醫學士(肖像)
▲聾啞の話…賀古學士
▲癲狂院村の話(下)…吳博士
▲慢性銅中毒の話…林學士
▲口内衛生に就て二三の注意…石原學士
雜錄 食鹽の話
終刊の辭

(その一)

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇番

第五巻第七號 既成發行

少女世界

本文紙數百廿八頁
口繪美麗なる石版寫眞版澤山
正價金拾錢 郵税壹錢

東京本町 博文館

口繪と表紙

○中將姬……(河合英忠)○初夏……(岡野榮)○伊勢の少女會○岐阜の少女會○お人形○女學校寫眞○誌友の面影（以上寫眞版）

本文の記事

▼お伽小説 鶯塚……巖谷小波
▼西洋の少女と日本の少女……佐々木敎授 ▲夕の星……櫻井百合子 ▼冒險小説 腕輪の行衞……押川春浪 ▼少女小説 母の家……西村渚山 ▼少女小説 舊友……沼田笠峰 ▼契沖の歌……佐々木信綱 ▼乳母ぐるま……さくら子 ▼ひぢつきの編み方……石井とみ子 ▼伊勢と岐阜の少女會記者 ▼少女史談 ひばり山……竹貫佳水 ▼漂流少女……江見水蔭 ▼家庭の少女…… ▼繪畫發表 少女會館……大盛況



（その二）

新撰名勝地誌

全部十二冊

田山花袋君編

一巻 畿内

續刊

第二 ▲東海道西部
第三 ▲東海道東部
第四 ▲東山道西部
第五 ▲東山道東部
第六 ▲北陸道
第七 ▲山陽道
第八 ▲山陰道
第九 ▲南海道
第十 ▲西海道
第十一 ▲北海道樺太
第十二 ▲臺灣琉球

毎編（洋装四六判總クロース
紙數約五百頁
正價六拾錢・郵税十錢）

本書は日本全國に於ける名勝を半ば地誌的に、半ば案内記的に記述せんことを企てたるものにして、全部十二巻より成る。其特色を謂へば、交通路に由りて名勝を記したること其一也、産業沿革にも出來得る限り注意を拂ひたること其二也。つとめて新しき材料に由りてこれを記したること其三也。旅行者の伴侶たらしめんが爲めに紙質を精選し、装釘を堅牢ならしめたる其四也。ことにその最も特色と稱すべきは、編者の足跡殆ど海内に遍ねく、殘山剩水と雖も訪はざるなく、探らざるなく、從つて其記述と排列と頗る精確を極めたること是也。況んや編中處々に各名勝地の寫眞數十葉を挿入し宛然人をして足其地を踏むの思ひあらしむるに於てをや。旅行せんとするもの、各地の名勝の分布を知らんと欲するものは、來つて本書を看よ。



發兌元
博文館
日本橋區本町
三丁目

（その四）

新婚の當日





右圖は今春華燭の典を擧けし紳商原六郎氏の令孃たき子と其新郎又左圖は某實業家の令孃にして勸業銀行員奥忠氏の配なり

大阪割烹學校夏期講習會





鳩山春子女史序文　前田雪子女史著

巴里婦人の交際振 奥樣の顧問

全一冊三六判
紙數四百四頁
正價四十八錢
郵稅六錢

花園に下りて花の一枝を折らんとせば、先づ必ず其が中の精粹を取るならん、本書は歐米交際界に花の王と稱せらるゝ巴里婦人の輕妙なる應對振、訪問振、談話振、舞踏振を始めとし、宴會法、婚姻法、外出法等あらゆる禮法を網羅したれば、苟も文明の禮法を學ばんとする奥樣方、特に未來の外交官夫人とならるゝ淑女令孃方は一本を購求し給はゞ、二十世紀の社交界に立ちて華々敷く活動することを得べし。

田村江東君著

活動せる 實業界の婦人

全一冊洋裝菊判紙數二百四十頁
卷頭實業家婦人寫眞版挿入
正價金三十八錢　郵稅八錢

（内容）

△勤勉力行の化身…三枝かれ子△文明の美化…菅川英子△發明家の妻…仁科懿子△内助の憂なき婦人…山崎ため子△獨立自尊の標本…篠原よれ子△隠れたる偉勳…川合こう子△黒りボン…伊藤なか子△時計の針の挽みなき妻…服部まん子…△夫婦共勵の醫師…篠田せい子△白牡丹の姉妹…松田八十子大西琴子…△寧ろ襤衣を縫はん…樂利舞子△準備教育を受けし嫁…佐藤歌子△才徳兼備の良妻…龜井まき子△商業教育の産物…宮成梓子△福徳圓満の内儀…横田鉄子△商賣繁昌の秘訣…内田とめ子△夜店の女書肆…片桐なか子△實踐躬行の才女…山崎きみ子△白芙蓉…丸茂宗子△此母にして此嫁あり…大橋きよ子△妙齢の女書記…秋山德子△中洲の四大后…佐々木縁子△光榮ある襤衣の元祖…茂野蝶子△實業家の理想的婦人…雨宮信子、同てる子

福田琴月君著

當世奥樣氣質

再版

洋裝四六判紙數二百頁　正價卅錢　郵稅四錢

（目次）

◎奥樣十種　◎人の噂　◎結婚前の某孃に答ふ　◎大みそか　◎土産日記　◎奥樣となる事は易く奥樣たる事は難し
◎あはれな誇り　◎會社員の奥樣　◎母よ　◎霜夜　◎奥樣の失望　▲餘興　◎滑稽戯の痛燒

東京本町
博文館
振替口座番號
東京二四〇

（ちの二）

産科婦人科楠田病院長 楠田謙藏先生校閲
産科婦人科専門醫 稲生鑑次郎君纂著

實習産婆學

全二冊

洋装菊判美本

上巻 **通常産** 紙數三五〇頁

下巻 **異常産** 紙數約三〇〇頁

◎上巻正價金七十錢 ◎下巻正價金八拾錢……▲郵税各一冊十錢

上巻は通常産を講じ下巻は異常産を述ぶ通常産の異常産に於ける産科の兩輪双翼にして助産婦たるもの相共に精修練磨せざるべからず然るに其一を修めて其一を習はざれば到底開業者たる資格なく又産科實習の効用を得ざるべし上下完全して其全科を實修し得べし殊に行文の平易なる挿畫の精密なる世上未だ如此親切懇到のものあるなし開業者は素より本科の生徒諸孃は早く此要書を得て研修の便を得らるべし

報知新聞家庭記者

天野誠齋君著

家庭宝典 臺所改良



全一冊 菊判和装美本 紙數約二百三十頁

定價四拾錢 郵税六錢

口繪 彩色石版畫壹枚 挿畫數十個

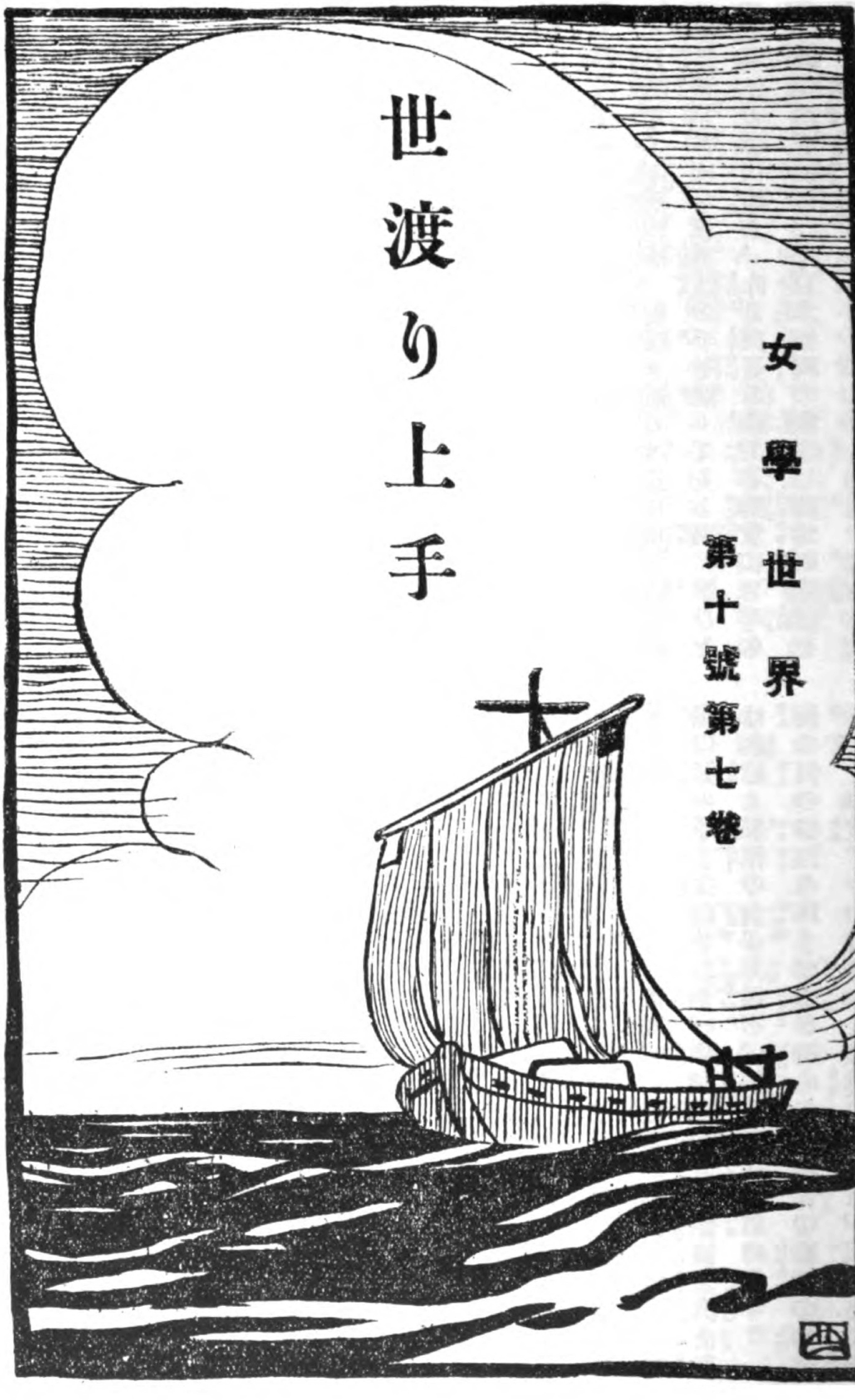
(本書内容)

◎食物は如何なる臺所にて料理すべきか◎何な第一に改良すべきか◎清潔の應用法◎竈の構造◎臺所の位置◎食物と黴菌の關係◎釜の動力◎蒸籠の動力◎瓦山式消毒蒸籠◎洗流しの水使ひ方◎完全濾水器◎竈の改良◎改良竈の便利◎料理ストーブの改良◎布巾の取扱方◎布巾掛の位置◎流し元の改良◎把藁の取扱方◎臺所日記の附方◎料理臺の置き方◎臺所の掃除◎台所の規律◎米國の實況

◎掃除の仕方◎塵拂の懸け方◎雜巾の掛け方◎床下掃除◎鼠不入の掃除◎鼠不入の改良◎台所の模範實例◎下水の掃除◎下水の改造◎下水の清潔◎流し元臭氣止◎下水と傳染病◎塵箱の改良◎廚の處分法◎飲料水の位置◎場の洗い方◎堀井戸の水と水魚類豆腐類◎女中の使ひ方◎女中部屋の整理◎台所の經濟◎改良の台所道具等其他數項

女(ちの三)

博文館 東京日本橋本町三丁目 振替口座東京二四〇番


世渡り上手
女學世界
第十號第七卷



戰はずして得たる勝利

清水玉露

一筆示し上候

春は參り候、春は參り候、東都は今や歡樂の巷と化して人は皆靑春の夢にあこがるゝ春は參り候、三越に白木に若く美しき貴婦人はごむ輪の御車走らせて綾ある絹の撰り好みに長き日の暮るゝも知らず醉ひ給へば、月朧なる不忍池畔、櫻咲き亂るゝ丘に目元艶き紳士は足元しどけなき美妓の手を取りてそよ風に醉ひをさまさむとなし給ふ、昨日東臺の森深き樂堂にワグネルの歡樂境を聞き、今日木挽町の劇場に薄雪姬の戀を見る、面白の春の日やよろこばしき人の世や血潮ももゆる若人と生れし身こそうれしう候へ。

あゝされども年月に關守りなく行く水は再び歸らず若き日のいつまでか續き候べき、年々花は咲き盛れど乙女はいつも乙女ならず、歲々春はめぐり來れど人は次第に老い行きて過ぎし昔を思ひ出るのみ歡樂極まりてうれひ起り樂しき裏に淚ひそむ、複雜の世の樣やむつかしの人生や、あはれかゝる浮世に生れ來し人の身こそ悲しう候へ。

はかなき世に生れし人のましては弱き女なれば憂き事々の數々を何として凌ぎつゝ、むつかしき此世の中を如何にして渡ると思す？ 女は弱しとあなどり給ふな大象も髮一すぢに繫なぐとかや隱れたる勢力の强きは女に候ぞや、見給へ、世には、男子一生御口の始末に迷ひたまふお方も御座すに位階は愚か素性さへ本屋の妾の子と生れて二十一歲、春若きに伯爵夫人と敬はれ給ふ果報の女子も候ぞ、何？ 花婿君の御年？ 何の何の御頭の輝くは尊き御心の反映にて御額の皺は御情けの波、いかでかいとひ申さるべき、出づるに馬

車入るに玉樓、榮華は望みの儘に候べきを。此結婚屆は御父君と御嬢君との名ばかりで御子息即ちお婿様の名が書いてありません、などゝ失禮な事申すはお芋の煮えたも御存じなき區役所の小吏のみにて候。

いつぞやの女學世界に「今の女學生は子供の扱ひさへ下手である、階子段を上る子供にたゞ危いと叱つたとて、子供は聞きません、さう云ふ時には坊は大丈夫だけれど小母さんは落ちさうで一人では上りにくいから小母さんを連れて行つて頂戴と云つてひそかに子供をおさへて上れば子供は喜んで居る。」と誰樣か仰せられしが出で居候。これこそ!!!　これこそ!!!　世渡りの秘訣にて候眞直にのびんとする竹は雪にも頭下ぐるとか最後の勝利を我手に取れば事は足りて候へば、其上にて思ひのまゝに世を笑つ暮せば、大和女子の顔は立ち申すべく候。

實例を擧げよと仰有る?　承知致し候。さらば拙き筆に理想のマダム一人御らんに入れ申すべく候左に……。

十二時もとくに過ぎぬ。六疊の居間に一人待てばセコンドのチクタクと鐵瓶のヂ、と云ふ音のみ更くる夜の淋しさ增して襖の我かげも何となくあはれなり。

「あゝ今夜も數寄屋町へお泊かしら、どんな面白さうな事をして笑つてお出だらう夫婦は同身だと云ふに私は毎日子供の世話や召使の對手になつて煩い事やつまらない事に骨を折つて居るのに……女なんかに生れるもんぢやない……父樣が生きて入らつしたら……母樣がお聞き遊ばしたら……。私の顏が立たぬと思つて恥かしさに秘して居るから母樣は私の事を仕合せ者とばかり思つて入らつしやるけれど「私は高等下女にされてしまひました數寄屋町の桃代と云ふ無敎育の女に夫を奪らはれてしまひました」と話したら……どんなに口惜しく思召すだらう、馬鹿々々しい!!!　一郞さへなければ私だつて思ふ存分すきな眞似でもしませうものを……」

夜は神經を亂すものを更け行く夜半の千々の思ひに涙さへ胸にみちました。

初夏の花　（堀切の菖蒲）



みどり「まあ!!!　私は!!!　飛んだ愚痴になつた事!!!　緑よ花よと愛しまれた幼い時から勝氣で通つた私だのに一郎と云ふ子もあるのに何で此位の事で世の常の女のやうになげいたんでせう……。勝つて見せる……。勝つて見せる。數寄屋町の桃代と云へば昔新橋で人に知られた藝者だつたが……私だつて秋月のみどり……。○○銀行の頭取の娘と生れて高等教育を受けた今では此尾花家の妻ですもの、夫や藝者の一人位始末が出來なくてどうなりませう……、きつと……。覺悟きはむる折柄「お歸り!!!」と門邊に車夫の叫び聲!!!　いそいそと出向へて。

みどり「お歸り遊ばせ、よく歸つて下さつてねえ、數寄屋町でも相變らず？　まあこれ？　どうも有り難う何て好い色でせう桃代さんとお揃ひ？　うれしい事!!!　桃代さんがかけたらどんなによく似合ふでせう、一郎がねさつきも目をさまして「お父様はまだ？」つて聞きましたのよ明朝はどんなに喜ぶでせう、貴郎お口がおかわき遊すでせうバナ、召し上れな。」

「涙のあとも何處へか冴え〴〵したる聲美しくおだやかなる微笑み見せて甲斐々々しき世話女房の手前、夫なる君は面伏せて、

夫「今日は早く歸るつもりだつたがね‥‥小山が。」皆まで云はせず引取つて、

みどり「アラ小山樣も御一緒、まあそりやお賑やかでよかつてね桃代さんならどなたの前へ出したつて自慢が出來てよ、此間三越でこしらへた衣服もう出來て？エ先日桃代さんが來て話しましたの。」

夫「ウム出來たよお前も何か欲しいものがあつたら拵へてもいゝよ。」

みどり「さう？ 有り難う少しね入用があるの出來てくると御らんに入れますから。それぢやお言葉に甘えて少し頂き度ものね。」

夫「どの位？」

みどり「さうね五十圓許‥‥でも御都合でそれより少しは缺けてもよろしうございますわ、アお床が出來てますのよお寢み遊ばせな！」

心の紐の元までも切れたりとにはあらねども、野暮を禁物の若き男子の。利き過ぐる才智の、あらぬ方にまで走りて多年紅燈綠酒に親しみ慣れし夫の君、不自由なきに、向上心も起らず、翌々日の日曜は何とやらの集會に御友達と共に、「今夜は山口だよ。」の一言を殘して出で行きたまへり。

其日なりけり。

「桃代さんが。」の女中の取次ぎを先きに靜かに來りし其人を みど「まあよく來て下すつてねさあ〳〵お入りなさい、一郎さんを見て下さい、さおふとん敷いて頂戴よ、まあいつもお髪がいゝ格好ねえ、繪にかいた樣よ。」

うれしげにもてなしながら眺めやる衿元に絞りの蝶の朱に出でし裏葉色の半衿に冴えて襲り下着の縞御召鹿の子繻の色澁きに濃き廣東じまを出したる帶のあたり思ひ切つて意氣ッた姿、我夫の寵ひ者、我涙の種は此人!!!

桃代「今日伺ひましたのは先日旦那樣が仰有るには私が

あんまり行儀が悪いのでちつとお茶の湯のお稽古でもしたらと思ふがと御話で私も願つてもない幸と奥様がいつぞや御話下すつた陽月先生で御座んすがあちらへ伺つて私もお茶やお禮法が覺えたいので……」

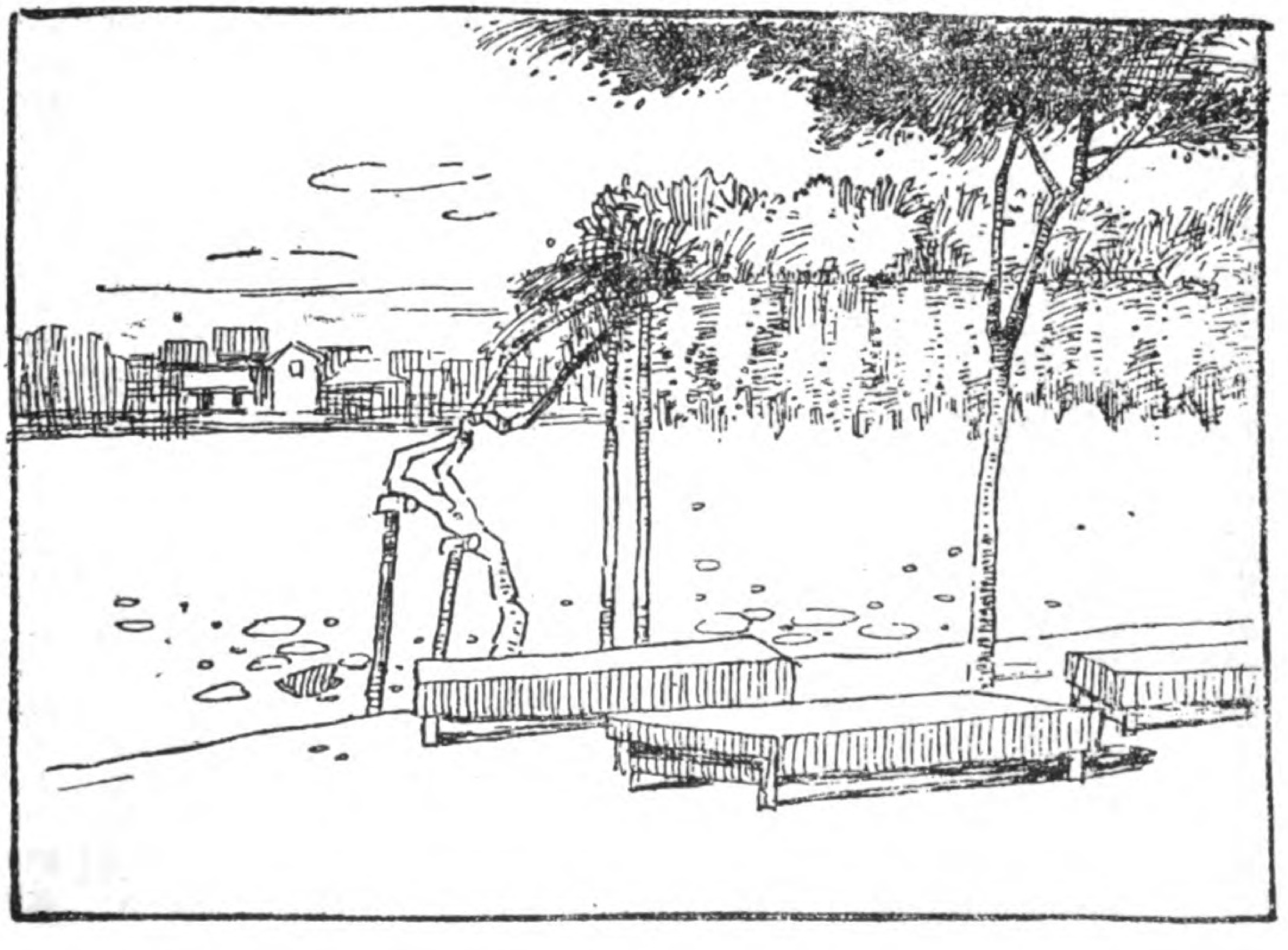
さては我夫、妾を下女代りにせらるゝまゝに桃代を奥様代りにしたまはむと行儀など仕込み給ふか、衣類の世話遊山の伴に猶足らで、品性をまで磨かせんとしたまふ、有る甲斐もなき我身口惜しや、と思ふ心の色も見せで。

みどり「まあ感心ね結構ですわ、だけど面白い思ひをする爲めに桃代さんのとこへ行きなさるのに桃ちやんまで窮屈な思ひさせちや仕方がないのにね、何、先生へは私早速願つてあげますよ、此次の土曜日に一緒に行きませう其前に私願つておくからね……。まあ急がないでいゝでせうまあいゝぢやありませんかゆつくり遊んでゐらつしやいよ……」

桃代が歸ると引ちがへて角帽の人來りぬ。

藤村「昨夜はお手紙で……」と其人の叮嚀に辭儀すれば

初夏の花　（不忍池の藤）



みどり「エ主人が留主勝なのでつい〳〵延引なつてね、それぢや五十圓だけ上げますから確り御勉強なさいまし、今夜は吉川様も來る筈でしたから序に山田さんも呼んで皆一緒に御飯でも上げませう。今桃代が歸つた所よ。」

藤村「エ桃代が……」と眼輝くを、

みどり「オホヽヽ、感心に私をよく尋ねてくれますわいつ見ても綺麗でしたよ。お目にかけたい位！　アラ何もそんなに殘念がつて下さらなくてもいゝの、主人が桃代を可愛がるのも道樂なら私が貴君方を修業させるのも道樂、趣味を感じる點は同じ事ですもの……。外にも勉強が出來ないで困つて居る人があつたら世話して下さい。力の及ぶ限りは助けてあげますから。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊

年月は夢と過ぎて一郎様早や本年は五歳となりたまひ一粒種のかけ代へなき坊樣なれど、山田、吉川、藤村の諸學士、杖となり柱と支へて、僕等大恩受けた奥樣の御子樣、命に代へても御力となつて立派なお方に致します。」

といつも〳〵申さるゝとか。

さしも折花攀柳に浮身やつしたまへりし夫の君も、奥樣よりの深き依賴引受けたりし陽月先生が諭しに感じて桃代の他へ嫁入りし後は、御身のくゝり確と付きて人々の信用厚く日々の事業に勵み給ひつゝ只管一郎樣の御成人をのみ樂しみで御座す由に候。

何處までもやさしう何處までもおとなしう、しかも遂に世の波風を凌ぎ艱難に耐えて女の意地を捨てざりしみどり樣の御技量の巧みさ、羨ましうも候はずや其御苦勞の成績は曾て中途で學業を止めざるべからざる運命にありし三學生を有爲の人とならしめたまひしのみならずと存じ候、プローチにリングに心用ゐて人々を虚榮の光におどしつけむとしたまふ貴婦人や星や菫や香に泣きて針程の御辛棒も出來給はぬ御嬢樣に飽きたまひけむ曉には、私此樣な女を御紹介申上ても宜しく候。我等がお友達には昔ながらの武家の血受けて現代の智育に人となりし、ハイカラならぬ。女子もまだ

まだ無くなりは致し不申候へば、玉椿の八千代をかけて御一緒に世渡りをしたまはむ事のさしてむつかしからずとも存せられ候。

長文御判讀被下度先は御返事かたがた右申上候

かしこ

誰様　　玉露

梅雨前の用意

之から入梅に這入ると何時も雨がシトシト降つて居るので従つて空氣も濕つて居る、ために屋内の種々の器具や衣類にまで濕氣を及ぼし且つ有害なる黴菌の繁殖を助けるから各々の家庭衛生上大いに注意をしなければならぬ。

第一に注意すべき者は衣類である。この衣服は體溫の調節を計る可きものであるからなるべく熱を導か無い目のあらひ空氣を多く含んで居るものが良い。然し入梅中はこれが多量の水分を吸收する爲に身體から溫を傳導する事が非常に強くなる、それ故にたまに氣溫でも低くなると體溫の調節に變化を起して、遂に感冒の原因となる事がある。又濕氣の爲に衣服の換氣が妨げられて衣服の下に炭酸瓦斯がたまり、又水蒸氣が多くなるので此等の瓦斯が身體から外界へ出る事が出來ないやうになつて氣持をわるくする。又衣服が汚れて居る場合に乾燥して居る時は左程でもないが、濕氣の爲にバクテリヤが繁殖して、汚物が分解する即ち種々の臭氣ある瓦斯を發生せしめる原因はこれである。

さて此衣服をなるべく不健康にさせぬ事であるが、それには材料の撰擇が必要である。一番良いのはフランネルである、毛織は比較的潤ふことが少いから急に體溫を冷却したり、空氣の交換を妨げるといふやうな事も少い兎に角如何なる材料で製した衣服でも良く乾燥させて用ゐればならぬ。

次は器具である、器に黴が生ずると品が惡くなる許でなく空氣に一種の臭氣を與へて不快を感ぜしめる、で此黴菌が繁殖するには三つの條件があるが「溫度」と「黴菌の養分」の二ツがあつても水分がなければ決して繁殖はしない。然るに入梅となると濕氣が多くなるから空氣が冷えると水蒸氣は液體となつて、それが種々の物に附着して黴菌の發育を助るのである、故に日常使用して居る諸道具は常に乾燥させて置く樣にするのが肝要である、又食物中の米麥或は粉類などには黴が發生し易く、そして有害な物質が出來て爲めに脚氣を惹起すことがあるから注意せなければならぬ。

賢き妻

木の葉



A 私ほどつまらない者つたらありませんわ。
B そんなことありませんよ、そりや私のことですよ。
A いゝえあんたなんか私から見たらいくら賢く入らつしやるか知れませんわ。
B 賢ければ結構でございますが人様に比べては悲觀ばかりしてゐますの。
A どうして怎那に氣が利かないのでせう。
B ほんとにね。それが一づそお大名様で氣が付かぬのなら我慢が出來ますけれど私などの様な苦しい經濟をやり繰りをつけたり、家族の關係の複雜な中に立ち働いて行かねばならん様な境遇ではほんとに困つてしまひますのよ。
A お察しいたしますよ。それにあなたには一番お妹御でいらしたからそれこそお孃様育ちだつたんですもの。私實はあなたが御きまりになつた時によくまああんな複雜な家庭に御はいりになると感心してゐましたよ。
B 因縁よ。
A だつて。
B 初めには左程でもなからうと思つたものですからね。何しろ養父母はまだ若し妹(小姑)もかたづけねばならず親類にも却々理窟家がゐまして。でも好意で向つて骨惜しみさへせねばいゝのよ。
A 世の中つてね、私わからなくなりましたよ山井さんの様な眞面目な氣の好いおとなしい方でも旦那様の御氣にいらないのだつてね。
B どうしていゝか分りませんよ、古田さんなんか極のお轉婆でせう？　けれどあれで却々甘く皆様の御氣に入つてゐらつしやるし。

A 溫順なのも程度で御ざいますわね、やはり一家を引きまはして行く上には才智がなくてはいけませんね其點になると柴田さんなんか甘いものでせうね、あの方は頭腦も明晰だし技藝も御上手だし、却々才子ですから、そらいつかの會の有つた時だつて一人で切つて廻してゐらしたでせう。

B 處が世の中は學校とは違ひますよ。奥樣が餘りハシヤギすぎると品が下りましてとかく批評や嫉妬の種となつて主人にまで影響して參りますからね。嫁と云ふものは却々むづかしいものよ。やり過ぎると舅姑を蔑にすることになり、退き過ぎれば氣が利かぬことになりますし、まあ目に立たずによく働いてをるのが勝ちでございますまいか。

A 楫の取り樣一つで船が動きますからね。

B あなた伊坂樣を御存じ？

A 御名前だけは。大層立派な方だつてね。何だか職工からお仕上になつて、今は會社長やら何々委員やらを澤山兼ねてゐらつしやるつてね。

B えゝ、御主人も御偉い方なんでせうけれど奥樣が却々よく出來た拔け目の無い方でそのために伊坂樣は餘程人望がおありになるのだつてね。

A まあさうですか。あなた御會ひなすつて？

B えゝ、私の叔母と仲好しだものですから時折伺ひますの。

A どんな方？　御年頃は？

B どんなつてそりや何から何まで屆いてゐらつしやるのよ。御年は三十五六でせうかね。

A どんな態度で御話しになりますの？

B さうねまあ女の客でゝもあれば「まあよくいらつして下さいましたさあどうぞ此方へと打解けて柔和に向はれますからもう何だか十年の知己の樣になつてすつかり安心して云はるゝが儘に寛げると云ふ樣なんでせう。服裝など極々質素で御座いますけれど品がよくて挨拶ぶりだつて淡泊と叮嚀にされて。客がまご〱してをれば若ければ若い者にふさはしい樣な話題を、それからそれへと移して、客に口をあか

せて決して退屈なんかおさせになりませんよ。茶菓の御指圖なんかちつともなさらずともお孃樣が皆なさります。あの奥樣の氣の低い優しい態度や御話し振りが忘れられません。それがちつとも態とらしくなくつて御心からなんで御座いますからちつとも厭味がありません。よつく御客樣がおありになりますが客によつてお玄關で濟むのは濟し御上りになつても男の御客樣であれば態度やお詞づかひも何處やら注意してゐらして其應答ぶりがそれはそれは感心に釘がさゝれて行くのよ。何に對してもすべて善意で解し善意で迎へてゐらつしやる口數が少くて拔かりの無いのには驚きますよ。いつも御茶の間の方で伺つてゐますが蔭ながら愛嬌たつぷりな。やさしい、然もどこか深い思想を潛めてゐらつしやるのが人を引き付けるのでせうね

A私なんか一度に二人も客を受けるとどぎまぎして了ひますがね。



B　があの奧樣にはちつともそれがないですよ。餘裕のあることつたらね。何だかそれからそれへと心の中で計畫をしてゐらつしやるやうですよ。

A　智識もお廣いでせうね？

B　ほんとに廣いですよ。各方面にどんなことでも御對手をなさるのよ。それも常識的によくこなして被仰るからとんと耳に障りませんね。私なんかいつもお茶の間で長居しますけれど用向きの方は大抵十分か十五分位でさつさとかたづけて御仕舞ひなさるのよ

A　お偉いのね。

B　下女なんかにでもお優しいこと。そして要を抑へてあるのよ。角張らなくて整つてゐますよ。よくね一日を時間割を立てゝ機械的になさる方がありますけれどそんな冷いやり方でなくても亂れないのでせうね。

A　やり手と云ふものはとかく角が立ち易いものですがね。

B　事々に同情を持つてゐらつしやるから少しも氣兼ねがいりません。度量も廣いし、なつかしい方よ。そして元氣のいゝ沈痛で快活で。

A　御身體も必つと御丈夫でせうね。

B　えゝ、艶々してゐらして三十前後にしかお見えになりませんね。

A　やはり活氣のある、精神作用は弱い樣な身體ですね

B　お女中にきゝますといつも奧樣も御臺所や洗濯をなさる樣に申しますけれど人の來てゐる樣な時には決してそんな樣子は御見せになりませんね。大抵の人がいかにも偉いと云ふ所を人に見せたがるものですけれどあの奧樣にはちつともそれが見えませんよ。

A　婦人會などにはとんと御出になりませんね。

B　お嫌いなんですつて。

A　そんな御腕並みで惜いのね。

B　いいえ、さうでないですよ。高木には風が荒いから御用心深いのでせう。

A　さうですかね。注意周到ですね。

B　お若い時から却々苦勞をしてゐらつしやるからね。

Aやはりね。どんなに？

B話しませうかね。あの奥様は金滿家の御孃様だつたから御召物なんか澤山持つてゐらしたのだつて。

A御召物がどうしたの？

B御主人はやはり嚴格な父御の御意見で初めから學校ばかりに御出しにならないで職工から見習はせなすつたとさ。却々非凡な方なので奥様の父御が見込むで十六の時に御婚約になつたんですつて、處が御主人の方に御不幸が續いて、さつぱり破産なすつたと云ふ次第なのよ。けれど十八の春約束通り御結婚になつたの。時々はお金の融通が付かなくなつてそれこそ今日の生活にもお困りになつた時分など、奥様がいつもそつと其御召しを持ち出しては質入れして交際むきから當座の用など缺かせたことなんかもう無かつたとかですよ。



A へえー!

B でも一度だつてお里や叔母等に困つたと云ふ様な顔をしたり、こぼしたり決してなさらないでいつも樂觀してゐらしたと云ひますがね。まだ御舅姑様も小姑様も揃つてゐらして隨分我慢の出來ない様なことが有つてもゐつも平氣なんだつたとさ。奥様は却々筆がお立ちになりますので一寸の隙に雜誌新聞などに投書などしては苦しい經濟の中からも賞金や原稿料なんかすつかり舅御の御酒手や妹御(小姑)の襦袢の袖や學資にまはしてゐらしたのよ。そして其頃でも新刊の書物なんか仲間の誰れよりも多く讀むでゐらしたし御交際なんかそれはすつかりしてゐらしやると云ふ評判だつたと云ひますからね。

A お偉い、お偉い、まあ感心してしまひました。

其中に舅御はお亡くなりになりましたが御妹御がお嫁に行かるゝ時なんか奥様がずん／＼御自分のものを直したり工夫したりしてあの通り立派に工學士の方へお上げになりましたよ。

A 慾の無い好い姉様ね。

B 處がね。あれで又お買物なんかのお黒いことつたらね、たとへ炭一俵でもよく吟味して一錢でも廉くて質のいゝのを好時節を見計つて特約して御取りになりますのよ。お大根一本でも餘計なことには御用ゐにならないとか。

A 何としたことでせう。

B でね、御女中でも却々經濟家よ。

A それでけちに見えなくて?

B いいえ、却々すつぱりしたものですよ。

A 何から何まで屆いてゐらつしやるのね。人の苦にする様なことがちつとも苦でなく、又恩を笠に着たりなんかなさらないのですね。

B ほんとにあのお宅ではついぞ内輪もめなんかあつたことが無くていつも笑ひ聲が洩れてゐますの。御姑様でも實の娘御よりも嬉しく思召してね。奥様も亦大切になさるのですよ。

A まあそんなお嫁を貰つた方は仕合せね。

B 伊坂さんもお偉い方ですからね。そんな好い奥様を御持ちになつても御友達なんかに、もう「妻」がなんか被仰つたことなんかないんですつて。

A 流石は好配ね。

B あの沈着な親切な伊坂さんにはもう皆會社員が心服してるのですよ。

A あの會社の方は皆品行のよい方ばかりだと云ふ評判ね。

B そりや社長さんが趣味が高いのですもの今でも盛に讀書會や評論會等を御宅で開いては奥様が御編めになつて匿名で雜誌に御出しになりますよ。其後



で御馳走なんかが出て清遊を御催しになるとか。

A 實力もおありになるのね。御子達は？

B 長男が今洋行中だし御嬢様はあの苦學して御仕上げなすつた村井さんに御きまりになつてあとは小學校の坊チャンが御一人なんですよ。

A 好い御子持ちね。

B でも奥様はいつも一ダース程産むで各方面に向けて見度いと御冗談に被仰つてゐましたさうですからちと御氣寂しいでせうよ。

A 今の世はとかく奥様の名の出易い風がありますけれ

ど、あの方に限つてちつともそんな事が無いぢやありませんか。

B　そこが模範的よ全く誠意誠心と云ひませうか献身的と云ひませうか。つまり煩い事や苦勞な事などをすつかり趣味眼を持つて當つてゐらつしやるからむしろ御樂しみなんでせうね。

A　實際人間は同情と趣味とを持つて自分を投げ出して行けば何も厭ふことはありませんわね。

A　あゝ私なんか恥かしいこと。辛棒は無く才はなくただ泣くことゝ「何うしませう」と云ふ詞とより持たないのだもの。

B　實際あの奥樣は女性の優しい柔い美點と、親切な俠氣とを具へてゐらして、然も男性的の彈力を加へてすべて樂天的になさるのですね。

A　あなた方に御若い時分の事等御話しになるの？

B　ちつともよ功さうな話なんか一度も承つたことはないの。まあお優しい御愉快なことつたらね。かつて女中にでも御子達にでも荒いことなんか被仰つたことがないですつて、仲裁事等はいつも奥樣に持つて行くさうですよ。

A　やつぱり人格が大事ね。河村さんなんか一寸見て御世辭はいゝし才子だけれど何だか薄つぺらな樣だし今井さんの樣な溫順な方でも旦那樣が御不身持だとかだし山内さんの樣に眞面目一方でも人が恐れますしね。B　却々むつかしいものね。出すぎていかず、意氣地が無くてもいかず。

A　世の中ほどむつかしいものはありませんね。

B　しかしむつかしい樣で易いのは世渡りですつて。まあ優しくて眞心で口數少く拔け目の無いのが好いでせうね。

A　だつて表べ飾りや不正な人でも成功するし。

B　そんなのは永續しませんわね、わけて女は犧牲の心がなければ駄目ね。そして飾り神經質でなく如才のない樣に立ちまはつたら大した仕損りはないでせうと思はれますよ。

A　あなたも伊坂の奥樣に劣らぬ奥樣におなりになりますよ。B　御冗談を・・・。



世渡修行の巻

野菊女

何ですつて……信乃さん！　世海浪高しだつて……。おほゝゝゝ、まあ貴嬢、とう〳〵ヒステリーにおなりぢやないこと？……。

新代の婦人を代表して、解放された自由の天地に、獨立獨行の模範を示すといふ、大抱負を持つてゐらしつた貴嬢のお口から、こんな弱い音を承らうとは、いるゝか以て心細い次第。噫、弱き者よ、汝の名は女なりと、絶叫したくもなりますわ……。

春爛漫の花蔭に、櫻かざして悠々と歌を詠んだり、鞠を蹴つたり、至て、のんきらしかつた、古の大宮人でさへ、「しりにけむ、きゝてもいとへ世の中は、浪のさわぎに風ぞしくめる」なんて、歌つて居るではありませんか、きのふけふ、遽につらくなつた浮世の風でもムんすまい。風が荒いとか浪が高いとか、今更らしく、そんな愚痴なんか仰しやるものぢやなくつてよ、ミュンヘンビールとやらに唇を濕して、ピアノの一曲も彈奏しやうつて方が……、みつともないぢやありませんか！。

平坦な單調な、どんな人にでも、安々と渡れるやうな世の中なら、いつそ、生れざりしならば……ですわ。目も遙かなる千里の野や、天を浸す海原や、胡蝶舞ふ園、毒蛇棲む淵、死んだり生きたり泣いたり笑つたりこれあつてこそ、眞に生甲斐のある世態ぢやないかと僕はさう思つて居ますのよ、雨ふらばふれ風吹かばふけ、高々四尺有九寸五分の此體位、何所の隅にでも匿所はあらうと、まあ、かう、大悟徹底してるつもりなのよ、却々達人でせう、おほゝゝゝ。

え、何？、峰子夫人が羨ましいつて……、いやね、信乃さん、どうかしてゐるわー、あ解つたー。貴嬢矢張米人たなつて見たいんでせうー、さうよ〳〵きつとさうよー、そんならさうと早く白状遊ばせ、おほゝゝゝ、ホーム、ホーム、スウヰートホーム、あゝ、スウヰートホーム……ま、そんな恐い顔遊して、ほゝほゝ、まつたくね信乃さん、そんならもう、ほんとに其方がよかなくつて？。それはね、どうしたつて女は弱い者、細い腕に棹とつて、浮世の荒浪と戦はうつていふには、貴嬢などは餘りに涙が多過ぎますわー。あの何々女史とか、何先生とかつて、活動場裡に成功（？）してる方々女ながらも一分の弱味も見せまい、半歩の退もとるまいつていふには、もう、眼の光りからして違てつてますわ。だめよ貴嬢なんどのやうに、何に憧がるゝ瞳ぞ、うつとりと夢見るやうな眼ざしゝて、ともすれば熱い涙を滾すつてやうな、そんな優しいお心で、どうして獨り浮世の綱渡りが出來ませう……。

僕、昨夜もね、つく〴〵と考へましたのよー、まあね、人の世つてものは、きつと造化の神様が手すさびに、十重二十重、縦横十文字に、十千萬筋の雜多な綱こそ、張り渡したものぢやないかと思ふのよ。ついの詰りは、神様のみ手に握られた一條に歸するのでせうけれど、人は我勝に、可及的立派なよい綱を撰んで、うまく渡り了せやうとあせつてゐる、する〳〵と何の苦もなく通過する人もあらうし、半分途を蹈みはづして、奈落の底に沈むのもあらうし、もつれた綱にからまれて煩悶するもの、喜ぶもの、わめくもの、千態萬狀の運命を、隻手に握つた神様は、きつと、面白がつて肩を揺つて、笑つてらつしやるに違ひないわ……。仕損じは平に御容赦……と、御見物衆へは謝つてすましも出來ませうが、當の太夫さんの身になつては、少少胸がわく〳〵して、足下が案じられますわねえ……。玆に於てか、心弱い僕などは、なまじ獨り立つて、危ない世を渡らうとするよりは、矢張まあ、頼む男の腕に縋つて、どうにか、かうにか、やつてのけやうといふ、誠に以て、意氣地のないおはなし、ほんにお恥し

い次第ですのよ……。而も其綱たるや、自分の立場が低くては、思ふ所に上る事も容易ぢやないし、よしんば理想の如き高位置に、上つたにしても、いつどんな天災地變で、スッテンドーと墜落の憂目を見ないものでもあるまい、そんな危ない所を行くのより、身分相應の低い綱を辿つた方が、落ちるとしても樂だらうと……。あら、信乃さん、笑つてらつしやるのね、ひどいわ！　ほゝゝゝ、實はね、僕だつて眞個の所は、それはもう、なるべく高位置の綱から、男らしくつて美しくて金持で、人格の高い立派な紳士に連添つて、ダイヤ、ゴールド、綾錦に身を飾り、かうずつと反身になつて、世の中の有象無象共、これ見よやとばかり、渡つて見たいのは山々……と、いろいろ悶えてもみたり、考へても見たけれど、殘念なことには僕の希望は千に一つも叶はなかつたのよ……、で詮方なく〳〵村夫子が妻ー、信乃さん、同情して下さるわねえ。



然し、負惜しみぢやないが、僕、これで却々の世渡り上手！　と自任してるのよ……、まあ第一、僕の虚榮心を刺戟しさうな、都の住居を避けたのから、感心してやつて下さいませな、おほゝゝゝ、何所も同じ月は照る。住めばすまるゝ此片田舎に、雲雀の聲や草刈歌を、無上の音樂ときゝ惚れながら、摘んだ嫁菜は晩のお惣菜……、良人が得てくる一ヶ月の報酬は、貴嬢の襟元に耀やいてる寶石の、小さい一粒の價にも及ばないでせうけれど、それでも僕等二人が、生命の糧には充分ですの！、稀に、染返しの、黑ちりの羽織でも引かけて出やうものなら「奥樣、今日はどちらへお出かけで……」なんて、野良仕事のお百姓が、頬被りとつて、叩頭までしてくれますよ、えゝもう、蝙蝠だつて、大威張ですわ、おほゝゝゝおやまあ、田舎のお味噌は、ちとお鹽がきゝすぎますかしらほゝゝゝ。

幸子さんなどは、ほんに結構な綱を、見つけなすつたものね。あの方、學校時代から、却々お如才ない遣口でいらしつたが．夫人となつてぐつと一段、世才を發揮して餘蘊なしですのね。學士、高等官夫人で、隨分上流貴婦人方には、愛されてらつしやるつて……、あなた、それが羨ましいと仰しやるの？、まあ罪のない方ね、おほゝゝゝ、え、其成功の秘訣をつて……、それはどうも僕自身、さうした經驗がないんですものかうするものよと、御傳授する譯にはいきませんわ、が僕の側面觀(をかしいものね)では、幸子さんの成功は、不得要領にあると思ひますわ。何故？　と仰しやられても困るけれど……、まあ、あの學校時代をも考へて御覽遊ばせよ，勝氣で、男オンナといはれたクロコダイル先生ね、あの方が、B組のナメクジさんを、おハナに遊した如きも、一つの例にはなりませう。學才備はつて、智德圓滿と、だれもが敬愛して居た、須磨子さんでさへ、T女史が自尊の眼には、缺點のいくつもが映し出されて居たでせう、自惚と嫉妬がつきものゝやうになつてる世間並の女の前などで、餘り要領を得すぎては、それ〳〵、あの眼が恐しいことよ……何でも人に可愛がられたくば、少々痴は、間の抜けた

所で、御披露するのがよいとか、さる苦勞人がいつてましたが、多少味のある言と思はれますのね、幸子さんなどは此間の消息をよく知つてらしつて、加ふるに、あの巧妙な舌を、持つてらしやるのですもの、あちらからも、こちらからも幸子夫人〳〵と、お聲がかゝるのでせう。つまり氣がおけなくていいと、いはれる側ぢやないかしら……。

それから又、廣告つてことも大切ですつてね……。

私の知つてる人で、實家は地方でも中以下の家柄、資産だつて碌々あるのぢやないけれども、都のさる裁縫女學校とかを、卒業したばかりで、今は其地第一



流の、素封家の若奥様と、なり濟してる方がありますよ、其人が學校を卒業してきた當座の評判つて大したもの！、其兩親が又大の天狗の面でしてね、もう天下廣しと雖、うちの何子程の者は二人とあるまいつて、鳶が鷹を生んだやうな噂で、質樸な近所の人達を、すつかり烟に卷いてしまつたの…で、其娘が歸つてきて、間もなく、入口に掲げだした大看板に、洋服和服、古代服一式、袋物編物何々何々教授所、東京〇〇女學校卒業何の何子…、ね、振つてるでせう！

そこへゆくと田舍の人は正直ですからね一時は此看板に押されて、其地方のお針のお師匠さん

達は、大恐慌を來してしまひましたつて！。此調子で以て、巧に、大風呂敷を展開したものですから、まんまと首尾克く、其財產家の一族を包括してしまつたのですつて……、信乃さん、自家廣告の效も、實に偉大なりと謂つべしですわね。

要するに、渡世の秘訣もいろ〳〵ありませうけれどどうしても、鐵面皮で、强情の者の方が、より多く成功するやうですのね。所謂、謙遜して、お世辭よく、器用に立まわるのがよいか、或は又ぐつと高飛車にでて、例の大風呂敷流がよいか、それは折にもよらうし、人にもよらうし、其邊のよしあしは、妾等には分りませんが、信乃さん！　貴孃ならどちら……。え、いやだつて？　どちらも出來ないつて？、おほゝ、ではどうも詮方がない、幸子さんが羨ましいなんて仰しやらないで、人里離れた山寺の、尼さんにでも、おなり遊ばせ……。けれども、いくら山中の空氣は淸くても、矢張其折々の、浮世の風は通ひませう。尼さんだつて血もある肉もある、「世をすてゝ山に入るとも味噌醬油米の通路なくて叶はじ、」心臓の鼓動止む時なければ、人なつかしい涙も溢れませう、所詮は、「猶うき時はいつち行くらん」で、人間界の辭職でも、しなけりやなりませんのね、だからまあ、人の道さへまちがはなけりや、磯の千鳥のすぢりもぢりにでも、行く所まで行かれゝば、それで結構！、泣いても笑つても、精々五六十年の短い命を、どうのかうの神經を惱まして、八の字よせてゐたつてつまりませんわ……、少しは陽氣に、下座の鳴物でもはづませて、扇使ひも花やかな、若太夫氣取りで、足どり輕く渡らうではムいませんか。

都はいつも常世の春、羅綺粉黛の巷にも、お厭きなされはしませんか。こゝは名に負ふ太田氏の古城趾、素顔になつたお富士さんを背景にして、菜の花、蓮華草の縫取りの中に、肉の厚い頑丈らしい體を、紺の筒袖股引に包んで、白手拭の姉樣被り、桃色の帶もふさはしい、田舍少女が畑うつ姿でも見に、お出かけなさいませな。騷々しい電車のうなりや、魔物の吠えるやうな自働車とやらの、危ない聲が聞えないばかりでも

頭痛位は、立どころに忘れますよ、不味いお藥などより効能顯著!、僕が保證いたしますわ。其内、是非お出かけ遊ばせねえ、停車場までお迎へを出しますからね……。あら馬車の喇叭― あれよ信乃さん、野菊がお抱への二頭立は……、おほゝゝゝ。

間違つた言葉

今の若い學生に、何うも自他の區別の判らないもの丶多いには驚く。此間も某生徒が、「先生、私今日、お風を引きまして、お咽喉が痛う御座いますから、お謠曲は御免下さい」と云つたから、私は「なんだ咽喉も謠曲もあなたの有ちやないか、自分の物に、おの字の敬語を用ゐる人があるか」と云つて大に笑つたが、平日の「だわ」「よ」の流儀を改めて叮嚀に物を言はうとすると、こんな滑稽になつて仕舞ふ。其外自分の父母や舅姑のことなどを他人に話すに、「お父様がかう被仰つた」の、「お母様があゝなすつた」のと、人の上をいふのか自分の方の事を話すのか分らぬやうな物の言ひ振りを隨分教育のある婦人がして居るは、誠に何うも困つたものだが、自他の區別はまづ二の次のことにして、第一に訛りを除くことが肝要であるが。併しながら是れ又何うもなかなかむづかしいものと見えて、教育會あたりで制定した言葉遣ひなどを見ても、何うもこんな言葉を遣はせては宜くあるまいと思ふやうなことも少なくはない。例之ば自稱の私は「わたし」と云つても宜いとしてある。若し「わたし」が好いと云ふなら、下等社會の婦人の謂なる「わたい」と云ふのも「し」と「い」と音通するだけだから差支はないと云つても宜からう。こんな言葉は何うも私には贊成は出來ない。其他國々に在る聞き惡い訛りなども、先づ是れならば宜いと云ふまでに矯正するのは容易なことではない。けれど人と云ふものは容姿は衣服裝飾に因て多少整ふることが出來るが、言語音聲は直ちに其人格を現はすもので、社交界に立つ上には殊に大切なものである。西洋人は談話を交はしながら食事をすると云ふが、無暗に饒舌るのでは決してない。彼方の上流社會に往つて見ると、斯う云ふ場合の談話は、語も上品に、事柄も擇んで、極めて靜肅なものだと云ふ。それを以ても言語の大切なことが分る。要するに是れは俄に矯正しやうとしても無理な話で、偏に幼少からの家庭の自然の訓へに俟ることで、いくら學校で喧しく言つても家庭で放任して居つては何時になつても改良は覺束ない。(小笠原清務氏)

熱心、忍耐、自信の三德

堺　まさ子

凡て何事を致すにしても不精無精に唯義務だから遣らずばなるまいとしてするのと、自然に愉快で面白くて樂しくて熱情と希望を以て働くのと較べて見て、結果に雲泥を來すこと大なるは、爭はれない事實である、一寸裁縫をするにしても、義務的に行るのと、趣味を以て一生懸命にやるのとは、出來榮の巧拙、時間の長短、共に比較にはならない、凡て何事を爲すにも熱心が必要である、熱心なき人は到底末の見込はない、……然るに此の熱心と云ふものは誠に逃げたがる質のもので、古來成功を失つた人は、多くは皆事業半途に於て此の熱心に逃げられたに外ならぬ、熱心を永久に離さない算段こそ大切である、巴里の博物館に行つて見ると、大理石で出來た一つの立派な肖像があるが、是は或る貧乏な細工人が丹精を凝らして、土塊の型が出來た時非常な寒さで霜が降り、その爲に折角骨を砕いて造つたその土型が凍つて張り裂けやうとした、其の時彼は健氣にも自分の衣服を脱て之に着せたので、その土型は依然として殘つたが憐れむべし彼は此の寒さにとう〳〵凍へ死んで終つたので、後の人がその志を嗣いでその土型の通りに、大理石に作つたものであると申します、



實に此の樣な精神がなくては事は出來ぬ、賢明なる淑女諸君――自分の着物を脱て迄も、其の事業に斃せるの勇氣がありますか、けれ共人情の常として誰しも成るべく艱難を避けて、快樂を得たいと思ふのであるが僥倖によつて得た快樂は、長く保たない、のみならず、却つてその人をして慢心を起さしむる原因となるのである、世間には一時の僥倖によりて、一生涯の計畫を誤つた者が往々ある、然るに是に反して、躬自から奮つて艱難に中り、朝は夙に起き夜はおそくまで身心を砕いて、勞働に從ひ勉め勵みて得た快樂こそ眞の快樂であらう、桂月氏の曰つた言葉に「玉の汗を流して暑さに苦しみたる人にあらずんば、眞の涼しき味を解せざるべし、涼風絶えざる高樓に安坐して、常に氷を嚙むものは、恐らくは眞の涼味を解せざらん、終日歩行し若しくは勞働して偶々樹の陰を得、淸水を得たる者にして、始めて淸涼の眞趣を知るべきなり、思へば安坐閑頽の人こそ世に最も不幸なれ、冬は寒世界なり、故に暖を得るが最も樂し、夏は熱世界なり故に涼を得るが最も快し、而かも非常に暖かき者が眞の暖味を知らざるは猶ほ常に涼しき者が眞の味を知らざる如し、天は人を樂しめんが爲に苦しましむるなり、十分に苦しみたる者にして始めて眞の樂しみを知るべし」と是れ實に味ふべき名言ではありませぬか、故に快樂を欲するのは、艱難をも辭す

べからず潔く迎ふべきである、されば一度之を迎へては、飽くまでも是に打ち勝たなければならぬ、又先年内村農學士が相州箱根にて開設せられし夏期學校に於て事業と云ふものは艱難に打ち勝つ事に由つて、出來るものであると云ふ樣な意味で、演説せられた事があるが、此の中カーライルと、二宮尊德先生との話があつて、吾々が事業にたづさはる際に色々な辛いと面倒なとに當つて、吾々の心を慰め益する事が多いと思ふから、幸ひ後世への「最大遺物」と稱するその演説筆記中より左に拔萃して掲げて見やう。

「私は元來トーマス、カーライルの本を非常に敬讀する者であります、度々あの人の本を讀んで利益を得、又其れに依つて刺戟をも受けた事でございます、御承知の通り、カーライルが書いたものゝ中で一番有名なものは、佛蘭西革命の歴史でございます、カーライルが我々にのこして呉れた此の本は、實に吾々の貴ぶ所でありますが併しながら、佛蘭西の革命を書いたカーライルの生涯の實驗を見ると、此の本よりかまだ立派なものがあります、カーライルが此の本を著はすのは、彼に取りては殆ど一生涯の仕事であつた、チヨット革命史を見ますするならば、此の位の本は誰にでも書けるだらうと思はれる程の本であるけれども、歴史的の研究を凝らして、さうして漸く材料を集めて成つた本で、ありまして、實にカーライル



が生涯の血を絞つて書いた本であります、夫れで何十年ですか忘れましたが、何十年かかゝつて漸く自分の望みの通りの本が書けた、それからしてその本が原稿になつて之を罫紙に書いて終つた、それから是はもう直きに出版の時が來るだらうと思つて待つて居つた、その時に友人が來て、カーライルに遇つた所がカーライルがその話をしたら實に結構な書物だ、今晩一讀を許して貰ひ度と云つた、其の時にカーライルは自分の書いたものは、詰らないものだと思つて人に批評を仰ぎ度い爲に貸してやつた、貸してやるとその友人は之を家へ持つて行つた、さうすると友人の友人がやつて來て、之を手に取つて讀んで見て、是は面白い本だ一つどーぞ今晩私に讀まして呉れと云つた、そこで友人が云ふには、明朝早く持つて來い、さうすれば貸してやると云つたら、その人は又之をその家へ持つて行つて、一生懸命に讀んで曉方まで讀んだ所が明日の仕事に妨げになると云ふので、其の本をば机の上に擲り放しにして、自分は床に就いて寢入つて終つた、さうすると、翌朝彼の起きない前に下女がやつて來て、家の主人が起きる前に「ストーブ」に火をたき附けやうと思つて御承知の通り、西洋では紙をコツパの代りに用ゐてくべますから何か好い反古はないかと思つて調べた所が机の前に、大分書いたものが廣がつて居たから、是はよいものと直ぐそれを皆

丸めて「ストーブ」の中へ入れて火をつけて燒て了つた、カーライルの何十年かゝつて出來た革命史を燒て了つた、時計の三分か四分の間に煙となつて了つた、それで友人がこのことを聞いて非常に驚いた、何とも云ふ事が出來ない、外のものであるならば、紙幣を燒たならば、紙幣を償ふ事は出來る家を燒たならば、家を建てゝやることも出來る、併しながら思想の凝つて成つたもの、熱血を注いで何十年が間かゝつて書いた者を燒いて了つたのは償い樣がない、死んだ者はもう活き歸らない、夫が爲に腹を切つた所がそれまでゝあります、それで友人に話した所が、友人も實にどうすることも出來ないで、一週間默つて居つた、何と云つて宜いか解らぬ、けれどもどうも仕方がないから、其の事をカーライルに云つた、その時にカーライルは十日ばかりもボンヤリとして居つて、何もしなかつたと云ふことであります、流石のカーライルもさうであつたらうと思ひます、夫で腹が立つた、隨分弘量の人ではあつたけれども餘りの事に非常に立腹した、彼はその時には歴史などは抛りつぽかして、何にもならない詰らない小說を讀んださうです、然れ共、流石はカーライルである忽ちにして己で己に歸つて云ふには、「トーマス、カーライルよ汝は愚人である汝の書いた革命史はそんなに、貴いものではない、第一に貴いのは、汝が此の艱難を忍んで、さうして再び



筆を取つてそれを書き直す事である、其れが汝の本當に偉い所である、實にその位な事に付て失望する樣な人間が書いた書物を社會に出した所で何の役にか立つべき、嗚呼汝よ之れしきのことに何ぞ力を落さん、速やかに勇氣を起して再び奮つて勉勵せざらんやは」と自分で自分を鼓舞して、直ちに筆を採つて書き直したと云ふことである、その話はそれ丈の話ですが、併し我々は其の時のカーライルの心中に這入た時には實に推察の情溢るゝばかりではありませぬか、カーライルの偉いことは革命史と云ふ本の爲にではなくして、火にて燒かれたものを再び書き直したと云ふ一點にあるのである、嗚呼敬の到りなるかな、げにも世に恐るべきものは、彼の三德にぞある、即ち彼は此の三德(熱心、忍耐、自信)を兼ね備へて居つたればこそ、斯かる艱難にも耐へて〳〵耐へ擢して終に馨ばしい名を世に博したのである、故に吾々が事業に於ても假令いくらやり損なつても、いくら不運に出逢つても、その時に力を囘復して自己の事業を全うせねばならぬ、かりにも折れてはならぬ、再びそれに取り掛らなければならぬと云ふ心をカーライルは、吾々に與へて呉れた人ではないか、若しも今日彼の手になつた革命史が遺つて居らずとも、彼は實に後世への非常の遺物をのこした人であると云ふて、過言はなからう。

私は近世の日本の英傑、或ひは世界の英傑と云つても宜しい人のお話を致しませう、此の世界の英傑の中で、丁度、我々の留つて居る此の箱根山の近所に生れた人で、二宮金次郎と云ふ人がありました、自分は此の人の傳を讀んだ時に非常な感覺を貰つた、夫でどうも二宮先生には自分は現に貧ふ所が甚だ多い、二宮先生の事業は、餘り日本に廣まつては居らぬ、夫で彼の爲した事業は、悉く之を纏めて見たならば、二十ケ村か三十ケ村の人民を救つた丈に止まつて居ると考へます、併しながら此の人の生涯が己を益し、人を益すは譯は何であるかと云ふに外でもないが此人は事業の贈り物に非ずして、生涯の贈り物を遺したのである、此の人の生涯は既に御承知の方もあらうが一寸申して見よう。

二宮先生は、十四の時に父を失ひ、十六の時に亦母迄失つて了つた、その上に家が貧乏で何もなく、爲に極く殘酷な伯父に預けられ、あらゆる艱難をなめた人である、それで家産は悉く傾き、弟二人持つて居る身に、錢と云つたら一文もなくしておまけに孤子です、それでその人が如何して身を立てたか、申すも憐れな話であるが或る時伯父さんの家にあつて其手傳へをして居る間に、本が讀み度くなつた、そこで本を讀んで居つたら、伯父さんに叱られた、此の高い油を使て本を讀むなどゝ云ふ事は、何と馬鹿々々しい事ではないかと云



つて讀ませぬ、先生は默然として居つたが、伯父さんの油を使つては惡いと云ふ事を聞いたから、今度は自分は自分の油の出來るまでは、本を讀まぬと云ふ決心をした、夫で如何したかと云ふに、川邊の誰も知らない所へ行つて菜種を蒔いた、一ケ年かゝつて菜種を五六升も取つた、夫から其の菜種を持つて、油屋へ行つて油と取換へて來た、夫からその油で本を見た、さうした所が又叱られた、油ばかりお前のものであれば、本を讀んでも宜いと思ふては違ふ、お前の時間も矢張り己のものだ、本を讀むなどゝ云ふ馬鹿な事をするならばよいから、その時間に繩を綯へと云はれた、夫から又仕方がない伯父さんの云ふ事であるから、終日働いてその後で、繩を綯つたり草鞋を造つたりして、いよ〳〵人が寢入つてから、ひそかに燈火を掩ひながら本を讀んだ、……さう云ふ苦學をした人である、如何して自分の生涯を立てたかと云ふに、村の人の遊ぶ時、殊にお祭りの日などには、近所の畑の中に洪水のために出來た沼地を、伯父さんの時間でない時分の時間に能く耕して、そこで以て小さい鍬で田地を拵へて、そこへ稲を植ゑた、斯うして始めて一俵の米を取つた、その人の自傳に據りますれば、米を一俵取つた時の己の喜びは、實に何とも云へなかつた、是れ天が始めて己に直接に授けたものにしてその一俵は己にとりては、百萬の價値があつたといふてある

夫から、その方法を段々續けて二十六歳の時に伯父さんの家を辭した、その時は已に三四俵の米を持つて居た。夫れから仕上げた人であります、實に此の人の生涯を始めから終りまで見ますと、此の宇宙と云ふものは誠に神樣…神樣と云はればならぬ……天の造つて下さつたもので天と云ふものは、實に恩惠の深いもので、常に人間を助けやう〳〵とばかり思ふて居る。それだから若し吾々が此の身を天と地とに委れて天の法則に從がつて行つたならば、吾々は欲せずとも天が助けて吳れると斯う云ふ考へであつたのです。而して其の考を持つたばかりでなく、それを實行した、その話は長いけれども遂には何萬石と云ふ村々を改良して、自分の身を悉く人の爲に使つた。舊幕の末路に方つて、經濟上農業改良上に就て非常に功勞のあつた人であります。夫で吾々もさう云ふ人の生涯、二宮先生の樣な人の生涯を見る時に、若しもあの人にあゝ云ふ事が出來たならば、自分も出來ない事はないと云ふ考へを起しました。普通の考へではあるが、非常に價値のある考へであります。夫で人にたよらずとも、神にたより己にたよつて、宇宙の法則に從へば、此の世界は何でも吾々の望む通りになり、此の世界に我が考へを實行する事が出來ない筈はないと云ふ感覺が起つて來る。己ばかりでなく、全國幾萬の人は此の人から「インスピレーシヨン」を得たであらうと



思ひます。諸君も此の人の傳を讀んで見給へ。自分の能く讀んだのは、農商務省で出版になつた五百頁ばかりの報德記と云ふ本である。此の本を讀まれんことを切にお進め申すのです。此の本は吾々に新理想を與へ新希望を與へて吳れる本である。實に基督敎のバイブルを讀むやうな心地が致します。故に吾々が若しも事業を遺すことが出來ずとも、二宮金次郎的の即ち獨立生涯を躬行して往つたならば、吾々は實に大事業をのこす人と云ふてもよからうと思ひます云々」

嗚呼右の二名士を見よ。何れもつぶさに憂世にありとあらゆる艱難を犯した人ではないか。實に斯樣な目に遇ふても、撓まず折れず飽くまでも本氣になつて、奮勵せば終には素志を果すを誠に古今の實例に於て、深く之を信ずるのである。

何のその岩をも通す桑の弓

▲金の在處

辯護士「お前さんの罪を少しでも輕くして上げる爲に辯護をするンだから、何でも匿しちやいけない、れ、話しなさい悉皆と、四人「皆話しちまいましたあとは金の匿して在る處だけれど、此奴お滅多にや話しません。



平和な生活にすゝむ道

白桃

一體世渡り上手てどんなのでせう、あなたでも私でもまだ世の中に出る資格がないわ第一かどが取れてゐない學生丸出しで頭が高いばかりで常識が缺けて居ることは免かれない。世の中といふものはさう眞面目ばかりで通せるものぢやなくつてよ、世と共に融和しつつ其中に冒し難い威厳を保つ随分むづかしいには違ひないけれどそれがうまく出來ると世渡り上手と賞められるのですわ。

だつて私にはそんな表裏のある事は出來ないわ心にもないお世辭なんか薬にしたくも出ないぢやありませんか、濁りの中に入れば濁るは當然で角のあるのが私の短所の長所で、私の人格の基礎はこれなんでせう、これを取り去つたらもう私は零よ。

それはさうですよお互にさう品性の劣てゐるとは思はないけれど、まだ／＼修養の餘地があるといふ迄ですわ。修養ですかそれはもう禪もよろしからう、キリストもよろしからう、しかしあまり堅まりすぎて偏してしまつては却て弊害が起るでせう、兎に角世に遠ざかると云ふ事は處世上失敗の原因であらうと思はれるわ。無論正しいのはよいけれども、𧘔𧘕着て居るばかりでは人が窮屈がつて遂に敬遠されて厭世に陥り、終りを全ふする事が出來なくなるでせう、屈原の二の舞も當世ぢやなくつてよ。

屈原てなに。

屈原といふのは楚の懐王の寵臣で非常に正義の士であつたが遂に世に入れられぬを嘆き汨羅といふ川に入水して死んだ人です。後世こんな歌を作て嘲笑しました「死ないでもよかるべきらに身を投げて變屈原の名

を殺しけり」だつて。ありがたくないでせう。偏屈の事ならあの松田先生流石宗教信者だけあつてなか／＼感心な方ね、十五年の永い間お勤めの甲斐あつて今度いよ／＼恩給が下がるのですつて。恩給てどれ程出るのでせう。何でも一年に百二十圓とか聞きましたよ、まあ十五年勤續の慰勞が僅か百二十圓女敎師の末路も悲慘なものね、だけれど先生な



んか成功者の中よあの方なればこそお辛抱が出來たのよ、いつかも下宿のお神さんが離れの先生は機械の樣だ、朝から晩迄仕事から何から規律の正しいこと、年が年中少しのくるいもない獨身の方といふ者はなか／＼かずるい者であるが、彼の先生はお掃除からお洗濯迄それは／＼行屆いて、お心得のよい事といつたら點の打ち處のないお方、あんな方に居ていた

だくと娘共の躾にもなり、まことに結構ですと大そう喜んで居ましたよ、あんないゝ先生にお別れするのかと思ふと心細くなるわ、あなた先生の辭職の理由御存じ？　えゝ校長と意見がどうとか云ふのでせう。表面はさうですけれど裏には深いわけがあつて篠原さんが絲を引いて居るんですとさ、篠原さんの此頃の勢力を御覽なさい先輩を超いてどん／＼昇級なさるぢやありませんか、何一つ取り得のないあの方があれ迄になれたのは全く美貌の德、婦人の命たる貞操を賣つた價なんでせう。それを松田先生例のお氣性見かねて忠告なすつたのを、僻み根性に惡るく取て、とう／＼逐ひ出して仕舞つたださうです。外の先生方も此關係をよく知りながら位置に戀々として一言も仰らないのださうよ女でも松田先生は感心ぢやありませんか、しかしこんな事を云つてた人もあつたわ、松田さんは正しいには違ひないが馬鹿だ、その弱點を握つて居て其れを利用して行けばよいのに……と、これだから世の中はいやになるわ、まあ呆れるねえ、そんならまだいさ子さんの方が恕すべき點があるわ、あの方も今でこそ押しもおされもせぬ立派な將校夫人、學識はあり才氣はあり交際は至て巧みな方だから、乾度貴婦人仲間の立物となつて居らつしやるだらうが、あの方があれ丈けの位置を得られたのは全くミッションスクールのお陰ですわ、入學をさせるのにでも牧師がどれだけ骨を折られたか知れない、學資から小遣から何にもかも皆宣教師のお世話でした、お悧怜だから成績はよし交際はうまし、五年の永い間可愛がられて高等科迄も立派に卒業して、直に洋行と隨分うまくあやつゝて置て、扨いよいよ結婚して何夫人となるや否後足で砂、敎會なんぞは見向きもなさらない「キリストもよろしいがあまり窮屈で軍人の家庭には向きません」とすまして居らつしやるとやら、これが當世流世渡り上手といふのか知らないがあんまりでねえ。

　其の段になると室町先生は一等えらい、今でこそ高等師範卒業生は掃くほどあつて珍らしくはないけれど室町先生が歸られた時は此所では只一人だつたので、

大そうな評判であつた、其時分は女學校や師範の卒業生位でも威張たもので、學士以上でなければ結婚せぬといふ勢であつたのに、室町先生が最高學府の出身でありながら、小學敎員であつた今のハスと結婚なされたので、さあ皆は驚いていろ〳〵批評をしたさうですしかし先生は世の中のそしりほまれはさもあらばあれと、樂翁公の口吻其儘少しも頓着なしに信ずる所をやりぬかれた、內助の効は數年間に顯はれて遂に夫を立派な中等敎員に仕立上げ、今では共稼の幸福なる境遇しかも至て平和の家庭を造つて居られる。別に交際場裡に牛耳を取ると云ふでもなくほんにじみな生活ながら心の滿足は如何ばかりと、お友達とて何日も母樣がおほめなさるわ、いつかも母樣が平和の家庭はとお聞ひなさつたら只服從よと仰つたさうだ、これが先生の成功の鍵だと思ふ。

考へて見ると何だか突飛な出世をしたり、人を驚かす樣な事をする人は乾度裏にはいろ〳〵のからくりがあるのねえ、自分の望を滿たす爲めにさういふ手段を施す樣になるのだらう、して見ると心に安きはないだらう、いくら飽食煖衣大厦高樓に起臥して、人の羨やむくらしをしても安心がなければ幸福とは云はれないでせう、分に安んずる即ち滿足して己れの責任を盡すといふ事は安心の基礎であり、やがて成功に達する階段であらうと思ふわ。

足ることを知りて上見ぬ柳かな

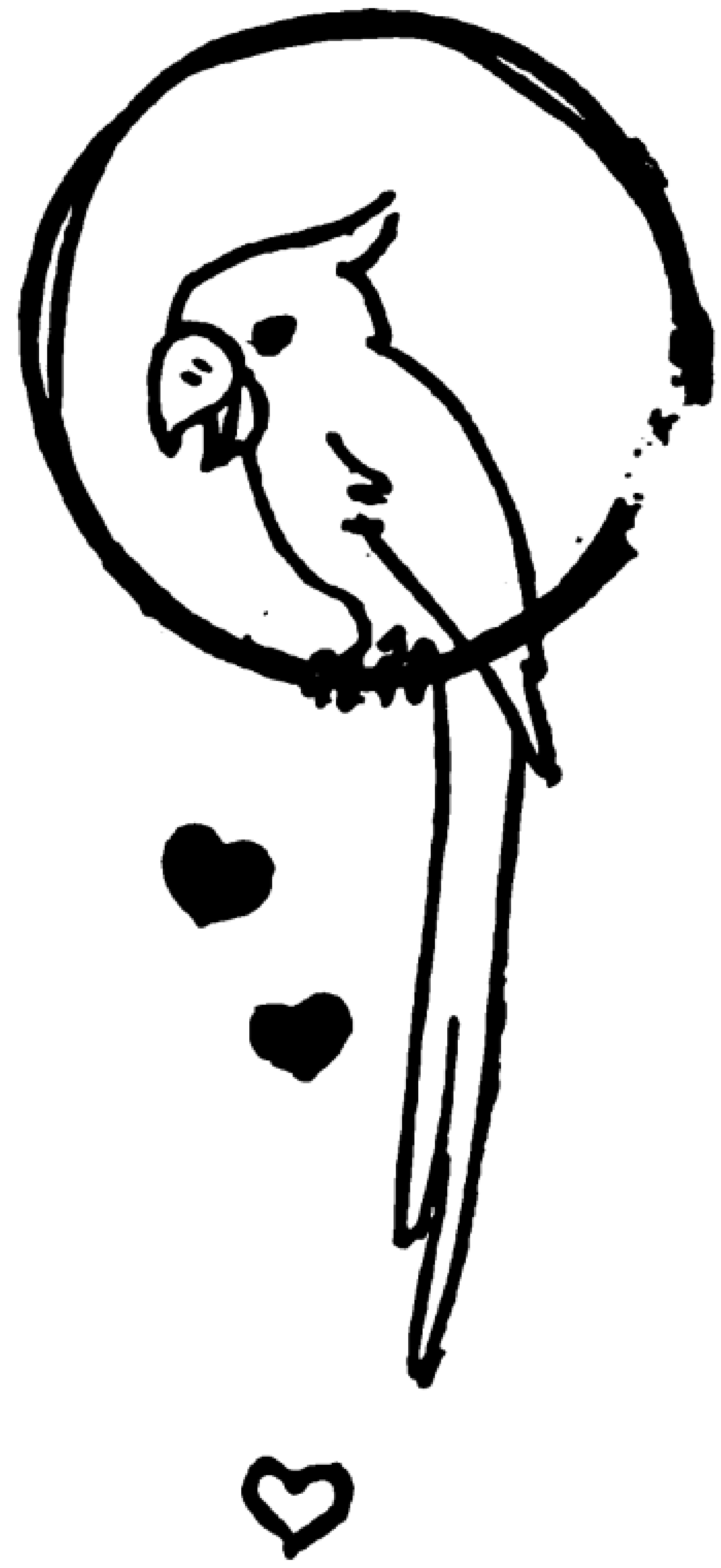
義人の持てるものゝ少なきは多くの惡しきものゝ豐かなるにまされり

いゝ句ぢやありませんか。



當世 世渡りの秘術

相模の夕立



貴女どうしても女學世界は女學雜誌界の女王ですわね、愛讀者の或人か、女學世界は少し高尚過ぎると云ひましたけど、そこが價値のあるところですわ、オヤ何をそんなに一心に見て入らしやるの、あら〳〵ホヽお安くありませんね、スキートホーム、丁度貴女のことを書いた樣ですわ、エヽ、よく書けてますわ、相變らず、そりや勿論萩香さんね、大分物議が持ち上つた樣ですけど、どんな方ですかね、若い婦人でないとも限りませんわ、八方美人ですね。交際がうまいのでしよつて、文章家はいづれ神經過敏なものですわ、何ニヤニヤ笑ひをして、ホヽ、全くね、我身の事は棚へ上げといて、艱難汝を玉にすつてことがありますが、私なんか石だか瓦だかわかりませんよでも昔に變る今の我身、一日でいゝから昔の樣なのん氣になつて見たいと思ひますよ、實際世間てものは恐ろしいとこですわ、貴女なんぞも、どうで一度はね、エヽ、經驗談をつて人の悪い、びつくりするぢやありませんか、だしぬけに、何、親友のよしみだつて、貴女もうまくなつたぢやありませんか、そりや話さない事もないけども、都住ひの貴女が、田舎者の私の云ふことを聞いたつてだめですわ、まあそんなにお仰るなら申しませうよ、御存知の通りの私ですからね、一時は、いつそ、すみ染衣を身につけてとも思ひましたのよ、だつて悲しいやら情ないやらね、考へりやをかしいけども、貴女になんぞ合せる面もありませんわね、何他人が何と云つたつて自分の心さへ正しけりやかまはないなんて、大きい事を云つたものですけど、だめ〳〵、世間てものには

かたれません、それでも盲千人、目明千人の世の中ならいゝけども、どうして貴女、盲萬人に目明一人位ですからね、まぜつかへしちやいや、口が惡いたつてから見えても私、元來べらんめえ崇拜者なんですものホヽ冗談はぬきとしてね、世間にや目のあいた人は少ないのですから、正直一遍でもいけませんね、ほらも吹きや、たまにやうそも云はで叶はぬ場合もありますしまあ善かれ惡かれ世間につれないとね、つまり現代に後れますから、心ではどう思つて居ても、しかたがありません、世が世ですから、エヽそりやとても自分一人がんばつたつて、世間を動せるものぢやなし、世間に從ふのが第一ですね、逆らつちや損ですもの、惡まれて、のけものにされますからね、假令取るにたらない奴と思つたつてやつぱり、世間の一員ですもの、生てる甲斐にはしかたもありません、全く世間と、はなれて暮しちや、この二十世紀の女と生れた甲斐がありませんわ、まあたべて、飲で、着て、ちやらん、ぷらん、いゝ加減に世間並の交際をして暮して行くですよ

こんな事をきちやうめんに考へた日にや、それこそ一番目の命をなくしますからね、利口な人にも、馬鹿な人にも、此の人はかういふ人だと云ふことをのみこんで其人相應に交際しなければいけませんの、御無理御尤もで云ひたい事を云はしてヘイ左樣々々で居るが一番骨が折れなくていゝですよ、しかし云ふべき時には、うんと云つてやるんですね、ヘイ〳〵するのも自分の人格を落さない範圍に於てゞすわ、人は感情の動物なりで、お世辭と知りつゝも、よく云はれたら惡い氣はしませんからね、又同じ事を云ふにも、ぶつちやう面で云はれたより、にこ〳〵して云はれた方がどんなにいい氣持か知れませんからね、それに自分だつて、どうで苦の娑婆ですから、誰一人苦勞をしない人はありませんから笑つて暮すのがどんなに德か知れませんよ、まあ〳〵義理もかゝさず生恥でもかゝなけりやいゝとして世間並の事をして日を送るんですよ、エヽ、お金をどうしましたと、まあ、呆れてね、貴女もすみへは置けない、これぢや試驗されてる樣ですわ、目出度く

合格すればいゝけども、ネ、お仰る通り金の世の中、萬事御方便になりまして、お金さへありや何でも買へますよ、ありやと云つたつて其亦お金と云ふものが俗に云ふおあしで來たら行かなけりやいゝですけど、當世ぢやおあしぢやなくておはねがはいて、直に飛で行てしまいますからね、いくら押て居たくたつて、何ぢやなし彼ぢやなし遣ふ事ばかり多いのですもの、何だつて十五圓の月給取が三十五圓もするフロツクを着なくちやならない世になりましたからね、



尋常一様の事ぢやお金はたまりませんよ、と云つたつて其れ相應の姿や交際も要りますからね、他人の見てるとこぢや、とても費用削減は出來ませんわ、そこで即ち人世に裏ありです、かげぢやぼろをさげて働いて、かつ込み主義の出づるを制すですね、手品師見た樣だつて、何だつて彼だつて、かまうもんですか、せちがらい走馬燈見た樣な世ですもの、かげ日向なく、なんてな事ばかりぢや遣されませんわ

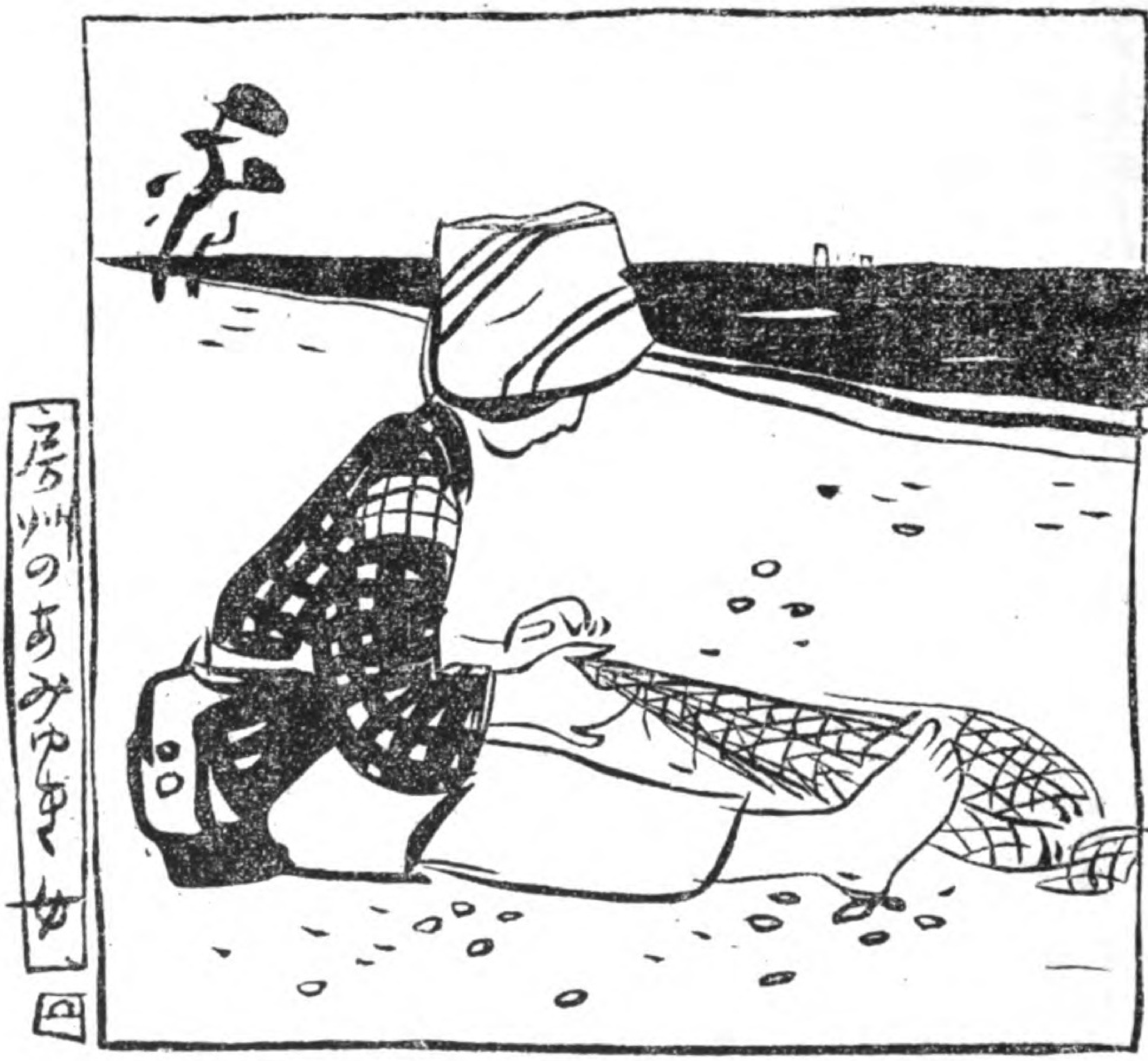
しかしね、いざと云ふ時になると、並の人ぢや十年の

知人も無面識になります世の中ですから、ふだん有力なる後見者をこしらへとくんですよ、かう云ふ人にはおべんちやらばかりでなく、誠實も伴はなけりやいけません、そりや捨てる神あれば助ける神ありで、どこへ行たつて一人位はめつかりますよ、まあ目付かりますなんて大に失禮ですけど、早い話しがね、何によらず長上の人は尊敬するんですよ、そんな、けんのんな人は敬して遠ざけりや宜しいんですわ、損がいかないものなら奉つとくんですよ、さはらぬ神にたゝりなし、何を嘆息なんかして入らしやるの、おそろしくなりましたつて、こまつたお孃ちやんね、世間つてものはかうしたものですよ、義理をかゝない位が上の部實際義理をかく方が多いのですもの、此間もね或人と話しましたの、強食弱肉ならまだしも、どうかしてその強者へも、かぶりつかうとして居るのですからね、餘程しつかりしてないとやられますよ、つまり理性が勝つてないとね、世は末になりましたよ。もうどうかして他人を深い落穴へつき落さうとして居るんですもの博愛主義なんぞ、だいなしですわ、四海兄弟で他人のこまるのも我のこまるのも同じだと思つてやさしい言葉でもかけ様ものなら、其につけ込で甘言以てあざむき、却つて恩を仇ですもの、こちがこまつてる時なんぞ、生意氣をしたから、それ見たかで手をたゝく位がせきの山、ですからうんときつい氣でなくちや、まかり間違へば命の一つ二つなげ出す位の覺悟で居ないとね、生存競爭のはげしい世の中ですもの、あゝくたびれた、おいなりさんでも澤山奢つて頂かなくちや、口がうまくすべりませんわ、一寸御免なさいな、一休みして私の感じたある方の御話しを又少しますから、だつて私のなんざあこれつきりよ、あなたつて云へないんですもの、いづれ又御參考になることがありましたら御參考もすさまじいけども。

妾の感心した奧樣

陸軍へお勤めなすた或相當官の奧樣、もとより一面識もなかつたのですが、お互にこんな田舍では定めしお淋しからうから、お遊びに御出なさいと、おことづ

けを受けましたが、ついごぶさたして居ましたら、或雨の日、わざわざのお使ひでお手ぎわ美事なちらしごもく私其時はほんとに、泣きましたよ、たよる人とて一人もない田舎へ突然引込んだ時ですもの、それから其お禮かたがた上りましたの、お女中さん案内で暫くお待ち申して居りましたら、やがて御見えになりましてね、まあまあそんな御遠慮をなすつちやいけませんよ、さあ〳〵おさく、私も



御免かうむりますつて初めのごあいさつ、なんかわすれちまう位でしたのよ、丸で昔なじみに逢つた樣に、一日おもしろく遊できましたの、それからちよくちよく上りますけど、一寸も氣のおけない、いつでも同じ方ですの其變り御自分の御用のあります時はそれをしながらお話しますのよ、ですからこちらでも却つてお氣の毒でなくつていゝですわ、しごとの手をやめてわざわざだと落ついてお話

なんか出來ませんわね、それでも行くたんびに何かお手製のものが出ますのよ、それで誰にでも同じなんですからね、此方がお話しなすつた事がありますが、決して敵をつくつちやいけませんつてね、おみなりなんぞもやわらかづくめでしたわ、しかしだん／＼おつき合ひ申して内幕を拜見して、成程と思ひました、それはねお家では隨分ごけんやくなんですよ、おかずなんか大抵おつけものでね、お召物なんぞもそりや大事におきなさるし、廢物利用がお上手なんですよ、お菓子折なんぞ一々新聞紙に包んで棚へ上げときなさるの、他家をお尋なさるにもそりや何かと御心配なさるのよでも決して金目のかゝつたものでなく、ちよつと重寶なものを時に應じて下さるの、ですからどんなにうれしいか知れませんよ、決してもつたいぶらないと云つてへイ／＼もしないし、他人のうわさなんか大きらいでしたわ、私其方にはどんなお世話になつたか知れませんよ、エヽ、ですから誰にも尊敬されてましたわ、軍人のせいかも知れませんわ、ほんとにさつぱりしたお察しのいゝ宜く行きとゞくそして目の高い方でしたわ、まあ此方についてもまだいろ／＼御話しがありますけど私何だか、此頃頭がガン／＼してね、云ふことがとりとめないでせう、醫者は「ヒ」の字だつてますけど、イヽエどういたしまして、私こそ却つてわからないことばかりしやべつて失禮いたしましたお退屈さま。オホヽヽ。



様々な人の性情

綾瀬の里

△上手な敗北者

之れは私の式部時代を朝に夕に送た御家の奥様却々くのしつかり者切れるは〳〵馬觸るれば馬を斬り、人觸るれば人を斬る勢ひ何々婦人會、何々慈善會と書き立てれば限りない程有らゆる婦人團體の牛耳を取り〇〇夫人と云へば、あゝ彼の方かと直ぐ點頭かるゝ位。〇〇爵を婦人にしたらあんな方だらうとは或口惡るの評旦那様は至て御人善しなれば内外の事、凡て奥様の手腕によると云ふ恐ろしい程の女丈夫、勿論御交際は御得意クラッスメート評判記にあつた富子様の様に上中下三段に言葉の遣ひ分け御子様達の御教育も却々嚴しく長幼序ありとは斯かる御家の事ならんと思はるゝ程どう見ても美しき御家庭どなたも羨まぬ方はありませんが然し世の中には裏のあるものかゝる家庭の御子様が揃ひも揃つて學校の成績も面白からず御嫁入り先きの評判も宜しからずと聞いてはあつと明いた口も塞がらず元來此の御家には昔より御家で御子様育てると不幸があるとか云ふ迷信があるのともう一つは奥様が哺乳なさると容色が衰へると云ふハイカラな考へと偶然相助け合つて御子様方を皆里子に御出しなされたが幸か不幸か御家へ御戻りの後も親子兄弟の間遠慮勝ちに上目使ひに顔見合つて日を送るのを奥様の早合點案の子供は温和しいと許り思ひ込んで居らしやつたのが何よりの誤り継子様の根性増して物事を凡べて隠す見えない所では互にいがみあふのが外出勝ちの御母さん少しも御存じなし御父様は元より家内安全を 希ふ人なれば何の御小言も仰しやらずまあそんなこんなが卑屈、柔弱、陰険ていふ様な御氣象を作つたのではあるまいかと思はれますまあ美しい春霞に被はれた底の知れない御家とでも申しませうか。

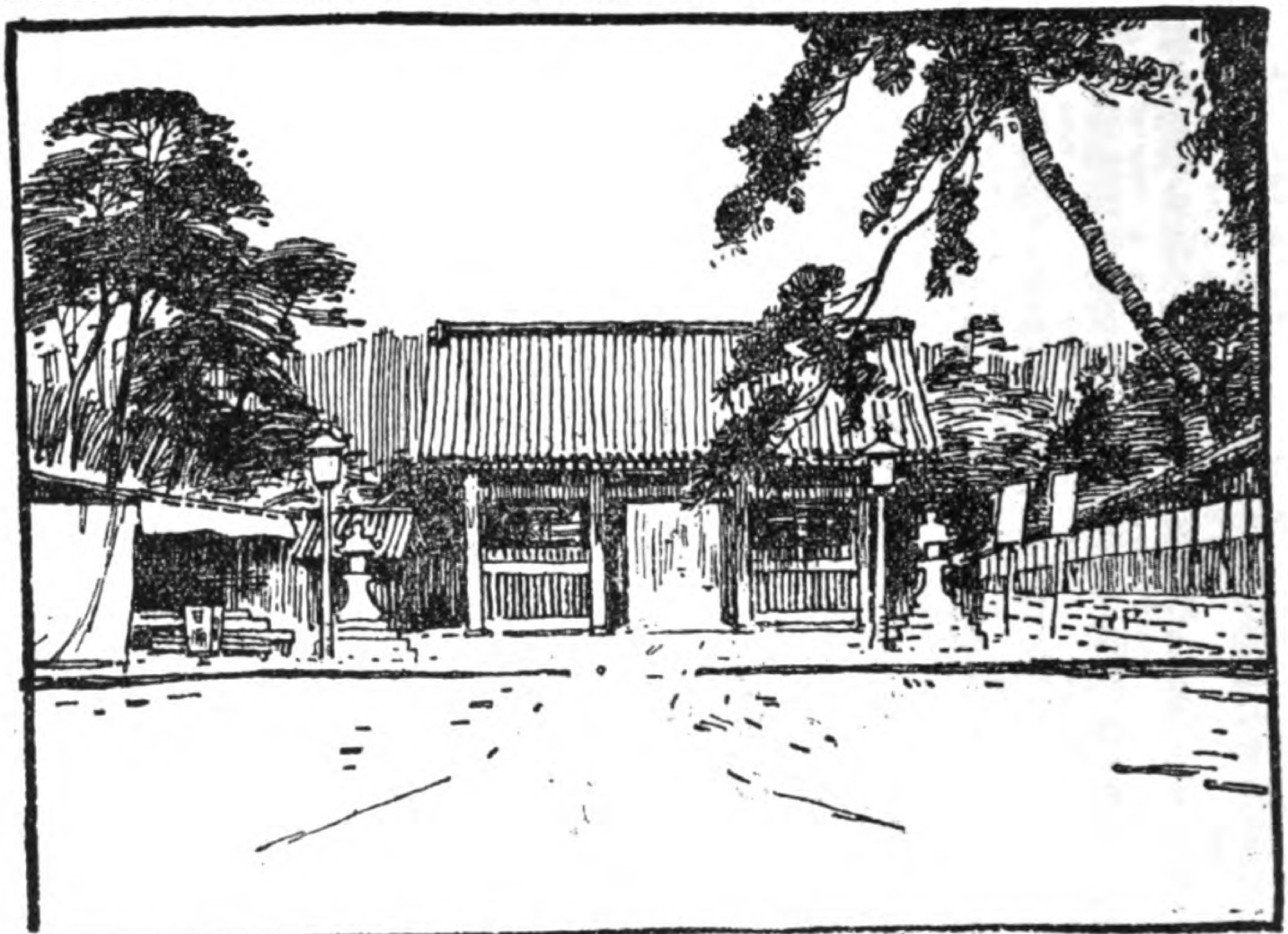
△下手な様で勝利を得し人

之れは少しく方面が異つて私の家へ出入りしたものの話しで御座いますが此の婦人の家は又揃ひも揃つて無口家御世辭とは何處の國の語かと云ふ顔して暮す人人さりとて優れた藝があるではなしまあ平々凡々の權化でせうかされど此の細君平々の代りに至て親切な人私の家に何か忙しい事があると直ぐ來てくれます來ても別に御世辭遣ふでもなし默つて其處ら手傳つて御飯の時になると必ず自分の家へ歸る二三間隣りだからそして呼びにやつても却々來ません御飯すんだ頃にはやつて來て又何かして居る私共が見ては何んだらうあんな遠回りな事をしてと思ふて居る内何時の間にか一つの仕事が出來る其の代り休息なし煙草一服喫はず手の先きはとぼ〳〵と始終動いて居る其の家の裏の藪際の汚い所は隙々におこして今では肥沃な宜い畑地になつて居ります物を入れた竹の皮は一枚殘らず溜めて置いて夜の仕事に子供の草履を作つてやるといふ鈍ろいけれども萬事丹精なやりかた今では一、二千の財產を有し米の小賣屋としては有數のものとなつて居りますまあ蟻が蟻垤を作る樣なやり方でせうね。

△人に好かるゝ氣質

之れはさる高等官の奥樣まあ厭味と云ふは藥にしたくもなし何時もさつぱりとして居らつしやる深い御交際はないがおしなべてどなたにも當らずさはらず女學生二人許り世話して居らつしやいますが二人ながら良い奥樣だと申して居ります私共が一寸上がつても何時もにこやかに御相手なすつて下さいますつらひと云ふ事は鵜の毛ほどもあるまいと思はるゝ程圓滿な御樣子此の方の前へ出ると何時も春の彌生の心地がするとは皆樣の一致した評であります私あんな御母さんがもう一人あれば良いと思ひますわ、慾が深いつてだつてホヽヽまあ梅が香を櫻の花に匂はして柳の枝に咲かした樣な方とでも申しませうか此の方の美點は圓滿と快活とでせう。

△嫌はれながら押し通す人



音羽の護國寺（東京の名刹）

此の方は市で名高い或醫學士夫人遣り手の大將男ならまあ星亭式の遣り口前に御話した私の世話になつた御家の奥樣と好一對されど此の方は少しく峻酷に過ぎるとでも申しませうか、御自分の事は棚の上盛に他人の缺點落度に立入る御親切も過ぎては毒になり種種の會合に御出でになつても何時も白い眼で睨めて居らつしやるあの餘興はボンヤリして居たの此の裝飾が間がぬけて居たの其のプログラムはどうも不整頓だのど會の準備のときは何やら彼やらやかましいの何のとされば陰口は至る處に聞かれクシャミは出續けだらうでも御家が御醫者樣だから何とかなさるだらうとは或る口惡る樣の批評、道理で御内でも書生下女は非常な迷惑やれ其處が形付かないの其れどこが塵埃だらけだとの隙さへあれば鵜の目、鷹の目缺點拾ひ御まけに朝は四時の五時のと云ふ頃から御目覺め鈴を鳴らして書生下女部屋を起し回る書生や下女は此の奥樣がせめて半月でも旅行して下されば良いのにと神信心して居るとはまさか。

然し此の奥樣至て規則正しき事が取り得にて相當に腕利きの上に旦那樣が醫學士と云ふ位置とによりて此の奥樣の御名前なくば會の景氣に關するとかされば陰口の善惡は兎に角世に時めき給ふ事は相ひも變らず鳥の鳴かぬ日はあれど此の奥樣の車上姿拜まぬ事はなしとか先づ腕で押し通す腕白ものとでも申しませうか。

△利口さうで纒りつかぬ人

何事を聞いてもはあさうです何事を見てもあゝするよりかうした方が良いと一廉分つた口振御交際振り御世話振りもはき〳〵と脱け目なく御家へ上がつてもよく御口の回る事色々實驗談に苦辛談など御自慢混じりの御談し澤山御話半分としても充分の經驗に富まれた方一寸交際した人でも賢夫人の内に指折るとかされど旦那樣御歸りの度毎に家内整頓せず掃除行屆かず或時は小遣帳までも引き出されて御叱りなさるとかはてあれ程の御方どうしてそんな不平のあるにやと思ひましたのに其も道理口は八町なれど手は半町もむづかしく」奥樣口先きばかりの實驗家表面のみの賢夫人洗濯と臺所は大嫌ひ自から何も彼もなさると云ふ敏腕を見せたさに下女も置かず實驗振り回すはよけれど臺所庭の隅は塵埃の山、戸棚には汚れた寢衣、肌衣は古着屋の店程御飯は御孃さん方に交番にて炊かせ御自身は雜誌の御勉强とか其れでこそあの御話どうやら覺えのある話と思ふたのに皆雜誌の燒き直しとは大膽にも程があるあゝ一種の虚榮に囚はれし奥樣よ一日も早く御覺め遊ばせ吾が世の春は何時までも續きませんぞ。

△ぼんやりして鍵を握て居る人

之れは私の叔母から申しては自慢らしう御座いますが人柄至て良く親切な人祖父の氣象を受けしとやら物事顔にも口にも出されずまあ英雄の風があるんですね朝から晩まで何ともなく庭の草をむしつたり御座敷の御掃除をしたりそれで居て目は高い耳は鋭い直きに昔取た杵柄振り回はして金次(下男)お前其れでは米の搗

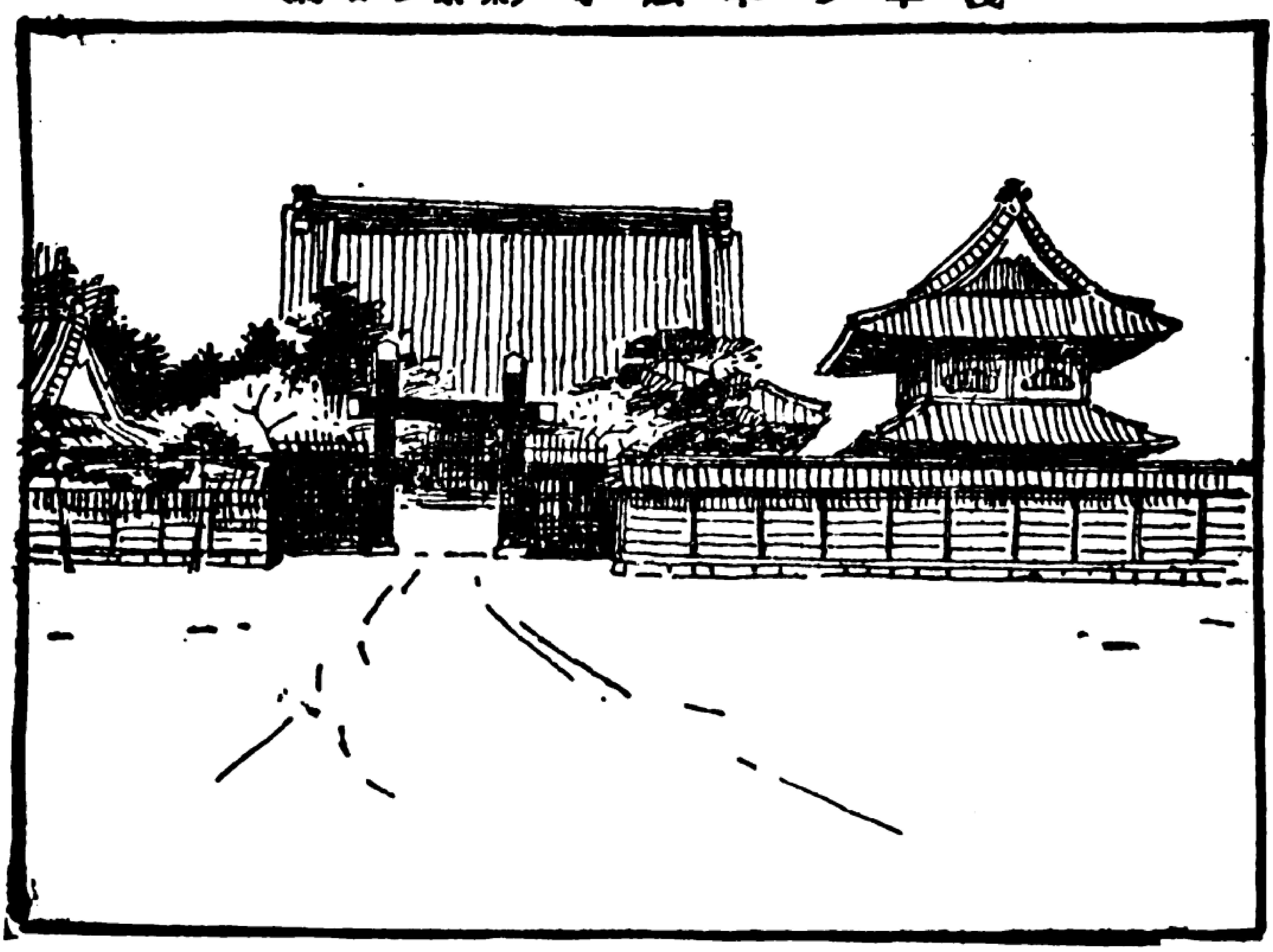
き方が力を入れ過ぎて米が折れる佐代（下女）お前其の手つきでは御香の物の片が離れないよ、もう少し前へ引き加減に御切りなんて私共なら側へ行て見ても分らない事を遠くで見て居てもちやんと分るされば一家の鍵を握つて默つて居ても家族親類が叔母には一目置いて居るつまり叔母の頭は推理の力に富み熟考する餘裕のある人でありませう。

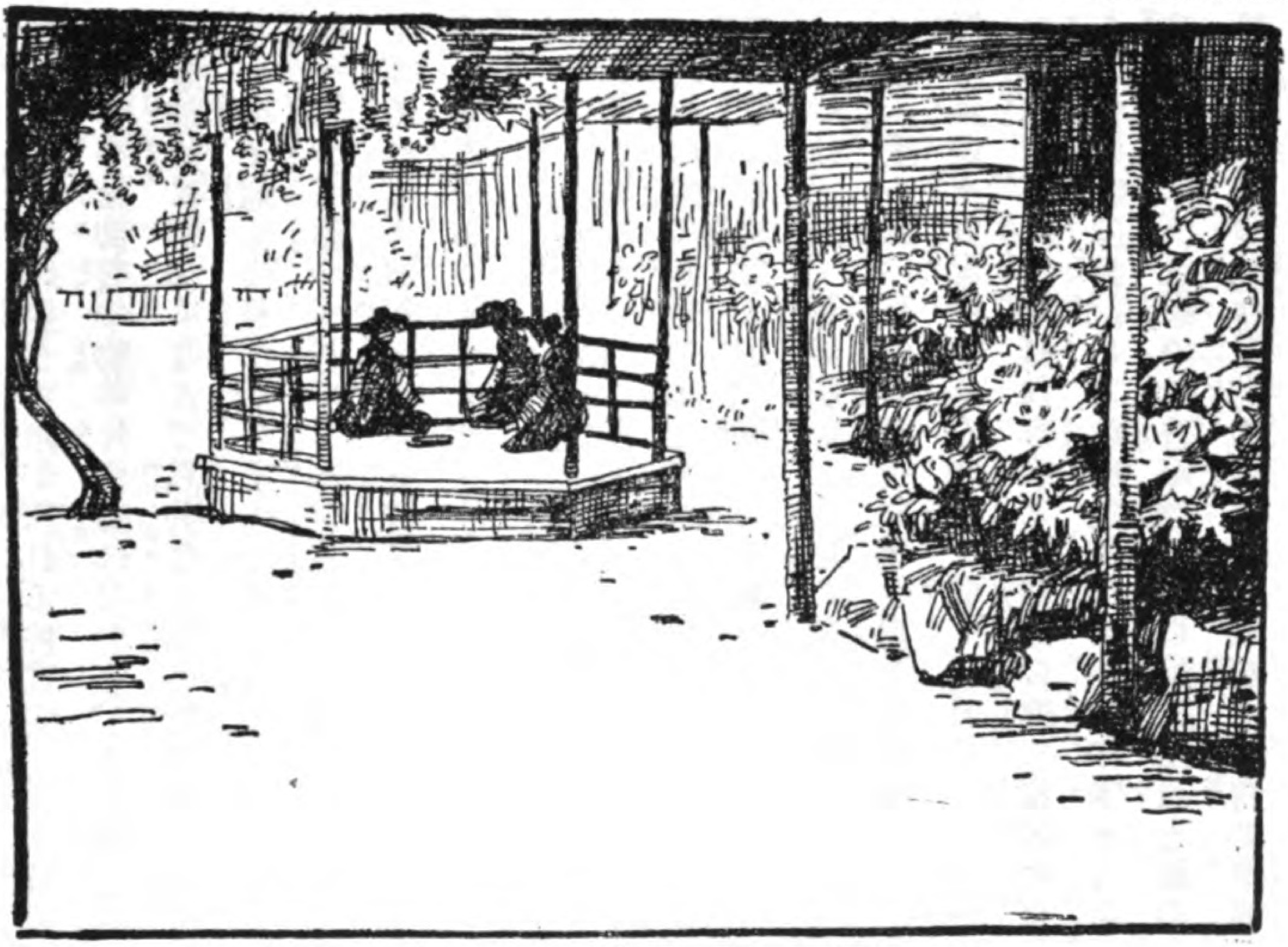
△働かぬ樣で働いて居る人

之れは家の祖母の事です餘り續けて身内のもの許り書き立てる樣ですが、御免しを願ひます。

祖母は元來、目の屆いた人店の隣室の炬燵の中で家へ出入する人のした事話した事を得意な達筆で記して居る其の上日記は委しくつけて置く後日になつて色々の事柄で家内中忘れたやうな事何か前例に從はねばならぬ事は此の日記によればすぐ分る臺所の下女でも祖母が立廻れば仕事の仕方が違ふ實に祖母は目と耳の人である祖母の目は私共の及ばぬ所に光り祖母の耳は私

淺草の本願寺（東京の名刹）





初夏の花（四ツ目の牡丹）

共の感せぬ事までも聞く、手と足とを動かさずして、却て其れ以上の働らきをなした人であります。

△要領を得ながら結局不得要領に終る人

少しく病的ではあるが頻りに詩とか趣味とか云はるる奥樣シエークスピヤーを常に御愛讀なされ、詩趣に就きての話は成程と感心する事もあり一通り立派な御意見を御持ちの樣子先づ感心して置きますが此の奥樣他人までも自分の思ふ通りに同化させたく強いて之を遂げんとて若し成らざれば世は終りなり趣味は墮落せりと煩悶する其れで御持物装飾は俗惡なものを御好きになる人を刺戟する色は下等な色が多いと仰しやるかと思へば赤い色は綺麗で良いねと仰しやつて何でも赤を御用ゐになる詩は各個人によりて作られ趣味は各人自由であると仰しやるかと思へば盛に他人に干渉して御自分の思ふ通にしようとなさる一面に要領を得たるが如く一面には頗る要領を得ない方であります。

輕薄な世渡り術

きよ子

○書　齋

主人書見の處へいそ〳〵と入り來たる奥様机の傍なる火鉢の前へ坐る。

凡て奥様の聲のみ漏れ聞ゆる體。

「あれ松(下女の名)は！　お火を差上げと吩咐けて置くのに又忘れるのですもの。眞實に呆れて終ふわ……。まあ貴方も隨分…燐寸で入らないんですつて？　まあ貴方も隨分…燐寸で烟草をつけたりして。松――ッ松――ッ…何處へ行つたんだらう⁉　あれの呼ばれて直來た例はありやしない。屹とまたお隣の下女とお喋舌だよ、焦心い……

オヤ、此本はどうなしたの？　お求めなすつて？　幾ら？　五圓？　五圓！　まあ…それでね――それでね――、ねえツてば貴方！「うん」なんて、よく聞えて居る癖に……それであの…「又金か」ですつて？　未だ何とも云つて居ないぢやありませんか、ぢや、良う御座んす、いつ「また」と云はれる程無心を言いましたら！？　眞實に自分のお金があつたら一文だつて誰が出して下さいと賴む物ですか其都度貴方に嫌な顏をされるのが妾にはどんなに辛いか分りやしない。

「辛けりや言はない樣にしろ」と仰るの？　まあ貴方そりや眞面目で仰る事？　笑談でせう⁉　ね、笑談。後生だから眞面目になつて頂戴。眞面目に…ねえ貴方。貴方は本なんか讀んで呑氣に構へて入來るけど今は何月だと御思召すの？

五月、ほーら五月でせう。もう夏ですわ、去年は貴方の病氣で木綿物一つ儉約して居たのと、それに今年は「露子」が急に大きくなつて迚も四つ身では間に合ひませんから如何かせねばならず妾はどんなに氣を揉んで居るか…それを貴方は一寸も御察し下さらないでこんな本なんかお買ひになつて……

えゝ、そりや幾ら妾が馬鹿だつて知つてますわ、御本の大切な位。ねえ貴方、物には譬が御座んすわ、妾の申すのは、御本も必要でせうが、御本の事を御考へ

なさると一緒に家內や子供の事も考へて下さいと御願する丈ですの。「露」だつて七つと云へばもう着物の赤い白いも分る年頃ですし、妾にしても人樣と同じ樣にしてやりたう御座います。此間も學校から遠足に行く時に絹張の蝙蝠を持つて居なんだのは自分一人だと云つて、もう遠足なぞ二度と行かないと申してましたわそれとも其が出來ない身分なら格別、今度增俸もあつたのですもの少しは子供の僻み心の起らぬ樣にも…

「そんな心を起さすのは妾の仕附が惡い」と仰るの？えゝそりや妾が惡いんでせうよ！　何れ無敎育な女ですもの、そんなに妾があれの爲に惡いのなら貴方一人で立派にお育てなさるが好い、妾は暫く里へ歸つて居ますから……里の兄だつて母だつて日頃親切に言つて吳れてるんですから妾一人位何日迄居たつて關はないし…

「馬鹿な事を言ふな」つて？　そりやもう妾は馬鹿ですわ、日本一の馬鹿ですわ、家の爲許り思つて花見一つ行かず年中眞黑になつて働いて居る馬鹿ですわ。

何となりと御勝手に仰い、いゝえ、あれの着物なんか入りません。裸體で慄へて居たつて關ふものですかそして世間から「彼處の家はお役人か知らないけどもの子供の身態は！」と後指をさゝれるが宜うござんす！

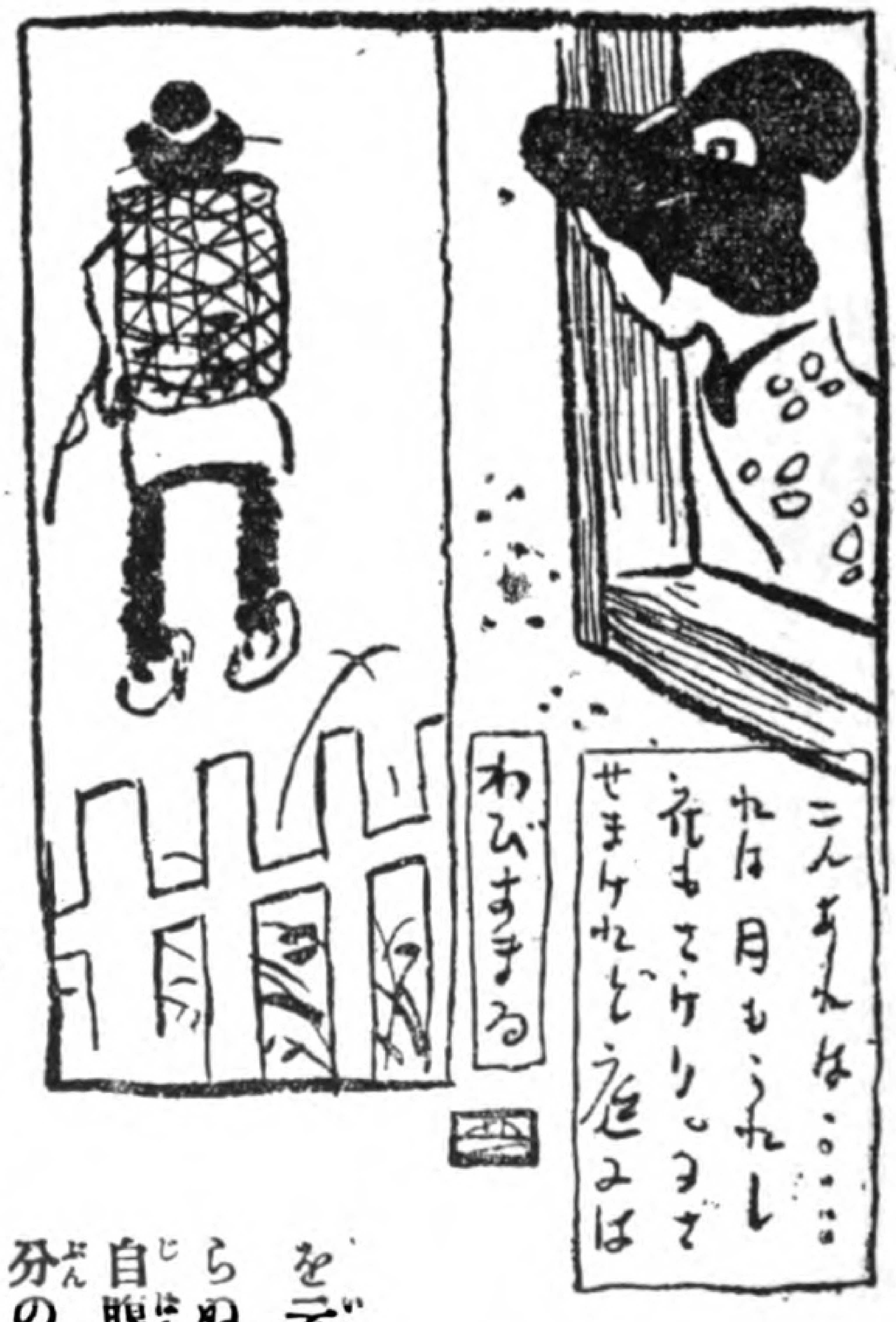
「お金を出さんと云ふ理ぢやない」つて？　そいぢやどんな理？　妾が着物に遣ひ過ぎると仰るの？

まあどうしてそんなひどい事を仰るんだらう！？　どれ丈子供の物があるか箪笥の抽斗を拔いて參りませうか。ねえ夏物と云へば初着の染變が一枚と妾の帶のお古をあれのにしたのが一枚切り。此頃貴方はよくあれに動物園へ連れて行つて遣る〳〵と仰いますがどの衣物を着せて行くお積り？

「一體どれ程だ」と仰るの？　え？「參考の爲に聞いて置く」つて？　良人も隨分ね。でも良う御座んす、エ、ト、ねえ貴方、第一あれの單物としなきやならず拵へるとすると貴方は綿入の襟へ物は虛榮だと言つてお嫌だから、本物でしてと…それに貴方、妾だつて

こんな袖口の着物で辛抱して居るのですよ。ホラ汚いつて？　ホヽヽさうでせう、だから何か拵へて頂かなきや暑中見舞に行く事も出來ませんわね…「幾ら」だつて？　まあさう急がないで待つて頂戴。勘定違をしたら大變だから…

ねえ貴方、充分儉約してギリ〳〵結着引けぬ處が是よ、今度丈と思つて「三」丈下さいましな。「三圓かいつて？　その白ばくれ樣たら眞實にお上手。ねえ、笑談は除にしてそれ丈ね。宜しう御座んすか、貴方なぞ御存じないでせうけど此頃の物價の昇つた事と言つたら――「物價の割に俸給が上らない」つて？　昇つたぢやありませんか、二割の増俸があつたぢやありませんか…で其物價の騰つた事たら百圓持ても何も買へぬ程ですの、それに…何と仰るの？「半分なら遣る」半分では仕方がありませんわ、まあ考へて御覽なさいなあれの袴丈でも三圓でせう着物が十圓としてもぼつ切の一枚着せる理にも行かず襦袢なんかも拵へると直ぐ廿圓ですわ、其處へ妾の物の一枚も入れると…「そりや分つて居る」つて……お分りなら何卒それ丈下さいな、眞實を云ふと迚もそれ丈では足らぬのですけど其處は妾が自腹を切りますわ…「自分の金があるのか」つて？



まあ可怖いお顔、そりやその、妾だつて萬一の爲に儉約したのが無いでもありませんわ、ホヽヽそんな事は聞きつこなし。何せ下さるのなら快く諾と云つて下さいましな。ね？　良いでせう!?――!?――!?

○お臺所

流し元にて陶器を破る音す、通りかゝりの奥樣そをきゝつけて。

オヤ？　あの音は何だらう。亦「松」が何かお落したんだよ、チヨツあれの粗忽やたら。

松――ッ松――ッ、松ッ呼んだら直ぐ返事丈おし。物も言はないで膨れたりして此人は！…‥お前、正可物を破たのではあるまいね、何ですつて？　ハ、、、ハイ破り、、、ました？　破りましたでお前濟むとお思ひ？「ハイ破りました」と言へた義理ぢやない、それが今一度ではなしあの清水燒の水差を破つたのもお前、紅葉の土瓶を破つたのもお前。ね、薩摩燒を毀したのも大方お前だらう…‥「よありや違ひます」つて…‥假んば違つたつて度々の事だもの疑ぐられても仕方がない、だから何でも平生が大事だと云ふんだよ…‥何？「あれはどうしても違ふとお言ひなの、まあ強情だこと此人は！　それだから廿三にもなつて嫁入口が無いんだよ。

オヤお前泣いて居るの、良い年をして…‥。お止しお止し、見ともない、泣く程惡いと思ふなら何故失策した時直に斷はらないの、ねえ松、「是を破しました、御免なさい」と一言云へばお隣の奥樣ぢやなし其上誰が叱る物ですか、茶碗や皿の一枚位どうでも良い。唯お前の仕打が頼もしくないと言ふ丈なの。それに叱言を云ふのだつて一元の奉公人なれば誰が好かれもせぬ事を言ひたい物ですか、お前は父親から「何卒あれに行儀の一つも教へて遣つて下されと頼まれてるのだから、つい〳〵憎まれ口の一つも言ふのよ。今は妾の樣な者の言ふ事は馬鹿におしだらうが子の一人も生んで御覧、ひし〳〵と胸に答へる時が來るわ。ねえ左樣だらう、何時かもお前の惡口を言つたお向のお留どん、あんなに朝から晩迄近所を喋舌り歩いて居て偶に奥樣が叱言を仰ると酸漿提灯に火を點した樣な顏をして…‥…ほらお笑ひだらう…‥今度誰かに左樣言つてお遣りあんな顏を酸漿提灯と云ふのだつて、赤くて膨れて居るからよ、見つともないつたらありやしない。

此間も人が來て「お宅のお松どんはお留どん等よりずつと氣が利く」と云ふから妾は態と怒つた振をして「宅の松とお留どんとは人間の段が違ふ」とさう言つて遣つたのよ。

ねえ、そりや妾だつて口八ケ間敷く、云ふわ、けども只の一言でもお前の爲を思はないで言つた覺はありやしない、旦那様は眞實の事を御存じないから何ぞ云ふと妾許り口八ケ間敷い樣に仰るけど、それにつけ上つて妾を不足に思ふ樣な事があればそりやお前の價値を下げる許りだわね。

子供と云つても只の一人、老人があるでなし井戸は勝手元にあるのだしこんな樂な家はありやしない、旦那様だつて一晩遲くなる事もなし、始終勉強許して入來るんだもの少しはお前も其氣になつてね、粗忽の無い樣、大きい聲も控へる樣にしてお上げ、それが家の者の勤だわ、妾だつて御覧、流行の寶石一つ買はず二期に三越へ行くのが關の山、それだつて旦那様には心配はかけぬのだものね、皆平生儉約して溜めたので行くので、家内中その心掛になつて初めて人の家は治つて行くのだよ……

オヤ今鳴つたのは午砲ぢやないの、もう旦那様が歸つて見える。早くお前竈の下をたきつけてお呉れ——



○接客振り

同年輩の奥様が上座に今對談の最中

…オヤ、まあ木村様の奥様もそんな慘酷な事をなさる方？　眞實に人は見掛によらない物ね、あんな優しいお顔をして入來しつて…。それに平生は紅い物を掛けて入來るんだわ、でもあの方のお髮は綺麗な事ね、「縮れて居るつて」？　お宅の洋犬見たいに、ホヽホヽ口の惡いのは奥様の方で入來るわ、ホヽヽヽ時にあの方の旦那様は何處へ出て入仰るのでせう、會社？さう、溫和しい方ですつて？　ホヽヽ何れ溫和しい方でなけりやあんな眞似も出來ないぢやありませんかオヤまあさうですか。妾もそんな默つて居ても指環を買つて呉れる夫が羨しいわ…、どうして〳〵宅のなんか眞實に甚いのですよ、指環處か半襟一つ快く買つて呉れやしませんの。えゝでも三越の夏物賣出には參りました。貴女も？　さう、こんなのを買つて來たのですが少し華美で氣に入りませんの、木村の奥様でもお召になつたらよく似合ふでせうけど…あの方は色が黒いつて、妾の方が黒いかも知れませんわ、ほんとに、まあ御世辭許り。幾らで御座いましたかね、十三圓だつたと思ひます、良人にですか、良人には五圓と言ふてあるのですよ、其代り露子の方をずつとお高く言つて…ひどいと仰るの、ナーニ關ふ物ですか、男なんか何にも知らないで、ふん〳〵と言つて居ますわホヽヽヽ。

此帶？　これも序に買つたので御座います、佛蘭西の織物でクル、クル…えゝ何とか申しましたよ、矢張織物は彼方が良う御座んすのねえ、日本なんか幾ら氣張つても駄目ですわ。」

別の話で御座んすけど藤井様も増俸があつた相ね、ホヽ宅でも面白い話をして居るのですが、まあ、あれが新聞に出ると直ぐと下女をお置きなすつたんですつて！　みす〳〵氣の知れた、ねえ貴女。そんなにしないでも良さ相な物を…。

オヤもうお歸りですつて？　まあ宜いぢやございま

せんか、切角御飯も拵へさしましたし……音樂會へ入來いますの？　慈善會の？　あれにはほんとに弱らせられましたよ。今度丈は御斷致しますと云ふのを皆樣が是非幹事になれと仰つて、貴女が奔走しなきや會が盛にならぬなんて皆お世辭ですわ、でも何だか濟まぬ樣な氣がしましてねそいぢや切符丈賣りませうと三十枚丈漸く方附けたのですわその氣苦勞たらもうもう會なんか手を出す物ぢやありません。

　オヤつまらぬ物ですが御飯が出來ました。每度ですつて？　どう致しまして貴女、妾もよく御宅で頂くぢや御座いませんか、それにこれは此間講習會で習つた料理ですの、貴女に笑つて頂かうと思つて。ホヽヽホヽヽ



△船來の雨傘

舶來の婦人物には絹張で極く細く柄と共に袋に捲き込まれるのが流行する、茶色、水色、白茶鼠と好みの色があつて骨に七間の亙つて細い日傘である、又男子用として最新米國から輸入された雨天專用と云ふ蝙蝠傘がある、骨の長は廿五吋中で張地は中絹、袋に捲き込むことになつて居る、骨は柄の處でピウナウで留め、猶は濡れた時には捲き切れぬので張地の上よりも二重にピウナウで留る杯、甚だ工合が可い柄は自然木で一寸した彫刻が有て耕抹の玉飾を附着する價は五圓五十錢乃至七圓五十錢位

△子供の櫻傘

子供の日傘は新案登錄の綠の繻子張で色には赤、水色、小豆、お納戸と好みがあつて模樣は白絹で櫻花着き、刺繡が施してあるので目覺むるばかり美麗である形は十九吋と十七吋との大小二種があつて年齢で區別される、そして木製の塗柄に菜の花に蝶の戯むるゝ簡單の彫刻と絹の飾玉が着いて至極可愛らしい。



世間を趣味で見る人

むらさき

我が友の世渡り振り

どんなに御立派な旦那樣をお持ち遊ばしても、いつもピイ〳〵風車でいらつしやる方もございますし、高が小學校の校長の御夫人でも甘く上役の方に取入つて旦那樣の御出世を御計りになる方もございますからねオヤ〳〵私にそれについて何か話せつて仰しやるのでございますか。御覽の通り私はいつでも良人に「お前は人附合は惡くはないけれど、人によると怖いやうだと思はれる事があるさうだ。」と、云はれて居ります樣に自分ぢや固くなつてそらない積でございますけれど、ツヒ癖でして人樣とお話する時に固くきまる相でございますよ。ですからとても自分の世渡り經驗などをお話する事は、出來ませんね。でもつて？　それぢや致方がありませんから學校に居りました頃の友達や、一二存じて居りまする奧樣について申しあげませうか。

△山本つき子樣

此お方は私共のクスヲ中でもおとなしい方でございましたが、其くせなか〳〵の野心家で一度誰れにも知らさず高等師範をお受驗になりまして……勿論技藝科で、駄目だつたと知れた時も默つて笑つて御出でになりました。よく私共が集つて突飛な、理想だか空想だかわからない事を喋々して居ります時にも、いつも後の方で口數少なくきいていらつしやいましたが卒業するとまあ俄に人が變つたやうなお體の御かまひ振り、もう一月とたゝぬ間に田舍で多額納稅者の令息の所へおいでになりました。同窓會なんかでお目にかゝりますと昔の俤今いつこ、私共のやうなみすぼらしい形

をしてゐる者にでも溢るゝやうな愛嬌を湛へて上手に隔なくお話して下さいます。それで柴なんかは大層よい奥様だと敬服して居るのでございますが、又他の方にきゝますとお家ではお食物に非常なしまつ屋ださうで、女中なぞは一月も居たまらないと申す事でございます。さうきけば時々會の事や何かであがりますと艶のあるシユウ〳〵した御着物を引裾に遊ばしておいでになつて、相變らずなつかしくお話をして下さいますがいつもお茶一つ出た切りなんで御座いますよ。けれど御親類への盆暮のお贈り物は思ひ切つてお立派なのがゆくさうでございます。まア御免下さいまし。私とした事が飛んだ事を申しましたね。兎に角御交際の御上手な方でいづれ近い内東京へおいでになつて本場で腕をお揮ひになるさうでございますよ。

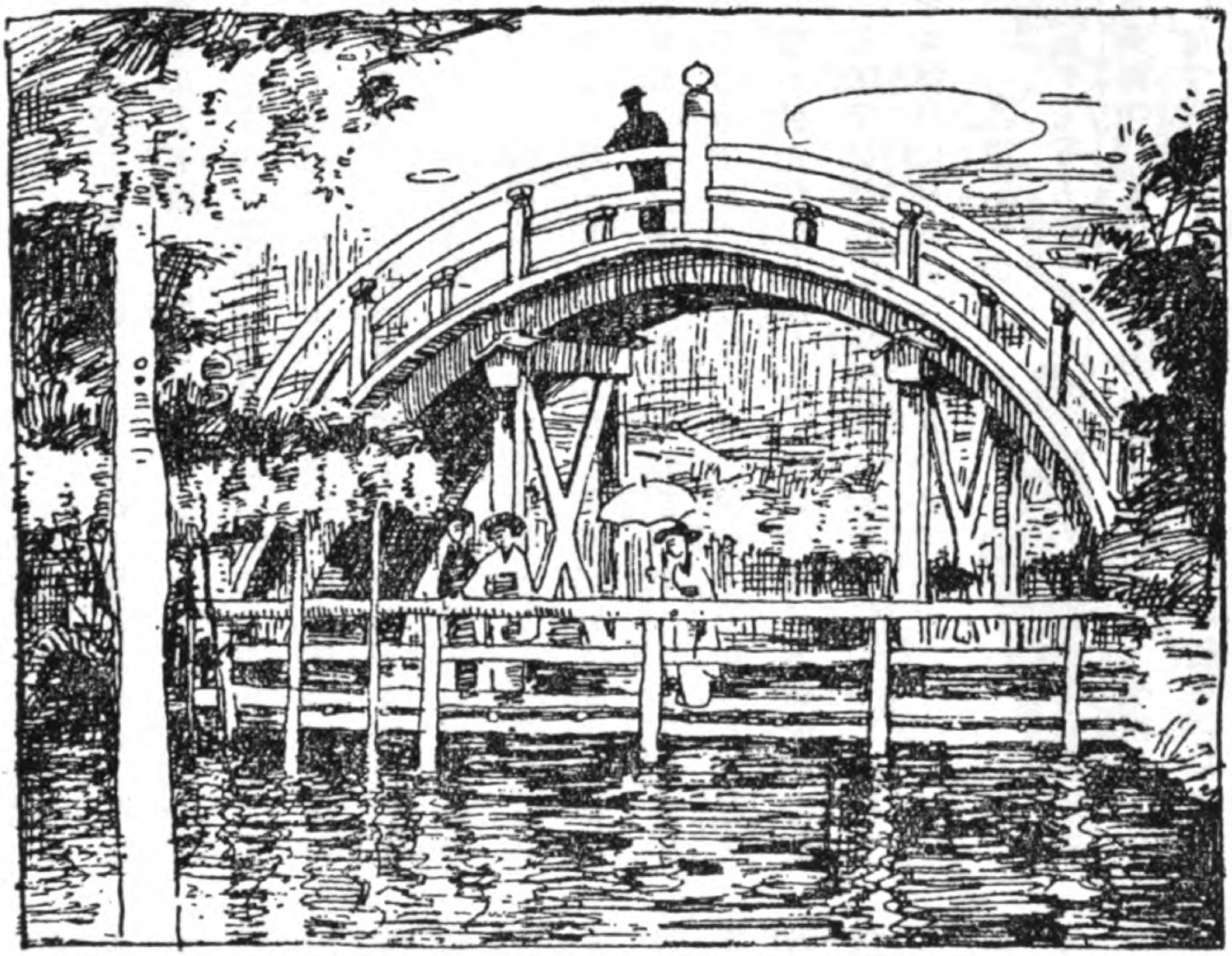
△下田かつみ樣

疳高いそゝるやうなお聲の方でお家は本町通りの大きな藥屋で、華美ずきのお母樣のお好みで、學校においでになつた頃から、艶々した癖のないお髮を粋な銀杏返しにして長い袖をひるがへしてお出でございましたよくお家へ伺ひますと黒繻子の衿のかゝつた横縞か何かのお着物に前垂掛、なか〳〵振つたものでした。一體が蓮葉な方でお標緻も一寸類のこけた首筋のぬけた、やさ形で實業家がお望みでしたが、御本人よりもお母樣のすゝめで、どうした事か税務署のお役人樣の所へおいでになりましたが、其後御良人樣が京都へ御出張遊ばしたのでお淋しいと云つて、下宿屋をお初になりました所が性來此方の氣性として適當するので、今では六七人も女中二人とでお世話をしていらつしやいます。旦那樣は一月に一度位づゝお歸りになる相で例の若やいだお笑ひ聲が漏れると申しますよ。あまり氣を張るといふ方ではありませんがそれだけ又親しみやすく誰方にも差別なく愛想よく遊ばすので、お友人仲間でも御近所でも御評判がよろしいつて申しますよ。むらさきなんかも御見習ひ申したいと思つて居ります。

△菱野すみえ樣

お目許の御やさしい引つけるやうなので隨分有名な

初夏の花（龜井戸の藤）



方で、それに御文章と來たら私なんかよくわかりませんけれど錚々たるものださうで、東都の雜誌でもいつも賞をお取りになります。阿父樣は休職中佐でゆつたりとしてお育ちになつたのが自から眉目の間にほの見えます。一寸令孃振つた方ではありますが御みなりなぞは少しも御かまひ遊ばしませんでした。只今は中尉樣のお許へおかたづきになりましたが、元が軍人大嫌ひの方で今の旦那樣の時もひどくお拒みになつたんださうで……何でも文士か何かでなければお厭だとか仰しやつたのでお父樣は大層お怒り遊ばして、御相談なしにおきめ遊ばしたとかきゝました。性來お氣の弱い方ですから默つて仕へていらつしやいますが、奥樣にお成り遊ばしてからは沈み勝なのがかうしとやかに落付いたのに見えまして、誠によい奥樣でいらつしやいます。むらさきとは格別お親しく願つて居りましたから、いつももう少し快活に御なり遊ばせつて申して居るのでございますよ。ですから會や何かでも御老人方には重寶がら

れ遊ばしてあまりお若い虚飾をかざる方々には向かないやうでございます。師團長の御夫人がひどく御贔屓になさいますので旦那様も御出世が早からうと皆様お噂をしていらつしやいます。文章なんかも昔の雜誌を折々出して御覧になつて、「ま、こんな事をかいてゐたんですかね。」つてお笑ひになるばかりで専ら家事に御心を注いでいらつしやるので經濟の方も大層御上手だと申しまする。

△島木ふみの樣

いつも柄のよい柔かいお着物にスミレ色のカシミヤの御袴、廂を思ひ切つてふつくりと出し形のよいお鼻に銀縁のお眼鏡をかけたのが頗るよいつて皆が申しました方で、友禪の華美な嚢にヴイオリンを包んでさげ片手に樂のお包みを抱へて武士町のお家からお通ひになつて居りました。お家は高利貸とかを遊ばしていらつしやるのださうで、私これが一番つらいわ。」つて時時泣いておいでヽした、音樂が御得意でヴイオリンでもピアノでも御上手ですがわけて其お聲の御綺麗な事と云つたら、梁上の塵も動くなんて云ふ古い形容ではたりません。音樂會のある時はいつでも山田先生のピアノでその輪廓のはつきりしたお顔を心持かしげて獨唱遊ばして、若い人達の羨みの的になつておいでゝした。卒業遊ばしてからは御縹緻このみで隨分御縁談も降る程あつたでせうが皆御父樣の業慾に呆れて、誰も貰つてくれる人がないのださうで誠にお氣の毒に存じて居ります、御性質は大層御情け深く、女中なんぞは涙をこぼして喜んでをりますと。ひどくほめるぢやないかつて？　あらそんな譯ではありませんの。いまだに何所へもいらつしやいません。何歳かつて。お二十四で御座いますよ。お金は腐る程あつても……ほんとにさま〳〵で御座いますのね。

△土屋つな子樣

この方でございます、あの卒業の時に特別な褒状をお貰ひになりましたのは。何しろお家が餘程の田舎でそれに養子をお取り遊ばすのですからむづかしいのでございました。お脊の高い口のきりつと締つた、決心

の程もほの見える方ですがお髮が至つて少なく肩巾が廣く骨組のしつかりした方で、ま云へば御縹緻のあがらない方でした。併し其お心の御立派な事には先生も非常に敬服していらつしやつた程で一寸のことがあつても唯は見逃がさないと云ふのですぐ修養の種に遊ばして、都度々々所感をおきかせになりました。卒業後は田舍におかへりになつて無教育な者と一緒に畑を作つたり肥料をやつたりして、盛にお家の御繁昌を計つて居られます。これが又感心な事で少し中等の教育もうけて見ますと今迄さう大した考のなかつた方でも、今更田舍へ歸つて鋤鍬いじりもねエ。」と大抵どころか皆お厭がり遊ばしますが普通なのに、進んで田の草を取らうといふお心には感服しないものはありませぬ。お老父樣は養子をいろいろ御心配遊ばして小學校の教員の方をお貰ひになりました所へ別に御不足も仰しやらず誠心から仕へておいで遊ばすので皆樣の御氣うけも至極よいとの事でございます。

初夏の花　（大久保のつゝじ）



まあ私の友達では此位に致しておきまして外に一人是非申しあげねばならないのがございます。それは今年お三十四で西野たみ子様と仰しやる辯護士の御夫人でございます。お宅には御坊様が十四五のと八つのといらつしやいますしお孃様が十六七のと十一二のといらつしやいますが、大層華美な御家庭でして何か會があれば必ず發起人か幹事に御なり遊ばして抱へ車で方方のお家を御訪問遊ばします。それに又御衣裳が大層なもので一度流行のものをお召しになりますと、二度とお用ゐになりません。お孃様は女學校にいつていらつしやいますがお琴やオルガンやヴイオリン皆御稽古にいつていらつしやいますとかきいてをります。又大變なお寫眞道樂で御うつしになる其度に繪はがきに刷らしておわけになるさうで御座います。近頃になつて御良人様がお遊びが始まり東郷とかの流行兒を落籍してお圍ひになつてしげ〳〵お通ひ遊ばすのを、奥様御心配遊ばしてうまくおときつけなさいましてお宅へお妾を入れ家内に風波をたゝせず、御自人は相變らず且那様の御名聲もお落し遊ばさず交際場裡の花とうたはれていらつしやいます。きけば月々のお拂ひもきれいに下りないとの魚屋やお酒屋の小僧の小言もあります由、又古着屋も勝手口から折々大きな包みを脊負つて出るのを見ると御近所の方々が、お話していらつしやいますけれども、表にはアラもお出しにならず御孃様の御自慢やら新柄の御披露やらではなやかに、毎日を送つていらつしやいます。これらが當世の世渡り上手と申すので御座いませうかね。まア〳〵あんまりしやべつてしまひましたね。こんな事おかき遊ばしては迷惑致しますよよろしう御座いますか。





ひかへ帳

さむしろ

○世間渡るにや豆腐の樣にまめで四角で軟かでと云ふ俗諺ありまめとは壯健四角とは規律正しき事軟かとは融通のきく事ならん世渡りの秘訣は今も昔も變るまじけれど尙充分を云へば此の三ッの中に一ッ親切を加へたきものなり。

○奧樣の世渡りは親切らしき親切を貴ぶ待合料理店の女將は親切らしき不親切を要す。

○奧樣の世渡りは親切が過ぐれば財を費す事多きも信博する事大なり、女將の世渡りは不親切ならねば立行かじ。

○信用を得んとするには正直にせよと云へど餘り正直に過ぎては融通がきかず御察しがなしとて却て信用を落す奧樣もあり。

○融通がきゝ過ぎて彼方の事も承知し此方の事も引き受け結局兩方調和しがたく何れへも不義理をなす場合起る。

○斯る事は己が身を思はず及ばぬ事を周旋人顏して出しやばる奧樣に多し。

○女性の心は弱きものなり身に及ばぬ事は諦めんと思ひながらつい他人のよき衣着たるを見れば無理算段してまでも虛榮を張り後に悔む奧樣もあり。

○虛榮は好まぬ〳〵と云ふのを名譽と心得何處へ出でても虛榮の攻擊をなす奧樣あり是も亦虛榮の一つならんか

○幼時は人形に親しみ稍ゝ長じては化粧に浮き身をやつし嫁しては子供を中心とし老いては黃金の奴隷となる是れ所謂婦人の一生なる歟。

○下らぬ事の樣なれど世渡りの年數重なると同時に誇

る範圍の狭くなる樣に思はる。

○渡る世間に鬼なしと云へど新聞を見るに隨分鬼も多き樣なりあれでも實數の何分の一と云ふ事なれば隱れたる鬼は幾何あるや分らず。

○今も昔も婦人は貞操を貴べど常磐は貞節を捨てゝ貞節を立てたりとかどこまでもすねた世渡りなり。

○政岡は自分の子を殺してまでも忠義を盡したりと武士の妻は隨分危險の世渡りをなしたるものなり。

○危險といへば綱渡りは危險のものなりされど婦人世渡りは尙綱渡りの如きか四方八方を取捌きて圓滑に行く間は體の重心を保つときなり一度其位置を誤らんか四方より攻擊され直ちに衝き落されて無限の悲しみに遂ふものなり。

○婦人は三界に家なしと云へど今は天國ある由なれば先づ御安心遊ばせ。

○世の尼樣の世渡り程のどかに優しきはなしされど花恥かしき妙齡墨染の衣着たるは深き理由あるならんが出來るならば他の方法を取りたらばとつく／＼思ふ事あり。

○或人曰く藝妓上りと卑しめど彼れ等に却て世渡りの巧みなるものあり敎育ある奥樣にも意外に此道に拙きものあり。

○婦人の一生は花の如く譬へられたれど眞に花の如く輝ける世渡りをなせるもの幾人ありや。

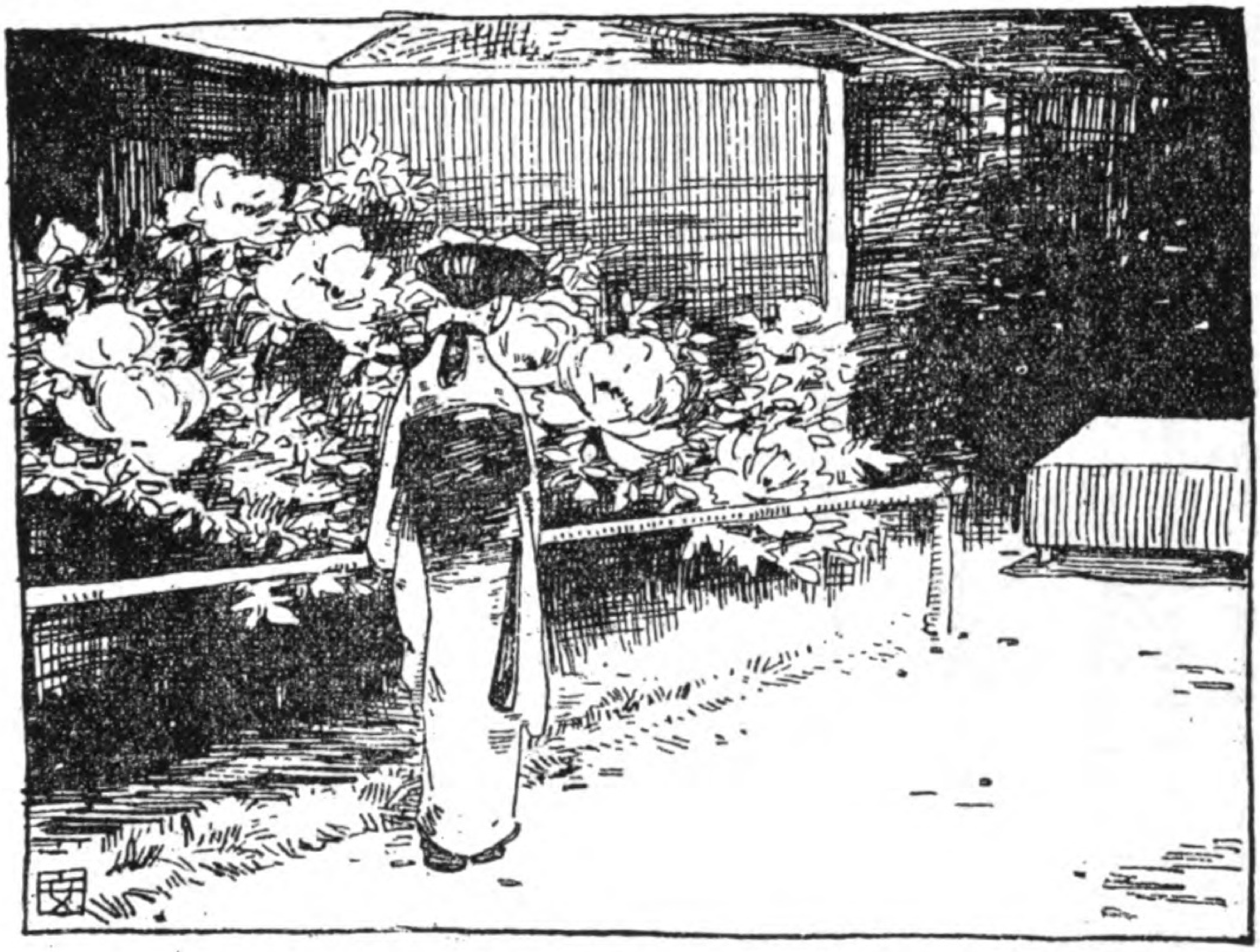
○或人敎育低き婦人に雜誌ムラサキを贈れるにあれは御醬油の事が書いてあるんでせうと云ひたる事ありと下情に通じ給はざる姫達の中に之に類せる話ありはせずや。

○他國の方言を笑ふは婦人に多し笑ふ婦人は殊に各自の方言を遣ふものなり。

○人を訪問して話つゞきにて其の家庭の事親族の事まで事々しく自慢らしき口振を拜聽するは片腹痛きものなり寧ろ客觀的に御話しなされたらと思ふ事あり。

○むづかしく考ふれば婦人の世渡りには客觀と主觀とある樣に思はる。

○前者は己れの分を顧みて適度の生活をなするれど消



初夏の花　(四ツ目の牡丹)

極的なり後者は取締りなし監督者なければ往々危險に陷るされど積極的にて進取の氣に富む。

○自分の事は棚に上げて他人樣の事をつけ〳〵と云ふ婦人あり或る時或る嫁樣の御里の批評を初めし故側の人面憎く思ひて貴女の御里はと問ひしに赤面したりとか。

○己れのみ良き衣にめかして旦那樣御子樣はみすぼらしく彼の服裝はと驚かるゝ奧樣あり。

○ひたすらに臺所にくすぼりて御身分に似合はず不景氣な御服裝婦人の客までも旦那樣任せにて一寸御出になつてもせか〳〵と腰落付かざる奧樣あり御家の御為には良からんがさりとは餘り失禮ならずや。

○前者も好ましき御暮しとは云へず後者も賞むべきにあらず世は凡て中庸を貴ぶとつく〳〵思ひ合はさる。

○昔の徳川大奧の女中は陰に國政に干渉し水越の改革の如きも大奧に手を入るゝに至りて破壞せられたりと云ふ其の勢力侮り難きものなりき婦人三從の

敎を守りたる時代にさへ此の活動あり今の婦人は如何にや。

○家庭寫眞女行商女事務員と東京の婦人には現代的の職業多し京には大原女の花賣を始めとし西陣其他機織職工に至るまで古風な職業多し「花いりまへんか花どうどす」と優に柔さしき姿の慢に詩趣を起すに足る。

○されど何時までも源氏物語のヒーロインを氣取る時代にてもあるまじ如何なる英雄も時代思潮の上に出でずとか婦人も時代の要求に應じ具體的でも何でもよし盛に活動することそ望ましけれ。

○常に高き清き家庭と口癖に云へる友ありき卒業後如何なる風の吹き回しにや或る相場師とやらに嫁ぎプラチナの鎖ダイヤのリング自から高く誇れりとか高きと清きとの意味を如何に解したるにや高きとは黄金多き事か清きとは衣服の美き事か人の心は樣々なりけり。

○或る家を訪れたるに御玄關口より凡ての御座敷迄よう整頓し密かに感心して居たりふと床の間の懸物を拜見せしに「あさねすべからず」と水墨の跡美はしくなる程と益々感心せり。

○或外交官の夫人に男女六人の子福者あり下女と仲働き相手に凡ての交際凡ての養育一と手に行はれ何時上つても居心地よき御宅なり新築の御邸も自から設計なされたりとか外交官夫人と云へばダンスとパターの外御存じなきものと思ひしにかゝる尊き奥様もありけり

○親しき女教師に音樂熱心の方ありけり或る小學校に赴任せしに彼の先生赴任以來子供が唱歌許り歌つて仕事が手につかぬと散々の不評判程度といふ事はむづかしきもの。

○或る奥様に世話好きの方あり餘り立入り過ぎて何處までも干渉し飼猫に手を嚙まれし事度々あり下賤のもの共は却て誤解して惡しざまに云ふものさへあり家人忠告すれど持た病は却々癒らず幾度も世話好きの失敗を繰返へす惡しき事ならねどなくもがなと思はる。

○大阪の人の話に藝妓が落ちぶれて「下駄買ひまひよう」と海藻の樣なる着物着て古下駄背負つて歩るく女ありしと職業より見れば不羈獨立ならんも生活より云

へば墮落なり。

○或奥樣毎朝の新聞十何種本屋の拂ひ月々十何圓さては御勉强の奥樣もありけりと感心せしに新聞も御本も唯小說のみに耽り給ふと聞きてはさても〳〵旦那樣は御年老けたる富豪とかにてよき道樂なりとて喜んで御許しなさるよし。

○金色夜叉の宮が貫一に送るべく毎日毎夜手紙書くを富山は唯宮の勉强とのみ喜びて良き墨良き筆買ひて與へしとかよく似通ひたる話ならずや。

○自からは滿足なる衣も着得ず人並の娯樂もなし得ずたゞ貯蓄して大學にある弟に送れる女敎師あり弟が卒業しさへすれば私は滿足ですと常に云ふ「心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても神や守らむ」よき姉よ幸あれ。

○知れる女敎師に富豪に媚ぶるを專一とする婦人あり媚びらるれば心惡しき筈なく富豪の後援にて其の便宜多く檢定試驗に及第して女學校に敎鞭執りしが巧に例の方法を行ひて勢益々盛なりとか之も一



初夏の花　(植物園の薔薇)

つの世渡りならん。

○七度嫁して七度破鏡の悲みに逢へる人あり今五十五六近頃も嫁したれど一週間位にて戻れり兄なき後とて叔母風を吹かせ人目には失敗の歷史なれど本人一向平氣の御樣子一生嫁入りして暮す積りにや。

○或る奥樣は旦那樣やかましやなりとて物事をよく隠してなさる却て意外に平和にすむ由又或る奥樣は旦那樣うるさくとも御かまひなく其れ何やれ何と何事も旦那樣に御相談なくては行はず何れがよろしきものにや程度によりては前者の方勝れる樣に思はる。

生活費の高い日本

私は病氣保養の爲め英國へ昨年の春歸つたのでございますが、英吉利は霧の深い處で、却つて身體に障りはせぬか、それよりは健康の回復した後に行つては何うかと、友達などは頻りに心配して呉れましたが、彼地へ着きましてからは大變心地も快く、それに日本で見た事のない禽鳥や花なども澤山見る事が出來まして、非常に愉快に感じました、其故か霧も思つた程の事はありませんでした、それに公園などへ參りましても、木の枝は折られず、花は毎月變つたものと植え替へられるので、一つ公園へ何時往つても變化がありまして、一入樂しいやうに思はれました、公園で特に目に附きましたのは、足腰の衰へた老人や、病人などをペーシナア（大きな乳母車のやうなもの）に載せて午頃から夕方まで空氣の良い眺望の美しい處を遊ばせて歩き、自然の慰安に浴させる事で、此點は確かに日本の老人や病人に比べて幸福であると思はれました、それから歐羅巴へ往つて見ますと、日本の物價が案外高いと云ふことを感じました、家賃など（歐洲風の家屋）日本程高い處はありません、又彼地の社交界の有樣を見ますと、婦人の服裝などは實に華美を極めて居りますが、それに比べて見ますと、日本へ來て居る西洋人の服裝などは、實に質素なもので、彼方では洗濯屋の主人でもあんな服裝はして居りません、歸途には西比利亞を經て來ましたが、西比利亞鐵道はなか〳〵完全したもので、寢臺も二つ宛備へてあり上の寢臺に立つて髮を結ぶことも出來、卓子には一ツ〳〵電燈の裝置があり食物も如何なるものでも得る事が出來まして、少しも不自由な事がありません、その鐵道へ乘つた後、敦賀へ來て、日本の鐵道を見たときは玩具の鐵道ではあるまいかと思ひました位です。（築地正則女學校サンマー女史）

中流の生活

△婦人の仕事

米國の中流社會の家庭は、朝起て散歩し新聞などを讀み食事をする、大概朝は燒パン卵の半熟又はハム、珈琲等で濟し九時から主人は出勤し、妻君は家具の整理及コックに食品を買はしむるなど隨分忙しい、午後五六時頃主人が歸つて來て夜食を終り散歩に出掛け八時頃から家にあつて、書見などし十一時頃には必ず就床する、歐洲諸國のやうに夜更しをする事は少ない。

△日曜日

斯くして一日を過すが、日曜日は綺麗な衣服を着て、家族中が敎會や訪問に行く之が又歐洲と異り、英國では紳士には絹帽禮服は付きものであるが、米國は商業國ですから却々左樣にぺらくした風はしないけれども、サンデースーツと云つて日曜着物は一般に綺麗にする、婦人は此日曜着物を皆な流行のものにするので流行が終れば常服にする、而して又更に日曜着物を造るのである。

それから月曜日は洗濯日で大抵の物は內で洗濯する、火曜日は干かす日、水曜日は火のしをなし、土曜又は日曜の食事には七面鳥又は雞で御馳走をし晩餐を供へて客をする、此日は魚類を用ふることは少ないやうである。



△子供の躾

米國人が食堂に出るには餘程注意をする母が子供に對する態度も非常に嚴格である、殊に女の兒に對して嚴肅である總べて晩餐會に行く前には子供にはビスケットなどを與へて腹をこしらへた後同行する、つまり食堂は人物の標準を定むる所だから子供をしつけるには非常に注意をする親が子供に對する社交的の爲事のしつけは此食堂から練習する樣にしてある。されはタトヱ如何なる金滿家が上等のホテルに宿り込んでも一度食堂で禮を缺ぐ事があるとホテルの支配人は之れ別席に移す事になつてゐる又如何なる美人でも肉叉の持方が惡いと他の客から擯斥される事があるのである。又米國の家庭では小兒に獨立自活の念を養はせる、米國第一のホテルの子供は每日晩餐後に客室に新聞賣りに來るさうである、決して親の力に賴らぬやうに躾ける。

△臺所の經濟

米國の家庭に就て最も感服するのは、臺所經濟の上手なる事

で牛酪又は牛脂などの使ひ殘りでも決して無駄にしない。此の使ひ殘りには、色々な屑物が混じて居るから、馬鈴薯を入れて屑を取り又使へるやうにする、料理人を雇ふにも料理屋に居た者は物の使方が荒々しいから、家庭のコックには適當しないとして居る、又臺所の經濟法や家屋の建築法などは時時新聞で懸賞募集をやつてゐる。

△獨身者の生活

米國は獨身生活者が甚だ多い、是等の者に向つての生活法は至て簡單である、食事時分には飯屋に出掛ると、一品料理は五仙から十仙位でも出來る、又一食十五仙、五十仙、七十五仙乃至は一弗位と種々ある學生などや一般普通の者は、皆二十五仙即ち我五十錢位のを食する、而して收入の三分の一位は貯蓄するそして獨身者の財産は主に株券、公債の有價證券で土地などを有する者は少ない。

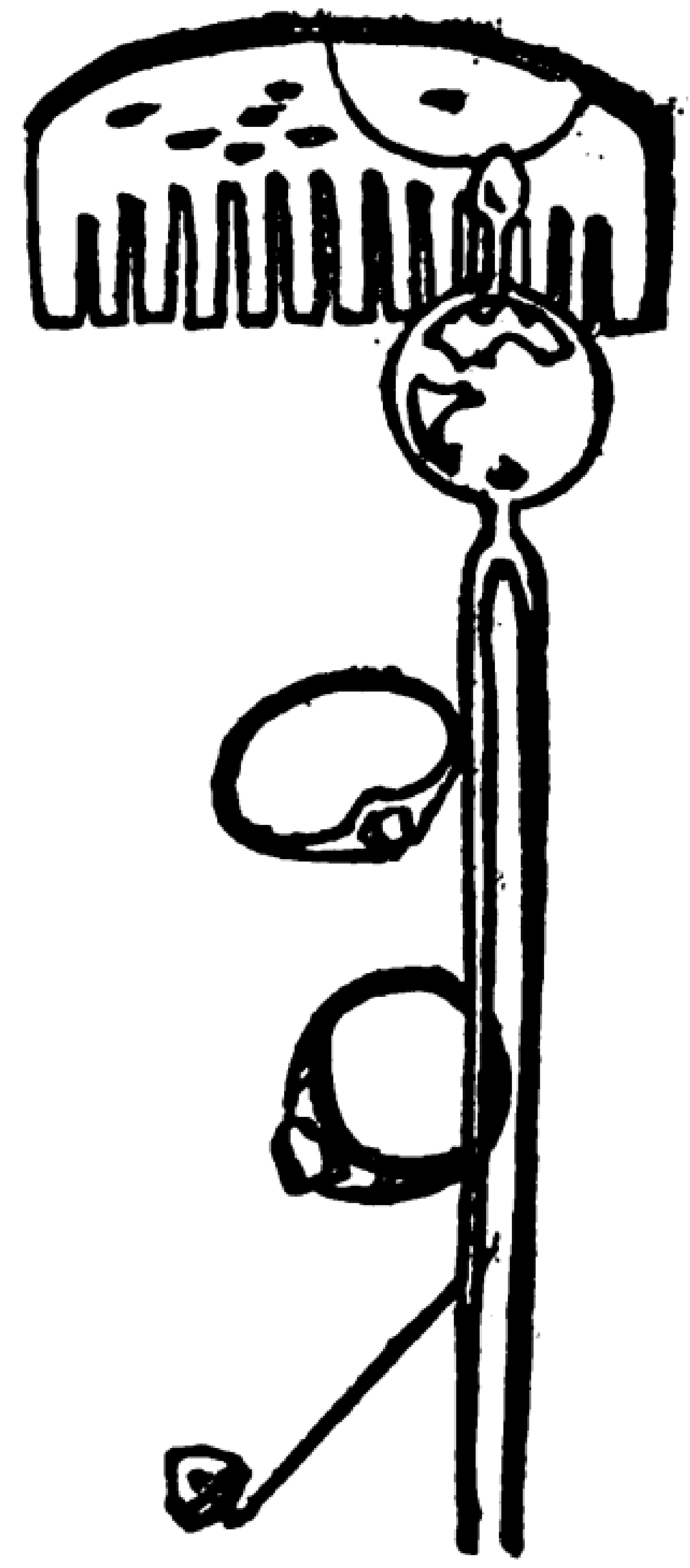
△家庭の生活

米國では中流の家庭といつても自分の家を有するものは稀で、ボーチングハウス即ち下宿屋若くはホテルの臺所付の室を借りる、そこには寢室、應接室、食堂に臺所が付て居る、下宿屋には斯う云ふ室が幾つも設備してあつて、何でも其家で用途が出來得る仕組になつゐる、ホテルには溫湯や蒸氣や瓦斯管で以て、至る所に引てあるから客の隨意に使用が出來るベルを鳴らせばボーイが飛んで來て用を便ずる、それから種種日用品物もホテル内で賣つてるといふ風で外に出る事なしに萬事整へられる、さて又一戸の所有者となつて永住したいと思ふ人があれば、それ等の爲めに建物會社で成崩法を設け十ケ年と十五ケ年とか、かけて行けば其者の所有に歸するのである、所がもし十ケ年の契約として二年間住んで他へ移轉しやうといふ人は如何かと云ふに、此れには割戻法がある。安心してかけてゆくのである。



◎染髮の害

古來我國では白髮染の習慣がある西洋では老若男女の區別無く人々の嗜好に應じて種々の染髮液を使用し、一般に流行して居るが、凡て是等の染髮に使用する藥劑は、一種の腐蝕劑で、毛髮の表面に化學的變化を及ぼし、其多くは鉛分を含有して居るから、毛の組織を害し殊に皮下に滲み込んで毛根を破壞する憂がある、其爲め毛髮が脫落してしまう樣な危險が往々あり、假へ其の危險は無いにしても、毛髮が天然に有する色澤は、透明な毛管を透して反射するから美麗であるけれど、外部から塗布した染料の色は、到底天然の色澤に見るやうな譯のもでない、若し染髮しなければならぬやうな場合には、成るべく無鉛の染髮劑を撰擇しなければならぬ併し全然無害に終ることは難いのである、又一時的のものには黑粉を打つか又は胡桃の葉を煮詰めた液を塗れば最も安全である。



御馳走政略の奥様

美すゞ女

澄み切つた空の碧瑠璃、石を投げたらカチリと響きもしさうな。ぢつと凝視て居る心まで、其中に溶け入るかとばかり麗な日でした。

美知様のお化粧もすんでもうお客様を待つばかり。少しの暇に庭へ降りて見ると、花壇の外へは花物をゆるさぬ良人の好みで、只青々とした綠葉の中には、芽出し猩々も花めいて、お隣邸から牡丹櫻が傾がり咲いたも、風情めいて眺められるのですよ。玄關の案内鈴がチリンと鳴つた。思はず胸をどつきりさせて、緣に戻ると駒が走つて來て。

「川瀨樣が。」

「ソウ。お新座敷へ……。」

と其まゝ二階の書齋に走せ上つて。

「いらしてよ。」

自分ながら周章だしさ。例の後の山が崩れても、と物に動じない良人も、此時ばかりは直ぐに紙莨を捨てて立上りましたよ。

一寸姿見の前で衿元をつくろつてお座敷へ。アラ。いゝお婆の癖にですつて。憚り乍ら之でもまだ、茗溪の小赤壁へ吹き降す砂風に、袴の裾輕く行通つた當年の意氣は少しも變らないことよ。雀百まで……。女が鏡に別れるのはお墓へ行く時ですわ。

私とした事がそんな無駄話どころでは無い。襖の内ではもう主客打解けて、何やら聲高に話して居られる。引手へ手を懸けてする〳〵と引開けると、障子口に主人。御存じでせう川瀨樣。大手町の參事官、もとはお國のお方で……相變らずまぶしさうな目付して

無けなしのお髯を引張つていらつしやる傍に、床の間を避けて斜に鳥井樣。斜子の五ツ紋に厭味の無い縞物お袴ゆつたり召した其お人柄。五歳を歐山米水に起臥遊したしるしか、クツキリと白いお顔に榮える金縁。工學博士と聞けば小鬢に白い物もちらつくお年と思はれるに、短く刈つたお髭の邊。美しく分けたお髮の房り懸るお額つきの若々しさ。初對面の御挨拶もあつさりとお話はそれからそれと花が咲きます。川瀬樣は洋行中の赤毛布の恥をひろげ出す。

「オヤ川瀬樣。そんな珍談はまだ伺ひませんでしたよ、どつさり取ときがお有り遊すんでしよ、罪ほろばしをなさいまし。鳥井樣構ひませんから素破抜いてお上げ遊ばせ。」

と大笑ひになる。駒が運ぶ玉露に越後屋の蒸し物をお進めして美知樣のお部屋へ。

懸花いけの紅躑躅燃え立つ柱に倚せた黒塗りの小机に、何やら讀み耽つて居る美知樣。ふつくり結ひ上げた桃割に一輪の紅薔薇にはやかに其花よりも人の目につくやさ姿に心を引かれ無い人が有るでせうか。乾度乾度此御緣は成り立つと思はずにつこりしたんですが扨氣づかはしさ。美人必ずしも幸運とはきまつて居ませんもの……。

變り柄のお召にクリームへ色々の蝶を飛ばした厚板を、脊筋高く結び上げた橫矢の字。帯と褄を直して上てサアと手を取れば、顔うちあかめて運ぶ足元もたどたどしう。

未だ美知樣には話して無かつたのよ。良人と二人忍び忍びの内わ話や、川瀬樣が御洋行のトランクへ盛裝の寫眞のは入つて行つた事も、萬事に聰い少女心に、何故と知らずに居ませうか。お二人落合つたのは伯林。折からの炎暑に分れた同志は涼を納るべく、ライン河畔の一茶亭の庭。緑蔭深き所に坐をしめて、カフエー啜りつゝ語るは故國のあれや是や。次手よしと世故にたけた川瀬樣ですもの、ぬかり無く持出した美知樣の事、學術こそ老大家を凌ぐ鳥井樣も、まだ〳〵生なお坊ちやま。否應なく寫眞まで貰つて、程無く境を

越てベルギーへ笈を移された。只ほんの視察の川瀬樣はやがてお歸りに成り、先づよい首尾を語られたのですが、安心とは未だなか〳〵。唯お一人の叔父樣がいらつしやる、御歸朝ともに、此處へ申込まれる御緣談の數々。中には伯爵樣多額納稅の議員樣など、及びも付かないお立派な候補者。サア私は氣が氣で無い。いゝ御迷惑は川瀬樣。責めて責めてやつと此日某會から戻道の途次、御一緖にいらして頂いたのよ。之までにして萬一……いや〳〵何で手離しませう。篤の力量を御覽



遊ばせと、心の内に叫んだのよ。川瀬樣と良人はいつか例の烏鷺の合戰が初まつた。殿方は氣樂だわ。おつと興ありさうに見ていらつしやる鳥井樣のお氣の毒さ。

「御覽に入れる程でも御座いませんが、離亭の方に少々花を作つて御ざいます。美知樣御案內申して……。」

とかへり見ると、颯と紅くなつて其當惑顔。

「夫では拜見。」

氣輕にもうお立ちに成る。御案內は動きさうにも無い。仕方が無いから私が先へ立つて廊下を幾まがりして離

座敷。失いお舅様が御隱居所の思召しの數寄屋造り。何と無い柱一本板一枚にもゆるがせの無い。
　昔は此所も花の香もなく、蝶も訪ひ來ぬ庭で有つたのを、美知樣と二人、良人に願てやつと此花壇を作らして頂いたのよ、媚ある色、心をそゝる仄な薫り。そぞろ心にたゝずんだ美知樣の夢見る樣な瞳の美しさ。そならば其時、あの花の間に立たせて、鳥井樣に見せ申したかつたわ。
　緣に郡内の褥直して歐洲に培はれる花などのお話を伺ふ。夫らの知識にも疎からぬ君の床しさ。
「鳥井樣。餘りぶしつけでは御ざいますが……。」
「ハア。」
と、むづ痒ゆさうなお顔付き。
「强て申上るのでは御座いませんが、若し此御緣が整ひますれば、こちらはもとより願つても無い幸で御座いますし、又美知子は……私の口から申すも可笑しう御ざいますけれど、敎育と云ひ性質といひ、どなたにお進めしても恥しく無いと信じて居ります。私とは此家へ嫁つた以來、五年越しの馴染でしか御座いませんが、ほんに〳〵可愛い人、血を分けた人にも增すんで御ざいますよ。小姑なんぞとつひしか思つた事も無い程……。」
　鳥井樣はもう重々しい眞面目に成ていらしつた。
「私も深く考へて居るのですが、親に代つて世話された叔父が有ります。萬事は相談の上御返答する筈です。併し叔父もあちこち人の噂も聞き込んで、至極の良緣と悦んで居ります。いづれ川瀨君まで私の意中は申しませうが。或ひは末永く御交誼を願ふ樣になるでせう。」
　御覽遊ばせ篶の腕前の凄さを。もう鳥井樣はこちらの物、伯爵の姫樣貴族院議員の令孃も、美事指を咬へさして、三國一のお婿樣は是非々々私の美知樣へ……。
　翠の蔭の新座敷ではさら〳〵と石をくづす音。此間に用意の夕餉を……鳥井樣には庭下駄參らせ私は急いで厨へ。
　此日のお越しを初めに、ボルドーからの到來の口を

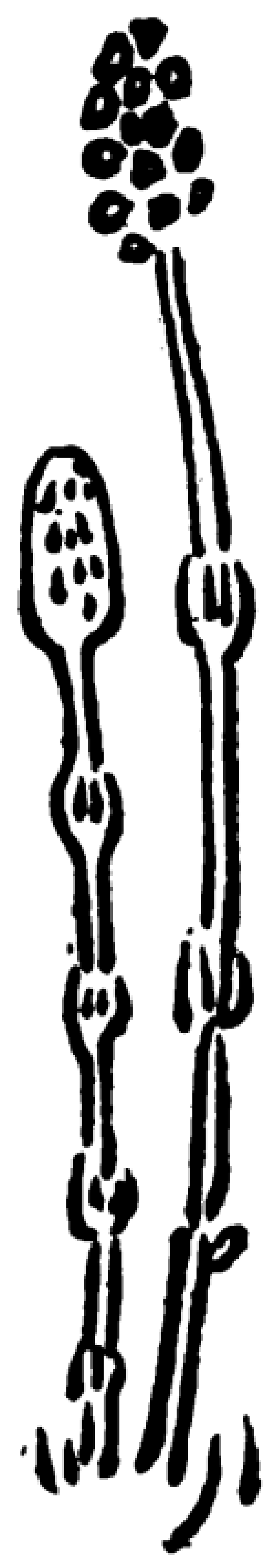
切ります。布哇のマンゴーが届きました。やれ某工事の御鑑定願ひまし度くと、三日にあげずのお呼び使、一月の後にはお結納の使の行き來となつて、晴れの式は日比谷で、茶寮の御披露の夕べは、名ある大家のお名を連ねて、松浦大臣の奥様、名高い志奈子夫人も、此時しみ／＼お顏を見ましたわ。オヤ雜誌へ出た寫眞を御覽になつて。ほんに一對の女夫雛でせう。私の鼻の高さ‥‥。

主婦の心掛

◎私は家事を治めて參りますのに、成るべくお金を外に出さぬやうにと思つて、洗濯から張物、湯熨斗まで、皆家でいたします。料理は主人が酒を飲みますから肉類にしても野菜にしても自分で臺所に出て毎日習つたものをいろ／＼拵へます。で肉なども一時に三斤なり五斤なり澤山取つて湯煮にして置きますと、夏でも二週間位は保ちますから、それを要るだけ切り取つて使ひますと、大變經濟になるやうです。けれども氣を附けべきことは、湯煎をした肉の中に汁がなくつても決してそれへ水を注しては可けませぬ。水さへ入れなければ味は少しも變りませぬ。

◎一家の主婦としては、下女の使ひ方は餘程注意しなければなりませぬ。一人の下婢が長く奉公して居るやうな家ならば必ず其家の主婦は頁い人に違ひありませぬ。人を使ふことはなか／＼六ケしいものです。下婢は既に雇はれて來る時に此主人に仕へやうと云ふ考へを持つて一歩も二歩も讓つて來るのですから、使ふ方でも成るべく憐みを懸けて叱るよりは敎へるやうにするのが肝要です。私共では下婢は少なくも七八年は續いて居りますし、車夫も三十年に二人しか取替へませぬ。

◎現今の風習で是非一つ改めたいと思ふことは。不幸のあつたとき、親戚知己から靈前に供へられる香奠に對し、昔は極つて soft物を配つて挨拶したものですが、近頃は漸く其風が廢れて、故人の遺言に因て寄附したとか、故人の遺志に因て何うするから御承知を願ひたいとか云ふやうな書狀を回して挨拶の代りにするやうになりました。これは大へんに善いことですが、この風習の起つたのを幸ひ、挨拶などは面倒臭いから世話なしに寄附して仕舞はうと云ふやうな向きが出來やすまいか、萬一そんな事にでもなると夫れは大間違ひで、その位なら先づ寄附も廢した方が宜い亡き人の後を弔うのは遺族の爲すべき務めであるから、苟にも面倒だなどゝ云ふのは決して善い心掛けとは申されますまい、私の思ふには香奠の挨拶代りに寄附をしやうと思ふ場合には、大きい處ならば新聞に寄贈者の名義を並べて廣告をして謝禮に代へ、又それ程に出來ぬ處ならば養育院なり育兒院なりに寄附する時に一々寄贈者の名前を書き添へて報告をするやうにしたならば、慈善に叶ひ、旁香奠を寄贈した人の美しい志に酬いる事も出來て、大へんに宜しからうと思ひます。（栗塚夫人）



私の姉の世渡り術

壽美子

まあ姉樣つてなぜあんなにお氣が小さいのでせう。やつぱり御病氣の爲かしら。けれど兄樣もあんまりよあれ程懇望して貰つて置き乍らいくら母樣や妹達と氣が合はないからつて二年やそこいらであんなにお變りなさるのですもの、そりや此頃の樣に毎日陰氣な顔をしてぶら〳〵して入らつしやるとお役所からお歸りになつても嘸お腹が立つでせう。けれど元は皆兄樣がそんなにおさせなすつた樣なもの、少しは同情して昔の樣に柔しい詞の一つもかけてお上げなすつたら姉樣だつてすぐお直りなさるんだけれど。――こんな事を思ふと私もお嫁に行くのは嫌になつてしまふ。あの山本樣の方もお斷していつ迄も父樣や母樣のお傍にかうして居らうかしら。けれど今更そんな我儘を申上たら御兩親はどんなに御心配遊ばすだらうあゝ何事も運命の神樣にお任せしませう。併し私は假令どんな事があつても姉樣の樣に神經衰弱なんてそんな病氣にならないわ。もしも私が十分の誠を捧げて居るのに他日夫が私を愛してくれないで空閨に泣く樣な境遇になつたならば未熟乍らも熱烈の筆を奮つて滿天下の正義の人に訴へてやりますわ。まあ私とした事が今からこんな事迄想像してオヽいやですこと――來月の初が擧式といふのだから私共の新家庭を作る日も段々近づいて來た姉樣のお宅みたいに大勢の家内がない代り、亦財産とては何もない只高等官七等といふ位階と丈夫な二人の身體丈。けれど此心にもゆる愛と希望の光とは之以外何物をも欲しませんあゝスヰートホーム私は此名が大好き。きつときつと現實にお目にかけます。

スヰートホームつてあの木村の從姉樣のお宅みたいにあれ程理想に近い家庭はあるまいと思ふ私もどうかあの樣にならなくつては尤も從姉樣のお嫁きになつた

時は兄様はまだ貧困中尉で一頃は却々お困りの様だつたと母様は申て居られたけれど近頃のあの御立派さ。もう十四五年にもなるのに兄様は新婚の時と同じ様に從姉様を愛しなさる、秋雄様と君子様とは愛らしう成人する兄様今は大佐に御昇進なすつて聯隊長——軍人は皆貧困だといふが從姉様の經濟のとり様がお上手なのかついぞ一度も世帶のお小言を伺つた事はなし、兄様の親戚の方に學資迄出して上てるとのこと、尤も從姉様は却々やりての方で、若さうに見えてる中尉時代でさへも一度もおこぼしにならなかつたといふのだもの今はそりやお小言仰しやる筈もないが。さうしてお家はいつも春の様で二人の子供のお行儀もよく御自分のお髪だつてばら〳〵したのを拜見したことはなし下女もよくつゞいてる其上赤十字や將校婦人會など大抵の公共團體には加入して入らつしやるし女子大學の講義録なんて新らしい智識を得られることはすぐに入會して御自分の修養をもおつみなさるだから、十何年以前の學生だけれど今の世の事情や學識はどうして新らしい卒業生にお劣りにならない許りぢやない經驗をおつみになつた丈尚よくお分りになつてる兄様の御評判だつても却々よくつて親戚の人達のうけもいゝ近邊の人でも皆奥様々々つてそれは〳〵よくなついてるほんとにあの從姉様こそ世渡り上手といふのでせうか。あんまり美人ぢやないけれどいつも快活ににこやかなお顏して兄様とのお談でも當世流行のハイカラ夫婦とちがつて丸で神様みたいに敬つて入らつしやるから兄様もすつかり御信用なすつて、一から十迄從姉様次第其またはき〳〵として決斷力に富んだ物の仰しやり様どんな込入つた事でもあのパチッとしたお眼で疊を一二分間おみつめになると忽ち明快な御命令兄様さへ時時感心して眺めて入らつしやる位。

うらゝかな春の日が八疊の座敷一ぱいに射込でもう大かた散りかゝつたお庭の梅の木でまた鶯が鳴いてる此氣持のいゝ旭を脊にあびて昨日母様が裁て下すつた長襦袢を縫ふて居ると丁度私の大好きの從姉様が入らした。

すみさんもう日がないのね嘸お忙しいでせうつて仰る座布團の糸屑を拂つて進め乍ら従姉様丁度あなたの昔と同じなのですから何か參考に教へて頂戴な——つて申ますと

すみさんなんか立派な學校を御卒業になつて何でもよく御存じですもの昔者の私等別に何もお教へすることつてありませんよけれどね近頃の女學生さんつて私あんまり感心して居ませんのそりや皆さうといふのぢやありませんがよく夫の部下の方でも學校出の奥様をお貰ひになつて御挨拶につれてお出になりますが禮義でもお談でも丸つきりだめな方がありますもの私もあんなのであつたかとそりや自分で恥かしく思ふ時がありますよも少し應用が出來ませんかしら。それはね衛生學だとか經濟學だとかと筆の先や口でいふ事は却々上手ですが二三十人もある家ならば兎に角僅二人や三人の家内の所ではそんな大層な學校で習つた事よりもやはり母様に手をとつて教へて頂いた事の方よく間に合ふものですから全く應用と實地練習とですね御覧なさい不經濟々々つて業々しくさわいでるかと思へばすぐ其後で買いたてのお鍋でお芋をこげつかせたり新調のお羽織の袂を七輪の火で燒いたりね又純金の指輪をはめたなりに鐵の鎖の釣瓶で水を汲



み上て見たりさうかと思ふと書物と首引でお醬油と水の分量を間違へたりそりや隨分滑稽ですよね。けれど又其失策を可愛いとてお喜び遊ばす旦那樣も近頃はあるとやらだから世の中は餘り案じるものぢやないすみさんなんかも敎へられた學科ばかりに依賴せずと其を基にして應用なすつたらきつと立派な奥樣におなりですよ。もう十年も前の事ですが私のお友達に春子樣つてそりやをとなしいすなをなお方がありましてね私等と同じ時代にお嫁きになつたのですよすると其旦那樣は少し風變りの方で手をつかへて物を言ふたり外出の折玄關に出迎へたりそんな片苦しい事大のお嫌ださうで可愛想に罪もない奥樣をあんまり夫に仕へがよすぎるとの口實の許に無理な御離緣尤も民法の出來ない前ですが其後歲年月薄倖に泣いては男子の無情を恨んで入らつしやいます成程伺つて見れば誠に御氣の毒の樣ですけれど一旦夫と定まつたからには幾らか其趣味に同化してそこは臨機應變にすればいゝものを妻はかうしなければならぬといふ書物通りやつたものですから遂に失敗したのです又實際をとなしいのがいゝからつて氣のきかぬ程間のぬけたものはありませんからね私共の使つて居る下女でもさうです襖は坐つてしめるもの人樣に座布團はかうして差上るものと敎へてありますがそれを千遍一律いつも同じやうに玄關でお客樣が待て入らつしやらうが座敷が一ぱいちらばつて居らうが隅の方の押入の襖を落ついて坐つてあけたり一枚一枚座布團をさゝげて其ちらばつた座敷へ持て來たりすると全く腹が立ちますものいくら敎へられた規則がかうだからつてそれを應用出來ない樣ではだめですよ私はいつも一家の主婦だと思ふと同時に自分を犧牲にするといふ考を持てますの此心程世に强いものはないだらうと思ひますね自分の身をないものとすればいつも夫や子供の事ばかり考へますから自然今どんな要求をしてるかつて顏色さへ見れば分るのです以心傳心と申すのですからまだ口でいはない間に要求をみたすことが出來る即それ丈注意がよくとゞくのですね世間の人と交るのでも犧牲といふては語弊がありま

すがつまり自分の勝手といふことを捨てゝ先方の人に不快を與へぬ様とするのが肝要ですさうすれば大抵の人は滿足するものですよまあ一寸年頃のお孃さんのある方には其孫談の程度とか希望とかさういふことを談せば喜びますし、子供をつれた方にはまあ可愛らしいお子様ですことゝ只一言申ますと親は忽ち得意となつて只道連になつた丈でもよく自慢話など聞かされる事があります自分の子となると鼻の低いのも顔の四角いのもあまり分らないのですねだから子供のある家を訪問するのは一番なし易いことで昔から此秘訣を悟つて終に其主人の知遇を得立派に成業した人さへ澤山ありますつまり眞心から其人の考へてるらしい急所を只一言つくのですね又どんな人にでも長所と弱點とはあるものですからうまく交る人の弱點を悟るのが人を威服せしむる上に於て必要ですけれど決してそれを口外してはなりません人の秘密を洩らさぬといふのは交際法の秘訣だ



四

と思ひますね只其人があまり自慢なんかして聞き苦しい時にあらはにいはず一寸一言ほのめかす位はいゝでせうがそれも既に心づいたと見ればすぐ同情して慰める此呼吸が必要なのですそれからあの教科書に人から物を貰へば半分位返すのが禮として夫以上は失禮だとありますねあれも實社會に出てはうそですよ失禮も何もありやしませんいつも貰つた半分位返して御覧なさい氣がきかぬとか義理知らずとかと忽ち不評判の本になりますそれが貰つた物以上も返禮しますとあすこの奥様はよくお氣がつくからこちらも注意して行かねばと次の時でも人の禮をうけません又其進物でも先方をとくと觀察して成べくよろこびさうな物をあげなければ折角金を遣つてそしりをうける損があります之も其家風とか奥様の氣質とか又其故鄉に注目すれば大抵は別るものです進物について面白い狂歌がありますよ

　一は金二は反物よ三は紙
　　肴や菓子はくれぬよりまし

と兎に角昔の單純な時代と違つて一日をぼんやりすると一日丈人に後れて行くといふ此生活難の烈しい世の中ですもの學窓からのぞいたり妙齢の方が空想にゑがいてるやうな甘い事は却々ありませんよ立派な教育を受けた方で隣近邊の誹を受る方もあれば目に一丁字のない娘さんでも八方からあの人なくてはと重寶がられて所謂上手に世渡りをしてる人もあります極さゝいの事で人の感情をよくもし惡るくもするもの上手も下手もつまり間一髪で分れるのですね。

經濟法でもさうです強ち金をためて金持にならうなんてそんな野心はありませんがやはりね收入よりも支出を少くして僅かづゝでも貯蓄せぬといけません人間はいつ病氣したり不時の災にかゝるかもしれないのですものそんな時にすぐ人様に御厄介をかける樣では自分もつまらなく人にも嫌はれますからね主婦はいつも之丈の準備はせぬといけませんそれには假令僅の事にも注意して成べく無用の費を省くのですね少し氣をつけるとつけないのとで十圓の内二三圓はすぐ違つて來ますから塵も積れば大きいものですよ近頃あの新聞紙

などに生活難におはれて人の恩義にすがらねばならぬ男子の方がよく見えますがね私はいつも其お心を察して御氣の毒でなりません其方の過去をとくと調べて御覧なさいきつと奥様の虚榮とか身分不相應の贅澤とか何かひそんで居るものです。

世間ではよく木村様は御有福な近近別莊でもおたてになるだらうなど申すさうですが却却どうしてそんなにはねいくら功三級の年金があるからつて最初は何もなかつたのですものやつと此頃子供の教育費と何時休職になつても困らない丈の準備が出來たばかりとても贅澤は出來ませんよ尤もお金持になりたければ始から商家へ嫁ぎますわね私共は只どんな場合でも人の厄介にならぬ丈の用意さへすればそれでいゝのです併し人様には誠に僅ですが此數千圓を作つたのは私は心ひそかにほこりて居ますのもしもですこれが砂糖一斤鰹節一



箱にもせよ道ならぬ臺所から不時に貰つてあつたとすればどんなに心よくないでせう少しも他の人の助を借らず正しからざる金錢や物品は假令僅かな分子でも交へてない全く夫と二人協力一致してこゝ迄作り上げた清い財産ですもの金錢其ものは卑しいにもせよ其高潔な勢力と幾多の無形の忍耐とは此金に含まれてあるのですから私共には貴い〳〵寶の感じがします併し之は全く戰役のあつた爲で平素で軍人は却々まとまつた貯蓄なんてとても出來ません增俸になつた此後はどうか存じませんがね。兎に角心できちんと鍵をおろして外は成べく派手に見せる之が一番得策なのです。

上流と中流以下之は殆ど生れ乍らに定まつてある私共の運命で明治初年のやうな亂れた時代とちがつて此治まつた大御代では下流の人成功して上流に列するなんてまあ千萬人に一人位のものそれよりは叶はぬ虚榮にあこがれず身分相應の程度に滿足して肉體の勞働はとも角も精神ではいつも愉快の念を持て生活して行くのが一等です上流の人强ち幸福ぢやありません深窓に居作の日々不幸薄命に泣く佳人もありますし又見る影もない賤が伏屋にも理想に近いスヰートホームは多くあるものです、だから其お積りで假令夫がどんな人格であらうともすみさんが滿腔の赤誠を以て感化し盡しお互に君ならで誰にか見せん梅の花といふ工合に御夫婦の間にするも秘密といふ分子を作らない樣に折角理想のホームをお作り遊ばせ。ほんとにすみさんなんか今が一番樂しい時代ですわねつてまあいやな従姉樣ですこと御自分はあんなに幸福で入らつしやるくせに。



室内の衛生

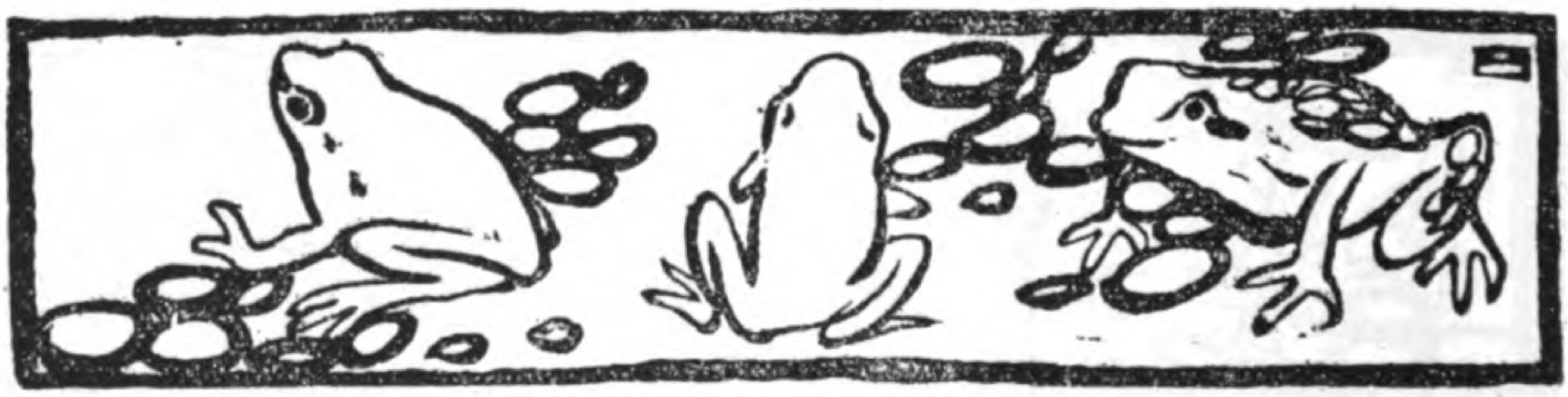
これは長病の患者に對する病室内の衛生法にして專ら室内の換氣の方法を說きたるものなり。

▲夏は開放　夏風の無い時は十分に窓を開け、さうすると風が無いから家の中で幾らか空氣が温まる其温つた空氣は逃げて仕舞ひ、其逃げた空氣を補ふ爲に外から新鮮の空氣が這入つて來ると云ふやうに僅かづゝ新陳代謝が出來て往くから夏ばすつかり開放して一向差支ないそれから風の無い時は夏の夜とても幾らか窓を開けて置いて仔細ない。

▲春と秋とは夜氣を防ぐ　春秋の頃夜になつてからは窓の戸を閉めて置く、何故かと云ふに春秋は外の空氣の濕度が非常に變り易い、急に冷たくなる、それ故に晝間と同じことゝ思つて窓を明けて置くと空氣が冷たくなつて風を邪くから夜は閉めて置かなければ可けない而して冬は極めて僅かに窓を開けて置くこれは外氣が寒冷であるから僅かでも十分換氣となる。

▲風の吹く時　風のある時は風の無いときよりも窓の開け方が少さくなければならぬ又風のない時は小さな口では不十分であるから大きくしなければならぬ。

▲新陳代謝の時の心得　空氣の新陳代謝をさせる時には患



者の身體に直接に風の當らないやうに注意しなければならぬ、其爲に或は窓の處に屏風を立てゝ風が一直線に來ないやうにしなければならぬ。

▲惡臭は直ちに放出せよ　室内の空氣に惡い臭が出來た時長く部屋を閉切て置くのはいけない、内に居る者は分らないが外から這入つて來る人には能く分る、殊に病人が寢て居ると其臭ひが一層烈しい惡い臭ひが空氣に付いた時には直に換氣しなければならぬ殊に病人が瘡でもあつて繃帶を換へて膿が出たやうな場合又は大小便な其部屋の内でする時などは窓を開けなければならぬ。

▲換氣中の溫度　換氣中室内の溫度に注意しなければならぬ、換氣して居ると自然冷たい空氣が外から這入つて來るので急にそれが爲に部屋の内が寒くなる、殊に冬だと部屋の内に急に寒くなるからさう云ふ場合には寒暖計を部屋の内に掛けて置いて餘り寒くなるやうなれば内で暖める爲に火をおこすなり又は換氣の仕方を寬やかにするとか工夫をして部屋の内の空氣が餘り冷たくならないやうに注意しなければならぬ。

▲空氣を汚すな　今度は成るべく部屋の空氣を穢なくしないやうに注意しなければならぬ是は部屋の掃除で掃除の仕方は成るべく部屋を穢くしないやうにした方が佳良である

此換氣も其通りで部屋の内の空氣を清潔に保てば度々換氣させる手數も要らぬ、それには病室内に多人數集合しては可けぬ、お見舞の人が澤山集つて來るのは困る、別段に要人が病人の傍に來たとて何の利益もない、用があれば用だけ濟ませてサツサツと歸つてゆくがよい、病人の枕元でくだらぬ話をしてゐる奴は阿呆である、馬鹿である、部屋に澤山人が居れば居るだけ空氣を其人が吸つて其代り炭酸を出して空氣を汚して行くのであるから病室内には人が少いやうにしなければならぬ。

▲禁煙　病室内で煙草は禁物である、お見舞に來た人が煙草を吸つたならば看護して居る者は叱付けて宜い。

▲炭火を入れし時の注意　炭火を起すことに付ては空氣中の酸素が入用であるから火が燃えて居る間或は火が起つて居る間は矢張空氣を汚して往く、其代りに酸素炭素を出して居る、酸化炭素が炭火から出來て來る、此酸化炭素は人身に害のあるものであるからそれを盛んに部屋の内で起すと從つて部屋の空氣は汚れて來る、けれども火なしでは部屋の内に居られぬ、勿論夫は必要であるが部屋の内で熙い炭を熾さないで戶外で起して部屋の內に持つて來ればよい

▲燈光を減ぜよ　餘分の燈火を用ゐないこと部屋が大きければ燈火も餘計要るけれども病室だから用の無い間は餘り



かん〳〵明るくして置くに及ばない、殊に病人が細かい仕事をするではなし僅かに本を讀む位であるから本が見えるだけの燈火があつたならば差支ない、燈火が燃えて居る間は酸素を使つて酸化炭素を出して居るのであるから燈火が餘計なれば從つて空氣の汚れ方が早い。

▲不潔物を置くな　不潔物を室内に置くことである、是は分つた話である繃帶交換をしたとか、大小便をしたとか斯う云ふ物が室内にあれば空氣が汚れるから長く置かないやうにしなければ可けぬ。

▲患者の身體　病人の身體が汚れて居ると困る、汗を搔いたり湯にも暫く這入らないで寢て居ると病人の身體に惡臭が付く、それも矢張空氣を汚すことになるから成るべく病人の身體を清潔にしなければならない、それから寢衣も度度取換へるやうにしてお貰ひ申したい、

▲病室と便所の距離　病室は便所の近所にあると都合が宜しいやうに考へられると云ふのは病人が便所に往くに近い所にあれば大變都合が宜いからであるが便所の近所は餘り清潔なものでない、空氣が外から這入つて來た所で穢ない空氣が這入つて來るのであるから幾ら換氣しても役に立たない、それ故に病室は雪隱に接してない所を擇ばればならぬ。

▲病室と花木　病室内に餘り香の高い木を置かないやうにしたい木犀だの薔薇のやうな木にしても成程其當時は好い香ひがするが併し長く置くと一種痲痺する心持になる、矢張あの香ひがあれば空氣は清潔であるとは言へない、成るべく香ひの高い木は室内に置かない方が宜い。

▲病室と薫香　又病室内で人が來ると臭がするものであるから香を焚たり香水を撒いたりすることがあるお客様のお愛想にするのであらうが是は何にもならない、斯う云ふことをして空氣が清潔になつたと思つて居るかも知れぬがそれよりも度々窓を開けて換氣させる方が宜い、決して香を焚いたからと云つてそれは空氣が清潔になつたと云ふのではない、香の臭ひで以て空氣の臭ひを消して仕舞ふ話であるから何にもならない設令香を焚ても換氣する場合は換氣しなければ可けぬ。

▲病室の溫度　常は同一でなければならない、寒い時があつたり暑い貼があつたりしては困る、夏は涼しく冬は暖かくするのは勿論、同じ位の溫度にして置くには寒暖計が入用です、折々寒暖計を見て寒くなつた時は火を入れ暑くなつたならば窓を開けて置くと云ふやうに何時も寒暖計を部屋に備へて置かなければならぬ、通例我々が用ゐて居るのは華氏の寒暖計であるが病室の溫度はどの位の度數が一番



宜いかと云ふと病人に依つて違ふ、始終寢て居る病人と折折床の上に起上るとか外に出て人と人と話も出來るやうな病人とは幾らか違ふ、常に横になつて居る病人は六十度から六十五度位が適當である、働いても左程暑いと云ふ感覺がなく一寸袷かフランネル一枚位で宜いと云ふ時候であるけれども始終寢て居る病人であると上に搔卷などを掛けて居るから其溫度よりも少し寒い方が宜い即ち六十度か六十五度位が適當である、それから病氣に依て部屋の溫度が違ふ貧血患者怪我をして澤山血を出したとか或は慢性の病の爲に血の出來方が少ない青い顏をして居る病人ならば普通の者より高く七十二度以上にするそれから今度は反對で熱のある患者は低い方が宜い、先づ六十度位、是が先づ病室の溫度である。

▲溫保の工夫　次に部屋を暖めるには通例の家では火であるが火にも色々種類があるが兎に角部屋の内で火を焚くことは空氣を汚すから成るべく便利で且つ空氣を汚さないものを撰ばなければならぬ部屋を汚さないで極く宜いものは蒸氣で暖めるのであるけれども是は西洋造りでなければ出來ない大仕掛な仕事で病院や何かであれば出來るが迚も通例の家では出來ない、故に一番手輕なのは矢張火鉢である火鉢で火を起すにしても部屋の内で黑い炭を起しては空氣

を汚すから、部屋の内では黒い炭を使はないやうにするさうすれば空氣を汚すこともなし、又部屋の内を眞黒にすることもない、火鉢が一番宜し、之に反して夏は部屋を冷たくしたい、其冷めたくする方法は、實に困る風の無い時は夜でも開けて置くけれども、是は不用心の話で看護人が始終煽いで居つても差支ないが是は病人一人だけ涼しいのであつて部屋が冷めたいとは言へぬ、それならどうしたら宜いかと云ふに部屋を冷たくするには、氷を入れるより外仕方がない、大きな氷の塊を入れて置けば涼しくなる、それから日が近い處には日除けなどする、其外青い葉の澤山付いて居る木の枝を手桶に挿して病人の枕許に置くのも幾らか涼しくする、或は布片を水に浸して緣側に置くとか窓に掛けて置くと云ふのも幾らか涼しくするのである。

△衞生學者の飲料適用說

▲飲もの時期　ヲベ教授曰く食事中には少々づゝ飲め、或は食事の終りに適度に飲め、但し食物と一緒に飲物を飲むな、斷食して飲料を取れば機關を洗ふ效能がある。

◎飲食の分量　又た曰く體質にもよるが普通に勞働者は一日間に葡萄酒を五合を極度とし、其他の者は二合五勺以下であれば害はない、但しこは一日の量で一回の量ではない、まだこは飲酒を欲する人に對して云ふので、酒を好まぬ人に云ふのではない。



◎渇た時に飲め　衞生學者ランスロー氏曰く人は渇いた時に飲むがよい、但し何れの時にも多量にのむと云ふ事を愼まねばならぬ、又渇いた時に全く飲まぬも害がある、食事中に少しも飲ものをせぬ人は後來病氣を引き起すであらう。

◎一日間の湯茶飲用の分量　一般の法則から云へば食事の間に飲料を取るがよい、食後でもよい、食前に飲んでしまつてはわるい一日二十四時間の液體の分量は少くとも五合は入用だこれ食物を消化する爲めにも臟腑を洗ふためにも入用である。

◎一回の食事にコツプに三つ　ドクトルタウニエル氏曰く人は廿四時に二千四百ガラムの水分を失ふそれを普通の食物中に多少水分を含んで居るので九百ガラムは補ふのである然らば單に飲ものとして他の千五百ガラム（凡そ七合五勺）を飲まねばならぬ然らば每回の食事に水なり葡萄酒なりを洋盃に三つだけ飲むべしだ食物は充分に嚙むがよい決して飲料と一緒に流し込んではならぬ普通の壯者に二合五勺の葡萄酒は害を及ぼさない但し胃擴張の病者は一食に於てのみものはコツプに一つ丈で愼まねばならぬ又腸膜炎のものは食後三十分の時に湯を一碗飲むがよい。

◎酒類飲用法　ドレリス教授曰く食物中には野菜菓實等澤山の水分を含んで居るから、單に飲料として多くの液體をのんではわるい葡萄酒は少量づゝ、そして少し水を加へて飲むがよい一口に多量を飲むべからず。

様々な婦人の噂

なにがし



何をいつても女學校の同窓會程多くの新マダムの集まる處はありますまい、初々しき髷の手柄の丸まげ姿さてはヒサシのハイカラ風と、皆とりどりの趣きはありますが、在校中クラス一のヒヨウキン者の樂天家が何處やら妙に沈んだ調子の落附いた、そして時々帶の間から時計など出して見て、宅が氣になるらしい方は必ず姑持ち、又以前は引込み主義の極無口の人が、打つて變つて快活に、只もう他愛もなくクワリ〳〵と、二言目には「良人が」をふりまわされる方は、大抵はさし向ひの氣がねなく奚さんのお手料理なら何んでもとドンナ不加減も苦情仰せられぬ旦那樣、その中で一トきわ目だつ〇〇さんの氣どりやう、尤もズット前から蒸し風呂の美顏術の、クリームのと、今の樣に流行せぬ時分から毎朝々々お顏の手入れに、何時も三十分位は遲刻せられた位のおめかしや、服裝も今日は紫のお被布、明日は八丈といふ風に、いづれも能く似合ひ相なもの許りを、一週間とつゞけられた事はなく、頭のものから足の先きまで其の通り、されば男敎師間にさへ氣のきいたとの評判、まして女生徒間では廊下の行きかひに見かへらぬ者なく、校内流行の泉源はいつも此人であつた、どうしても女の顏は女の運命とやら、去年の夏鎌倉の別莊で、高島田にモスリン友染の浴衣に羽二重の帶輕う、〆められた散歩姿のあでやかなるを、當時時めき給ふ某侯の令息の御目にとまり、小說にでも有り相な是非にとの懇望にて、表向きは成金の某の養女として一足とびに未來の侯爵、夫人となられたは、つい先き頃のこと、さればふらるゝも其筈、かりそめの外出にも侯爵に同伴され給ふ時、ぎやうぎ

やうしくも絢爛さしまわしのお馬車で、至る處の新聞紙に行動を二號活字で報道せらるゝ御身分、其内には御良人と歐洲に漫遊さるゝときけば、あの上に巴里の化粧法、伊太利の表情術の加はらばと、あちらでもこちらでも噂でもちきり、私とても同じやうな家に、同じく長女と生れし身ながら、容色と共に運命も授からぬと見え、どうでも何位何爵夫人となりて、洋服姿氣高う、雜誌の口繪に出さるゝやうと思ひ、隨分あちこちよりの申込みも頭からはねつけて許り居る内、思ひがけなくも待ちこがれた子爵があつた、私は大進み、ドンナ苦勞をしても子爵夫人となれば本望と、早や成つた氣でよろこんだが、兩親は數ある同族をさし置いて、一代議士の娘をといはるゝは、何か曰くがなくてはとの事で、いま〱しくも相談ははか〲しく進まず、其内新聞で見た子爵家の内事、引つゞき華族の禮遇停止、まあよかつた、うつかりして話に乘らうものなら、世間のもの笑ひとなる處、アヽ恐ろしや、それ以來はふつ〱大悟して、爵位何者ぞ、金錢何者ぞ

平和氣樂に越したものはない、是れからはドンナ處でもと思つて、それでも腰辨だけは御友達の手前御免といふ位、平凡な考へで嫁したが、さて出入りの商人に奧樣といはるゝが少々キマリの惡い位、氣樂許りを望んだ報ひ、まして子供の出來た今日此頃の樣子つたら一人許りの下女ではどちらが奧樣やら女中やら、髮が同じやうな風なれば分らぬ位、せめて間違へられぬためと一つは毎朝結ふが面倒くさゝに、とり上げ置く丸まげなれば、形も何といふのやら知らず、手がらも油じみて居やうが、一向おかまひなく、色氣も鹽氣もなけれど、さすがに三十まではと身だしなみの白粉つけても、鏡見るでもなく、折々夫にお前の顏はといはるゝに直すやうな始末、お湯にはいつても子供を入れるともうガツカリして洗ふ氣も出ず、磨く處でなく糠など何年使はぬやら、クラブ洗粉の小壜さへ廿日もある位子供も五六歲のクリ〱肥つたのに洋服でもきせ、連れて歩く分には中々詩的で、マダム振りも上がつて見ゆれど、乳呑子と來ては殺風景でお話にならず、一

寸の旅行にも提げるはオペラバッタでなくて、大きなおしめ袋、雨のふる日など軒におしめの干さつた家を見ると、氣の毒なやうな氣がする、かういふて見るとよい事は一つもない樣ながら、いつか夏の眞晝、縁側に赤ン坊横抱きにして、少しそり身になりて乳呑ませ居る人の姿のいかにもいゝ格好の、今もアリ〳〵見ゆるやうな其人の着物の思ひ切つた大きな井筒がすり、それ以來は大すきに成つた、誠に新田左中將の勾當の内侍を見そめられた事も思ひ出される、一體中年以上になッては子供の世話などまめ〳〵しくせるは見よくもこちらからもお母樣〳〵とはやされ、世事にもなれ經驗も出來れば、起居にも落附が出來、姑、良人よりも信用あつく、眞の奥樣ざかり女の全盛時、我女房に二度の繩といふ時節、昨日青物市場で會つた大島づくめの奥樣、金ぐさりの羽織ひも無造作に小形の丸まげ洗ひ朱の手柄に一寸粹をきかせ、白魚並べた樣な手に露一點したゝるやうなダイヤの光り、ゴム雪駄輕うお伴の女中の提げたる大きなアケビの手籠の中、物好きに一寸のぞき見れば、トマトーだのキヤベツだのが這入つて居る、いづれ會社の重役の夫人でゞもあらう、ほんとうに惚々とする、私などゝ來ては子供結ひ附け負ぶして、味噌するスタイルの、明方の破れ障子にうつるを見ても、ア、已みぬる哉、と歎息して居る、ひまもない位來客でも有つた時、木綿物なりとも垢附かぬやうにして、直ぐお目にかゝれるやうと心掛けて居ても、それすら折ふしは手順くるひて、取りみだした姿お目にかくることも度々、此間も實家の母に、一人の子持ちでお前のやうに身をもちくづしてはと叱られた事だが、然し少さいながらも家庭のクヰン、何もかも今は私の心のまゝ、華族の夫人となりて床の間の置物然たるよりは、矢張り氣樂でよいと私はあきらめて居る、

先き頃隣りに引越して來られた新學士とやらの奥樣などいゝつたら、チヨイ〳〵垣根ごしに見ると、朝はドンナに早くてもチヤンとお化粧は出來て居る、御出勤

のお手傳だひに後より洋服かけらるゝものごし繪にかいたやう、又一寸伊達に掛けた緋のたすきに、白の前掛胸高う、フライパンなど持ちて立たるゝ處も、丁度音羽孃そのまゝ見るやうな。されば旦那樣にも又なくおぼされ、出るも入るも御一緒、錢湯にも手をとらぬ許り、近所の岡燒が、今少し愛の節約してもらひたいといふも有るよし、遠き親類より近き隣といふから、一寸あいさつに行けば、待たせられること〳〵。半時許りもそして廣くもなき家の隣の部屋で、簞笥ガタ〳〵又押入から行李引ずり出すらしい、音聞きながら皆

向島牛の御前



私の手ずさみと云はぬ許り、編物の寫眞掛け花瓶敷など飾り立てられてある、やがて出て來らるゝ態度の勿體ぶつたる、旦那樣とは一日アハ、オホ、と話しつゞけの笑ひつゞけに引かへて、イヽエハイの外は口も聞かれず、人形としか思はれず、美しい許りにて根ッから面白くなく、たとへば花に香ひのない樣な、どちらがお客樣やら分らない、おそれ多くもやんごとなき宮樣の妃殿下ですら、御機嫌奉伺の人々には、色々お愛相仰せらるゝと聞くものを、之れではお氣の毒な、旦那樣のお友達も三度は二度、二度は一度となるだう然し御主人の御役目傘にきて、下役夫人を下女の樣に思され、お自分の御自慢話許りつゞけ樣にせらるゝよりは、毒にも藥にもならず、此人のやうなのがよい、されば當世月給とりの細君となる勿れと、誰やらの述懷も聞く、始めから大臣でなければ嫁かぬとの意氣込みでも、成功したは日本で只一人今は局長にさへ六つかしければ、一層百姓だの商人だのは一本だち、誰に頭を壓へらるゝ事もなけれど、お神さんといはるゝが口惜しく、醫師辯護士はあれども、外面許りは金の定紋付のお手車、黑羽二重の五ッ紋悠然として多くの書生たちに先生〳〵と玄關に見送らるゝ處はよけれど、内は火の車、それで居て矢張り奥樣らしくしなければならぬのだから、借金がおそろしい樣な氣の小さな女では納まらず、むつかしの世の中や、そこ〳〵にして出かけた序と、心易き家を訪問すれば、今お洗濯の最中とて旦那樣の兵古帶らしいたすきに二のうでまでとビでガサ〳〵の手を出して、下女然たる引つめびさし相ひもかはらず出合ひがしらに子供を引つたをして泣かせ、立ちがけに羽織をふんで後によろめき、茶を注がんとして急須の蓋をはづしてお盆一つぱいの洪水、餘りの氣の毒さに言葉も出す、ふと見れば去年からの綿入らしく衿から肩まで垢でピカ〳〵光り、襦袢の袖口の切れたるを氣にして引込めんとすれば、手の動く度に尚出るし、起居に褪紅色のメンネルの見ゆる處など、御主人の體面にもかゝるやう、お年はまだ三十に間のある由なれど、顏は小じわ一ぱい、それでも心から

のもてなしぶりうれしく、お茶や珈琲と共にお話もはづむ感心なのは、此人の旦那樣孝行にて、御自分召し上らずとも御主人のお膳部は三品四品のお肴かゝし給はず、八疊のお書齋にモスリンのお座ぶとん、アッアツト紬のお召しにトン／＼お手たゝかるゝお大名風、妻御法のお上手なのか、奧樣もそれに甘んじて御不足げの事もゝらされず、世間には女中や乳母の運よくも奧樣の死後々妻となをりし身をもて、旦那樣を座ぶとんがわりとなし、俄の奧樣ぶりおかしく、女中がお米は何程洗ひませうと聞けば、そこへよかろしよろとすましたとやら、同日の論ではなけれど、一體日本人殊に女の年のとりやうが餘り早い、誰れでも嫁入つて一二年子供の出來るまでは日本婦人の花とほこる娘時代よりも美しい樣なれど一朝子供の出來た曉には、自分と年より氣質を出してなりふりかまはず、着物などもジミ／＼にとするを、自慢のやうに又世間もそれを許し、氣も心も同時に因循なものと成つてしまふ、西洋婦人のやうに生理上年をとる程花やかにしなければ全く人間はいけない、人のふり見て我ふり直せ、ちと心がけませう。

婦人の貌と半襟の色

日本婦人の半襟は丁度西洋人の襟飾と同じもので、西洋の人は男女に限らずネクタイに大なる注意を拂ふさうでありますが、日本婦人の半襟とても其通りで、半襟の色彩が其人の貌姿に好く調和して居りますと、大へんに人品を上げるものです、半襟の好い爲めに人柄の好く見えると云ふことは餘程氣を附けて居ないと見落すこともありますが、假に皺だらけのものや、又は襟幅の揃はぬやうなものなぞを附けて居りますと、外がどの樣に立派でも醜くなります、外はどの樣に我慢をしても襟の亂れたのだけは大概の無頓着でも我慢が出來ませぬ、さうして黑く襟垢の附着したのは尙ほの事其人柄を卑しく見せます、襟垢は揮發油で洗つて一寸火に乾かせば直ぐに落ちますが只洗ふべき襟の下に淸い白布を敷くこと、その用具たる刷毛などの淸潔と云ふことに氣を附けませぬと可惜布地を損じ、綺麗に洗ひ上げて長く用ゐる事が出來なくなつてしまひます。

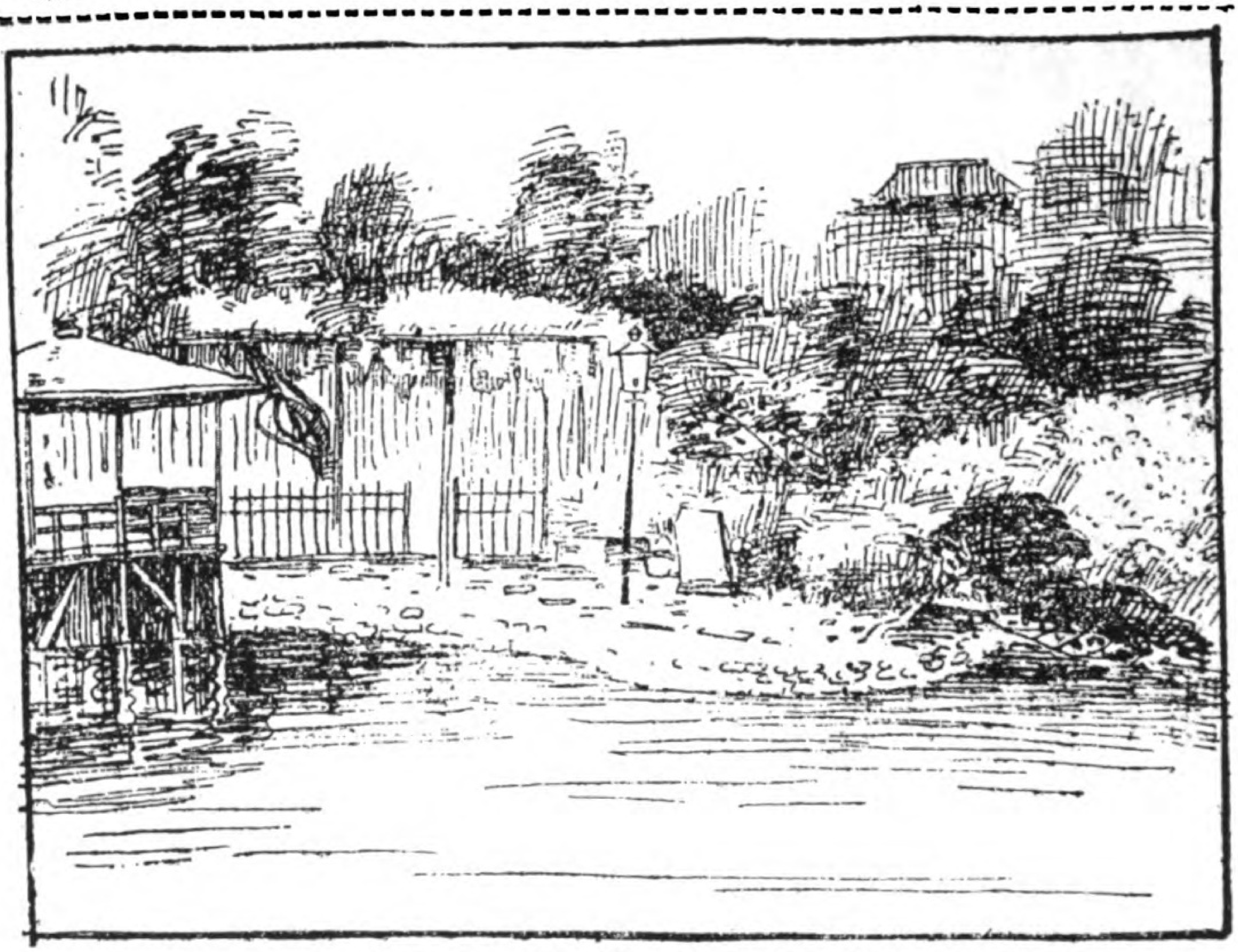
僞はらざる告白

登美子

自分の性癖を善用する人

今日四月十五日は我家の紀念日である、顧みれば、處女生活を脱して以來滿八ヶ年を經過した、隨分古嫁樣と云はねばならぬ、此間自分は、どんな世渡りをして來たであらう、來し方を思ひ辿るも亦一興と、書きながしてみた。自分は是でも學生時代には、隨分持てはやされたものだ、然も才色兼備が、聞いて呆れるが全くだつた、マア――貴方が、他を推して知るべしねえなんかと交せつかいしは眞平。だから理想は隨分高くて學士軍人さては一足飛びに巴里の交際場裡も夢みたものだ、處が卒業するや否や、今の夫から縁談があつた其時は陸軍中尉殿月給も四十九圓、今から考へると、始終食へんのなぞであつたらうと、可笑しくもあるがお姑さん一人弟はあつても自活して居る、是位な處はめつたに無いと、兩親の乘氣に、萬事仰せの通りと、話しはすぐに、結婚の式も簡單に、夫の任地へ來て、さてよい女中でも見付てと思ふ內、月末になり俸給を頂いたのを見ると、吻驚たつた二十五圓アット云つた口が塞がらなかつた、之では始じめの約束が違ふ學校では五十圓以下の家計簿記を習はんから出來んと、正可云へもせず何しろ袋の上は引去高で一ぱいといふ譯そこへ服屋でムい、肉屋で候の、おまけに、何々樓といふ書附まで來て、飛んだ品行方正違ひに、天晴れ才女を以て任ずる私も、不尠面喰つて、泣き出したい位、然し一旦家を出た以上こんな事でオメ〳〵歸りもならず、マヽヨ一生懸命出來る丈やれと、それから、おさんどんに書生奥樣の兼ね持ちにて、可成儉約し十圓の處へ二圓入れ五圓の處へ一圓拂ひ込みてやつてゐる內、此私の努力をして、益々勉强さす恩人が出來た外でもない同じ、やりくり仲間で常に下女を使つて、却々派手に、床の間には琴が立てかけてあり花の先生は來るといふ調子で、同じ身分で、かうも違ふものか

と、常々羨望に堪へなかつた處が、子供が生れて不幸にしてまもなく亡くなつた處サア大變葬式の費用にも差支へるといふ有樣、お悔みに行つて借金の受判を頼まれ、厭應なしに五十圓の借財、茲に於て平素の贅澤も故あるかなと、大に肝銘し、何でも借金なしにしなければ、枕を高くする事が出來んと、姿にも振にもかまはず洗濯屋の拂につかへて、自分で夏服の洗濯までやつてゐるのに、主人は又若盛りで、花嫁さんが下女の樣に眞黒で、粧はぬもので、折々はゾロリとした風が戀しいと見え、二次會三次會果ては翌朝フラリと歸つてくる、有樣に胸は煮える樣、お姑樣もお姑樣だ、いくら大事な息子だとて嫁の手前ちとお小言も仰有つても、よさゝうなものと、思へど、意見したとて、仕方がないよ、と人の事でもある樣、だから料理屋のみはいつ迄たつても綺麗にならず、丸で燒石に水、口惜しいやら腹立しいやら、だが私には主人に向つて、どういふものか諫言する勇氣が無い、今日に至るも、それ許は同じ事、自分ながら不思議に堪へられない、然し一方考へてみると其沈默主義が効を奏して、今日の境遇を、生んだのでは、あるまいかと、内心思つて居る、軍人といふものはいくら年を取つても、職務柄矢張り氣が若いかち、致し方が無いとして、向ふは向ふで大概の事は大目にみて、此方で引締める工夫が、第一と、一意經濟に腐心し、就寢時には火鉢の火へ水をかけて、消しては次の用に、立てた事すらあつた、然し食物を惜しんでは、一日の勞を慰する事が出來ないので、又不平をいはれてはならずと、晩餐丈は、身分に應じた事をして居た、かうして居る内彼の日露開戰となると、明日をも知られぬ命飲やめ歌へで、皆の氣の立つて居る事、無理も無い事、あとは何とでもなる思ひ殘す事なく愉快に出征さすに、若かずとなすが、儘に任かせ、卅七年五月に立たせた。翌日から直に小さい家に引移つて、是からは俸給全部丸取りだから、暫時にして、全然皆濟し、貯金といふものも、始じめて、仕出すと弟が事業に失敗して、無一物の丸裸で轉げ込んだ始末、でも大事の一人の兄弟とて、食客に



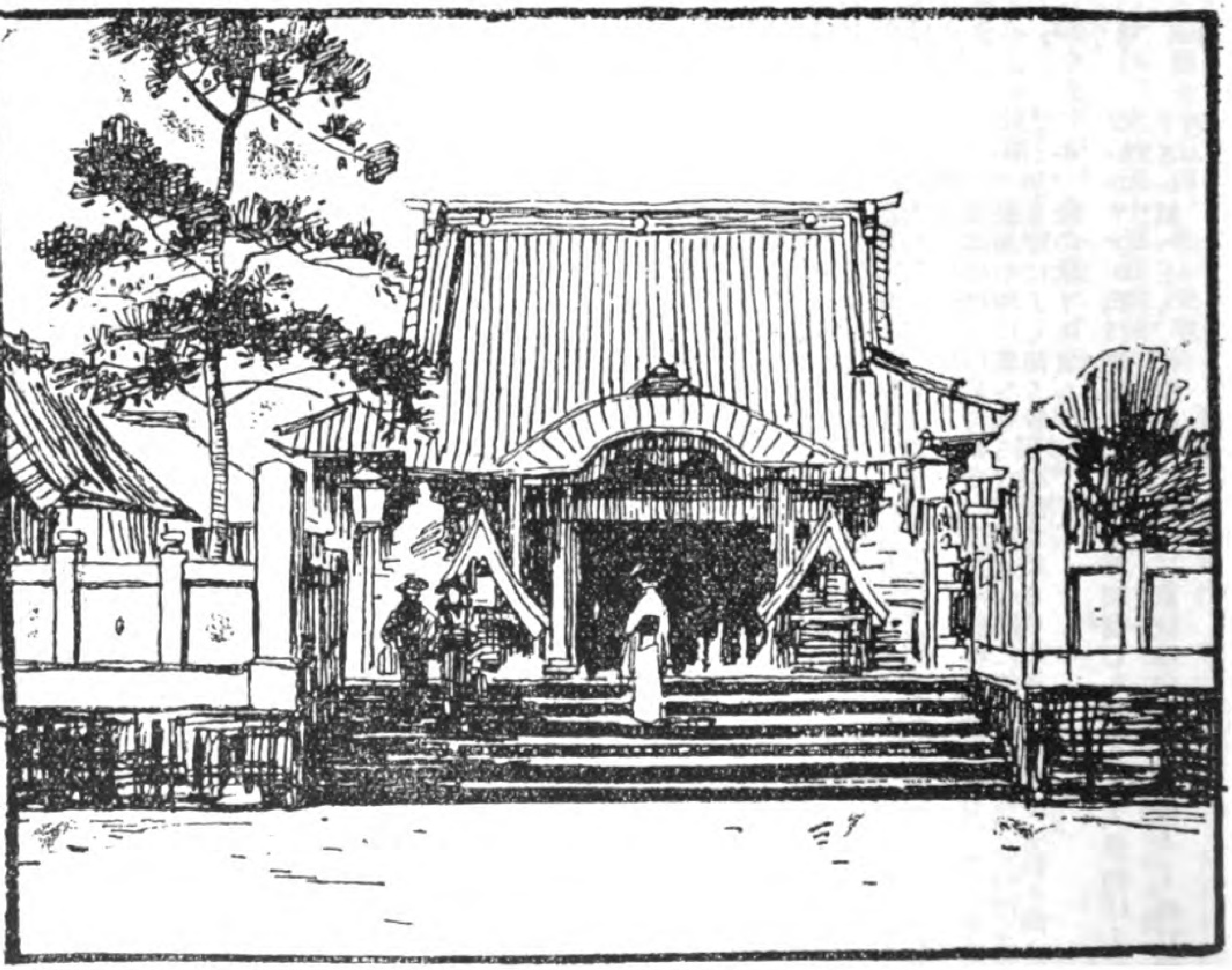
清水谷公園の藤

してある内、急性腹膜炎にかゝつて、入院そこへ以て主人が足部と腰部に負傷して後送せられたといふ騒ぎ其時こそ自分はどうして、かう不幸なのであらうと、勿體ないが、神様も佛様も恨みに恨んだ、が幸ひに兩人とも全快して、良人は再び出征といふ事になり、此度は旅順攻圍戰の眞最中とて之が最後の別れかと、笑つて送り出したあとで、一間に籠つて思ひ切り泣いた八月には、やつと、大尉に進級、幾分か家計は樂になつたが、一朝事ある時零落しては勇士の面目にかゝると、相變らず油斷なく、ケチ〳〵やつて居た、すると今日は誰さん戰死誰さん重傷と毎日の騒ぎの中にも不拘中にも退屈とあつて、挿花や絽ざしのお稽古なんかして入られる方もあれば、着物だ帶だと新調して入られる奥様もある皆思ひ〳〵の遣り方に、流石に堅き決心を持つた私も、何年間新らしいもの身につけた事もなく、あくせくしてゐるので、同じ暮すならと、羨やましくて、一層と思つた事もあつたが、頭のどこやらに、主人は血の降る滿洲に居て、櫛風沐雨臥薪嘗膽の

苦しみをして、居るではないか、そんな心を、起すなんて、以ての外だ、といふ聲の響く心地がして、矢張りおさんどんに暮したので、野村さんの、奥さん御覧なさい女中の着るやうな手織の着物着てさ、かまはない方ねえ田舎の方は氣樂で羨やましいわと、賞めるんだか、けなすんだか、人を馬鹿にした、評判も、ちらちら耳に入るが、其奥さん達は又流行々々と限りある金で、よく出來ると思へば、片つ端しから古い着物を賣り拂つては、それに足して作つてゐるんだとか八百屋も、米屋も、滿足に拂つた事は、無いとか、いくら下女を使つて威張つたつて、こんな内幕では仕方がない、私なぞは眞平だ、と却つて反抗心が起つて暮しよかつた、越えて卅九年一月目出度凱旋命拾ひと歡迎會、祝賀會と當分は丸で、酒浸し被服から、背嚢から何から何迄、新調、家は大きくなる來客はある、手は廻らず、已を得ず下女は置く、經費は嵩む、俸給では又足らん事になり、折角の貯金をぼつ〳〵引出して、足して居た、其暮れ居候さんが漸く十圓の郵便局のお役人になり、やつと安心。翌四十年戰功に依り功五級金鵄勳章年金三百圓を頂戴した時は、思はず嬉しくて神樣に謝した、人間はどこ迄勝手に出來てゐる者だらう、前の負傷の時、死んで仕舞へば夫迄だが、神の御加護に依つて、輕傷で濟んだのに、思ひ切り恨み、今ではお禮を申なんて、よく此口が曲らない事だ、同じ負傷までして、功六級にもありつけず一時金位の方も多きを思つてみても、實に我等は幸の部でなければならぬ、つく〴〵考へると、長い間貧乏に苦しめられた處へ、急に大金が降つた事故、自然金遣いが荒くなるは必定又元の木阿彌になつては、お上へ對しても、勿體ない譯故、萬一の用意に、保險に掛けておけば、遣い度も遣へんから、夫丈は殘る道理と、千圓の養老保險に加入し、其殘りを積む事にした、然し何としても手を附けぬ譯にいかず夏冬の服料丈は、之から支辨して、其他へは土に嚙りついても、出すまいと決心丈は附けてゐた、四十二年末幸ひにしてコンマ以下を脫して、上長官の位に昇り、また一苦勞、馬は買ふ、正

装は作る、馬丁は置く、馬屋附の家に越す、折角の貯金もたゝく間に綺麗に無くした、とても一生金に縁は無い生れ合せと、諦らめ、是からは少佐殿の奥様と、云はるゝ位を、せめてもの心遣りと思つて居ると、好事魔多く弟が不治の病に犯され、腰辯の悲しさ、免の字を頂戴し、又候兄の厄介此度は故郷の海岸へ引取らせ、月々の支送り、此調子では中佐が大佐になつても、矢張り同じ事であらう、然し

幸にして借金丈はなく、贅澤さへしなければ食べるに困る事もないので、先づ此邊が諦らめ所だと思つてゐる、是から少し我流處世法を云つてみやう今に通帳で物を買ふ事と、小買ひと、買ひ置きとは、最も禁物である、そしてさしも遊ぶ事の好きな良人も年と共に自然に止んで、此節では料理屋の拂なんか、めつたにない、是を以て見ても生中の諫言なんかするものでないと思ふ、人の性質にもよりけりでは、あるが、男といふものは、妙な意地の強いもので、例い自分が惡くても、女には負けて居ない、遊



深川不動尊

ふ事の悪い事は、百も二百も常識のあるものならば、知つて居る、それを諫めたりした處が、生意氣なと思はれる丈で、駄目、自ら良心に恥ぢて、くる樣口を少しも開かず、處作で仕向けるのが、穩で賢い仕方である、で今日迄、遂に顏を赧め合つた事もないのは、いつも負けて、勝つ爲に外ならぬ、三には姑と嫁の仲のよきを怒る人は恐らくあるまい、敵を射んとせば、先づ其馬を射よと、だから相談事でもあると、第一番にお姑樣に、持つていきそれから良人に計る樣にしてゐる、四には馬丁や下女などは、よく他家の事を云ふものだ、他家の事を云ふ位なら、必ず內の事も云ふに違いない、彼等は物さへ貰へば白を黑といふ位は、朝飯前無い事でも云ふ・此樣な手合を信じ過ぎるのは誤りの素故、決して心を許さない、が或程度迄は耳を借してやる事にして居る、五には愛嬌を降りまくはよき事に相違ないが、餘り空々しいお世辭は、人格の落ちる樣な、心地がして大嫌い、正直に萬人平等に交際するのが一番だと心得て居る、故に我等夫妻はめつたにお世辭なんか云つた事もなけれど、幸い皆さんが慕つて下さる所をみると、敢て吝坊で、憎らしいとも思つて居られないと見える、自分には自分の事は分らない或は自惚れかも知れない、誰か正直に云つて下さる人は無いかしら、思はず長くなつた、ほんとに、下らない過去だ、一寸先は闇ア、どんな將來を經る事であらう。

咀嚼は長壽の基

米人フレッチャー氏は幼より不養生の爲めか四十五歲以前には瘦せ衰へた病人であつた。が不圖した事から食物咀嚼の法を案出した爲め頗る壯健の人となつた今其方法如何といふに。

一、食物が重湯のやうになるまで嚙め。わざ〳〵呑み下さずともひとりで喉を通るほどに嚙め。

一、液體を嚙む事。肉類に於けるが如くせよ酒も、乳も　茶も皆嚙みつゝ喉へ下ろせ。

一、寢起きに直ちに食事するな、湯は無用である、汝はまだ夜間に蓄積したる勢力を消費せり、よろしく正午まで食事を待て。

一、食慾の起つた時でなければ食物を取るなよく咬み切る事の出來ぬ肉を食ふな、そして量は三十口を以て充分とする決して過食する勿れ。

一、食事の終りに於て飲め、多量の飲料は必要なし。

一、悲痛の中に箸を執るな、恐怖の間に箸をとるな、心の浮き立つて居る際はよく落ち着くを待て。

一、汝の欲する質を擇べ。

フレッチャー氏は麵麭は凡そ三十三回嚙むを例とす。人最初はよく咀嚼するを厭へども、漸次嚙むに隨つて眞味を覺えるに至ると氏は云つて居る。



食卓日記

内藤津留女

皆様のお手並勝れた食卓日記、いつも〳〵感心して拜見して居ますが、とても我等の境遇では食ひ倒れになりさうで、實は雜誌なんかに出す樣な御馳走もした事はありませんが、書生上りで、毎日お料理の本と首つ引きでは、肝心のお財布の方がお留守になり、月末にあつと吐息つかれねばならぬ樣になりますから、たまには私等の献立も御參考になるかと思ひ、書く氣になりました、正直な處私は一陸軍大尉の妻です、姑一人とそして折々は貢がねばならぬ兄がありますが、將校と云へば大層立派ですが、俸給は本俸六十圓と宅料四圓七十五錢、然も受取る迄にはあれこれ差引かれ、大枚五十五圓前後です、幸ひ年金三百圓頂きますが、是を的にする樣では萬一の場合夫をして後顧の憂なからしむる樣に出來ませんから、之はどこまでも無いものとして置かねばなりません、實際勳章の無い方も澤山ありますから。さればいつも安くておいしい御馳走はないかと、鵜の目鷹の目で居ます。

△月曜日

朝は例に依りパンと紅茶、パンにはバタをつけ狐色に燒く、紅茶にクリーム砂糖を加ふ、但良人丈、妾はお姑さんのお相手に有合せにて朝食を終る、お晝は隊で皆樣と御一緒ゆゑ世話もなし、午後吉田夫人來訪せらる、いつもながらお人形の樣にお化粧してお召しなんかぞろりと着流して入らつしやる、人の噂ではあちこちに借金があるとやら、きつと御立派なのを羨やんでの作り言であらう、お話しは過日來某所で催された料理講習談に及び、其利益を得し事をしきりに說かれ、妾の赴かざりしを非常に殘念がられし故、如何なる珍料理にもやと伺へば、之はしたり、「鯛の頭を切るのに下女が金槌を持ち出して叩くやら、大騷ぎして居ましたが、先生がお切りになると、ズート二つに割れ、誠に感心致しました、貴方、あれは切り方があるんで厶いますよ、そして鷄など一羽買つて捌けば大變德用で厶ます事ネー、お豆腐でも白菊豆腐など御存知で入らつしやいますか」と、「ハイ手前共では始終用ゐて居ります」といへば、驚いた樣なお顏、扨扨結構な奥樣、私共は年が年中お三どん同樣故、夫位の事はいつでも敎へて差上たい位、華族の奥樣ではあるまいし、御自分の無能を吹聽して歩く樣なもの、およし遊ばせばよいのにと思ひましたが、そんな事もいへませんから、さもさも感服仕つた樣な振りして伺ひました、一時間許りで歸られる、四時頃朝岡樣の奥樣入らつした、今日はお客樣のとれる日と見える、先刻吉田夫人が來られて山田の奥さんはお料理に趣味を持つて入らつしやると話されたと仰有る

オヤ〳〵　私の白菊豆腐がもう趣味と大衆に變つたのか、之だからうつかり物は云へぬと驚く、晩餐は取つてあつたさよりを用ゐる、皆三枚に下し小骨をすきとり中分許糸作りにし、下し生姜あとは結びて薄鹽をなし吸物さきに下した骨やらすき取つて腹の處やら皆集め、鍋に湯を沸し入れ出してとり、漉して汁許りにし、酒一ずつ加へ結び身を入れ加減し、じゆん菜の瓶詰になりしものを二つ三つ添へる、お惣菜に荒芽に油揚を入れ鰹出しにて煮る。

△火曜日

今朝は一圓お豆腐の味噌汁、お茶菓子を切らせましたから、黒豆五合許焦げぬ樣にいりて砂糖中斤許、鍋に入れ、水少しと生姜の絞り汁大匙一ついれ、火にかけ砂糖の糸を引く位煮つめ前の豆を入れ、一時にかき廻す、岩の樣に固まるゆゑ一つ一つ離しおく、晩は鯛一尾にて潮汁照燒、荒芽の白和へ、菠薐草の浸し物と決める鯛は三枚に下し頭を四つに割り胴骨と共に薄鹽をなしおく二三時間して熱湯に一寸酒をさし其中へいれ、一沸さして鹽加減をみ、口柚子を添ふ、照燒は片身を適宜に切り、醤油、砂糖、酒の中へ暫時浸しおき、串にさし文火にて燒く味淋を用ゐれば上等なれど不經濟故砂糖酒にて十分なり、荒芽は昨日の殘り、豆腐を湯煮し、絞りて擂鉢にいりたる白胡麻をいれ、擂り砂糖少し加へ絞りたる豆腐をいれ、すり前の荒芽を入れ和へる。菠薐草は裏の畑の晩蒔のものを取り茹でゝ花鰹かける、殘りの鯛片身は白燒きにし明日へ廻す、下女を相手に臺所であれこれして居ると徳やの曰く

「馬丁さんが内の奥さんの樣に一尾の鯛でお汁やら、お刺身やら、燒き物など作るのは吝ち臭いから大嫌い、實附ならぶつ〳〵切つて皆一度に煮て仕舞ふと申して居ました」とサウカイ男は男、女は女、お前なんぞそんな眞似をするんではないよ、何でも見て覺えないぢやあいけないよと面倒臭いから相手にならず置く、お金なぞめつたに持つて居た事もなく、いつもピー〳〵の癖に口許はいやに達者、其癖何か物をやつた時許ペコ〳〵お辭儀して、ほんとに憎らしい、爺やをおだてゝはお米だの、お醤油だの、鼠の樣に引いて行くのを知つては居るけれど、僅かな事と見ん振りして居れば、よい氣になツて：：彼等ほど度し難いものはない、どうせ奥樣は憎まれ役、損なものだ。

△水曜日

今日は婦人會の定日故、午前九時頃より出懸ればならず夫迄には魚屋も來ず、お姑樣は一切我不關焉故、何でも徳やに分る樣なものにせればならず、仕方がないから鷄五十目と大胡瓜三本許買はせ置く、會は相も變らぬ不得要領で、名々勝手な雜談にお茶とお煎餅を頂いて形式的な軍醫殿のトラホーム豫防に關してと繃帶術とを聽問して正午歸宅、只一つ前會より入會の小室夫人の急激なる變化に驚く、此前は前髮も髷も高い二〇三式であつたものが、今日は恐ろしい廂で8番、遠くから又新入會者があるなと思つた處、近よりて二度びつくり。然し惜しい哉、鼠の巣宜しくのすき毛の心がそこゝゝ顔を現はし、お召物の召し方もお髪と調和してゐな

い、晝し一時にはといふ處より、逐次改良せらるゝお考でがなあらう、人の振見て我振り直せとはよくいつたものだと感心した、さて晩には鶏を叩き胡瓜の中をくりぬき詰め、一寸位に切り醤油砂糖酒にて汁澤山にしてよく煮込む、昨日の焼き鯛の身をほぐし、砂糖少し振り、酢をかけ置く、胡瓜をきざみ薄鹽し、三十分程してよく絞り、前の酢の中に交ぜる、醤油一寸落す、素麺を茹で薄味噌汁に仕立つ、食後今日婦人會のお話しをお姑様に申上て居たら、良人傍から貧乏症の治療法を習つて來ればよかつたのにと横槍を入れられ大笑ひす。

△木曜日

昨夜の雨の降り様、車軸を流すとは此事であらう、又お魚は無いなと思つたから、朝から明き火へ黒豆をかけて煮る、氷蒟蒻を小さく切りて入れる。晩は牛肉のすき焼と定め、葱豆腐を添ふ、丁度中島様より手作りの赤茄子一個見本にとて下さる、よき幸と熱湯をかけ皮をむき、輪切りなし、酢醤油かけて頂く、淡泊にして肉食の後には殊によし、お姑さまは西洋臭いとて召しあがらず、夕食後良人散歩にと出懸けらる其あとで馬丁内々にて奥様にお願ひがあるとて來る、何事かと思へばお金の無心、旦那様に聞こえると平素訓戒せられし揚句とて解雇になるは必定故、何卒奥様のお心で私を助けると思し召し、五圓丈拝借したしと哀れつぽく云ふ、其口の甘さ、日頃は人を吝だく／＼と云つておいて勝手な時には此様と、あんまり腹が立つたから主人に内々では六つかしいと斷つてやつたが、此度は切迫つまりし事故、決して其儘には不致月給にてお差引下されとたつての頼み、又あまり手強くはねつけると此手合はいつどんな無法な返報しないとも限らず、萬一良人の名譽にかゝはる様の事があつても濟ますと、親の様な大男によく／＼云ひ聞かせて借し與ふ、三拝九拝して退く、世間によく放蕩息子が其母親をせびりて、金を無心し、父に知らさず苦勞してゐる母親なぞ、其心配は血を分けし子丈にどんなであらうと、妙な處へ同情心湧く。

△金曜日

午前中柴岡様令嬢のお見舞に行く、最う全快、座に大石夫人在り、いろ／＼お話しの末、いざ辭さむと勝手口へ出でしに、出入の魚屋丁度お勘定取りに來り、大聲にてヘイ五圓といくらといふ、大石夫人云はでもの、アラ内は七圓餘りだわと、これをきかれた神經質の柴岡夫人ピリ／＼と眉根をあげられしも、さあらぬ體、妾は長居は無用とさつさと御暇する、大石夫人御自慢の所かは知られど、假にも上官のお内、自分方より少なくば最少し經濟を切りつめ、少なくせれば身分の割に過ぎる位の考あつて然るべき事例ひ思つたからとて胸に收めていらるれば濟む事を、兎角かゝる些細な事よりお互に隔など出來果ては旦那様のお身の上にも及ぼす様に至るもの、交際の秘訣は人の感情を害せざるに在り、あゝけふはよき學問せりと思ひつゝ歸宅、夕食は小鯵を取つてあるから之にてフライ、餡かけ茄子胡麻ゴシを作る、フライは片身下し適宜切り、紙にてくるみ鹽をふり、三四時間置き、

とり出しよく水氣を拭ひ、メリケン粉、玉子、パン粉へ順次ころがしラードにて揚げる、ソースかける、片身も程よく切り、薄鹽をなしゆき鍋に湯を沸し骨にし出しをとり此中へ切り身をいれ、酒一すまし一沸きして切身を出しあとの汁へ葛を溶き込み鹽又は醤油にて加減しよく葛のかゝりし時前の魚へかけ下し生姜を添へる茄子湯煮し水氣を絞り擂鉢に鰹節と胡麻をすり醤油砂糖を加へ此中にいれ和へる。

△土曜日

けふはお姑樣のお誕生日に當るし土曜日とて良人も正午お歸り丁度今明日松屋呉服店の見切り賣出しとの案内狀も來てゐるし此日丸髷方も入らつしやる模樣だけれど見れば眼の毒安いと思へば、餘計な物も買ふ道理行かざるに如かずと無理に我慢しそれよりかお祝ひに御馳走でも仕樣と定む、晝は鰻の丼と葉人參の浸し鰻を醤油と味淋にて照燒にし炊き立の御飯を丼にいれ鰻を並べ汁をかけ御飯をいれ又前の通りにし一番上に鰻を並べ蓋をなしむらし置く揃ひの丼なく三人三樣の丼なれど手製と思へば美味なり晩は赤の御飯に車蝦と茗荷の吸物車蝦を茹で皮をむき二つに割り鹽出しには吸物茗荷をきざみ浮かす小鯛のお頭付鹽燒お膾は茹でし蛸の身を小口切にし大根突きにて突き鹽にてよくもみ水洗ひしかたく絞る木耳は水につけ小口切にきざむ以上三つのものを甘酢にて和へるきんとんは白いんげん豆をよく茹で鹽と砂糖にて味をつけあまり形のくづれぬ樣にしておく薩摩芋を蒸し裏漉にかけ鹽砂糖にて味をつけ前の豆をあへる最一つ百合根の甘煮之はお姑樣大好物よく〳〵何度も湯出こぼし鹽砂糖にて煮込む此五品にてお燒物誠に輕少ながらお頭付といふ點を取り柄にして頂く清酒は皆不調法とて葡萄酒を一口づゝ頂きて樂しく食事す。

△日曜日

朝さやいんげんの味噌汁にて三人共和食、入時頃もう同鄕の少尉さん二人入らつした遠慮のない間柄とてすぐ寢そべつてお話しが却々盛んだ又きつとお晝飯を出す樣になる事と思ひ手廻しす日曜每にさう御馳走しては大變故けふは散し壽し天麩羅お汁ときめお晝迄に枝豆を茹でゝ出したら忽ち皮は盆上山を成した、お魚屋が丁度小ハダと金頭(ホーボウ)を持つてきた、よい鹽梅兩方とも取つて小ハダの身を下し、小骨をとり酢につけておく、壽しの種は蓮根、椎茸、干瓢、高野豆腐、人參、それ〳〵茹でるものは茹で、小口切にきざみ醤油砂糖酒にて味をつけ御飯を出し團扇にてさましながら鹽を振り、よき加減にし前の具を交ぜ、酢を振り魚を交ぜ玉子を薄く燒き千切りに切り海苔をあぶり粉にし玉子と共に上にふり紅生姜添ふ金頭を適宜に切り、薄鹽をなし、吸物に仕立つ出しは前の小ハダの骨を用ゐる、サナインゲンを茹で胡麻味噌和へにし、前の殘りの蓮根人參有合せの薩摩芋とを揚げ物となし下し大根にて出すお壽もじが參らしとてお代り〳〵して召し上つた、二時頃お歸り、晩は昨日けふ少し豫算超過故、儉約してかき玉子のお汁にもみ海苔、金頭の煮附お晝の殘り物にて濟ます。

世間を猛烈に罵しる人

さみどり女

旦那樣は御出勤、子供達はお隣の岡村さんに遊びに上つてゐる、あゝこんな時こそ一日中で私の樂な時、なまなか階下に下りたら又竹のする事がもどかしくつてやきもきせねばなるまいと、急に俗界から天人界にでも來た積で、二階の御書齋の掃除が濟むと其儘簾を壁に立てかけて、通路の方の小窓をかけて見る。澄みきつた秋の光は穩に流れて、輕い暖みが頬に當る。薄黒い瓦屋根の間々から思ひ〳〵に顏を出してゐる木や草やは、もう葉といふ葉が皆黄を帶びて、何所かに疲れきつたやうな、さりとて見やうによつては充實の影を宿したやうな姿をしてゐる。あ、鳩が三四羽飛んで來た。乾度瓜生さんのお庭に下りるのだらう。

四邊に高い屋根がないから、細い通を間にして近所の家々が皆見える。誰か通らないか知ら、如何に邊鄙な駒込だからつて、日中而かも此天氣のいゝのに、近い所には犬一匹見えやしない。これでも東京でせうか尤も此間見た江戸の舊圖には「駒込宿」なんて書いてあつた位な所だから無理もないけれど……。ほゝ、人間もそんなものね、今こそ何々夫人などゝ意張つてゐても、昔が昔だと矢張何所かに他より落ちて見える所があるわ。昨日見たある雑誌に、「名流婦人の髪の好み」として一々社の問に答へた所謂貴女のお名が並んでだつけが、一人毎に、正何位何爵の某夫人とか、何何會社顧問何博士夫人とか御叮嚀に書いてあつたので私吹出してしまつたわ。其樣に旦那樣の肩書やお名を書かなければ何人だかわからないやうな人なら、何所が名流婦人なのでせう。自分には何の價値がなくつても、立派な旦那樣さへ持てばすぐ立派な人になれるといふのなら、女といふものは絶對に無價値なものだわ全く零だわ。それと同時に女の學問などゝいふものも其見方からすると只立派な旦那樣を見つける道具に過ぎやしない。藝者が紅や白粉でそばかすや小皺をかく

すのも、女學生が家政だ歴史だつて頭をいためるのもつまりお化粧の仕方が違ふばかりになるわ。今の女子敎育者といふ方は、其美顏術の技師の積で敎壇に立つてゐられるか知ら、うかゞひものね。

一人でとんでもない事を考へてゐると、ゝ、ゝ、がらりと近い所で格子戸のあく音がする。あ、お向の天野さんだ。誰が出て來るのだらう。おや奧さんが！　まアあんな大いお腹をして何所においでになるのか知ら。見て居る中に岡村さんの先の角をお曲りになる。何所かへ縫上りものゝお屆けね。でも彼の奧さんは感心だわ。先の名流婦人から見たら「豪くない女」なのかも知れないけれど、七人もお子さんを抱へて一人での切盛、もう今度は八人にならうといふのに下女一人お置きになるのぢやなし、其上に無い暇を作つて仕立ものまでお引受になるなんて。尤も二十年一日のやうに遞信省の屬官をお通しになる旦那樣に連添ふ位の方だからだけれど、全く普通大抵の人には出來ない事ですわ。若し女といふものが一家を治め子供を育てるといふ事丈が天職なのなら、あの奧さんなど眞に此上のない良妻、賢母。それこそ名流婦人の上乘だわ。一體世間の雜誌など、上流の方の詰らない事を業々して書き立てる暇があるなら、此樣な隱れた人の事でも書けばいゝのに上流の方などは外で提灯を持たずも人目につくし自家廣告にも抜目がないものを。だけどそれも只理窟ね。風敎のためだの、家庭の改良だのといつたつて、元々賣るのが目的なんですもの雜誌の。發行者だつて記者だつて皆パンを食べる矢張人だわ。ホヽ。雜誌の記者曰くこりや却々獰猛だ、どういたして私共は人間以上の神樣だと思つてゐるのにまあひどい事をいふ人ね。

私何といふ生意氣な事を考へてたんでせう、毎日の家の事ばかりでさへやりきれないのに、餘計な人樣の事まで頭痛にやむなんて隨分もの好きね。然し私さう思ふわ、旦那樣に作つて頂く名流婦人など眞平だけれど、さりとて天野の奧さんのやうなのも餘り贊成ぢやないと。だつて如何に女だからつて其所に何等この意味のある生活がありやしますまいか、親の情で折角習

はして頂いた學問は嫁入の時の振袖と一緒に簞笥の底に藏うてしまつて——振袖はでも年に一度位蟲干するからまだいゝけれど——下らない三度の食事のわりふり位に腦味噌を腐らしながら、急がずもよい人生の春の頃から臺所の隅にけちな繭をつくるなんて、餘り利口な遣方ぢやないわ。男の方ぢやないけれど、少しは忙中に閑日月を作つて、悠々迫らぬ位の心持があつてほしいのね。

おや／＼、とんでもない事を考へてゐる内に、流石の駒込宿も賑かになつた事。あゝ兵隊さんごつこね。眞先が長屋の力坊、銀紙の烏帽子にブリキのサーベルぢや不調和だわ。あれでも總大將の積で大意張だから面白い。一人、二人、三人、四人、

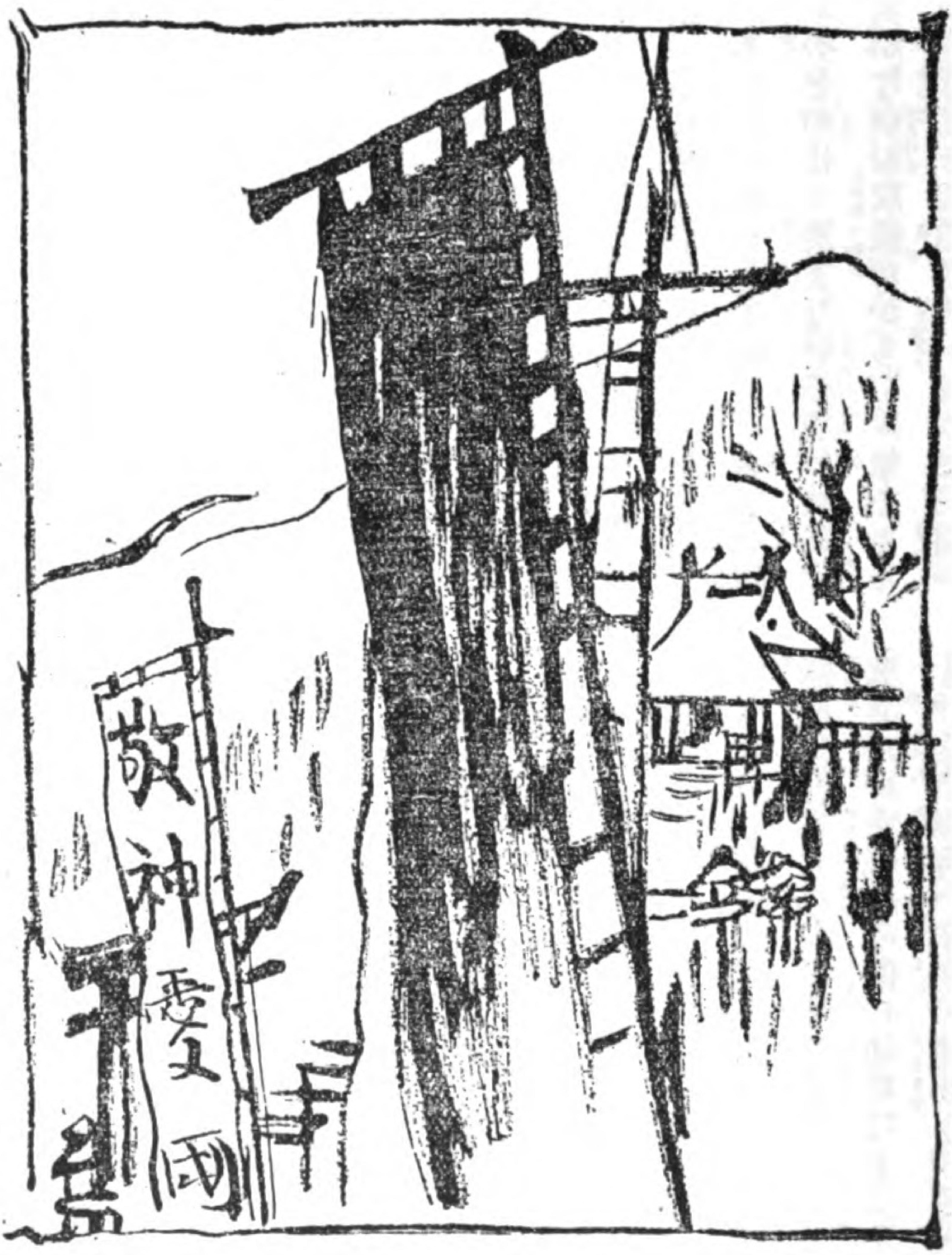


總勢五騎、ホヽ………、何れも見すぼらしい武者振だこと。おや何所からか長い竿など持出して、あの亂暴さつたら！　差配の無花果もめちいゝ、やめちやだわ。今に彼の喧しやのお爺さんが飛出したら如何するでせうけれども子供つて罪のないものね。罪がないからこそ彼樣な事が出來るんだわ。實をいつたら彼の兩親も兄姉も闇にかくれては皆より以上の惡戯をするんでせう、けれど、誰一人白晝彼の大膽な事をし得ませう。それ丈見ても罪の大小はもういふ迄もなく……そら案の條戸が明いた。逃げるわ／＼、彼の樣子つたら！　でも何といふ怒りやうなんでせう、お爺さん年甲斐もない眞赤になつてさ、けれども斯う見てゐると眞に面白い

對照ね。譬へば子供達はまだ造りたての木地の儘、其木地に利慾といふ漆をかけて塗り上つたのが彼の差配のお爺さん、さう思ふと人といふものは皆塗物見たいなものね。學問の漆のかゝつたのもあれば、虚榮の漆のかゝつたのもあり、我意ばかりで仕上げたのがお轉婆さん、貞淑とやらで仕上げたのが賢母式、意氣地なし地やら神經塗やら。――私などは何塗でせう、あの馬鹿塗といふのか知ら。＊……、宛然漆器屋の廣告見たいだこと。あら、お爺さんまだ怒鳴つてるわ、對手もないのに。だけど彼の人だつて別に惡い人ぢやない。金錢の事は喧しいつたつて、何も道理のないお金をとるのぢやなし、よこさない奴こそ不都合なのだわ。此前角の長屋の人を追立てた時だつて、皆は情知らずだの我利我利亡者だのつていつたけれど、人の家を平氣で幾月も只借りてる方がどの位不都合でせう。追立てるのは情知らずかも知れないけれど、緣も由緣もない人に、それ程滯るまで貸して置いた丈でもとんだお情、難有い仕合と拜まれてもよいのぢやないかしら。おや、私大層お爺さんの肩を持つたのね。これだから馬鹿塗だわ。＊、、、、。

折角プン／＼いつてゐたお爺さんも、對手がないので箒を持出して門前の掃除を初める。町頭から裏面に日を受けた小路は、昨夜の小雨の名殘を陽炎に見せてほの／＼と立つ淡い蒸氣に春のやうな趣を偲ばせる。赤い蜻蛉がつういつつい塀の上を飛んで、今折られた無花果の梢をすれ／＼に往來する。折角の背景にお爺さんばかりぢや舞臺が淋しいと思つてゐると、「三毛や」と妙なアクセントの聲がして、其向の門ががら／＼と開いた。おや、どんな俳優の登場かしらと思つてるとお召縮緬の袷をぞろりと召した下瀬の奥さん！ まア此一齣の女主人主には上乘の花役者だこと。成程三毛が抱こしてるが、あのお仕度は如何か御出かけなのかしら。おや／＼さうでもないらしい。三毛を初々しく兩袖で抱へて、あれ頬擦なんど遊ばした。お爺さんの方へ駒下駄を引ずると、「まア何と惡戯なんでございませうね、折角丹精してお置きになるのに。眞に此邊の

子は惡戲が烈しうございますわ。あ——の掃除がおすみになりましたらちとおいで下さいまし、幸宅も出張で靜でございますからお茶でも入れませう。」つてお爺さんは頻りにお辭儀をしながら倚せつゝと掃いてゐる薄濕の土の上に箒目が美しくついて下瀬さんの塀際に生へた雜草が一際目立つ。一體彼の奥さんはお幾歳なんでせう？　家の髮結さんは「廿七でゐらつしやるんですつてね。如何もさうは思へないんですけれど、御本人のお話だから間違はありますまいわ。」つていつてたが。それでも前にお片付の所には、十七になるお息子がおありなんださうだから、餘程妙だわ。如何にあの方だつて九歳の時お生みになりもすまいし。でも彼樣な派手な着物を召して白粉つたらあの通り眞白、矢張廿七に見える積で被在るのね。赤い手柄は申すまでもなくあれで折々廂になどさるから面白い。でも彼の僻のあるお髮をあれ丈



になさるには並大抵ぢやないわ。

箒目は次第々々に廣まつて行く。奥さんのお茶のお使も出會頭のお世辭だつたと見えて、其儘表の通りの方へ行つて仕舞はれた。おやお足が少し變だわ。今迄氣がつかなかつたがと思つて見てゐると、何と思つたかお爺さんも手を休めて後姿を見送つてゐる。其又心が其方にとられたといふ身の態度が、如何にも面白い。劍術や柔道に達した方が御覽になつたら、嚥身體中隙だらけなんだらう。でも何を其様に感心してゐるのか知ら。ふゝ、彼のお爺さんも隨分拔目のない人だけれど、奥さんにかけちや段が違ふと見えるのね。何時やら疊の表換の事で家に來た時の話を思出すと可笑しくなるわ。「や、あの奥さんには弱りますわい。家賃を頂きにあがると、御足勞をかけて濟まないのまづお茶を上れのつて下にも置かないお取扱だからいゝ氣でゐると、其様な時に限つて乾度十八圓の所へたつた貳圓か三圓、何れこの十五日にはなんてそれつきり忘れたやうな顔でさア。お菓子の一つも食つた揚句だから、まさかこれでは困ると急に居直る譯にも行かないんでね。」つてこぼしてゐたつけ。ホ……、矢張外交術に長けて被在るんだわ。けれどもあれ程の御生活でよくさう圖々しく出來たものだこと。伺ふと御主人はお役所でも相應な位置に被在るんださうだし、それに御家内は少く、何に遣つてさう不足をなさるんでせう？　尤も御主人は御主人で毎晩十二時過でなくつちやお歸りにならず、奥さんは奥さんで、彼様おめかしで遣はれる丈は遣はうといふ主義、明日の經濟より今日の面白い事が目的で、お俥に召しちや二十七を四方に振廻して喜んで被在るんだから堪らない筈だけれど。何もない家庭とは皆で寄集つて御飯を食べて寝る所といふお考なのね。御夫婦はそれでもよからうけれど、そんな家庭に育てられたお子さんこそいゝ迷惑だわ。長男の充さんが小學生の僻に煙草などふかして、歩く生意氣も、全く難有い家庭の賜物よ。それを思ふと、父母の恩は山よりも高く海よりも深いなんて教へる學校が滑稽になること。

ホ……、他の事より自分こそ餘計な事に氣をとられて知らずにゐたわ。彼のお爺さんと話してゐるのは誰でせう、二人とも此邊では見かけない人のやうだがまア隨分ハイカラね。思切つて根を下げたマーガレツトに紅の勝つたミルク色のリボン、寫生板をお揃でかけたスタイルも氣取つてゐるわ。見るとお爺さんは何か幾度も聞きかへしてゐる。何？　何を尋ねてゐるのでせう。彼の人は耳が少し遠いんだから大きい聲でいはなくつちや。そら太つた方の人が傍によつた。まア大い聲だこと。あら瓜生さん！　瓜生さんならすぐ我家の前だわ。成程見かけない筈ね、友子さんのお友達ですもの。漸く分明つたと見えてお爺さんが指ざししてゐる。二人は、腰から上を少し曲げてお辭儀をすると、ダンスのやうな足取で此方を向いた。ホ……、すぐ顏を見合せて目で笑つた樣子つたら！「眞にわからない爺ね。」「えゝ。」と空中に書くやうな表情のうまいこと、今の方は眞に「目も口ほどにものをいひ」以上だわ。

あらあれ程「瓜生さん」て呼んでるのに、如何に門外からだつて聞えないのかしら。あゝ誰か出て來たやうね。友子さんぢやないわ。お妹の雪子さん？　障子が明いたかと思ふと「どなた」つて聲を先に格子戸が明く。門外の二人は默つて顏を見合はせて、「貴女行つしやいよ。」「いやだわ。」と又目で話す。

「どなた。」

「……………。」

「どなた。」

今漸く下駄を突かけて玄關を出た足音が、返事がないのでぴたりと門内でとまる。

「どなたよ――。」

止むを得ず一人が門の格子から顏を見せて、

「姉樣ゐらしつて？」

「えゝ。」

雪子さんは其儘ばた〳〵とかけ戻る。

間もなく友子さんが、矢張寫生板と三脚とを手にして出ていらしつた。今日は思切派手な糸織の袷、白い

襦袢の襟を苦しい程緊と合はせて、其所を抑へた寳石入の襟留、得意の妹脊卷は蒔繪の櫛でとめてゐる。側によつたら御園の香が床しいやうな薄化粧の、年も三人の内で一番長けてるが、器量も一人分抜けてゐる。

「眞にお待たせして濟まなかつてね。」

門をあけるとすぐ握手。

「まアおめかしね。だから長いんだわ。」

「いやアよ。――Kさんは？」

「今來しなにお寄りしたんだけれど、今日は御用があつて行かれないんですつて。お氣の毒さま！」

「眞實？　ぢやつまらないわ。嘘でせう。」

「ほゝゝゝ」と笑つて太つた方の人が側から答をとつて、

「そんなに心配しなくつたつていゝわ、貴女餘りKさんKさんて騒ぐから擔がれるのよ。――そこに待つてるわ。」

「さう。まアいやな柳田さん。」

肩を叩いて三人晴々と笑つた時、西の方の町の角から、中折や大黒帽の若い二三人がちらと顔を出して小手招ぎしてゐた。美しい人達は急いで皆其方に向ふ。

放任教育！　と私は獨語きながら思はず瓜生さんの方を見る。先刻の鳩が何に驚いたのか急に屋根に飛上つて、美しい日かげに胸を張りながら、棟瓦の上に揃つて並ぶ。やゝ大いのが一羽右に居て、其左に小いのが三つ、其大いのがクークーと底鳴きしながら右に右にと進むと、小い三つも聲を合はせて後から仲よく續く。まアあの鳩はモルモン教徒ねと笑ひながら、私は不圖、友子さんは今日何を寫生してゐらつしやるのだらう、でも親御さんな御勉強だと喜んでゐらつしやるからいゝわとくすぐられるやうな心地がした。

もう差配の爺さんは引込んでしまつた。下瀬の奥さんも何時の間にか歸られたと見えが、三毛が門の上で背延をしてゐる。正午近くなるにつれて世の中は流石にざわついて來て、表の通りの俥や自轉車の音が騒しく聞える。

おや珍しく車の音がすると思つてゐると、例の愛嬌

八百屋がひよつこり顔を出す。山のやうに積んだ青物の車を岡村さんの向の空地にとめて、「へい今日は、八百屋でござい。」と通る聲で目的もなくいふと、其所の奥にある三軒長屋の西端の勝手口ががらりと開く。おやと見てゐると、おや、おや、次の勝手口も次の勝手口も申合せたやうに開く。瓜生さんからは太つた女中が顔を出す。小路の裏からは西さんの婆やが駈け出す。宛然で八百彥の「へえ今日……」に見えない糸がついてゐて、斯う人を引よせるやう。狭い通りは急に東京らしくなつた。

「よいお天氣でございますこと。」



「先程は御馳走さま。」

「ちとお遊びに。」

などゝお互の挨拶が一通濟むと、一同は賑々しく八百彥を取廻く。

「八百屋さん何があつて？」

「へい、大根に牛蒡に蓮根に南瓜葱に小松菜茄子に里芋……。」と面白い節で讀上げる。



「茄子もあきたわね。今度は何を漬けたらいゝかしら。」

「ぢや三河島菜になさいまし。美味しう、ございますよ。」

「美味しいでせうか。」

「そりや受合、新漬はこれに限りますア。」

「私は何にしやうね。」と側からも相談を持ち込む。

「さうですな、此間は大根を上げましたから、今度は茄子がいゝでせう。秋茄子と來たら嫁に食べさせるなといふ程ですよ。」

「ちよいと、御汁に入れるものがなくつて、手のかゝらないものでゝ」

「へい〳〵、里芋は如何で。」

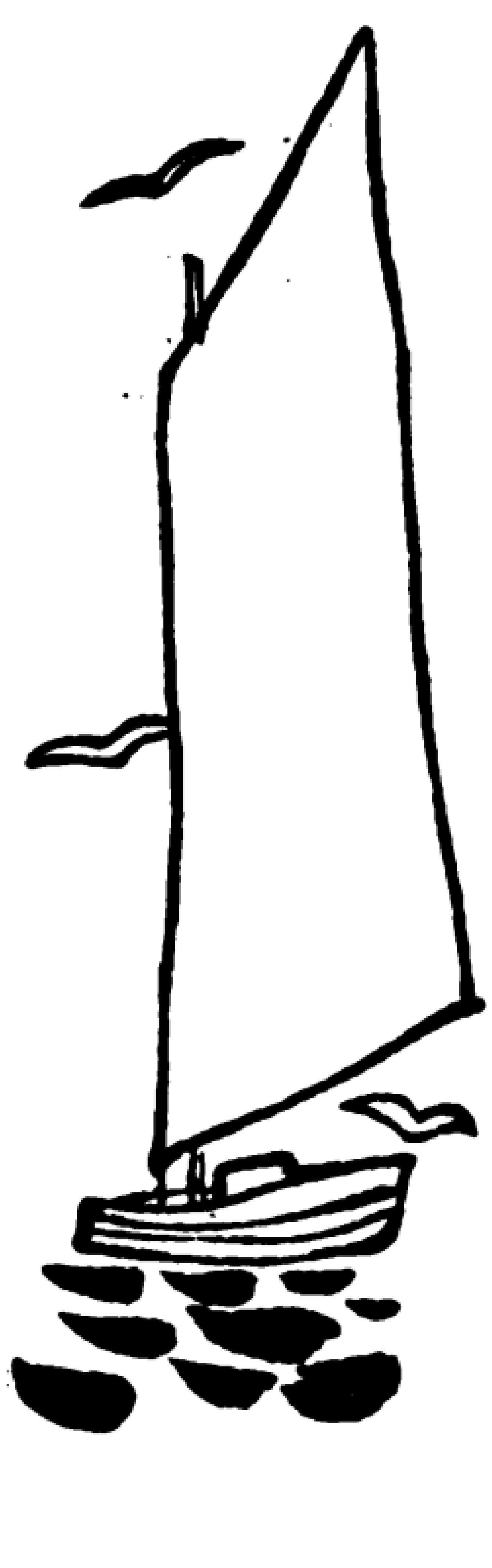
「八百屋さん、この南瓜はいくら。」

「ちよいと〳〵、枝豆はもうないの？」

「まアいゝ梨だこと。」

誰やらがいきなり箱の梨をつかんで嚙つて見る。柿にも手が入つた。八百彦は後から〳〵出て來る質問で目がまはるやう。まア何といふ賑かさでせう。あの阿弗利加の探險者がはじめて其土人を見た時、今日の私のやうな心持がしなかつたでせうか。だけど、人目も恥ぢぬ擧動、明日のお汁の實まで相談する其無恥、所謂天眞爛熳だわ眞情流露だわ、虛飾をさけよと叫ぶ聲が近頃高いやうだが、其人にあれを見せたら何といふでせう？　矢張其聲を續ける勇氣があるでせうか。ほゝほゝ、それより貴女といはれる人には全くあんな心や擧動がないかしら？　何時もお節句のお雛樣のやうに澄アしてゐらつしやるでせうか？　私何だか目前に其裏を見せられるやうな氣がするわ。あゝ、さうするとそれを押しかくす事を敎へた敎育といふものゝ力も大したものね。

あら竹が下で呼んでゐる。「あい。」「あいつてば。」八百屋物の事かしら。でも今日は大層面白かつたこと。が私も隨分ね、遠慮なしに批評してやつたわ。だけどこれは天人界の私よ。今に階下に下りれば又元の溫和しい内氣な奥樣になるわ。ほゝゝゝゝ。



歌會の作法

同好の人相集つて、和歌を咏み樂しむには一定の式ありし事にて其儀嚴かなるものなりし今其概略を擧ぐれば歌會には點者、詠吟、助吟、行事、給仕等の役員を要するなり

△點者とは人々の歌を評し、加筆する人にてまづ一座の先達たるべき人なり、これを又判者ともいふ。

△詠吟とは披講の時咏吟する人にて、助吟とはこれを助くる人をいふ。

△行事は會席一切の事を掌る人にて、其の道に經驗ある人に委ぬべし。

△給仕は雜用を辨ずる人にて末座の少年などにて三人を用ふ。兼題等の役員定まれば、同時に兼題を添へて案内すべし、兼題とは兼れて題し置く題の事にて、集りたる歌は點者に添削を乞ひ當日會場に携へ行くべし。會の席は床に神像をかけ、前に机をすゑて供物をなし其前に文臺を置く。

○神像は柿本人麿、山部赤人、又は紀貫之凡河内躬恒など主人の好みにまかす、かけ物は人々の座定まりてかけ、又はそれまでは屏風等にかくしおく、追悼の會等にはその人の像をかけて苦しからず、又風流の會には月花の掛物をかくることあるべし。

さて會衆は定刻前に行きて次の間に控へ居り、時來れば行事の案内あり次を以て席につく、席につけば一人づゝ靜かに神前にすゝみ懷紙を文臺の左方にのせておきて禮拜すべし、さて行事は文臺を取出で次の間には、吟咏者助吟者と相談して讀むべき順序を整へ、さてよきほどのところに据ゑ、次に助吟者は詠吟者と立出で助吟者座につきて、文臺の懷紙をとりてわが左りの方におき一葉づゝ文臺にのせ詠吟者それを讀みあぐ、その讀みかたはゆるやかに聲を引きてよみあぐべし、貴人點者などの歌は折り返してよみあぐべし、その外のは一回にてよし、詠吟者自身の歌は謙遜して聲低くよむべし、人々我が歌をよみあげらるゝ時は謹みて拜すべし、貴人點者などのもその定めなり。



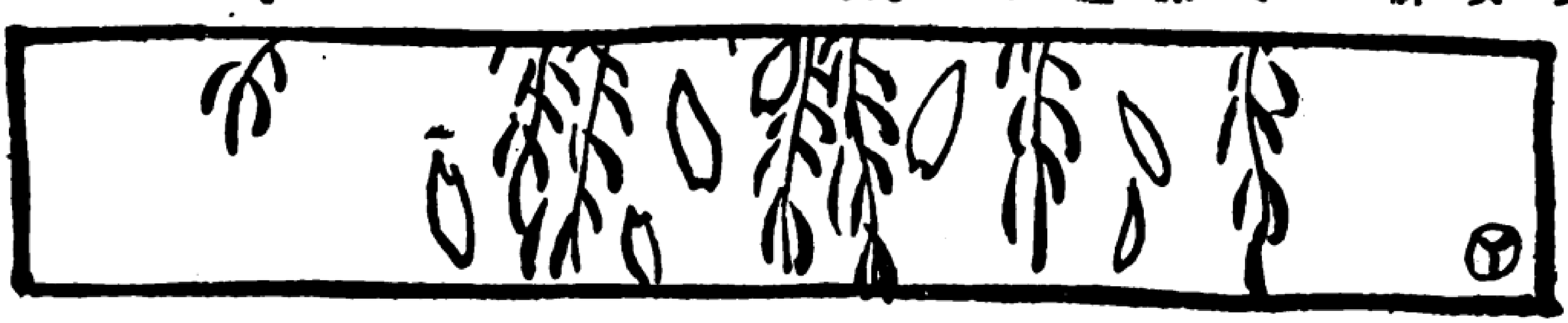
右終りて當座の式あり、行事は題を記したる短册を入れたる硯蓋をとりてまづ卷頭卷軸をよむべき人の前に持ち行き後ち、元の所ろに置くを一人づゝ立ちて取り來るなり、取りたる短册を懷ろにし、神前へ會釋して立つべし。

次に給仕より硯箱を配るときは、各々懷紙に題の字をしるし置きて歌を案ずべし、紙は上座よりとりて次〳〵へ送るを二枚とり、竪にして渡すべし、二枚とるは一枚は草稿、一枚は清書して點者に點を乞はん料なり、紙は二枚ながら折りて題の文字と名とを書きて硯箱の下へ半出しおくなり、歌を案ずる時は極めて靜かにし起居ともに他人の妨とならぬ樣にすべし、茶碗煙草盆の類は席に置くことなくして湯茶、煙草など飮まんとおも

ふ者は、次に立ちてすべし、おのが歌早く出來たりとて、いち早く點者の前へ持ちゆくは無禮なり、點者の評を得たる後ち其うたを短册にかき、行事に見せこれを三つに折り懐にいれて神前の硯蓋の前にすゝみて膝行して硯蓋の上におくべし。

さて行事出て硯蓋を取入れ、短册の順序をとゝのへ、持出ておくを助吟、詠吟出でゝ讀みあぐること前の懐紙の例に準ず詠吟の讀み了りたる詠草は助吟とりて、硯蓋におき共に神前に禮拜して退くべし、但し略式の時又は短日の折などには常座をよみあげぬ事もあるべし。その場合には懐紙の披講を常座の式の後におくる、次に行事硯蓋をとり神前に供拜して退けば一同齊しく禮拜をなし行事は神饌を卷き收む。

さて點者亭主へ禮を述べ、次に行事より酒食の饗應を催ふす饗膳はむかしは當座の前にも出すが常なれば、今もこれによること苦しからざるべし。饗は質素にして風流なるを旨とし、亭主の定まらぬ會などにては一種物などおもしろかるべし、一種物とは各々其肴一種づゝを持ち寄ることなり、但しこは極めて略式の時と知るべし、かくて一同飲食を了れば點者亭主に會釋して解散するなり、以上を定式の法とす、又定式を省略して適宜に行ふには饗膳を省き、或は當座の披講を略するものあり、今日世にあまねく行はるゝ月次會などは、大方これに隨ひ發會及び納會などのみ叮嚀にとり行ふを普通とす。



△西洋の小間使

歐羅巴邊の小間使の仕事を箇條書にして見ると、下の樣なものである。

（一）温い湯を朝一度、晝間二三度持つて行く事、
（二）朝早く茶を一杯持つて行く事、
（三）衣裳を忘らぬ事、次ぎ〳〵に準備をする事、
（四）主人の衣裳を助ける事、
（五）衣裳をつけた後は室の片附けをする事、
（六）主人が散歩や外出する時はお伴をし、主人の荷物は自分が持つ事、
（七）外出する時は室を一應片附けて出懸ける事、
（八）歸宅の際は主人が衣服を着換へるのを手傳ひ、寶石類は叮嚀に元の所になほして置く事、
（九）主人の洗濯物をなす事、

尚此外にいくつもあるが、先づ日本と大した變りはない、但し主人が狗や犬を飼つて居る時は、其の世話は小間使の仕事であるから、洗つてやつたり、食物を與へたり、散歩に連れて行つたり、萬事落ち度のないやうにせねばならぬので、なか〳〵手數がかゝる。



光彩陸離の我が友

彌　生

今日は實によいお天氣、がお定りの北風は葉を拔いだ見すぼらしい木立を吹いてピユーッと時々呻つて過ぎる、外は嘸寒い事だらう、あゝ然うだ、夢だ夢だ、仲よしの貴實子樣がお訪になつたと思つたのは夢だつた、でも餘り明瞭して居て夢とは思はれぬ位、然し如何しても夢だ、だつてあまり可笑しいもの。

あの方特有の淡桃色の澤の好いお顏に薄くお化粧して漆黑なそれこそ緑の黑髮をふつくりと出して何處までもお品のいゝお丸髷に高蒔繪のお櫛、おてからは氣が付かなかつたけれど無論緋鹿の子だつたらう、それとも流行の樺色かしらん、雪を欺く白羽二重のお襟、ブローチは日外御結婚の御披露の時に拜見した、眞中に大きなガーネットが入つて居て周圍を金剛石で取り卷いた、あのブローチが僅かに窺いて見える、黑のお模樣――たしか若松のお裾模樣に勿論白襲ね、御帶は金で霞を出して其際から匂ふ白梅の振い付き度い樣に高尙な綴織、ぽーつと赤みを持つた白魚の樣なお手には黃金の波に大きな眞珠が匂ふ。

夫人は有數な富豪新男爵の若夫人である。夫人は相變らずにこやかに笑を含んで、「私ね父の使で飛行機に乘つて月の都に行つて參りましたのよ、エ？　矢張り富士山頂から！　始めてゞ何だか氣味が惡かつたのですけれども皆が何でもない何でもないと申ますから乘つて見ましたの、エ、丸でね少し上へ行つて家根などが微かになる頃から私の周圍は濛々した少し黃色ずんだ雲が寄せて來て何とも云へぬ心地、と云つて何だか息が迫まる樣には思ひますけれどいやなといふよりは氣が朦朧としてまア無我といふのでせうネ全然自分

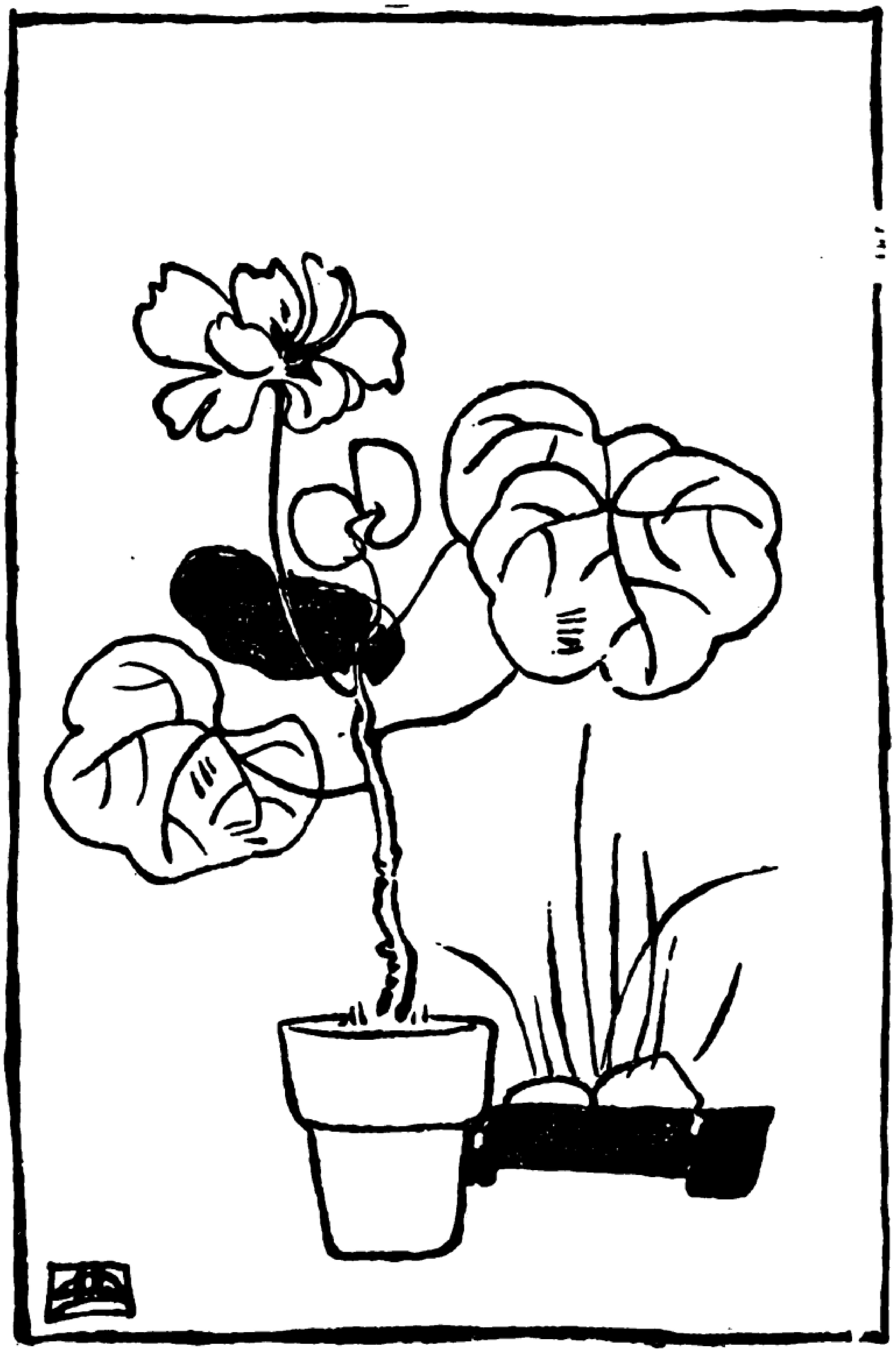
も無ければ人懐かしくもない慾も何も無くなつて人間の持つすべての感情は全く沒滅つて了つたのネ、それが又下に來て地上へ歸ると始めて人心地がついて當り前の平生の樣な氣分になり、まるで夜が明た樣でそれは〳〵嬉しう御座いましたよ、下で夫に御苦勞！ と手を取られた時は實に何とも申上げられません位で御座いましたよオホヽヽヽ、月の都は極樂淨土だと申ますが矢張り人間界が樂しいと私は存じましたわホヽヽホヽ、何の用？ 父からの月宮殿へ屆けものがあつて夫れを持つて參りましたの歸りにはお姫樣から寶珠の玉といふのでせう直徑三寸許りの丸いそれはそれは光る珠を頂いて參りましたのよ淡紫の綺羅に處々へ金剛石、小いのが織り込んである美しい帛に包んで御座いました』と、あゝ夢？ かしらん！？ 事柄は勿論本當らしくもない然し其の花の姿玉の聲今も目耳に歷々と

……………

『あの昨日か今朝貴實子樣が御出になつたかネ！？』折から牛乳を持つて這入つて來た美知に突然に聞くとイイエ誰樣も……とイヽエに馬鹿に力を入れて何を仰しやると言ふ樣な彼女特有の切れの長い睫の黑い目を見張つて……それとも私は存じませんが……と又澄アして言ひ添へり、矢張り夢なのだ、如何しても夢！ 不思議な夢もあつたもの空中飛行機に乘つて月宮殿へ、而も月都の姬君から寶珠の玉を貰つて來るとはお伽噺にでもありさうな奇拔な夢を見たもの、それならばもつとお姬樣の事や天上界の模樣をもつと委しく伺ふのであつたあゝ惜しい事をした、それに何處へでも御一所にお出になるのに如何して御同列でなかつたの？ つて冷かしても上げたかつたのに……夢と知りせば覺めざらましを、然し何方にしても惡い夢ではない早速御母上樣にお話して笑はして上げたい、があゝよさうよさう一富士といふから三日の間は我慢して置きませう。

今日は春子さんはお友達の復習會とかでお留守、會が濟むと餘興で銘々隱し藝を出すんだつて春さんは糸さん（春子の從姉）と仕舞羽衣をするとかで過日中か

ら一生懸命におさらひ、昨日も枕元へ話に來ては呉たがいつか低聲に‥‥かあすーみまーぎれて‥‥などゝやつて居る、無邪氣な可愛らしい賑かな人、私は女より男の子が好きだけれど十二三位の女の子は又一段可愛らしいと思ふ、入浴後など時々思ひ出した樣に粉白粉をつけて頰紅なんかさして居る、母樣がネ春は顏が蒼いから少し紅くする方がいゝと仰しやるのといふ、我が姪ながら嫂樣に似て鼻



筋の通つた柳の眉の濃さにも過ぎぬ口元の締つた色白の美少女櫻色に染めた豐頰はまるで蕉園さんの繪にでも見る樣な好い子いつまでも何時迄も年も姿もこの儘で置き度いと見惚れる事も屢々、今日は其の私の無邪氣なお友達がお留守なので何となく淋しい、いやに人懷かしい日貴實子さんの御手紙でも見たくなつた、通りがゝりの千枝に本箱の上の手文庫を取つて貰つて開けて見るおや澤山藏つて置

いた皆の貴實子樣のお文が一つもない、あ、只一つ、さう〳〵もう一つの文庫に入れてお戸棚に藏つたつけ、出し度いけれど面倒だからよさう、これは何時のか不知、七月十四日とある。

御懇に御文にて御尋ね下され御禮申上候もはや病氣も全快致し候まゝ御安神願上候 相變らず御暑さきびしくお互樣に閉口の事に御座候いつも御機嫌克く何より結構の御事山々御悦び申上候 庭のダリアも滿開お好きの濠洲の蘭も温室に咲き盛り居り候間相子樣御誘ひ被遊お遊びにお出下され度くお待ち申上候 然し時分柄御遠方ゆゑ途中が中々お暑き事と存上候 雨ふりにても何にてもこの方は何日にても宜しく候まゝ一寸電話にても前におかけ頂き候はゞ日外お約束の國料理お笑草に整へ置かせ申すべく候かしこ

實に優しい懐かしい春の如な方、さればこそ天も身分といひ財産といひ位置といひ何の申分のないお身の上にしてお上げになつたのだらう、お上手とではないが御書風迄何處かゆつたりと豊かに書かれてある、

もう一つオヤこれは由子樣のだ、あの方も如何してお出になる事やらとんと御無沙汰して了つた。

御手紙恐れ入りました實は二十九日落手致し其の時とその夜と只今と都合三度拜見致しましたの何だか面白くて、これが如何いふ譯でかは私自身にも分りませんが多分あなた樣を好きだからでせう（失禮の段幾重にも）あなた樣のお書亂筆どころかほんとにいつ拜見してもお立派ね實にお美事でいらつしやるわ（普通のお世辭と思し召してはいや）それに引かへ私のこの書き樣は何とした事でせうあらどうしませう硯箱の黒塗に寫る顏が瓶にさした紅菊よりも色濃くなりました。

公設展覽會御覽になり度く思召しませんの？ 私是非ともとは思つて居りますがまだホヽ、都に居てまだなので御座いますよあはれねえ、仕事を追ふのは氣持のよいものですが仕事に追はれるの程いやな心地は御座いませんわネー何？ 理窟屋が好きな譯？ さうね理窟屋とまで申ては少し語弊があるかも知れませんが兎に角所謂頭腦明斷で何事に對しても自分の意見は持つて

居てさうしてひねくれずまあ何と申したらよいでせう思ひのまゝの言葉が出ませんの、それから神經過敏？ェ、普通は神經穎敏といふ私でせうが私の注文は過敏の方ネある場合は殆ど病的といふまで、といふ意味で申上げたのホヽ、何だか罪狀の申ひらきの樣な姿ネホホ、私の宗敎？　無宗敎ネだつて御案内の通りまだこれといふ迄研究して御座いませんのいづれとは思つて居りますがまあゆつくりと、ほんに折角の御問に御返事が出來なくて濟みませんのネ然し無いものは申上げられませんから惡しからず、隨分先日の御返事にはいろ〳〵の事を大膽に書きましたのネ只其の時思つた事をづる〳〵書きますから時に失禮な事もありませうがこんなあけはなし者の常によくある圖と厭き御心に笑ひても秘めおかせ給へや呵々、御如才もありますまいが、どうぞ〳〵御自愛かしこ

武子樣　　由子

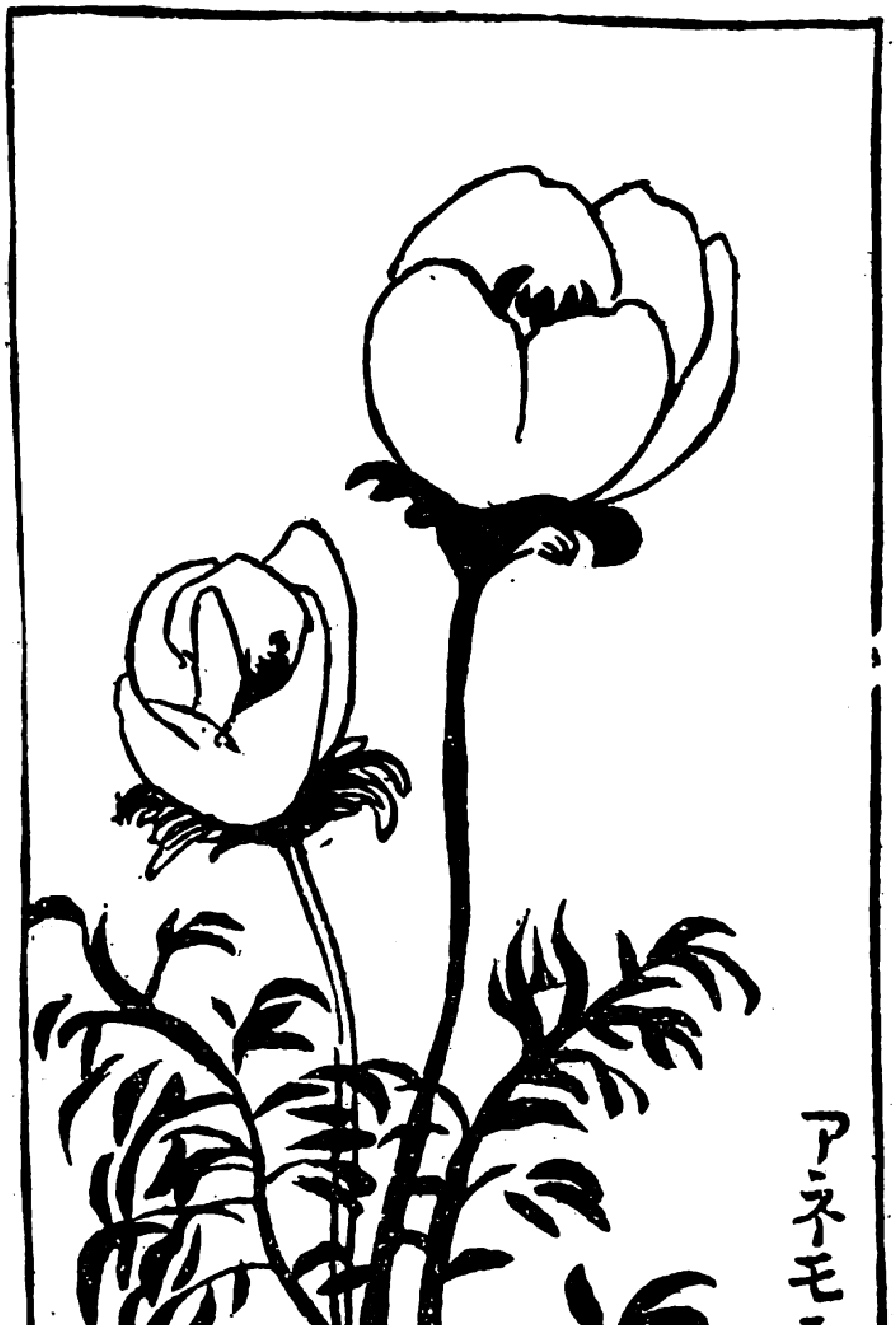
私と輝の字との寫眞丸木に出て居りますつて？……ホヽ、いやあネ私の島田のが一枚もないから是非撮れと申てよこしましたから近日參るつもり其時主人に申して引つ込めて貰ひますわ、先日も小梅で糸子樣と花子樣に御目にかゝつて了ひましたよ。

この時分はかの男爵家の二男の君との婚約も成立つてお暇毎にかの君と手を携へては野外に音樂會に美術館、日比谷とお脊高きフロックの君と或時は高島田、桔梗鼠に褪紅緋友仙の御下着華やかに匂はせられ或時は澁い大島にハイカラな束髮、ふつくりとしたお髱につゝく撫で肩の下には好洒な雲上織の御帶を柳の腰に、縞脊廣とお姿並べての御散歩を幾度お見かけしたか知れないと出好きの京子樣から伺つた、それがまあ何とした事か少しの間に大變な變りやう先頃迄は一口に云へば色氣たつぷりの頭の先から足の先まで靑春の氣滿ち〳〵て居られたのにこの頃は妙に世にすねたといふのかあれが超世主義といふのか知らないけれど全で人が違つた樣、人間の心といふものは境遇によつてこんなにも左右されるものかと驚いて了つた、聞けばかの輝秀の君は御本家の令孃と結婚されて近々子爵樣

になられるさうな御本人は御本家の威光でいや〳〵ながら無理矢理に結婚されたともまたは爵位に心迷つて由子樣を自らお捨になつたとも噂されて實際の事は分らない其んな位や財寶などに迷つて許婚の戀人を棄てる樣な――而も滿腔の愛情を捧げつゝある由子樣を――そんな〳〵冷酷い方とは信じられない何れいろ〳〵入り組んだ事情があるのであらう、然し兎に角取り殘された由子樣の御心は如何であらう、日頃人一倍輝秀さんを信じ無限の愛を捧げて居られたゞけ猶お氣の毒に堪へない餘りお仲の好いのを見せつけられ內心妬んでいらしつた京子さんさへ近頃は大に同情を寄せて居られた。あゝこれ〳〵先日の御文はこれだ。

さても〳〵御無沙汰申上候　近頃は如何御消光遊ばされ候や存じつゝも遂筆不性致し申譯これなく候　京子樣や花子樣は相變らず御往來遊ばされ候や矢張り樂地へお稽古に御通ひの御事と存上候　私はこの頃は少しも參らずこの半年程は鎌倉箱根と遊び暮し居り候先頃は御文下され候ひしもあの頃は少しく身體勝れず醫師もいやな事は無理にせず氣まかせに呑氣に暮せと申し[illegible]始め一同大に心配致し呉れ候時とて遂其の儘に御不禮申上候事にて深く御詫申上候御陰樣にてこの頃はめつきり壯健に相成いまだ肉氣なしの皮いらしくは候へ共まづ〳〵この寒さにも風の神も寄せつけず元氣に致し居り候　間憚乍樣御安神願上候　御文の御模樣によれば近頃大分世の中を御悲觀の御樣子いづれ何か御理由もあらせられ候事と存じ上げ御氣の毒樣に存居り候然し差出たる申上樣には候へども實際つまらないと思ひ出してはそれから夫れへとつまらぬ事の行列して胸を襲ひ遂には堪へがたくなりてそれこそ淺間敷を思はずにもあらぬ事に相成候　私も一時は大に考へ込みし事も有之候へども心を痛め身體を損ひし外には何の得る處もなく只今となりては實に馬鹿々々しき事致したりと思はれ候いかにこの世がいやに相成候とて自ら天壽を縮めて一家親族に煩をかけ家名を汚す事も出來申さずされば人生僅か五十か六十、この先は出來る丈け笑つて樂しく暮すが德に御座候しかし

悲しき時に涙を干せと言はるゝより泣けと言はるゝ方却て慰安を覚え候もの故決してお悲しみ遊ばすなと申上候にはこれなく何卒私や他の人の様子を見ても甲斐なき事ゆゑよき程におきり上げ遊ばされ度くと切に申上候事に御座候、先日一寸従妹にせがまれ久し振りに銀座に参り候節花子様に御目にかゝり候　紫の絣の御被布大きな花束のお簪、私も先達迄は同じヴアイオリンのお仲間にて御一所に騒ぎ廻つて居りしものが今は全く音



を聞くもいやな位に相成候御前様にもマダムにならせられ定めてお丸髷姿に變らせられし御事と存上候さてもいろ〳〵に相成り候ものかな洒落度い時には大に洒落ておく事に候笑ひたければ大に笑ふべしと存じ候それもこれも時代と申すものにて其の時代が去れば笑ひ度くもなく洒落氣も失するものに候斯様な事分りきつた事にて誰しも申す事には候へども私も申しながら矢張り悟らず眞に左様感ずる様になりしはほんの近頃の事にて

候これは私の取越し苦勞かも知れず候へども若しも御許樣何か御悲觀中ならば早く其域をお脱し遊ばされ候樣と祈上げ居る事に候、これはこれは下らぬ事長長と書き並べ恐れ入り候氣まぐれ者いやな時には御返事も認めず書き度い時は要なき事をくだ〳〵とかくの通り何卒々々御見ゆるし願ひ上げ候　私この頃面白き書を見つけ申候　御許樣もお好きさう故御暇の折御遊にお出下され候はゞ御覽に入れ申すべく又御都合によりこなたより參上致しても宜しく候毎年の事ながら年の暮と申て宅の者は大騷ぎ致居候お正月だとてそんなに騷がずともよさゝうなものをつまらぬ餘計な事して忙がしがる娑婆の人間共に候呵々、この頃の御容子何とぞ御示し待上候かしこ。

お筆跡も以前の白粉氣が拔けて奈何でも私の自由よといつた風に字形などつくる態もなく一氣に書き下されて中々達筆。

日はすつかり暮ちて室の中も薄暗くなつた、この物淋しい夕暮の病床に春の化神の樣な温かさを覺える貴實子樣と秋水の如に靜冷な由子樣とを思ひ較らべて無量の感慨に耽つて了つた。

窓の小笹がザワ〳〵と寒い寒い音を立てゝ居る。

春子さんの歸りの遲い事。

桑港における　日本料理店

先年震災がありました當時は桑港に一時日本料理店が一軒も無くなりましたが、最早や昨今では三十四軒ばかり開業して居ります然し大抵は洋風の室で椅子卓子の食事で、日本の小座敷と申す樣な趣味はありません。唯二三軒、日本風の部屋を備へて疊に床の間の純日本式の家があります許りです、而して店に酌婦が二三人置てあります、何れも洋裝で胸から白前掛を掛けて甲斐々々しく立ち働いて居ります、此邊は布哇などの方が一層日本的で桑港の料理屋にも上中下がありまして、上の部は會席膳で萬事日本好み、中下になりますと單に日本料理と申す迄で、日本室で洋食を喰てる事を逆に行く丈けです、料理の可否は申上る丈け野暮です然し中には甘く食はせる家も少くありません、直段は先づ次の樣なものです。

吸物(十仙)茶碗(五仙)さしみ(十五仙)　玉子燒(十五仙)　めし(五仙)茶碗むし(廿五仙)煮肴(十仙)いり鳥(廿仙)味噌汁(五仙)鹽やき(十仙)ビール(廿五仙)日本酒一合(十仙)

大魚を捕へし女

秦　野

性質濶達非常の交際家で愛嬌ありお世辭たつぷりで所謂お上手の婦人とは此の方

「まあ再婚のお身でよくも伯爵夫人になんかなれたものね」

「まつたくすごい腕まへだわ」とは內々夫人を羨望のあまり世人が影での皮肉の評

今は東京にお住なれどもお生は西京のよし然し京都婦人には珍らしきほど表情に富み非常の美人といふほどの御容姿ではなかりしが江戸ッ兒も及ばぬ快活にて小事に拘泥せず決斷力のある男らしき氣象にして家庭にあつては其の特長たる愛嬌と千金の價たる其の明眸を以つて夫の君にかしづき給へば流石の伯もころりと參つてお仕舞ひなさるさうで家庭はいつも春のよし

そも此の夫人がまだ二十にならぬ二年ほど前大阪のある商人にとつがれしが夫人の才氣ある性質はよく古風なる商人のお家樣となるにはあまりに適せざりしが遂に三年の後破鏡となりて實家に歸りぬ。實家は普通の京都士族なり。後一年ほどたちて或機會にて今の伯に知られ再婚も承知なれども初婚なる伯に懸望せられて伯爵夫人とはなりしなり。

今でこそ此の伯爵家は同族間でも相當の百福なれども此の夫人の婚嫁せられし頃は公卿華族の常なる名ばかり何とやらにてなか〳〵お不如意の樣に噂せられしが其當時まだ廿二三なりし夫人は鋭意家政整理につとめられ四五年を出ずして漸く少の餘裕あらしめそを以つて世事にうとき伯にすゝめて株とやらを買はれしが運よくも當りしとかにて夫人卅五歳となりし今日にては巨萬の富を作られぬ。

此の才と鋭敏なる手腕とにて夫の君の信用を得、其の愛嬌及び人をチャームする表情によりて限なき伯の愛とを得て、現今家庭にあつては隨分御氣隨も遊ばされ出ては交際社會の立物となり影でこそ皆皮肉な評もすれども前へ出てはやはり一言もなきよし

又不斷流行の粹を極めらるれば風采は華麗になりお年よりもずつと若く見られ實に現代社交界の婦人のモデルである。

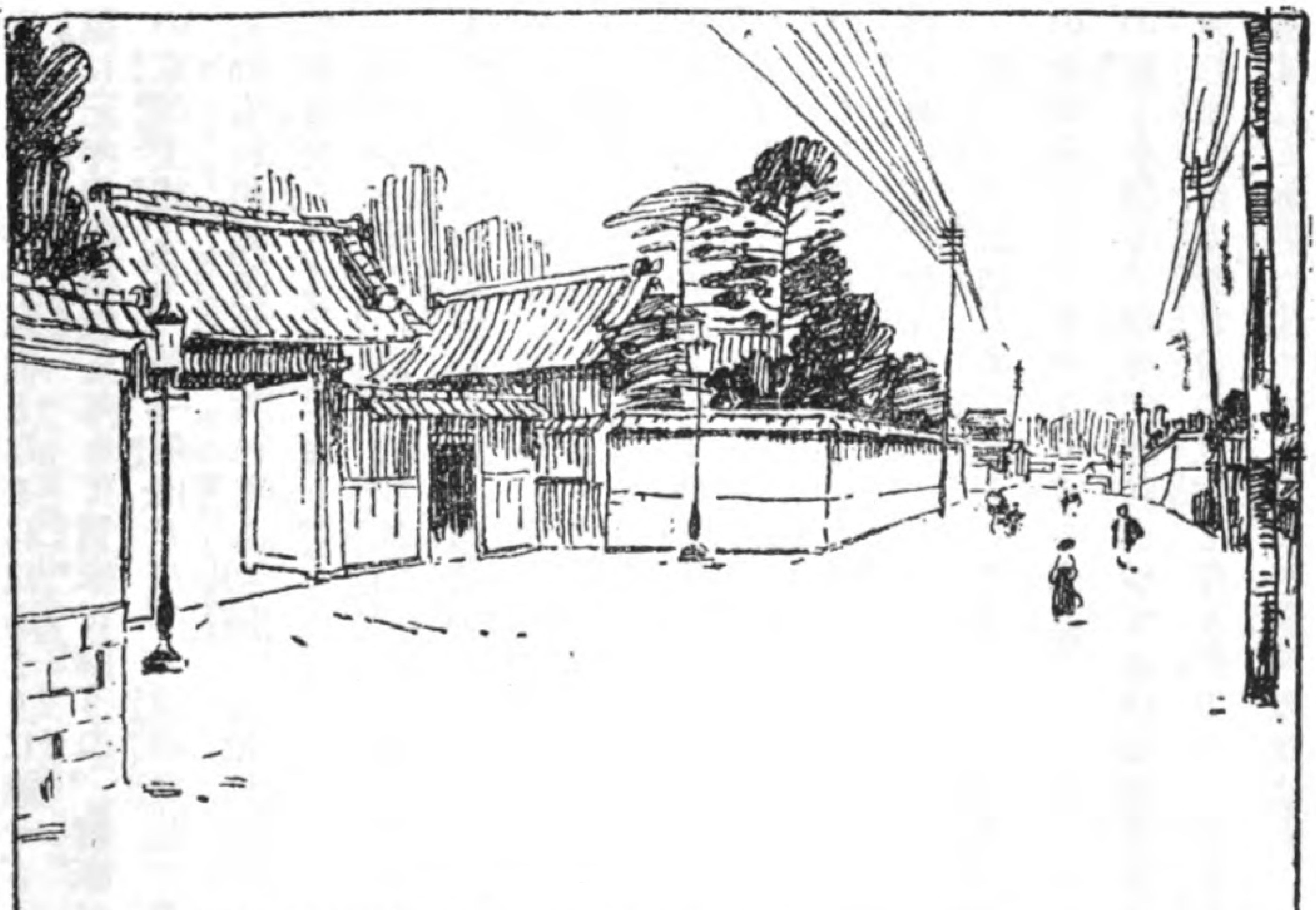
時によると婦人會の集會などより氣の合ひし同伴者でも出來ると其處より御邸へ

「よんどころなき交際にて二三人の婦人會員と只今より江の島及び鎌倉邊へ參る故御前によろしく申上げてチヨ……」

などゝ電話をかけおきすまあして御出かけ二三日位は遊び歩くなどなか〱引込思案の婦人の思ひ及ばぬところである。

全く夫人今日の幸福は鋭敏の性質機を見るに慧きと男も及ばぬ才と快活なる氣象との力を以つて自生みしに外ならず其の上よく華族などにはありがちの殿樣が他の婦人に心うつし給ふなどの事は少もなく一にも夫人二にも夫人ならではとは實にえらいかたである。

横から見ても縱から見ても實に氣味よき活動的の婦人とは此夫人を指した形容詞とこそ思はるれ。



新綠の彌生ヶ岡



初奉公の經驗

若紫

まあ私に初奉公の經驗談をとおつしやるの？　大變ですこと!!!

だつてあなた、まだ漸く御目見得が濟んだばかし現在斯うして召使はれてる身なんですもの、云ひたいことはいろ〳〵有つても無暗な口は利けませんからねえ……ではまあ御主人の姓名だけは御預りとして兎に角今の世にときめき給ふS伯爵家とだけ申上げて置きませう（但し新華族なので御座いますよ）

最初私が伯爵家へ上る樣になつたのは新聞の廣告からなんですの、私もどうか斯うか女學校も四年まではすませましたのに急病で父が亡くなりますとそれに續いて兄が有金殘らず持出して行衛知れず、あれやこれやと泣面に蜂の境遇に陷りましたので事務員も氣が利かない、いつそ奉公でもと思つてる矢先、或る日新聞の廣告欄を見て居るとフト眼に止つたのが、

「容貌醜からぬ年十八九の小間使一人至急入用市内に確實なる保證人を要す、S伯爵家執事。」

これなんですの、容貌醜からぬと既に御注文が出て居る處へこんな私みたいな者が押掛けて行くのも何となく氣恥しい次第ながらこれがナニモ御妾奉公といふのではなしと思定めて兎も角伯母に連れられて行つて見ることゝいたしました。

永の年月結ひなれた束髮を唐人髷に直して帶も人柄な板〆縮緬、糸織の袷を稍前上りに、如何さま大家の小間使らしく裝つて伯母と兩人伯爵家の御門前へ立つた時には流石の私もその昔、試驗の成績を氣遣つた折ぐらゐの胸さわぎは禁じ得ませんでした。

破風作りの大玄關を横に見て通用門から御中の口に

廻つて「御免あそばせ」と二聲ばかり訪ひますとまづ小倉袴着けた横柄な書生が出て來意を聞きましたの、暫くして通されたのは玄關脇のうす暗い一室、ホッと息しながらハンケチ取出して額ににじんだ汗をふきふき無言のまゝあたりを見廻してる處へ今度は四十許りの女中頭といふのが出て來て、

「新聞を見て來たつてのはあなた？」

それを冒頭に年は幾歳かの裁縫はできるか親はあるかの何のといろ〳〵訊ねた揚句の果の文句がね、まあ斯うなんです、

「いろはは、殘らずよめるんでせうね、？ 奥樣に始終小說をよんでさし上げなければならないから……」

「あんまりひどいわ」と云つてやりたいのを我慢して

「は、それ位の事なら大抵は……」

すまあして言つてのけたのでゝは當分の御目見得といふ事になつて伯母は歸つて行きました。

さて、これからがいよ〳〵伯爵夫人への初見參、長い廊下を幾度か折れ曲つて突當りの御襖を先に立つた女中頭がスーと引きますと派手な友禪縮緬の座蒲團あそばして可愛い三毛猫をぢやらしてゐらしつたのが奥樣で御座いましたの。

御年の頃は三十あまり、凄い程な御美しさを、やたら縞のうづら御召にしやら博多の御み帶、華族家の奥方といへば、まあ紫檀の御机にもたれて色紙にお歌でも御染め遊ばすといふ樣な上品な御姿を想像して居た私の眼には此の頃衿もかけかねまいと思はるゝ伯爵夫人にはいさゝか驚きましたけれど、さあらぬ體を裝つて、叮嚀に御挨拶申上げました。

御居間は高麗縁の八疊敷、歌麿の軸をかけた御床には、御花はなくつてその代り月琴が一隅に立てかけてありその他には小說本や、講談物やらが雜然として散らばつて居るといふさわぎ。

私の御用始めは御晝飯の御給仕、黒塗高脚の御膳を二つ御次の間へ運んで御案内申上げると奥樣がお上座に、お次座にお十四ばかりの御嬢樣が御席着になつて白味噌の御汁と御燒物とで御兩人とも四碗づゝめし上

りましたホ……あら事實ですよ。

お下の衣達は御臺所の板の間に薄縁しいて其處で御冷飯の掃除なのですの、かけたお碗に塗りのはげたお箸「さああんた遠慮なくお食んなさい」と女中頭に云はれた時には私何だか胸がつまつて睡をあげるのが辛う御座いましたわ。

全くね、華族だつて伯爵だつて矢つ張り御臺所なんぞは汚いもので大隈邸みたいなのはそんなに有りやあいたしませんのねえ。

御下の人數は女中頭と御孃様附のお愛さんといふ年増と、小間使と御炊事係が三人。執事と書生と車夫と馭者とが男なのです、ほかにもう一人お千代さんと御遠縁にあたる人が女中代りに來て居ますけれど何だかニコ〳〵してばかり、ちつとも役に立ちさうにも見えませんのよ。

それから御奥は御夫婦に従五位様、御孃様の御四人で御前様、奥様、従五位様、百合子様と申上げるのだといふことは、女中頭が敎へてくれました。

午後からは女部屋で解きものをする様にとてお美濃さん（女中頭）から百合



子様のらしい御長襦袢をわたされましたので獨りでセッセといたしますと、御勝手のお高さんていふ女が入つて來ましてね小さからぬ御みこしを据ゑていろ〳〵なことをきかしてくれました。

御前様は毎日夜に入らなければ御歸邸のない事や從五位様といふのは先奥様のお腹でその先夫人は現今でも麻布とやらに詫びしく御暮し遊ばすことやら今の奥様の親御は身分の低い方であつたとか何とかきゝもせぬことまで調子に乘つてしやべりはじめますのでせう私も程よく調子を合せてますと。

いろ〳〵の事を言つてきかせました。

「あのお千代さんね、あれで御前様の從兄の子とか何とかなんですつてさ、生れつきがあんな風にヌケてるもんで皆が馬鹿にしますけどね……イーエ親はもう亡いんですよ」

「從五位様は當邸においで遊ばすの？」

「いゝえ、目白の學習院つてね、華族だのえらい人の若様だちばかり入る學校に寄宿してらつしやるの、奥様とは仲が惡いけれど……好い男子よそしていろんな物品をちよい〳〵下さつてねほんとに私大好き……」

まだ何か云はうとしてる處へ後の唐紙が開いて入つて來たのはお愛さん。

「お艶さん百合子様がね大いそぎで御召しですよ、さつきの疊廊下の突き當りが御居間、早く〳〵ゐらつしやい」

まあね、人を早くだのいそぎだの、せき立てながら自分は片手を懐中に入れてノッソリやつて來たんぢやありませんか、隨分だと存じましたわ。

百合子様は何ごとのお召かと恐る〳〵伺ひましたら

「艶ね、お前にお芝居の繪葉書みせて上げやう」

これでした大いそぎの御召の旨といふのは……。

それでもほんとに御羨しいことにかけたら何處へ出したとてひけは取るまじき御容色その薔の樣な紅さした唇からお芝居の噂です。

今日の日曜は芝居にも行かれないでつまらないと思つてたけれど、艶が來たからおもしろかつたわ、艶・私もう愛のお供はいやだから、あしたから學校へは御

前が來て頂だいな」

矢張り何といつても子供ですね、一寸お世辭に百合子様の御寫眞を雜誌で拜見いたしましたと申上げたばかりでこれですの、そしてそれ以來あんまり艶、艶と仰せになるもんで、何だかお愛さんの眼はいつも私に向つては光つてばかり、恐しいことですわ、その後も矢張りお愛さんが御供してますのよ。

一番早く仲よしになつたのはお高さんが少しヌケてると云つたお千代さんです、實際悪氣など藥にしたくも無さゝうな、いつもポカんと開いたまゝの口を見ては私何だか哀れでたまらなくなつてしまひましたの。



お艶さんの髮は、好い格好ね、私もそんな簪がほしいわ」

といふまゝに花菱の定紋すかしばりの平打を拔いて、お千代さんの引くり返つた桃割にさして上げて、

「失禮ですけどさして頂だいな、あの私まだ當邸の樣子がちつとも判りませんからどうぞ何でも敎へて下さいねえ」

「えゝ敎へて上げてよ、誰にも秘密にしなくつちやい

けないんだけれどもね、先の伯母樣はよく可愛がつて下すつたんだわ…」

誰かの口眞似らしいチグハグの話の中からもその邊の消息はおぼろならず推察せられるでは御座いませんか、ヌケては居ても猫よりやましです。

「何かこはすと大變よ謝罪つたり買つて返したり大變だことよ」

障子の蔭でエヘンとお美濃さんの咳ばらひがして、

「お千代さん、よけいなおしやべりなさるときゝませんよ、奧樣に申上げるから…」

可愛想にこの一言でお千代さんはブル〳〵ふるへてますの餘程奧樣を恐れて居るらしいと思はれます。

その夕べ、女中溜室へ入らうとすると內からはお美濃さんの話し聲が手にとる樣、何の氣なしに立ち止つて、聞きますと、

「お千代さんを捉へて根掘り葉掘り何か聞いてるの、なか〳〵油斷がならないことよ、それに餘り指が細くて綺麗すぎると思つた…」

ハッとして脚がすくんでしまひました、私の上でなくて何でせう…油斷がならぬとは何が油斷がならぬのか私にはよく判りませんけれど兎に角あまり嬉しい話ではありませんわ。

皆樣御風呂が大お好きで朝夕二回づゝ檜の香もまだ失せやらぬ浴槽になみ〳〵と、わかさせて御召し遊ばします、そしておながしを差上げるのは御前樣のはお美濃さん、奧樣には小間使のきまりださうですから此の節では奧樣は私が御流しいたして居ります。

あのね、お脊中に新しい御灸のあとがいくつも御有りになりますの、何だか雪の肌には惜しい樣に思はれますぐらゐよ。

お美しいも道理、りんごをおろし金でおろしてその絞り汁だけで御顏をお洗ひになりますのですよ、私が驚いた樣を御覽あそばして、

「トマトの汁もよくきくよ、バナヽも宜しいちどでもよし果汁で洗へば日にやけることがないからねえ」

なんて氣輕に仰せになりますの、鏡臺の上を片付け

ながら試しに數へましたら御化粧料だけで十二通りも御座いましたつけ、お素顔の時でもそれは〳〵女ながらに見とれる程なんで御座いますよ、どこか斯う仇つぽい處もおあり遊ばしてねえ。

八時過ぎでも御前様の御歸邸は無くお奥御兩人は疾うに御寢になつて御用も無いと云ふので私が上つて四日目の晩お美濃さんがあみだをしやうと云ひだしましたのよ私何だた學生時代の寄宿舎を想ひ出してほゝ笑ますには居られませんでした。

「今夜は御仲間入にどうぞ私におごらして頂戴」と云つて皆の好きさうなものを買つて賑はしましたら誰も〳〵が大よろこび、果ては花札まで持ちだしたり何か、私にもすゝめますからできませんと斷りましたらばね。



「今の人の様でもないわ、奥様なんかほんとにお上手よ知らなきや數へてあげるからやつて御覽なさいよ」なんてお餡文字類張りながらお愛さんがうるさい位申しますの、人つてものはをかしなものでこの晩から後は割合に皆がよくしてくれますお愛さんの眼も光がうすらぎお美濃さんも何だかやさしくなりましたこれが奉公人根生と人には卑しまれるか知りませんけれど朋輩に憎まれるのは何より損ですからね、こんなことで機嫌がとれるなら誠に容易いことですわ。

五日目からいよ〳〵御奉公といふことに定つて今では苦しいことも悲しいことも此の胸一つに秘めてかくして兎も角も御主人大切と勤めて居ります。えゝ時々

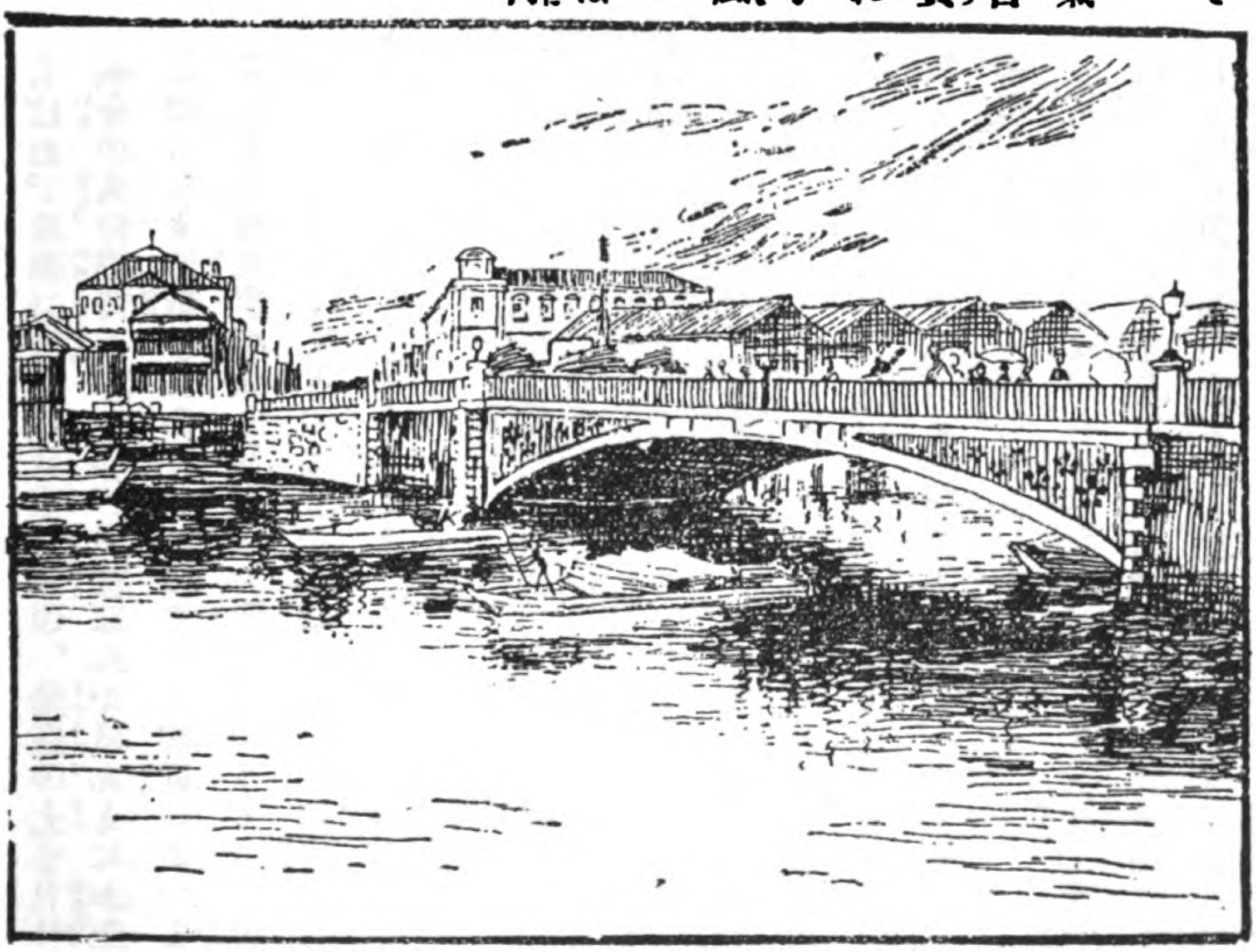
は奥樣の御居間に上つてパックだの都新聞だの讀んでさし上げることもありますの。

それで私この頃ではつく〴〵悟りました、自分の氣に入らぬからとて直ぐ樣プットふくれるのは矢張り自分の損ですわね、人に接する毎にその人の趣味や氣質やをよく呑み込んでうまく調子を合せるが一番、それかとて不正のことにくみせよと云はれてもそれに調子を合せてとでは御座いません、そんな場合には柳に風と好い加減にうけ流すが得策、奉公する身はこれさへ心得て居れば屹度御主人にも朋輩にもうけの好いのはたしかで御座いますわ、ではまた少し馴れましたら何か面白いお話でも申上げませう。

まだ新米故どうも毎日いそがしくて……。

青柳の糸くりかくる春しもぞ
亂れてはなの綻びにける　貫之

菜の花の世界に今日も入日かな　淡々



朝の江戸橋

獨立獨行の模範

里の女

私の知つた感心な奥樣

世渡り上手……世渡り上手と云へば私の隣の奥樣だつて御多分に洩れぬ一人でせう母樣がいつも「お仙さんは……家持上手世渡り上手だ」とお賞めなさるのも無理はない。そりやこの奥樣なか／＼快活でネーいゝえあの快活だつて奥樣らしくもないお轉婆のおしやべりでは有ませんよ。たゞネ氣の明々した潔白した方ですよ。日々村役場にお通ひなさる旦那樣の二十圓の月給で夫婦に子供四人都合六人の切盛なさらねばならぬ奥樣の心勞並大抵では有ますまい。それでも年中ハハハホヽの笑聲が戸の外に洩れて誰羨やまぬ者ない樂しきホームです。どんな時でも此奥樣に接すると氣分が清々しますよ。私の隣にお移りなすつてから四年此方たつた一度も怒んなすつた顔見た事が有りませんもの……。だけど奥樣これで居てなか／＼經濟家ですからね。男の子が多いから買物ちやひとたまりもしませんと云つて坊ちやん達の繼のあたつた着物は近所の百姓達に買つてそれでもつて糸買つて四疊半のお部屋に機立てゝ暇を盗んで織つて仕立てゝお着せなさる其早い事つたら……電光石火……とはちと大袈裟ですが……あれでなくちや……恐づ／＼してたら出來ませんからネー春の長い日には單衣二枚は出來上るんですつて都ならばいざ知らずこんな田舎に珍らしい人それで此の町の金満家の田口さんや家入さんとこの奥樣。孃樣のお召物一人で受けて縫つてらつしやるから向の太郎作が花婿着物や隣の松どんが祭りの着物なんか朝の茶の子と云つた風に飯炊く竈の前に突かゝんで縫つてお終ひなさいますよ。「あの奥樣に頼めば直に出來る」とみんなの受の好事……元より財産の有る譯ぢやなし、家の洗濯物縫物を手早くすませ。他家の賃仕事して子供さん達の學校のお小づかひ……世間の附合や公義の出し物から吉凶のつけ屆けまで手一つでなさるお手際は、奥

樣の縞の單衣が袷になつたり、綿入に化けたりするのも道理だ。百圓も取つて夫婦で足りないと云つてる人が東京あたりにあるとか。そんな人達に聞かしてやりたい。二十圓からあなた子供の先々の學資を貯金するんですの。其殘りで米味噌醤油初め雜化の代を拂ふんですもの。餘程切つめなきや堪りませんわ。それで私疊屋にでも桶屋にでも肥料屋にでも、何にでもなるはつてあの…羽二重や、縮緬お縫ひなさる手で、垣根の繕ひまでなさるとは。野菜なんかも成るべく買はぬ樣につて裏に猫の額程の屋敷の有るのを開いておまきなすつた。たか菜が大きく成つた事、きのふ折つてらつしやつたから、大變立派にたちましたネつて云つたらば、あゝお蔭樣でネー、私し此廣さで困つてるのよ…ちと手傳つて頂戴な、ホヽ…つて何處までも愉快な方、そして此跡には、なすび苗買つて植ゑてそのまはりには、とうもろこしを植るつて…實の入つた頃には上りますから、何分宜しくと云つたら、ホーあなたの其食しん坊さんに來られたら太郎、すゝ枝、が泣きますよつてひどい方。さつき一寸お伺ひしたら、お京さん一寸…見せる物が有つて、久江さんつては人の境遇知つてる癖に、こんな者送つて寄しましたの見ればダイヤ入りのリング、え…私の此指にやはまらないわ、たんすの底にしまつておくから好い、ダイヤこそとんだ迷惑、こんな山の中に來て、乾度身の不運を泣くでせう。なんて。なあに今にそのリングが役に立つ時が來ますよ。フヽンどうですか知らん。こんな物より木綿縞でも五六反送つて呉れゝば、どれ程有難いか。アヲおばさん家持はちがつたものネー。左樣よホヽ…お京さんまだ有るの、見せる物が、是、誰のかちてゝ御覽…とまだたつてない反の儘のお召をお出しなすつた。えそれアあなたの。いゝえ質屋の…あのお内儀さん、今まで來てたの。又しても例のお實家自慢、旦那樣の器量自慢。なん〳〵。と聞されちやつたの…何處へ行くんでせう。なあに花見衣裳つて事よ。マア東京や大阪ぢや有まいしこんな田舍に…花見衣裳の新調なんかお門ちがひ樣…いくつでせう…

・・奥様と同ひ年。衰へますネ。三十一にもなつて此様手さ加減たら、ホ、金は有るし子供は無し、今の内にたんと華美作りするが好わと奥様例の氣性が出る。あのお京さん女學世界參りまして、内藤さんの出てますか。出てませんの、なぜでせう、あの方のがないと淋しいわ三郎（奥様の弟で五高生）がまだ送つて寄しませんの、後で好から貸して頂戴文學に趣味もつてらつしやる奥様は私と同じ女學世界の愛讀者。白鳥さんや花袋さんの事も時々口になさいますよ。いつぞや私が奥様に「あなたの様に愉快に暮せたら」と云つたら。「私だつて人間だもの。そりや随分辛い事も悲しい事も有るの・・・だつてそれを何ぼく／＼云つたとてなほる譯ぢやなし、出來る事はして、出來ない事は諦らめてしまつて、結局樂しく、面白く世を渡るのが得ですよ、若い時の難儀は買つてもせよ。と云ふでは有ませんか。私は天が與へた己の境遇に満足して行くのが一番幸福だと思ひますわ。今に子供



達が成人してえらい○○○人になつたら、私は御隱居樣でネー、樂が出來ませう、それが樂しみよ。ホツホ……と奧樣獨特の聲でお笑ひなさる。ほんとにいくら金の中にうづまつて居て、時の流行一つ逃さず、髮形やお化粧に浮身をやつして居ても、體が弱くて子が無くて、年中えんま樣見たいな顏して、悲しいの口惜しいの、はては殺すの、阿蘇の山にとぶのと、夫婦喧嘩して狂ひまはる質屋のお內儀さんなんかに比べたら、金にこそ不自由なれ、精神上の樂しみは幾百倍上だか分らない。そして此奧樣こんなにさばけて快活で人好がしてりかうだけど、俗に云ふかゝあ天下ぢや有ませんよ。旦那樣は良人として敬ひなさる。そりや貞女ですよ。昨年の暮とか。一張羅の花嫁着物を賣つて、旦那樣の洋服を新調してお上げなすつたとか……新玉の年の初の拜賀式に、かねての羊羹色を拔ぎ捨てゝ、粗末ながらも新らしきにお着かへなすつた時、御當人の旦那樣より、傍で見て居る奧樣が莞爾り微笑を禁じ得なかつたでせう。其昔の山內一豐の妻が偲ばれて床しいでは有りませんか。それから朝の早いのには驚きますネ、未だ暗い內からがや〳〵と坊ちやん達の聲がして、ガラガラ〳〵とすべるやうな雨戶の音。ゴリ〳〵ゴリと味噌する音は奧樣らしい。旦那さまの笑聲、太郎さん鈴ちやん、次夫さん達がはくやら、ふくやら大さわぎ……やがてご飯が出來て、皆さん方の掃除がすめば、一家六人睦まじ相に食たくかこんで、笑ひつ話しつ誰の顏にもうれし相な笑があり〳〵と浮んでますのよ。……なんて樂しい……兄弟の少い、私羨やましくてなりませんの。夜は又旦那樣お得意の常陸丸の琵琶歌や玉を轉がす樣な鈴ちやんの唱歌、勇ましい太郎さん次夫さんの軍歌など垣一重の私とこには手に取る樣に聞えてネ、お仲間入りがしたい樣です。掃除の綺麗な事も一等でせう、塵一つなくはき清められた庭には小さいながらも、つき山や花だんが有つて、四季折々絶えすきれいな花を咲かしてをります。花散る夕べ南のえんに腰打かけて、白煙立のぼる阿蘇山を眺める時なんか、なか〳〵好景色ですよ。そりやねお座敷でもお部

屋でもお湯殿でもきれいですよ、お臺所の隅々から鍋釜に至るまでぴか〳〵とみがき上げて有りますよ、だからネお來客とて天手古舞を演じる樣な事ありませんよ。それから此奥樣のお實家はとなり村の酒屋でお兩親はすでに此世を去り、今ぢや八ケ間敷屋の嫂がついて居る兄の代になつてから、そんな事仕樣とも思はぬが金の無心なんか思ひもよらぬと云つてらつしつた。さう……奥樣の容貌……色が白くて目がすゞしくて何爵夫人と云つても恥かしからぬ御器量。……あの眞黑な水の滴るやうな長い髮をハイカラな束髮にして居らつしやる時なんかほんとに好んですよ。そりやなんぼあの夢二さん式女そつくりの質屋のお時さんなんかゞいくらもがいても駄目なんです。あゝ杉田仙子樣。おとなりのマダム樣私は……こんなお方の側に居るのを幸福だと思ひます。

風吹かばこゝにも薫る立花の
絶間や遠きむかしなるらん　景樹





下女より得たる一大教訓

やまぶき

「ねえ秋や（女中の名）お前宅へ來るまで中川さんに居たんださうだねえ。」

「ハイ二年半ばかりお世話様になりました。」

「二年半？　あんな家によくまアーー」

「オヤ奥様御存じで御ざいますか、中川様を。」

「アヽ前にお隣にいらしたんだもの、よく知つてるのあの奥さんどんな方？　お前達に對してさ。」

「奥様で御座いますか、極親切になすつて下さいました。」

「それぢやなほつたんだわ、あの奥さんはね　大變な癇癪持で女中なんぞにひどくあたり散らしてねえ、私等氣の毒でならなかつたの。」

「マア…。」

「ぢや何かへ、お前なんかにやそんな事はなかつたんだね。」

「ハイ私には大そう優しくして下さいました。」

「さうかへ…そんな優しい方の家をどうしてお前でたの？」

「…別にどうと云ふ譯も有りませんが少し都合が有りまして…。」

「フム…あゝさう／＼中川さんではあの大金持の春木さんからお嫁さんがいらつしやるんだつてねえ、子息さんの奥さまに。」

「ハアさう云ふお話で御座います。」

「呆れるぢあないか、ちつとも釣り合ないもの、そこには何かそのーー曰くが有るんだらうはねえ、中川さんの事だもの。」

「…。」

「何だへ、中川の旦那は此頃も矢張火の車で色々の悪計ばかりしてなさるんだらう？」
「イヽエそんな事は有りません樣です。」
「まあ、それは不思議だねえ、近頃旨い仕事でも有るのかしら？」
「……」
「でも今度の婚禮などは隨分、こみ入つた事情が有るだらうねえ。」
「どうで御座いますか私は――」
「で無きあ、とてもまとまる縁ぢやあないんだもの、さうさ、素晴らしく虚を張つて見せたり人を頼んだりして旨々春木さんを抱込だんぢあないこと？ お前なんかよくそこらへんの事情を知つてるんだらう。」
「否、別に計略なんかない樣で御ざいます、それに私は下の者ですから左樣な事は少しも存じません。」
「マア お前妙に隱すぢやあ無いか、口止でもされたの
「否、決して――」
「そんならいゝぢあ無いか話したつて、ねえ秋、お話よ、婚禮の事についてさ。」
「奥樣――今迄長い間中川樣のお恩になつた私に、そんな事お聞なさるは御無理です、私は下女で御ざいます、何も存じません。」
お秋が容を正してから云つた時に、其身體から御光がさす樣に私は感じました。
高士は國を去つて君を誹らずとか、お秋が今迄少しも先主家を惡く云はなかつたのもすつかり了解出來ましたあゝ人生他人の信用を博すと博せざるとは實に斯くの如き時に有り。
私はあまりにはしたない自分の根性を恥づると同時に此時下女に云はれた一言を千萬の金言にもまして尊く思ひました。
其後人と交るには、いつも此折の心持を忘れない樣に心掛て居りますので、まだ一度も云ひ過して悔いたり又人樣に御迷惑かけたりした事は有りません。お秋はたしかに私に世渡の一大秘訣をさずけて呉れました謹しんで彼女に感謝します。



新クラスメート評判記

春の花

クラスメートの前に、一寸三四の、先生方を御紹介致しませうか？

△大西先生

前の○○中學校長と、申す丈あつて、お腕のよさ、事々物々ア、此先生ならではと、思はれる事許り、如何して、校長を御辭職になつて、此學校に、おつとめ遊ばすのやら、深い仔細は存じませんが、何にしても我校にとつては、仕合せの事、未來の校長たることは火を見るより明らかと云ふ事で御座います。おもに、歴史と家政學を持たれます。家事に委しいことは、云はずもがな、水のまき方迄手を取つて、教へて下さる御親切さ、御眼識も、却々鋭いもので御座います。校長でさへ大西さん／＼と一にも二にも、此先生でなくてはならぬ樣に、仰います。今度又、寄宿舍整理の、任におあたり遊ばすとやら、お年は四十路あまり、學校中第一の勢力ある先生でございます。

△井口女先生

お名は、梅子樣と仰います。學校でも、寄宿でも、一番生徒になづかれる先生です。お年は三十前後、何一つとして、お出來遊ばさない事はございませんが、お髮がちゞれて居るのが、玉に瑕、それかあらぬか未だに、オールドミスで、被居います。裁縫や編物が殊に御熟練、お腕は實にたしかなものと存ぜられます。此先生の特長とも申しますは試驗が、いつも應用問題許り、生徒は非常にこれに難儀いたします。始終ニコ

ニコしてやさしい方、時々さうつと遊びに被居つては、知らずに氣焔をはいて居る生徒を眞赧になさいます。缺點と申上げる程でもありませんが、多少不公平がおありとか、私共には心付きません。矢張成績の面白くない連中の、下馬評と云ふのでせう。お聲の透き通つたお品のよい先生と思召せ、職業學校の御出身ださうです。

△山村先生

お鼻の下からお口のあたりへかけて、澤山なお髭を生やして被居いますので、入學當時はまあどんなに怖い先生だらうと思ひましたが、どうして〳〵お顔とは全然反對それは〳〵おとなしい、眞面目な先生でございます。處が奥樣と申しますのが、評判のパリ〳〵女先生なんでせう、ですから奥樣のお座布團におなりなさるわねえと、例の惡口やとあざ名をとつた△△さんの頭痛のたね、國語と算術がお得意、珠算綴方ももたれますが、此時間は皆惡戯許りしてをります。居眠の練習は須らく此時間になすべしですつてホヽ、たまらないわ、けれど罰が直きゝますわ試驗が一番多くて大弱りです。慶應の御出身極バンカラなお方と思召せ、簿記學の、委しい事も全校一とやら、校長先生の御信用は大したもので御座います。

△杉田春野先生

新らしく、被入いました體操音樂の女先生お年の頃は左樣二十四五かと、思はれます。小氣味よく太つたお顔の淺黒い、そしてお身丈も高からず、お目の縺な スタイルの振はないお氣の毒な先生でございますの。活潑な事は申すまでもなく、キチン〳〵と物事をなさるのがお慕はしい、お生國は西でせうお言葉がよほどちがひます。この先生、却々結構なお召物を澤山お持ちですが、どんな光る美くしい物を召しましても少しも見榮えが致しません。着物が泣き出しさうだわですつてオホヽ、無論老孃でお通し遊ばすお積りでせう先生がたのは餘り失禮ですから、いゝ加減にいたし

ましてクラスメートのをお目にかけるといたしませうね。

△高木千代野孃

同級生中第一の勢力家、お顏の丸いスラリとした一寸きれいな方です。修身なら、算術なら、國語なら、家事なら何でも出來ない物はないと申す位、學術に於きましては申分ないですが、かういふ方にあり勝ちな、謙遜の德を缺いて被居いますのが、誠に惜しい事です。常には却々よろしいですが、何か一寸氣に入らぬ事でもありますと、それは〳〵きつい御立腹、人を毒づく口眞似をする、冷評する、實にお話になりませんですのよ、ですから、皆履物に躓る樣に致してをります、さはらぬ神にたゝり無しですからねえ。春の花などゝは、狼犬もたゞならぬ仲なんで御座いますよ。先生方からは、多分の御信用を受けて被居いますが、御宅が高利貸とやら、その爲か品格と云ふ物は、少しも認められません、お氣の毒ですが道德上、品性上から申しますれば、零でせう、言葉なども餘程下卑て被居いますそしておべつか使ふ人を喜ぶと云ふのは、斯樣なお性質の處から、自然人の非難を受けるからでせう、ストライキをやつた時はほんに愉快で御座いましたわ餘り威張るとお里が知れ



ますよ、とは今も猶一同の陰口で御座います。

△中谷ます子孃

獨特の筆蹟を以て、又通學生中での才媛を以て、人に知られたます子様、お顔の白い、愛くるしい、極無邪氣な方で春の花の一番親しい友、矢張校中の花として先生方から御信用を受けて被居います。殊に圖畫がお上手、畫の先生のお花で御座いますわ、高木さんの様に威張らない、極氣のおけない方、一部分の人に對して少々意地が惡いとか、只今は〇〇先生の許に裁縫やら、技藝やらのお稽古、ほんとにお羨やましう存じます。

△大津川靜香孃

第五號室の室長様、お年に似合ぬよく行き屆いた、極お品のよい方でございます。學力は中等でせうが筆蹟は却々老練なものです。柔順なしい方丈に、萬事控へ目、人望はおありです。そして始終すまあして、大きな御聲もなさらず、況して大きな口を開いて物を召上るなんか、お薬にしたくもなさらないですよ。歌留多が大好き、土曜日の晩は乾度靜香さまの發起で大戰爭をいたします。

△岡崎はつ枝孃

御近所のお酒屋のお娘さま、校中第一の美人と云ふ評判の方それは〳〵お美しい自然の美形を備へて被居います。しかも少しも高ぶらず、あつさりとして、人望のある方で被居います。度々級長や幹事などに選ばれまして生徒からは、大變信用せられてをりますが學力が餘り上の部でありません丈に、先生のお受けはよくないですね、イエ全くの處ですよ、決してお美しいのを、やける譯ちやございませんわ、矢張お習字はお上手、御卒業後直にお嫁様に、おなり遊ばして、もう赤ちやまがおありとか、ほんとに早いものですわねえお年は十九でせう、春の花より一つ姉様ですよ。

△伊藤ひさ子孃

伊藤さんとお名前を呼んだ丈でも、皆クス／＼笑ひ出すと云ふ頗る付の滑稽家むしろ馬鹿氣てをりますわ、人格なんかコンマ以下な事は申す迄もなく、學力も大まけで丙位の處、日頃口數の少いKさんでさへ、丁度下女に持つて來いねと、囁く位、以て大抵は御推察下さいまし、それは何でもかでもすん／＼云つてお仕舞なさるのですもの、此方の側で　御免下さいね。



はほんとに無暗な事は申されないですよ。それで無線電信と云ふ名を奉つた次第で御座いますよオホヽヽ

それがまあどうでせう、先日Aさんからの御手紙に、御結婚遊ばしたとやら、ほんとに／＼可笑しくて獨りで吹き出しましたつけ、マダム振りを拜見に上りませうねと、同窓生よると、さはるとお噂です御子様がお出來遊ばしたら、まあどう遊ばすでせうと、又しても、いらぬおせつかい、ひさ子さん

△玉木文枝孃

最後に臨みまして、クラスの、模範たる文枝さまを御紹介いたしまする。お顔立は、さまでお美くしい方にはなけれど何處となくしつかりとした、犯し難い、誠に威風あたりを拂ふと云つた樣なお方、遊ばす事が少しもまがつて居りませぬ。然も下級に向つては、妹の如くいたはり、上級生に對しては姉の樣に敬ひ、忠實に物事をなされて、過失のない、眞に學生の好模範と申す方よく／＼お出來のよい令孃と云はねばなりますまい、天晴未來の良妻賢母とは、此方の爲にある言葉でございませう、學問技藝は申迄もなけれど、お身體の少々お弱いのが誠に殘念至極、承れば又此頃、御持病が起つて、田舍に御養生とやら、文枝樣どうぞ御身お大事に、御養生專一と遊ばして、一日も早く御全快遊ばして頂戴。

一家の團欒

一家の團欒と云ふ事は抽象的には說明されて居るかも知れぬが、具體的には少しも實行されて居ない。一家の團欒と云ふ事を具體的に實行する手段としては、先づ第一に從來日本の家庭で食事の時に使用され來た食膳を全廢し、其れに代ふるに食卓を以てするのが一番宜いと思ふ。近來は何所の家でも大抵食卓を用ゐる樣であるが、之れは團欒の樂みを取るに最も都合が宜いから、是非一般の風習として貰ひたい。

小學校若くば中學校で敎へる地理歷史の如きも、私は或る點迄は家庭で敎育した方が宜いと思ふ。今日世間でも頻りに中學校の敎課目が多きに過ぎると云ふ事を說く人があるが、何れも必修課目であつて決して棄てゝ宜い課目は一つも無いのである。然し私の思ふのには、若しも具體的に家庭の團欒と云ふ事が實行されたならば、其れは恰かも學校の出張所の如きものであるから、學校で敎へる敎課の幾分は充分家庭に於て敎育する事が出來やう。例へば食事の際に米國が滿洲鐵道問題に對して抗議を申込んだと云ふ樣な話題が出たとすれば、其れから直に滿洲及び米國に關する歷史地理を子供に敎へる事が出來る。而も斯樣して子供が興味を有つて覺えた事は、學校で地圖を示されて無意味に機械的に敎育された知識よりも子供の腦裡には遙かに印象が深いのである。要するに私は家庭の團欒と云ふ事を抽象的の說明ではなく、具體的に實行する樣に世間で注意することを望むのである。（新渡戸博士）



狹い人と廣い人

湖畔美人

「妾は昨日上野公園に參りましたのよ」と友達に話し懸けた時に、若しその友達が何の返事もしなかつたらうものなら、大抵の人は直ぐ氣を惡くするでしよう。氣を惡くした結果「何んだ、人が物言つても返事もしないで」と、心に思つて二の句も繼がずに怒る人もありませう。又普通の人なら「貴女、怎麽なすつて?」と迫つて聞きませう。二の句も繼がずに怒るやうな人は、先づ例外としても、怎麽なすつてと返事を促がすやうな人達も打てば必ず響くと云ふことを期して居る人で、妾は餘り感服致しませぬ。

況して「さう」と單に輕い返事位ゐしても、何んだか不足らしい顏をして、何故「花は綺麗だつたか」或は「繪畫展覽會は如何だつたか」と反問で下さらないのだらうと、豫期して居る人すら世間には尠なくない。左樣な人々は、神田から新橋に行くには是非何の道を通行らねばならぬと、自分の心の中に一本道を定めて置いて、甲も乙も矢張りその道を通行るものと速斷する、謂はゞ我が身勝手な人だと思ひます。

元來、社會は自分の爲めに出來て居るか否かと云ふことを考へて見らねばなりますまい。人間社會であれば、外の物の爲めに出來やう筈はなく、矢張り人間の爲めに出來て居ることは謂はずと識れて居るが、さて自分の爲めか、又は人の爲めかと云ふことは、充分稽がへる必要のあることゝ思ひます。若し自分の爲めに出來て居るものなら、自分は思ふ存分の擧動をしても善い、否々、社會の人々をして自分の言ふ通り又思ふ通りに使役しても善い道理である。而し自分にして善

いことは、社會の人々も亦して善いことである。然らば其麼勝手な眞似をしては、迚も社會は、一日たりとも靜謐なることはできぬでせう。

夫れ故、社會は相互的のもので、社會の一員となれば非常に利益を承ける代りには、又自分もそれ相應の報酬をしなければならぬ。此報酬が即ち自己制限と云ふもので、人が世渡りをするには先づ第一に考へねばならぬことでせう。一と口物を言ふて、人が直樣返事をしなかつた位ゐで、怒つたり罵いだりするやうな人は、少し此自己制限と云ふことを御考へになれば、未だ未だ面白い教訓が澤山この中に御座いませう。



打てば響く、斯樣すれば彼樣なると云ふやうなことを豫期して居る人は、妾は山岳の人と名づけます。試みに山の中に行つて大聲を出して御覧なさい、直ぐ後から山彦で反響が致しませう。又風景にしても眼

端に山が聳ゆるとか、巨巖が空に嘯くとか、樹の枝振りが盆栽ソックリだとか、岩清水が滾々と湧き出づるとか、何づれにしても、瞭然とした、小綺麗な、惡く謂へば小間チャクレタ所ろがありませう。此れを人間に例令たならば、小氣の利いた所謂小才子でせうと思はれます。彼樣な人は「モシ」と云へば、直ぐ、「ハイ」と返事をし「昨日は怎麼なすたの？」と云へば「ヤレ朝は誰を訪ねて、何の話をした」だの「午後は何樣と一緒に、何處に行つた」だの「夜は幾時まで何の仕事をした」だの、一と口の挨拶に對して、一日間にした事の大體を話さなければ承知の出來ぬ位ゐに要領を得た人である。併し其れまではマー宜しい、少しは冗長くても、對話者さへ善い加減に聞いて、而して善い加減の返答さへして居れば、要領先生得意滿面だからヤー／＼艶のないことでせうと思ひます。然るに斯樣な人は、或る句の切れ目に對話者が「ウーム」と云ふ位た一と口…イヤ鼻の先きでも出來る位の、受け答へを落さうものなら、秋風一陣、沛然たる大雨になる心配は萬々ないが、空は確かに曇つて來るに違ひない。其の癖、御本人は自分のやうな才子はない、自分のやうな世渡り上手はないと思つて居らつしやるに極まつて居るが、未だ／＼修養の足らないことは、爭はれますまい。

其處に行つては平原の人です…妾は小才子肌の人を山岳の人と申しました如く、見渡す限り唯茫漠として果しもなく、山もなく丘もなく、巖もなく又樹もなく、太陽が叢より出でゝ叢に入るやうな際涯のない雅量のある、惡く言へば無頓着の人を平原の人と名づけます。打見る所、奇巖もなく奇石もなく、狩野派の畫題などには絕對的になる資格のない、謂はゞ極めて平凡なる風致で、如何程呶鳴つても此所では山彥は致しませぬ、又山や河に制限せらるゝことがないから、道も東西南北自由自在に步行かれます。氣が利かずに間が拔けて居る、一見した所では、少しは何かゞ足りないのではあるまいかとも思はれる位ゐですが、實は才子肌の人に左樣に見らるゝのが却つて非常な利益です

あの人は茫然して居るからソウ〳〵氣は附かない、あの人は口の重い方だから餘りッペコペ挨拶はしない、と斯樣に通り相場となるのが大變の仕合せではありますまいか。

　と申せば、何んだか横着のやうですが、人には各々其本分が御座います、世間受けが大切か本分が大切かと云へば云はずと識れたことで、素より本分が大事のことでせう。それを山岳の人――小才子のかたは、世間受けの方を先きにしないまでも、少くとも之れを本分と同一に考へなさるやうで、その結果として本分が末分となり、折角の志が遂げられぬことが間々ありませう。左樣の時に平原の人無頓着のかたは、外のことなどは何うならうと關はずに、唯々本分に忠實なる爲め、世間でヤレお化粧が下手だの、縞柄が似合はぬだの言つて居る間に、嗤はれて居る人は却つて充分の志を先きに達すると云ふ結果になる。



それは本分と末分とが同時に、完全に履行はるれば其の上のことはないが、餘り色々なことに氣を配つて居れば、大事の使命が忘れ勝ちとなることは、尋常普通の人間の免かれ難きことゝ思ひますから、一層のことに、先づ本分を盡しそして餘裕があるなら、末分にも及ぶと云ふのが、成功法の秘訣で結局世渡り上手となるのでせう。得て八方美人と申しますが、これを裏から考へると、誰からも可愛がられぬ八方醜人ではありますまいか、マー其の方の順境の時には八方美人主義も大に宜しいかも知れませぬが、一朝不境に陷いつた時を想像して御覽なさい、誰と云ふ眞の友人がない爲め、相談相手になつて下さる方があるまいと思ひます。斯樣な方は、自ら好んで義理一遍の人情社會に投合すると云ふものも、八方美人の裏には、必ず四面楚歌の聲が潛んで居ることを忘れてはなりませぬ。

平生に化粧が上手だの、衣裝が綺麗だの、挨拶が巧妙だのと評判を博て居らつしやる所謂社交界の花形役者の方が、萬一少しの失策でもなすつて御覽んなさい世間の人は非常に嗤ひませう。つまり是れは、御自分から「僕は豪い、一點の失策もない」と高言さるゝのと同樣で、自分をして一點の失策も敢へてするを許さぬ窮窟な境遇に立たしむるもので、こんな無益ことはないと思ひます。夫れで捕捉へ得べき機會のある度毎に、自分を自由にし、單純にし、平易にし、而して又無頓着にすることが、世渡り上手の第一要素で、これが出來なければ一時は世間に持囃されても、其の方は到底御自分の目的を遂げらるゝことは、難かしからうと思ひます。妾が右にも左にも差障のある山岳的性格の人よりも、前にも後にも遮斷るものゝない。茫漠たる平原的性格の人が、屹度世渡り上手だと申しますのは、この故です。





當世鶴龜夫婦

橘左近

●芳子様、まア御聞き遊ばせ、○○様はネ、お年の若い美人でそして財産家の令嬢との御好みで御さがしになつたのですよ、然し御自分の御年や御顔は如何でせう随分殿方は自惚が強いぢやあ御座んせんか、世の中はさう御注文通りには參りませんからネ仕方なし今の御夫人をお貰ひ遊ばしたのですよ、そして其言ひ譯が面白いではありませんか、マア子供一人貰つたと思つて世話しますさですつてあきれて物が申されませんのよと仰せられたが、ソレヂヤアもしお子さんが御出來遊ばしたらおじいさんに御成り遊ばすのと申大笑ひいたし候、實に御雅量の程かんぷく仕り候、其後ち私も一度御尋ねいたし候處丁度旦那様御在宅にて御自分が先きに御座敷へ御出ましになり、お茶よお菓子よと皆旦那様が取て御出し被下奥様は側でポカンとして見てゐらつしやるので、甚だ手前事きまり惡く相成候故何かと奥様へ御話しむけ候へ共奥様はろく／＼御返事もなさらず、旦那様引とり御話しになると申風にて誠にぐあひあしく早々に御暇いたし候が、皆伺ふ方は其傳にあいホー／＼の體にて御引上げに候よし、其上御臺所の御世話より掃除の事其他あらゆる事迄御世話被遊るゝ由、少し宅の主にも煎じてなりとのまし度き位に候、かほどによく氣の附く方とてたま／＼宅へなど御出で下され候折は、ソレと申ので其邊とりかたづけるやら茶棚のごみをふくやらして、チロ／＼見給ふ目さきをそくらまし居り候、其氣がねさ、私なぞあんな人のそばに居つたら五十年の命が半分は確かにちゞまる

事と存じ候、其れ故其後ち伺ふ毎に奥樣の樣子に氣を附け居り候へ共、之は又至つて呑氣に氣らくで愉快だと云ひさうな御顏附で、ニコ〳〵と遊ばし學校時代の御話しで持ちきり、御かずごしらいの御心配もなさゝうにて、側で見る程の御氣がねもないものかとも思ひ又チト血のさわりがにぶくおはすのぢやないかとも思はれ申候、其れ故旦那樣の御仰せには命是從ふと云ふ風で、何事もハイ〳〵と義理をかいても旦那樣の御仰せがなければ、よそ樣へ御訪問にも御出ましにならないと云つた譯、其故家のやつは內氣過ぎると御主人公鼻の下長くして御出に候、扨こゝにをかしき事は旦那樣御出張遊ばされし御留守は書生や女中と家中ドタバタと大騷ぎ、何かうばひあひでも初まりし樣子、氣の小さき者は地震かと驚く位ゐ、其後御留守とさへなれば例の通り騷ぎが初まる事とてかう又〇〇樣では御出張だよと中位に相成申候いつぞやも八百屋の小僧參り〇〇樣の奥樣は隨分御てんばですぜと眞面目な顏して申候故なぜと聞き候處此間お裏を通つたら大變賑やかなので戸のすきから見ましたら書生と奥樣とでお庭でナワとびをやつて居りましたよ、奥さんなんか丸髷が落さうに成つてもかまはず庭中とび廻つて居りましたぜと、アキレタ顏附きいたし候が、然しおいらよりうまいものだとかんぷくしたので思はず女中と顏見合せ吹き出し申候．何にしろ此春女學校を卒業遊ばした許りに候へばまだ〳〵書生氣のうせ給はぬ事と私共の其頃を思ひ出し御無理もない事と存じ候、然し彼の旦那樣へ目から鼻へぬける體の奥樣では迚もおさまらぬ事と存じ候、旦那樣がいくらにがいお顏附き遊ばして其邊見て御出でもとんと平氣で何んのひゞきもなく御主人公の御顏色を讀んで事をなさるなんて風は少しも御座なく候、世の中はよくしたものと存じ候然し御留守中の事は旦那樣少しも御存じなきかと思へばをかしく相成申候、奥樣あつかひいたせばこそいろいろとあらも出で候事故此後ちは御主人公と一つに子供あつかひ致さば何んの惡口も出ぬ事と存じ〇〇令孃として御つきあひいたす積りに候、然しいつ迄も彼の

通りにて御暮しになれるものか否やと先き〳〵の事心にかゝり候何卒していつ迄も豊頬のやつれ給はぬ様いのるになん。

御手紙面白く拝見いたしましたよ○○様の御噂を彼れだけに御書きになる所を見るとゆきさんも御ひま人の御仲間と思ひましたよ、扨お求に従ひ私よりも一寸目に止まりし奥様の批評を御聞かせいたします、是は私共と親しくして居ります方へヤハリ此春、新夫人が出來たのですよ、御主人公は三十位夫人は二十二三、ツレ〳〵腰のぬける程の美人でしかも東京仕入れなので、御顔と云ひ御樣子と云ひ一分のすきもありませんのよ、初め御ちかづきにとて、旦那様がつれて御出になりましたがネ、髪は何んだか田舎者には一寸譯の分らない結び方ツレ〳〵いつかの女學世界に出てた前田夫人の横向きのお寫眞ネあれですの、御かんざしは眞赤な花とは振つて居りませう、然し御顔によくうつりますのお召物は江戸褄ではでなお模様、指にはリングが四つもピカピカそして貴婦人にはなくてかなはぬ金鎖りを頸からかけて一寸帯止の間ではさんで、まるで雑誌の口書を見る様私は只モー見とれてましたの其口書が鶯の様な御聲でものを仰有るのですもの、何んにたとへ様もありません、又其御口上がおじやうずで何からなに迄遊ばせづくめ田舎者の私はろく〳〵御返事も出來ないしぎでした、○○様と違ひ旦那様はチトアンポンタン式で何か御話しをむけてもハ、、アと仰有るぎり皆奥様が引とり面白をかしく手まねやいろ〳〵口をまげたり、まゆを上げたりして彼れがゆはゆる表情術にたくみとでも申すのでせう、義兄



さんと私とで話しかける事を右左どうけ流しでの御あいさつぶりには流石花の都でおしこみなされしだけと只々かんぷくいたしました、かね〴〵旦那様からおのろけの序に伺つて居つたエンゲーヂリングを御二人とも薬指にピカ〳〵させて御出になりました、花嫁さんなぞと云ふものは何か聞かれてもポート顔を赤くしてひかい目がちにお話しなさるものと思つてた目にはチト異様に見えましたが。然し之が當世流でせう○○夫人と逢ひ都そだちのチャキ〳〵だけあつて虚榮心は強いでせう、其後御尋ね下さる度毎にお召し物が違ひましてネ、三越タイムスなどで今之が流行のかしらんと思つて見てる物をチャンと着て御出になりますのそれは〳〵よい御つくりで一寸のすきもありませんのよ、此間も御髪を今日はよく拜見しやうと思ふと又ちがつた結ひぶりで銀製の洋花只一つなんてあつさりした風ハイカラですよ、又姉さんは粹好きと云ふのかしれませんがマー私なら少し根下りの丸髷に一寸ぬきえもんに着物召したらさぞと思ふのです然しハイカラ顔の方よ、ほんとにハイカラ好きのゆきさんに見せたいワ、最も旦那様の御家は今東京で賣り出しのチャキチャキ其一人むすこさんの御嫁ですもの好きになりますワ、半コートなんか實に振いつきたい位のを召してゝすよほんとに彼の奥様はおしあはせだと申ますとネ、義兄さんてばナーニ彼れは見え坊のおばけでヤツの處へ來たのではなく、おやじの處へ來たのだ今に後悔するサ、なんてにくまれ口聞いて居り升のよ私が御尋ねしても先づ暫く御座敷で待つ事ひさし、其内御召しがへになつてしづ〳〵と御出ましそして此地の不自由な話でもちきり、それは東京とくらべたらどこもよい土地はありやあしませんワツンナ事仰有つたつて私のせいでもあるまいし私も渡り者ですからよいものゝモシ此土地の人に聞かせたら氣の早い者はポカリと來たかもしれませんワネ、其後少し御不快だとて土地から一寸はなれた處へ避暑に御出まし旦那様も毎日そこから御役所へテク〳〵御通ひ日の長い時はまだしも短くなつては朝くらい内に出て又御歸りがくら〳〵なると云ふ

風何んだか御氣の毒な樣なをかしい樣な美人の奧樣御持になつてると扱て〳〵大變なもの、然しいくらおそく御歸りでも御美しい奧樣にチヤホヤされゝば毎日の御通ひぐらゐお茶の子でせうネ、ソーコーしてる內に奧樣は東京御歸り御主人公又々一人で下宿屋住ひ、ホヽヽニみじめなものですよ之がネ旦那樣の爲めならどんな田舍でもと仰有つてガタピシした家へ入つてよく御つくしに成つたらマー彼の奧樣が御かんしんな事とさぞ評判になつたでしよに、彼の奧樣ぢや、田舍住ひなんか御出來になられませんよ白魚の樣な御指ですもの女中の二三人も置かなければ廻りかねますワなんてそろ〳〵惡口が出るのですもの堪りませんネ其後風の便りに聞けば御姙娠との事モー御母さんに御成り遊ばすのかと何にやらそしい樣にも思はれますが、そしたら少しはおじみに御成りかとも思つて早く御母さんに御成りのが奧樣には御幸福の樣な氣がします〇〇夫人とは反對ネ旦那樣は僕が氣が附かない方だから家內には氣の廻るのでなければと仰有つてゞしたが面白いでせうゆきさんも〇〇夫人と此夫人とをひかくしてそして目を廣く世間にそゝいで惡口許り云ふのが能ではありませんから人の長所短所を見て御自分の處世法のたしになさい兎に角此夫人の人をそらさない處は實にかんぷくの至りで是れだけは誰れでもまねして差支はないと思ひます。

(完)



△晩餐會

晩餐會に招待された一人、少し道草を喰ひ過ぎて腹をペコ〳〵に減らして駈け付けたが、時間か遲れて珈琲の出た處であつた、主人役の貴婦人は氣の毒さうに、

「今夜は貴君が遲くお出でゝ眞實に殘念でした、一度裕御一緖に食事を致し度う御座いますが何時頃が御都合が宜う御座いませう、

客「奧樣、今でも結構で御座います。

佛國大使の食卓

◎私は佛國大使館に長く居りましたから、一寸様子が分りますが、普通の佛蘭西人は朝飯は寢臺の上で顏を洗はず、口も漱がずに食べ、朝飯は三食中で一番簡單で、人に依つて違ひますが、大概はコーヒーか紅茶か、其れにチヨコレツト、ボースパンを少し食べる位のもの、晝飯は魚のフライ、又は照焼き、卵類・魚肉、煮込み、野菜、鳥類等五皿位です。夕飯は晝飯と別に變りなく肉類がもう一皿多い。けれど食後には必度チースかコーヒーを飲む事になつて居ます。

◎酒は日本式に食前にも飲めば食後にも飲みます。葡萄酒は日本人の茶や水を飲むやうに飲みますが、時にはボート、ワインや黑葡萄酒やホワイト、ワイン等なども飲みます。食後の酒はキユラソー、ベルモツト、ウヰスキー、ブランデイ、コニヤク等六種出します。一體佛蘭西人は酒が強いのか又は水をわつて飲む故かどんな強い酒を飲んでも日本人の様に泥醉する事はありません。

◎西洋人が食後果實を食べる事は誰れも御存じですが、佛蘭西人は日本の梨は決して食べません、柿は本國にないとか聞いてゐますが一度も食べたのを見ない。最も好きな果物は支那邊から來るランチラーンと云ふ松笠の様な、圓い、生なら中の白い果實です。

◎前大使のアルマン氏などは夫人と二人で晝飯に書記官の一人二人が來る位ですから一週間の料理費は三十五圓から四十圓でした、尤も酒は十圓位要ります、又宴會ですとどんな御馳走でも出來ますから隨分多額な費用を要する事もあります。

◎私共の月給は三十五圓位です。下女は語學の出來ないものは十一二圓ですが、語學の出來る人ですと二十圓位のもムいます。私共は大抵和服で通しました、月給の他に夏と冬には一月分の月給位を衣裳料として與れますが、感心なのは日本の富豪のやうに召使ひの中天等に定紋を入れさせる様な事は決して無く、自分の好きな衣服を自由に拵へてよい事です。

◎月給は三十五六圓ですが、全收入は百圓近くです、と云ふのは料理人に依つては隨分狡猾な事をします、例へば晝飯の食物は朝飯の時に、夕飯は晝飯の時に獻立を差出しますと、それを撰擇して決めます、獻立が確まれば町に出て材料を買ひ集めて登りますが、其の時餘計の手數料を取るからです、之れはよくない事ですが、料理人仲間では公然の秘術となつて居ます。（牛込水築軒主人）

機敏に働き過ぎて同情を失つた人

野の花

桔梗は諂諛の花ださうな、「鳥渡貴女、桔梗の花お好きでせう」つて、みさんに皮肉を云つて遣りたかつたの。濃い髪の毛をふつくり庇にした、級きつての美人、そして又利け者でした。鳥渡交際したばかりでも「私本當に淋しいんですの、永久に交際して頂戴、ね乾度よ乾度よ」とあの艶つぽい調子で、まあ可愛らしい表情をして、瞬間に相手をチャームするのが特徴でした。桔梗の花は美しいのですもの誰だつて迷ひますわ、其等は案外にさめ易いとは知らぬ級一同、Tさんを至く信じて居ましたのですもの、階級ある先生方は、勿論ですわ、それは愛嬌たつぷりのお世辭上手、處へ例の表情を見せるのでせう、誰方でも、恍惚として了ふのです。學校中でTさんを知らないものは恐らく有ますまい、將來は交際場裡で論なく女王なの……でせうよ。天上の星か地上の百合か、……扨其儘美しく繼續すれば、浮世は太平無事ですが、人情の淺ましさ、だんだんと増長していつか四十人餘の級友を、左右するのはわけなしといふ得意から、つい紅葉と散つた壽永の昔、例なきソロモンの榮華、何故それが破壞されたのでせう……。が盛んなTさんは一時、「ほんたうに宜い方、理想の令孃よ」と異口同音に云はれたものです。

運動場の櫻の花が、芝生の上へ散り出しました。花園には三色菫や櫻草が時をえ顏に咲いて居ます。お晝休みにTさんと私は、散歩して居ますと、二年生のある方が、テニスコートの方へ駈けて行きながら、偶とTさんにお辭儀遊ばす、「あ、鳥渡お待ち遊ばせよ」と呼びとめて、「貴女が餘りお可愛らしいので、こら花片が留つてゝよ」なんて、甘い事を云つて、お下髮に結んだ五吋幅のリボンをまさぐりながら「いゝ色ね何處でお採りになつて、三井屋？ほんとによくお似合です

こと」と這麼調子、で去つて了つた後では「餘りあくどい色ね、私嫌ひ」直ぐもうこれですの・・・。向ふから、英語の、〇〇先生がお見えになつたら、慌てゝテニソンか何かの詩集を出して讀みはじめた、手持無沙汰の私なんかにお介意なしで。と、果して先生の眼にとまつて、遣つて被入しつた、「何讀んでお出ですか」と覗いて「や



新緑の曙町

あ、むづかしい物を讀んでるな」「えゝ・・・兄のですけれど・・・・」とこれから話しの端緒で、もう聞いてゝも白々しいお世辭ばかり並べて居ますの、で先生が見えなくなると詩集なんかそつちのけで「文子さんテニスしませんか」ですもの。實際如才ないのですね、でも私等から見ると何だか利用されてる様で面白くありません、否僻みでも

何でも有りません眞實のお話です。詰りTさんは世渡りの甘い人といふのでせう。其機敏な頭腦は忽ちに人の氣を呑込んで、ちやんとお調子を合せるのですもの、そして特に先生方には、四年級に自分の存在を知らせる樣にそりあ如才なく立廻るのです、ですから其歡心を買ふ場合は、友を賣つても自己の利を滿たさうといふ主義ですもの、折々受持の先生に告口も遊ばすのよ。善く解るつて‥‥そりあ、いつとなく知れますわ、いくらTさんが迅速に活動したつて、所謂四知の譬が御座いますよ。まだ這麼事が有ます、昨年の秋Tさんと外二人ばかり、瀧の川へ遠足の歸り、見得もなく柿の枝なんか擔込んだ處を、教頭の、先生に逢つたのですとさ、先生のお宅は不動様の傍とかで、其以來Tさんは數度其御門を潜つたさうです。

創世記御存じ? ヤコブがエサウの踵を持つて生れたでせう。何でも社會の政策上、踵をねらつて行くのが一番ですつて、さうかも知れないわ、誰しも裏面ーー足の方には氣がつきませんものね、Tさんは表裏共に働いて居ますし、×先生に取入れば踵を持つたも同じですから、自分に對抗する級友は何時でも引繰り返せますわ、えらい者です。同時に自己の防禦策も敏活なもので、此方の形勢不穩と認むるや、一人々々に御機嫌取つて籠絡しやうと致します。Tさんは餘り機敏に働きすぎて、ある程度を超えて了つたのですね、人を綾なし居る中にも、現はれる心の驕りは、情けない哉抑へる事が出來ません、四方八方に働く腦力は、吾行爲を自覺する暇が無いのかも知れません、折角五彩の霞に包まれて、美しかつたTさんは却つて自ら霞を破つて、其本體を現はして了つたのですの、一度、憎らしいと感じた級一同は、奈何しても冷靜な態度を取るより外仕方がございません、そりあ人情ですから‥‥。斯うなると、笑顔を向けられゝばむつとするし、お世辭を云はれゝば、腹が立つ、加之に先生方とTさんが話して被入ると、懐疑やら嫉妬やらが混亂して、倘々小面が憎くなりまして、どう考へても同情を寄する點がございませんの。ある時、

「私、何故そんなに憎まれるんでせう」と、例の弱々しい表情をしたのを見て、私は冷かな笑が唇頭に浮んだ。

「虚僞！ 皆貴女の身邊は僞の色が漂ふてゐるではありませんか、世渡る道に貴女は成功して被入いませうけれども、花や千草が露に生きると同じに、他人から同情の露の濕ひを持つて居ましたら什麼に美しい人でしやう、つて云ひたいけれど默つてましたの、だつて後難恐るべしですもの、×先生に睨まれると大變だから……あら、貴女も世渡りには巧者だつて!? まあ随分ね、先日の茶話會にだつて、Tさん一人出しやばるもんですから、不平黨は一層、積日の餘憤を加へて猛烈な勢、Aさんつたら、活人畫の天使に扮裝したまゝ大聲で「私もう廢めるわ、私等はお木偶ぢやないの、これでも相當の理性を持つて居ますからね」と怒り出すのを、まあ〳〵と押へると、又外で澁り出す、本當にもう閉口して了ひましたよ。



新綠の小日向

大きな聲では申されませんが、近頃痛快な事件がありますの、ある新聞の投書欄に、Tさんが角帽と大層御親密だとか、全く事實無根な記事が出てゐました、さあ大變、學校ぢやTさんが最後の武器を以つて、泣き出す、×先生も○○先生も非常に激昂遊ばして、實に處女の名譽を毀損したものだと、無名の投書家の惡徳を罵つてやみません。

流石に女の心狹く、「私奈何したら可いでせう、私が至らないから、這麼事になつたのですけれど……」と講堂の裏手、若葉を洩るゝ光線をあびながら、桃色のハンケチを顔にあてた、晝の樣な姿は、さぞ局外者の眼には、憐れに映じたで御座いませう。

あゝ此場合、心から泣いて慰藉を與へてくれる友達が、一人でも有りましたなら、先生方の慰めより一層、心強さを感ずるで御座いませう、お追從に泣いた人もありましたが、多くは眼と眼に快哉を現はして、浮調子に、「ほんとうに、お氣の毒ね、でも自分で疚しい事さへなけりや可いわ、ね、其樣に御心配なさいますな」と世間並を云つて居ます、相隔てゆく人の心、私偶と悲痛に感じましたわ、只々自己の享樂の幻影に憧憬れて、人の同情をTさんは失つたのだなと、沁々思ひました。未だ世渡りの是非を、私等に論ずるのは早いかも知れませんが、Tさんは果して、上手なんでせうか、下手なんでせうか。

何しろ新學期早々、這麼葛藤が始まつて、困つて了ひます、級では秘々と、「バクテリア」の「桔梗女史」のと、Tさんを呼んで居ります。



話の種

支那人の家庭

◎支那に於ては日本人の如くに別家する事無く、祖父母も父母も伯父叔母、従兄弟姉妹も残らず一つの屋の棟の下に暮し、同一生活を爲す、故に一家族が或は百人、百五十人の大多數に至る事は珍らしくない、處で此大家族は非常に多くの家婢下僕を召使つて居る、百五十人の家族で有れば四五十人は使ふのだから驚いた譯だ。

◎支那には無職業者が澤山に居る、日本ならば地所は持たなくても小作人に成つて一家を立てゝ行かれるが、支那では小作人に成るにも保證金を要するので其苦に堪へず、人の下婢下僕と成つて暮す、だから給金等も至つて安く、日本から移住して居る者でも一圓位で、支那人を雇入れ得られる其の日當は僅に四五十錢、下婢には僅に一ヶ月二十錢許の手當を給するのみで使ふ事が出來る是等の下婢下僕の他に又奴隷の如き者もある故元來惰弱なる支那人士は益々惰弱となり、横の物を縦にもしない煙草を飲むにも従者に煙草を詰めさせ、火をつけて貰ひ、自分は只飲む許り、直ぐに又吹殻をはたく事を従者に命じる。婦人が亦是れである。



◎無職業なる支那婦人、滿洲と廣東と下流社會を除いたる全支那の婦人は皆纏足をして居つて家の一番奥に集まつて居る、日本ならば男子が戸外に働けば、女子は内に働いて居る、即ち衣服を縫ふ、料理をする、子達を育てるなどゝ決して樂では無い處が彼地の女は全然無職業で朝から晩迄何も仕事が無い、中流の者になると自分の靴を編む位の事である、さらば一日中何をして遊んで居るかといふに、先づ化粧です、化粧に是れ日も足らずと云ふのが上流婦人の有様です、それに是等の婦人は一般に無教育な者許りで、偶々教育を受けて居ると云ふのは官吏の娘、學者の娘位です、小人閑居して不善をなす、とは先哲の言葉、能く言はれたもので表面堅く優しく見える無職業の支那婦人は其内部に於て厚顔な圖々しさ加減、到底是は想像の外であります。

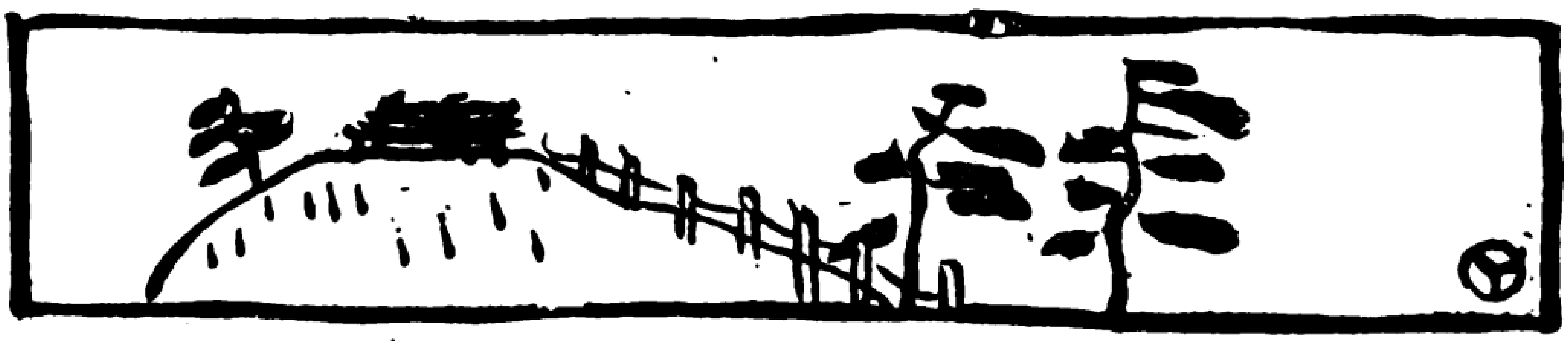
◎結婚の奇習、結婚に伴ふ奇習は何邦にも有る事で珍らしく無いが、平常深窓の人たる婦人が、良人の朋友に由つて聞くに堪へざる事を言はるゝのは此日である、招待を受けたる男子は此の日に限り嫁の室に於て非常な喧嘩を極める、此事を「鬧房」と云ふ相だ。それから婚禮の時には花嫁は總て身體の周圍頭部等に赤色の飾を施こし、葬式に用ふる花籠の如きものに嫁衣より入れて置く、扨婚禮の式が濟み、親戚の禮も濟んだ後で、始

めて花嫁は籠から出される、其時はもう、顔色は無く眞蒼に成つて居る、然うで有らう、食事もせず、一晝夜籠に這入つて居たのだから無理も無い、然し婦人の體力は驚く可きもので、籠から出た時に、先づ種々な結婚後の條件を提出して要求するのは婦人である相だ。

英佛家庭の相違

◎英國の家庭は純粹の家庭で、佛國の家庭は家族生活である。英國にはホームの文字があるが、家族生活の意味を含んだ文字がない。佛國には家族生活の文字はあるが、ホームを表す文字がない。文字の上ですら此位の差があるから、實際に當つて見ると大に異つた點が多い。

◎英國では子供を育てるのに全く道徳的科學的に教育する。隨つて縦令子供と雖も前後撞着した話とか、理由の不確實な[illegible]とかは一切此を許さぬ。學校教育の方針も、矢張り此と方針が一致して居て、學校と家庭との關係が甚だ圓滿にゆき又双方の教育が國民性に大なる効果を奏して居る。斯の樣にして一定の年齢迄教育するから、子供にも自から確固たる道徳思想が出來て來る。それで此の道徳的判斷が出來る樣になると、兩親は其の子供の行動に何等の干渉もせず、子供の獨立獨行に一任する。從つて子供の方でも兩親を何時迄も賴りにせず、常に獨立を希ふ樣になる。



又學校で教へるにも流石海國だけに科學的な教育を施すと同時に大に海事思想の涵養に力めて居る。其の結果青年少年は、自ら獨立し得ると信ずる時は、直に故國を飛び出して萬里の波濤を蹴り海外に大飛躍を試みる。そして其のホームを戀ひ慕ふのは只子供の時丈で、大人となれば僅かに自分の周圍のみをホームとし、決して兩親の故國に戀々たる事をしない又親の方でも此を大に悦んで子供の行爲を少しも怪まない。

◎處が佛國では左樣でない。子供は飽く迄自分の膝下に居らしめると云ふ方針で養育し、子供の自立獨行を決して喜ばない。其結果子供の方でも何處迄も親の周圍に居を定めて、決して海外に出稼をするとか、遠く故郷を去るとか云ふ事を欲しない。此の點が英佛の國力發展上に大なる影響を來したもので、英國が殖民政策に成功し、佛國が此に敗れたのも、畢竟するに此の家庭教育の方針が異つて居る結果と見らるゝのである。

◎家庭其のものゝ上から云つても、英國の方は常にキチンとして居て寸分の隙間もなく、他からは一寸入りにくいのに反し、佛國は誠に開放的で、誰でも時を問はず入り込む事が出來る。併し英國の方は一度其の家庭に入り込めば、直に其の一家の人人と親しくなれるが、佛國では入り込み易いに拘らず、家族の者には容易に馴れて來ない。此所等も其の道徳的の教育に基く結果ではなからうか。

◎婦人に就いて云へば、英國の婦人は非常に常識があり、且つ愛讀に富んで居て、それで又社會的の智識が廣い。從つて其等の人の間に交はされる話題も決して局部的でなく、社會全般に亘つて居る。佛國の婦人は之に反して最も家政上の智識に富んで居て、雜務、交際、さては經濟上の切り廻しがなか〳〵巧みであるが、其の話題は社會的でなく、只一局部に限られた傾がある。

◎又英國婦人は一般に旅行が好きで、時間と餘さへ許せば直に飛び出して所々を漫遊する。從つて其の眼識の廣い事も驚く程で、事毎に大なる趣味を持つて一々批評を下す風がある。加之其の批評は又實に的確なもので、なか〳〵男子も及ばない。處が佛國の方は、全く家庭を治めて行くと云ふ主義が根本になつて居るから、此等の點に行くと、英國婦人よりは非常に劣つて居る。

露國婦人の風俗

◎浦鹽は僅かに一衣帶水を隔たばかりですが、それでも國が違ふと山水の眺めばかりでなく、風俗なども變ります。彼地には近來女相撲が流行して昨年などは頻りに大騒ぎして居ました。何でも露西亞相撲は佛國式ださうで、なか〳〵派手な仕方です日本の樣に土俵場などはなしに舞臺の上で取るのですが、女は



何れも薄い肉シャツで身を固めて、圓形を作り、日本の相撲取の土俵入と同じ樣に、最初に賑やかな踊をいたします。それから組になつて勝負をするので、女でも隨分力が強くて、大きな男を手玉に取つて打ち擲ける所などは隨分見事です。

◎日本人の目障りになるのは、女が男を打つ權利をもつて居る事です。家庭の中でも氣に入らぬ事があれば、妻君は夫を毆り甚だしきは泥靴を以て蹴る樣な眞似さへ致します。男はそれに對して逆ふとはせず、却て溫順に忍んで居ます。若しも男の方が手を出さうものなら、男の權利が落ちるさうです。

◎右の樣な有樣ですから、家庭內は女本位で、男は絕對に其の意見に服從せねばならぬやうです。例之ば夫は明日客を招待したいと思うても、妻君が「私は厭です」と一言云へば直ぐ否決されて了ふので、靴下一足買ふ事から、子供の敎育の事から夫の洋服帽に至るまで、一切妻の贊同を仰がねば調製する事は出來ないのです。其の代り働く事も男に負けぬ位の事は致します。

◎彼地の婦人は皆游泳に達者で、夏になれば海邊等で盛に泳ぎます。しかし海水浴場でも、溫泉場でも、男女の區別は嚴しく立てゝあります。私が或時入浴して居ますと、……それは大理石の船形で長く寢て居られる樣に出來て居て、一回の入浴料が一圓でしたが、入浴中に一人の婦人が五つ位の男兒を連れて來ましたが、私を見ると其男は直に隱れて了つてどうしても出て來ません、後から其理由を聞くと、母親か姉妹ならば一緒に入浴しますが、若しも他人の婦人が居れば、男は子供でも入らぬ風習だといふ事でした。

樂しき世渡り人

萩野しづく

世は種々とは好く言つたものですが、人が此の世に生れて來た以上、善かれ惡かれ、生きるだけは生きて行きたいと言ふ精神に於ては、一寸も變つた所はない筈です。この慾望を滿たさうとする心が基礎になつて人それ〲の職業を營み、心配もすれば、努力もするといふのが、人生だらうと思ふ。

併しそれは只人生の根本義であつて、その内には今の生涯に慊らない、生きて行く以上、もつと生甲斐のある生涯がしたい、金に不自由なく、相當な名譽も擔つて行き度いといふ寧ろ當然な慾望が各自に出來て來て、向上心が昂まり、生存競爭に激しくなつてくる。中には立派な榮職、巨額な財產を贏ち得て、得意げに振舞ふ人も出來るし、一方には爲ることなすこと交嘴の嘴と喰ひ違つて、失意落膽の淵に沈んだ果は、狂人になつたり自殺したりする人が、決して少くはない。

これと言ふのも畢竟、平生の修養が足りないから起るので、意思の强い、理智の明らかな、自覺的精神の確固たる人ならば、夢そんなことが無い許りでなく、冷然として捲土重來の準備をするだらうと思ふのですだから私達は常々心懸けて、偉大なる運命の力、自己の天分といふやうな事も考へ、よしや富貴な身分になつても些の油斷なく、又極貧な境遇に零落しても笑つてゐるだけの餘裕、覺悟があり度いもの、これは孟子もよく〱敎へて行かれたことではありませんか。

此の覺悟をする前に、私達は先づ心の持ち方を『樂しくする』ことが必要である。これは處生法の最大條件であつて、誰しも心得て居らねばならぬことである。心さへ樂しければ、咲く花も啼く鳥も、すべて歡喜を以て享け入れられるが、若し心が不愉快であれば咲く花も悲しく見え、啼く鳥も陰氣に聞え、人の笑聲までが癪に障るやうなもので、「心を樂しく持つ」とい

ふことは、金の有無し名譽の高低を離れて、貧富貴賤凡ての階級を通じて、考ふべき要素だと思ひます。

廣い世間を御覽なさい。高位榮職をほしいまゝにし御殿のやうな屋敷を構へて、數多の下男下女を使ひながら、始終不愉快に暮してゐる人がある。さうかと思へば、十軒長屋の裏店に住つて、僅かな收入で生活しながらも、親子膝を突き合せて、一家團欒の樂しみを分つてゐる人もある。つまり、心の持ち方の別れ目がかう言ふ結果を來すのです。同じ五十年を送るのが人生ならば、前者の如きは實に世渡りの下手な人と言はなければならぬ。之に反して後者は、消極的ではあるが世渡りの上手な人である。成程、前者は社會に立つては、相應な辣腕を有し、處生上の要領を能く飲み込んで居ればこそ、今の位置を得たのであらうが、內面が恁うでは矢張り、餘り意味がないでせう。

財產があつて好地位があつて、好配偶があつて好子女があつて、加之絶えず樂しい心持を把持して行かれるといふ「好」の字詰めの人は卒知らず、普通一般を標準として見ると、まづ十人に九人否十人が殆んど十人まで、多少の差こそあれ、不足缺點を有つて居らぬ人はない。この缺點や不足を蔽はんが爲には、努めて心を樂しく持つ習慣を作るのが、一番よい方法であることは前に述べた。――されぱと言つて、私は無論消極的になれとか、小成に安んぜよとか言ふのではない。起つべき時には起て、默すべき時には默せ、富貴にして淫したり、貧乏して自棄したりして、世の物嗤ひとならぬやう、前以て注意せよとの意味なのである。

習慣程恐ろしいものはない。朝寢の癖をつけた人は、一生朝寢をする。無聊の時指の爪を嚙むのが癖になつた人は、一生指の爪を嚙む。――この心を樂しく持つといふ習慣も、永い間には乾度第二の天性になる。大事に打つかつても、周章狼狽しないで、一歩退いて靜に考へる位の、餘地は得られやうと信ずる。

……が、兎や角言つた所で、數學の問題でも解くやうな鹽梅に１＋１＝２の如く、キチン〳〵と當て篏まる

べきものでない、又無理に當て嵌めて見た所で、それは實際生活と何等の交渉なき物となつて了ひはしますまいか。私は無益な長談議を止めて、自分が曾て閱して來た狹い小さな經驗、見聞の中から得た暗示をば、私の知人を透して樂しき人々を觀照しませう。

　私の親戚に、斯う言ふ自覺したる八百屋がある。八百屋とはいひ條、未だ歴然とした店があるではなし、狹苦しい裏通りに假住居を構へて、他日の發展を期してゐるのですが、この男の主義、思想が、却々おもしろい。年齢はまだ漸と廿六で、細君と二人で商賣をしてゐるが二人とも揃つて、人間は、



生きてゐることが快樂

である、生きて働くことが即ち快樂なのであると固く信じてゐる。私はこの夫婦が、今後確に好發展を遂ぐべきを、固く信じて疑はないのですが、此の夫婦の說に從へば、人間總ては生きること即ち快樂なりといふことを自覺しないのである。正○位勳○等△爵とか、

何々會社取締役とか言ふ嚴めしい肩書も、要するに「生」の裝飾に過ぎない、名を竹帛に垂れるの何のと言つた所で、それが「生」本來の目的ではなからう、共に倶に贅澤なのだ。自分は只生き只働き、何等かの結果を見れば澤山である。笑つて眠することが出來る。偶々起つて來る厄病や災難だとても、決して無意味に來るのではない。それに打勝つて、生を續け働きをつづけて行く所に、無限の樂みがある。結局、災厄あつてこそ、快樂歡喜があるのであると。

私はこの主義には非常に贊成です。目前の小利に齷齪して、自他を顧る暇のない人が多い世の中に、悠然として而も美しい努力の下に、自分の路を歩んで行かうとする、この夫婦の態度は實に見上げたもの。かくの如き心懸を以て日送る人よ、永久に樂しかれ、永久にこの心より離るゝ勿れ、近き未來に於て、美しい果實が酬ゐられるだらう。——私は衷心より懇う祈つて止まないのである。

いつも〳〵私は、定つて下流の處生法ばかり、屢にも「二圓の結納で結婚した奇特な働き人」を御紹介しましたが、今度も矢張りさうなつて了つた。併し樂しき心持を以て、樂しく暮すと言ふ條件の下にあつては中流以上の人々は、既に其の要件を購ふべき大部分の素質を具備して居られるので、寧ろ樂しく暮らし得ないのが惡いのだとも言はれやう。之れが、私が好んで比較的缺陷の多い、物質的要素に乏しい、中流以下の例を採つた重なる理由です。

就てはもう一人斯ういふ實例がある。私の家の知人で、鐵道院の雇官吏ですが、年はもう彼れ之れ四十でせう。若い中から種々數寄な運命の波に揉まれ〳〵て漸と數年前茲に腰を落ち付けたばかりな人で、月給僅か、

廿五圓で親子五人

の口を糊して行かねばならぬ境遇です。側目から見たならば、隨分苦しい慘澹な生活のやうに思はれるが、實際は案外で、十七になる長男は〇〇中學へ、次の娘と末の男の子は、居住地の小學校へ通はせて、相當な

風采もさせてゐる。尤も主人の勤務してゐる停車場は市内だが、そこがそれ鐵道從事員の有難い箇所で、家はぐッと引込んで郡部にゐて、其處から汽車で通つてゐる。從つて家賃も安いし、物價も安いと言つた次第で、三圓なにがしで三間からの家に住んでゐる。

所が幸福なことには、中學へ行つてる息子も、小學校へ行つてる息子も、揃ひも揃つて成績が好い。大抵二番の立て續けで、三番と下つたことがないと言ふのが、主人夫婦の自慢であり、歡喜であり希望でもある夫婦はいつもさう言つてゐる。

「自分は今迄隨分と困難して來た。職業を取り代へたことも、五度や六度ではない。それと言ふのも、自分の力の足りなかつたのが主因とはいへ、一つには希望がなかつたからである、歡喜と言ふものを知らなかつたからである、それで心も落付かず、失敗ばかりしたのだ。ある時などは、此の苦痛を受けるのも子供の爲めだ、一層子供がなかつたら、如何な事でも出來やうにと、幾度子供を恨んだか知れない。それが今では、

子供の成人が希望の光明

になつて了つて、私等の胸の内も始終照り輝いてゐる今の生活の苦しみの曇りも、前途の光明を見る時すぐ晴れる。私等の心持は、子供の爲に絶えず明るい、嬉しい。此の先どんなに苦しんでも、子供は大學まで通る決志でゐる。――自分の失敗した仕事も、伜に仕遂げられると思へば惜しくない。……」

恁う言つて、この一家は樂しく暮らしてゐる。私の家でも、この一家を羨ましく思つてゐます。

息子の成功を待つ。――この希望の光明を目的にして、目前の小苦を苦とせず、未來の快樂の前提なりとして、孜々と各自の爲事を遣りつゝある主人も細君も慥に「處生の手ごゝろ――樂しき心持を以て働く」を悟つた人として、優に私等の龜鑑とすることが出來るでせう。つひ先達てもこの家を訪問しますと、主人は例日の平和な、得意な顔に微笑を含ませながら、

「先日萬朝に紹介してあつた、ニージニックス論を御

賢みですか」

との仰せ。ユージニックスとやら、何事にかと伺へば近頃西洋の學者間に注目されてゐる『民生改善學』と譯すべきものゝ由。主人は滔々として、受賣演說をして與れましたつたが、論旨の要點は、『今の世に於ては人が自己よりも體質に於て、將た心力に於て劣れる子を遺すことを、最大の罪惡とすべし。古昔よりも進步向上したる國家又は社會は、古昔より順次に大體に於て人が自己より優れる子を產したる結果なり』といふに歸着して居つたやうに覺えてゐるが、(四月六日より十日萬朝報)之れが、端なくも主人の自慢話と一致したのだと思ふと、私は心からの微笑を禁めあへなかつたのである。

　この人の態度に、果して人生の意義があるか無いかそんな難かしい事は私は知らぬ。けれども少くとも本人だけは幸福である。個人の幸福は軈て、國家の幸福である。ユージニックスの說に從へば、少なくとも罪人ではない、寧ろ國家の功勞者である。

兎に角、私が前々から述べて來た主義を實行してゐる人、若しくは其れに近い心持を以て世に處してゐる人なるが故に、私は深い尊敬と羨望とを以て見てゐるのです。

△三越の兒童博覽會

頃日來三越吳服店内に開催せる第二回兒童博覽會の成蹟に就て聞くに、其の出品人は三府十八縣の廣きに渉り、其の出品點數は二萬六千二百二十三點の多數に及び、玩具の如きは著しく實用に適するものゝ增加を見し由にて、前回に比すれば大なる進步なりしといふ、會場内部は、教育、保育、服飾、玩具の四部に分たれて、何れも子供に關する物品は殆ど悉く集められ、加ふるに其筋より貸下げられたる三皇孫殿下御料の御玩具數十點をも場内に陳列して廣く觀覽に供したれば、子供を有する者に取りては參考として非常に有益なりしと共に、會場の背景に富士山汽車の疾走するところなどを示し、又桃太郎の銅像を中心として、大噴水あり、百花爛漫の庭園あり、其他の裝飾皆お伽式に出來居りて、子供の爲にも頗る趣味多きものなりき、去る五日には出品人に對する褒賞授與式ありて、優等者に對しそれぞれ賞品を授與せられたるが此の種の催しは、兒童用品に對して世人の智識を增し、その改良を促すの効頗る大なれば、委員諸氏、出品人諸氏の盡力により次回は今回よりも更に一段の進步を見んことこそ願はしけれ。

受賞目錄

△機敏に働きて同情を失つた人　一等　金參拾圓　野の花
△當世世渡り秘術　二等　金貳拾圓　相模の夕立
△賢き妻　三等　金拾五圓　木の葉
△戰はずして得たる勝利　三等　金拾五圓　玉露
△獨立獨行の模範　四等　金拾圓　里の女
△狹い人と廣い人　四等　金拾圓　湖畔美人
△平和の生活に行く道　四等　金拾圓　白桃

△樂しき世渡り人　五等　金七圓
△僞らざる告白　同上
△新クラスメート評判記　同上
△世渡り修業の卷　同上
△樣々の人の性情　同上

△世を趣味で見る人
△私の姉の世渡り術
△當世鶺鴒夫婦
△大魚を捕へし女
以上六件　七等　金參圓

△交際陸離の我が友
△猛烈に世を罵る人
△初奉公の經驗
△ひかえ帳

△輕薄な世渡り術
以上五件六等　金五圓
△樣々の人の噂
△下女より得たる教訓

金魚の飼養法

夏の夕に軒の釣り葱と共に一種清涼の氣を感せしむるものは金魚の游泳してゐる樣である。

△飼育法　にはいろ〳〵あるが、最も平易で且つ素人にも飼ひ得らるゝ方法は容器と場所と餌食とに注意すればいゝのである、容器はガラスなどを用ゐてゐる人もあるが、これはよくない、一番よいのは木の箱で普通三尺に六尺位のものがよい深さは五六寸位のところがまづ程度である、さてこの中へ幾尾位飼育するかといふに當歳の七月で三十尾、同八月で十五尾、同九月で七八尾、二歳兒で六七尾、三歳以上が四尾位が丁度いゝ加減である、餌は二歳以上は毎日午前十時と午後二時との二回に與へる其量は約三十分間で食ひ盡す位にして與へればよいのである、又當歳兒は午前七時から午後四時頃まで通じて與へねばならぬ以上の三個條をさへ注意したら滅多に死ぬものではない。

△金魚の餌食　は普通ぼうふら、絲みゝずであるが近來衛生上下水などを清潔にされる爲め孑孑は自然少くなつて來たので今は人造の餌食が出來た、それはメリケン粉五合に豚肉十錢、卵二個、砂糖三錢位を混じて細く絲のやうにしたもので、ぼうふらと同じ性分を有してゐる。

△金魚の種類　は澤山あるが最も賞翫されてゐるものは金鋒俗に丸子といふものである、其の良否を識別するにはまづ頭、背、筒、尾、腹、鰭の形狀を見るのであるがこれは如何に名人でも幼時に豫め識別する事は出來ないのである、何故かといふに幼い時は不具な所なく滿足であつても段々成長するに隨つていつとはなしに其姿勢が變化して來るのである。

△緣日物　諸所の緣日や夜見世で賣つてる金魚は無論屑物であるが、彼等が金魚屋から買ひ受ける値段は一千尾で普通が五圓、小流が八圓、小鰹が三圓、黑二寸位が四五圓、赤二寸位が五圓、一尾の價ひ平均三厘から八厘位までゝある、尚緣日ものは弱いなどいふものもあるが、それはつまり飼ひ方がわるいからであるガラスの容器の惡い事は勿論であるが、强いてガラスに入れやうとすれば夜分だけなりとも盥か何かに入れて毎朝日中に水を代へてやらねばいけない、又餌は夜中に與へて日中に與へぬ樣にせねばならぬ。



病床三月

河岡潮風

一昨々年の頃から前屈すると脊骨が痛くて　だん〱反り返つて歩いてゐた。色々博士や學士に見てもらつたが、リウマチスとの事。去年の末大學病院の整形外科へ持ちこめば、これは大變でセムシの反對に後方に反る病氣で、類が少ない中にも、僕位ゐ思ひ切つてフン反り返つたのはついぞ見ぬと、田代博士も驚き顔。是非にと寫眞を撮られた聞けば。獨逸の一貴婦人が世界のレコードだといふ。僕のはそれに亞ぐかも知れない日本では類がないんだ。日本の醫學界に貢献する處少々でない。と却々鼻を高くして、益々反り返つてゐたが、年末から年始へかけて、熱海、箱根と飛びあるいて、挫骨神經痛を惹きおこし、哀れや、十歩と歩めぬ美事の病人となり、一月十一日から臥床九十日、未だ全癒せぬのである。或男評して「女學校評判記で惡口をかいた祟りだ」と、或はさうかも知れない。女の一念は恐ろしいものだと痛切に感じたが、持つて生れた毒舌、惡筆、なほ鋒を收めず。犬の年だけあつて、病床より遙かに遠吠する次第である。

▲無病なるは不幸なりと漢人もいふた。病氣の折は普通の狀態でないから、感想もまた平常と異る。人間の他の半面を見る事が出來る。無價値ではない。「こけてもたゞおきぬ」これがセチからき此世をわたる唯一の主義でなければならん。

▲病氣すれば、眼に見えて手にとれぬもの豈獨り「陽炎、電、水の月」ばかりであらうか。三尺の場所にある書物すら、一々人手をわづらはさねばならぬ始末。天下を鵜のみにする樣な法螺を吹いてゐても、カラ意氣地がない。病んで人間の弱小なる事を悟る。恐怖といふ事を知る。無病息災の男に惡德漢多き理由であらう。

▲病氣をなほすに二法。無理をして病氣に勝つのと、病氣の云ふなりになつて、快癒を待つのと。グラッドストンはつねに後者であつたさうな。此の方法なれば大病にならぬ。僕もこれに左袒する。トルストイの無

抵抗主義も病氣にだけは贊成だ。

▲「氣から病ひが出る」といふ。靈は絕對的に肉を超越する譯にもゆくまいが、或程度までは有効である。病氣になつて、これはたまらんと凹むでは、益々駄目だなる樣によりならぬと觀念して、たゞ一意に療養に手をつくすがよい。病氣になると大抵は宿命論者になる。

▲御退屈でせうと來る人每にいふ。どうして〳〵一日に何本か手紙をかく、原稿を認める。讀書する。詩吟する。俳句を作る。腰折れをやる。來客、校正。食事なか〳〵これで急がしい。春の永き日が短かくてならぬ。これだからあまり衰弱しないのだ——轉がる石には苔つかず。病人に爲すべき仕事がないときには非常に衰へる。誰しも萬一のときの心意に暇を消すものを習つておかるゝがよい。

▲貧血を防ぐため鐵劑を用ゆ。一ポンド入四十錢、これで一ケ月は大丈夫だ。醫者から買へば二日分二十四錢、一ケ月三圓六十錢である。眞に藥九層倍の儲け。こんな因果をやるから醫者の子弟多くは豚犬だと、相手もあらうに醫科大學生に語れば、先生クミチンキを甜めた樣な顏をしてゐた。

▲かつて神戶中學にありし頃、晝食をパンとし、每日白銅貨一枚握り行きて歸途翌日の糧を買つたのであつた。ある時——まてよ、三十七年六月廿日と書いてあるぞ——傳導師來校して、聖書類を勸めた。小形のバイブルは五錢だといふ。ふと欲しくなつて例の軍資金を抛ち、翌日は晝食を我慢して濟ませた。空腹は僅か一日にして、ナザレの聖者が一代の言行錄は永く〳〵僕の手に殘つた。

今、久し振りで塵を拂つて繙けば、紅痕綠跡縱橫無盡、一として當年の耽讀を證明せぬものはない。クリスチヤンならざるクリスチヤンとして、誘惑より免れ得たるは、五錢の此バイブル與つて力があるのだ。恐らくは生涯を通じて最も善く利用されたる五錢であらう。

これにつけても思はれるのは、主婦たる人の心懸けである。活用すれば十金も千金に勝り、死用すれば千

金も十錢に劣る。「女房は臺所からもらへ！」と昔の爺さんよく云つた!!

▲鼠は賢こい奴だいつか僕の足が立たぬのを知り居つて、眞晝中でも眼の前へチョコ〳〵現はれる。あまり業腹なので、枕頭の蜜柑をポン〳〵投げつけた。始めは膽を消して逃げ隱れたが、終には書棚の上の安全な遠方から首つき出し



て、平氣で見おろして居るわい。猛然と飛びかゝつて小鼠共を拉ぎ殺してやりたくおもふ

この事を一友に語れば名言を吐いた。曰く「此頃の女は皆その鼠の亞流だよ」

▲傳へ聞く、外國の一囚人牢中の徒然を鼠にパン屑を與へて慰めて居つた。仕舞には何匹かの鼠が彼の周圍をおッとりまいてダンスをして、時

には肩の上へ驅けのぼつて嬉戯した。刑期滿ちて放免されるとき、囚人は寧ろ獄中に停る方が、なまじ赦されて友なき世に出るよりもよいとかき口説き、鼠もまた別れを惜む風情であつたと。此頃の鼠と女はどうであらうか。蕭然としてマクスオーレルを想起す。

「女は植物の如し。美き花を咲かすも惡き花を咲かすも園丁の腕次第」

▲客「金があつたとて、病身ではツマリませんなア」

僕「だけれど金がなければ、なほツマリません！」

……見よ、世上には慰むる者なく、金なく、病骨を抱いて呻吟せる多くの薄倖の人がある事を！　兎に角にも呑氣に養生の出來る人は、その恩惠を天に謝すべきであるとおもふ。

▲病者の心を知るものは病者か、或は大病の經驗ある者に限る。僕の臥床を冒險世界誌上で讀むで、各雜誌の讀者から見舞狀を辱ふしたが、最も心を動かしたのは、目下自分もこれ〴〵の病氣で臥床中だといふ二三通の手紙であつた。女學世界の愛讀者といふ北海道の某女史などは不治の病（肺？）で數年惱んでゐる由こまごまかきつけた爲、不足税を徴られた位。見舞の言葉も通り一遍の挨拶でない。

僕は此意味よりして、將來主婦となる女學校卒業生は一度は一年志願患者として病院に收容し、しみ〴〵と病氣のせつなさを知らしめるが必要だらうかと考へる。

▲人の同情には自ら制限がある（と敢ていふ）不治の病または恐ろしい長病、或は業病にかゝれば、如何に親だつて兄弟だつてよい顏をして呉れぬ。イヤ、時にはこれ聞けがしに『早くカタがつけば……』など、いふかも知れない。人に捨てられ、世に棄てられた時、來よと招くものは神佛の手である。慰めてくれるのは經典の文句である。宗教は弱者の愁を迸出せしむる安全辯である。

▲死ぬ死ぬと自らいふ女は長生して、豪語壯言する男は多く早世す。瘦せた夫と、太つちようの妻君とを見るとき、あゝこの夫を殺す者は汝かと云つてやりたく

なる。

妻君の指には黄金燦然と指輪が輝いてゐる。と反對に夫君の眼は光鈍い

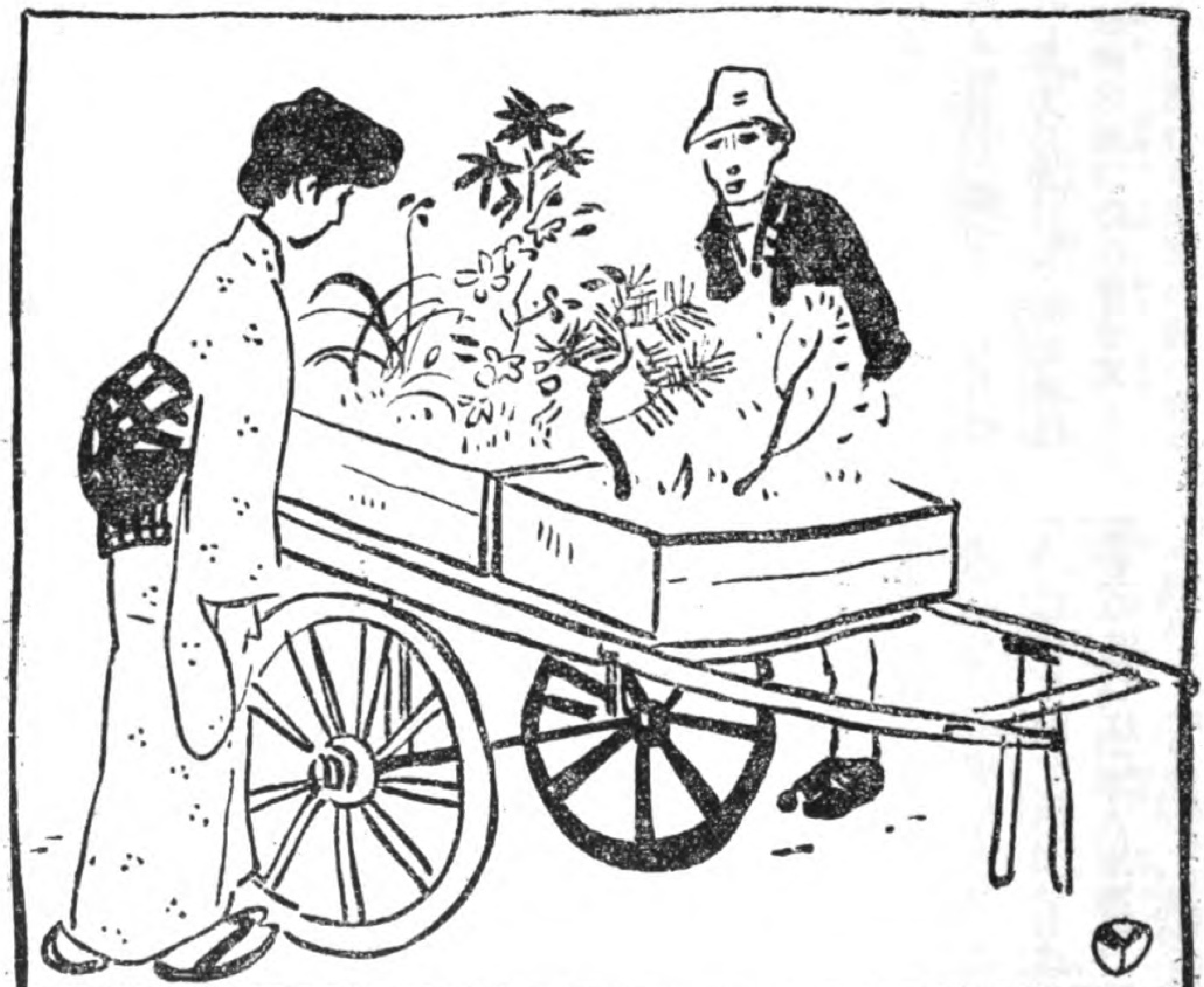
『貴郎、生命保險におはいりなさいな』

などゝいふはこんな妻君に限る也。

『なアにおれは百二十五まで生きるよ』

これは啞がれた、聲の主。

▲特にうれしかりし見舞品——一、恩人先輩よりの品——草花の鉢——油繪——遠き友人よりの寫眞——詩歌俳——要するに食慾があまりないから



視覺や、感覺に訴へるものが僕を喜ばせた。そんなら、干菓子、蒸菓子は嫌ひかね？ どうしてどうして、戴くものなら夏でも小袖、此病人まだ此慾心あり。命は大丈夫と笑はれた。

▲スエズ運河開通者レセップを奬勵した佛國の某伯は、有名な朝寢坊で、同時に見え坊であつた。侍者毎日その枕もとに立つて、

『閣下御目ざめなされませ！ 世界の者は今日も閣下の御精勵を期待して居ます』

と云へば、一擧で、飛びおきたさうな。妻君が夫を操縦するにも、夫の弱點につけ込んだら、有効ではあるまいか。

この話をある中學生にしたら、翌日その差し出した見舞狀に

「閣下、御全快なされませ！　世界の者は閣下の御精勵を希望して居ります！」

僕、讀過一番、おや〳〵おや。

▲見舞狀の出色歟あるなかに、巖谷小波氏が伊勢山田よりの見舞狀に、たゞ

「神託に曰く。「程無く快癒あるべし」云々」

と大書してあつたのは誰しも緣起を祝ふ病人への言葉として神髓を得たるもの。

▲滑稽趣味なものでは女學記者の

「三千年に一回大陽系を見舞ふ彗星が誤つて、お月樣の秋波に墮ちて人間界のものとなつたのが、河岡潮風……」だの、

久留島武彥氏の

「日本醫學界のレコード自重せよ、實を云へば、見本にしておきたい。なほつて呉れては困る」などは罪がない。

▲眞面目なるものには、坪谷水哉氏の

「如何なる豪傑も病氣には勝れませぬ。先々御氣長に御保養專一に祈上候」

押川春浪氏の「御全快の速かならん事を天に祈る。内心燃ゆる思ひありとも何事も心膽の練習也……」

ベルリンの心友田淵君の「遠きにありて切に君を念ふ一人の友ある事を忘るゝ勿れ。心やすかれ君よ。僕の一心だけでも病氣は快癒せん」

▲臥床九十日、やゝ癒ゆ。熱海へ轉地然るべしと、醫のすゝむるまゝに、二ヶ月を同地に送る事とした。何百卷の藏書も好愛する器具も持ち行く事が出來ぬ。何だか淋しい心地がする。人生百年に滿たず。强慾非道な、惡辣な腕を振つて七珍八寶を蓄ふるも、一として冥土の道づれにならない。吾等は赤裸にて來り、赤裸にて去るのだ。何ぞ財寶に思ひわづらはんやである。

今宵を名殘としてしばらくは別れる電車の鈴の冷やかに響く事よ。明日よりは熱海の濱に浪の音を友とし夜航船の汽笛に夢破るれば、溫泉の宿の寂として、壁にうつる吾が影ひとり瘦せて、孤島に謫せられた心地がするかも知れない。

永き生活が變調を來すとき、人は皆な詩人の心となるものである―(四月九日夜)

▲病床のノートに記せし片々。

▲病ひは艶消しの仕事也。熱き戀に對する三斗の冷水也。

▲昔時の戀は「クセモノ」也。近時の戀は「ウリモノ」也「キワモノ」也



▲神は一方に奪つて他方に與ふ。活動、勉強し得る範圍にて病むは寧ろ幸福。

▲大病のときの心持ちを忘れぬ者は善人となるべし。

▲臥床前の注意、手おくれにならぬ事第一。臥床中の注意、元氣をおとさぬ事第一。拂床後の注意、輕はづみせぬ事第一。

▲病氣の折には必ず病中の感想を記しおくべきものなり。快癒して後見て多大の敎訓とヒントとを得べし。

▲天は人生に病菌を播きたれども、いまだ人間に與へるほど殘忍ならず。病氣するは人間が自然の生活法に背きたる罰のみ。法を犯して罰なき世間豈あらんや。

歐米各國洗濯の話

洗濯には三つの種類がある一は日本では東京などで行つて居る洗張屋、しみ抜屋、京染屋の類で二は外國に盛に行はれる蒸氣洗濯、三は家庭内で行ふ洗濯である。中にも第二の蒸氣洗濯は最も研究の價値あるものと思ふ。

第一種の仕事はフランスが最も盛んである、それは絹物を多く用ゐて着飾る國であるからで、古くからの經驗を有ち仕事は完全に近い。日本で行はれるものは半襟とか衣物の一部分とかで此の方法を以て衣服を丸洗ひする事は無いが、追々衣服に迄も應用されるであらう。けれども多くの經費を要する事だから容易には出來ない。

第二の方法は日本で西洋洗濯と稱するもので手で洗ふことに限られてゐる、蒸氣で行るのは、横濱に一軒ある。手洗の洗濯は品物のためにもよく、事が叮嚀にされるが、時間と勞力とを多く要する缺點がある、現今の日本ではシヤツやカラアが多、洗はれて敷布や手拭類は餘り無いやうだ、かういふものが多くあるやうになると、手洗では迚も間に合はなくなる、一般の人が大に白い布を洗ふやうになれば將來必ず日本にも蒸氣洗濯の法が起るに違ひない。

蒸氣洗濯の機械を扱ふ事は却々六ケしい、先づ洗場で石鹸を溶かしなどして、次に洗ふ機械へかけるが、容易に洗へない。水が多ければ布が浮いて了ふし少ければシヤボンの廻りが惡いといふ風で却々經驗を要するものである。

米國の街では金曜日頃になると洗濯の馬車が盛んに活動して、洗濯ものを受取つてくる、取つて來た品は白いものと色ものとを分ける、絹物と木綿物とを分ける其中から又カラアはカラア、シヤツはシヤツ、シイツはシイツといふやうに分類して機械に入れて洗ふ、夫から水を切り乾燥室で乾し、或ものは糊を敷き次に鏝を掛けて其れ〴〵の棚に載せるといふ順序である。斯樣に蒸氣洗濯は米國のみならず英國にも獨逸にも盛んに行はれて居る、フランスは餘り盛んでなく、自國の長所である絹物色物の方が多い、ニューヨーク市中で大仕かけの洗濯屋は百四十八軒ある。

米英獨の三ヶ國で重に行つてるのは白人である白人以外では米國では黑人であつて、男は重に機械の方に立ち、女は手を使ふ方に廻る。日本や支那では男が主であるのに白人や黑人の洗濯業者は女の數の方が多い。

日本人で米國で洗濯業を營んで居るものは桑港に一番多い、今は在米日本人洗濯同盟會といふ組合が結ばれて其中に加盟して居るものが三十一ある、組長塚本氏の洗濯所では五十人程の人を使ひ盛んにやつてゐる。

第三の家内洗濯の有樣は米國では何れの家にも洗濯場が一番下の室に在る洗濯婆さんを雇ひなどして洗はせる、フランスでは政府或は市で洗濯場を造つてゐる巴里には洗濯船が十九あつて洗濯家屋といふのが四百程あるさうだ洗濯場を使用したものは湯を使つた分量、品物の日方、乾燥室の使用等に對して税金を拂ふ、それが市や政府の收入となるといふ方法を行つてゐる。(瀧澤溟氏)

家庭衛生

梅雨中の子供衛生

梅雨中は何人も胃腸の働が不活潑で、殊に小兒の如きまだ胃腸が十分發達しないものは其影響を受くること大なるものであるからこの時節に尤も注意せねばならぬ。

◎腸カタル

小兒の腸カタルは決して輕病でないから速かに相當の手當をしなければならぬ、慢性のものも急性のものも其症候は概して同じで何れも脂肪の少きソップ牛乳麥粉の煮汁等を少量宛何回にも與へ十分食養生を守らねばならぬ、此病氣は決して藥劑の力のみで治癒すべきものでないから牛乳を用ゐて居る小兒には人乳を呑ましめ、又は羊の乳を與ふなどすればよろしい、又患者が渇を訴へる樣なことあれば、水を加へて薄めた葡萄酒を與へ腹部には晝夜濕布を卷き或は腹部にオレーブ油又は肝油を塗布を以て其上を卷くもよろしい。

◎消化不良症

最も注意を要するは此病氣である、此病は往々にして、單に胃が少し惡い位に思はれ其儘に打過ぎるものが多い其實或程度までのものは姑らく置き或る程度以上になると甚だ危險である、この病氣の原因はいろいろあるが其重なるものは食量の多過ぎる事である人乳で發育する小兒には此害が少いけれども牛乳で育てる小兒には却々多いから注意を要する。

◎牛乳の注意

通常の食量を與ふれば二時間位で胃の中が空虚となるのが、大量を一時に與ふる時は空虚とならず、胃の中に前の食物の殘りが溜つて居て、それが腐敗に傾き、分解するやうになる、其處に又次の食物が這入れば、其食物の殘りは又分解するといふやうになる、斯く分解した乳が小腸に至るも、此異常分解は止まず遂に之が爲めに腸の蠕動、亢進、腹痛等の原因となる是等は主なる原因の一つである。

◎乳を吐く理由

併し其飲量が少し多過ぎて小兒が咳嗽の際又は戯に身を動かす時に飲みたる乳を吐くことがあるのは日常屢々目撃する所であるが、是れは小兒の胃は未だ十分發育せざると胃の位置が垂直になるとに依り吐くので決して惡症なる病的の症候でないのであるから別に憂ふるに及ばぬ。

◎油斷はならぬ

又牛乳で營養して居る小兒には生長するに從ひて、漸次に牛乳を稀釋する程度を少なくして行くのであるが、若し小兒の發育の程度に適合しない濃度のものを與ふれば、矢張り前と同じやうな結果となる、又食物の成分にも關係することがある、食器の洗ひ方が不十分のため有毒物質が乳の中に入ッたり、又傳染病毒が乳の中に混じたり、又飯や菓子、果物の如き年齢に相應せざるものを與へたときに起るものである、此消化不良症は他の小兒に傳染することがあるから、隔離して養生せしむべきである、本病は前記の如く牛乳にて營養して居る小兒に多く起るのであるが、母乳又は乳母の乳の證明し得ざる變常、授乳者の精神の過勞、月經又は他の病氣の時には人乳にて育てる小兒にも起ることがある。

◎吐乳と青便を催ふす場合

此病氣の症狀は非常に輕くして直ちに治癒するものもある、一方には又非常に重くなり直ちに死亡するもある、斯くの如く其病狀が一致せない故、素人は却つて等閑に過ぎ易く、遂に救ふべからざる症狀を呈するに至りて、始めて驚くものが少なくない、併し此時は治療法は最早や施すも甲斐なき時で、唯死を待つより外ないのである、故に斯る病氣になりたる疑あるときは病の輕重を問はず速かに醫師の治療を請はねばならぬ、輕症の場合には食慾多少減じ安らかに睡眠するを得ずして泣き易くなり、便通の度數が多くなり、大抵の場合は發熱し、重症になれば下痢が甚しくなり腹部膨滿し嘔吐を催し少しも食事をなし能はざることがある顏貌は嗜眠狀態となり全身の疲勞甚だしく、一

見しで容易ならざる病氣であることが判る。

◎胃液の二作用

元來胃液は消化作用を營む外に乳汁の胃中に於て腐敗するのを防ぐ力ありて適當なる分量と時間を規則正しく與ふる時は胃液はよく右二ツの作用を營むものであるけれども若し多量の乳汁が度々胃中に入る時はこれを消化せしむるために胃酸は皆其方へ用ゐられ、防腐作用を十分に營む事を得ずして腸管に送らるゝが故に却つて腸中にある細菌のために好發育場となり遂には種々の症狀を表はすやうになる殊に人工營養、即ち牛乳で營養せる小兒は此危險が多いから大いに注意を要する次第である。

夏季の飲食物

氣候と病氣とが深い關係を持つて居ることはいふまでもない話で、まづ大體に於て夏は胃腸病、冬は呼吸器病が多いものとなつてゐる、從つてその胃腸病が食物と大關係あると勿論であるがこゝには主として小兒の夏季飲食物に就て申しあぐれば。

第一に夏の食物は冬よりもずつと淡泊なのが善く肉食も夏は可成控へ目にするがよい、一體滋養物なるものは澤山食べたからといつて澤山滋養分を殘すものではない、効力の有無は吸收力の多少にあるものであるところが夏は消化力、即ち吸收する力が甚だ振はない時であるから多くの滋養物を食ふたところで消化されないで通過して仕舞ふ、して見れば夏季は澤山食して腸胃を損ふよりは少食して適當の吸收をさせた方がよろしいのである。最も病人の恢復期にある時は滋養物を一時に取る必要もあらうが、成長期にある小兒などは全然其必要はない、たとへば牛肉などは一日の分量三十目と定めたれば其れで充分である、それを五十目乃至百目に增加すれば營養分を供給しないばかりでなく却つて害を殘すばかりである。

これを今更仰々しくいふ程の事でもないが一概に新鮮だからといつて胃腸にさしつかへはなからうとはいへない果實の如きは新鮮なるが爲めにその反對に腸胃病を起す事がある、故に三四歲の小兒には絕對的に果物は食はせないがよろしい此外注意すべきは豆類と香の物である。

▲病毒傳染の豫防

◎寢床は食後まで放置し、掃除は必ず食後になすこと。大きい家で、食堂と寢室とが離れて居れば、風向によつては、必ずしも食後まで寢具を放置する必要はないが、寢具に未だ溫度の殘つて居る間に疊み込むことは宜しくない、又掃除をして塵の飛んで居る間に食事をするは不衞生也

◎寢床を敷く間際に其の室を掃除するは宜くない。

◎寢床を敷くときは成るべく靜かにして塵の立たぬやう、之を取りかたづけるときはいたく樣にするがよい。

◎寢床は一週間に一回位必ず日光に曝すべし。日光は殺菌力即ち細菌を殺す力があるから、此の目的で十分強い日光に曝すがよい。

◎寢具には常に敷布を用ゐ、度々之を洗濯せねばならぬ。

◎室内の掃除はよく風向を考へて、風上から風下に向ふてせよ。

◎一週間に一回位は床と疊との間の塵を掃除するがよい。是は單に衞生上のみならず蚤の繁殖を防ぐにも功がある。

◎天氣晴朗にして風の強い日には時々疊をたゝいて塵を拂ふがよい。

◎夏は凡そ二回位四十倍の石炭酸水で、疊表其の他室の各部を拭ふべし此の場合には手の皮膚が白くなつて、少々痛を感ずるが、清水でよく洗ひリスリンを塗ればよい。

◎疊は一時に全體でなくとも、一二枚づつ絶えず交代に日光に曝せよ。

◎傳染病の流行するときは、靴拭の樣なもの、又は筵でも置いて、是に二三十倍の石炭酸水を含まし下駄、靴などをこれで拭ふて入るがよい。

◎傘は倒立して、柄の方を上にして置くがよい、此の點から考へると蝙蝠傘は都合がよい。

◎草履は足に塵を附ける事が夥しいから成るべく用ゐぬがよい。

◎下駄を轉倒せしめぬ樣に注意せよ。

◎爪は常に短かく切つて、間に垢の入らぬやうにすべし。

◎頭髮は女子にありては一週間に一回位、男子は入浴毎に洗滌せよ。

◎入浴は隔日にし、常に皮膚の清潔を保つがよい、但し冷水浴をするものは一週一回にても宜し。

◎入浴のとき、湯槽を出たならば上り湯又は冷水にて全身を清潔にせよ

◎手拭は水の濁らぬまで洗滌するがよい。

◎小兒の頭部は入浴毎に石鹼を以て洗ふがよい。

◎食事の用意前には必ず手を洗ふがよい。

◎夏は食器を三日に一度位熱湯中で洗はねばならぬ。

◎布巾は日々熱湯にて洗ひ日光に曝すがよい。

◎野菜は清潔に見えても病毒のあること多きもの故、煮て食するものゝ外は念を入れて清潔に洗ふがよい、殊に大根などの葉は危險である。

◎下駄又は靴を修理せしめたるときは、適當の消毒法を行ふべし。

◎煙管を修理せしめたるときも、前條同樣の心掛が必要である。

◎飯の疊の上に落ちたるものは拾ふて食はぬがよい。

◎俎は度々熱湯をかけ洗ひ、日光に曝して乾かさねばならぬ。

◎果實はそとの皮を剝いで食ふものと雖も、清潔に洗はねばならぬ。



女の手紙

内藤千代子

小學教師の君へ返事

先生、過日はお邪覧に參上、失禮ばかり致しました。あの折の女學世界、昨日わざ〳〵お使者にお持せて……たしかにお請取申しました。まア細谷先生ですゐ分な方ねエ、初めからあまりお温和しいとは思ひませんでしたがまさかこれ程までとは……。餘りです、借りた品物に無斷でその人の惡口を書き散らすなんて失敬な。まして婦人に對して……。實に文明の男子にあるまじき所爲よ、口癖の二十世紀〳〵はどう遊ばして口惜しく腹も立ち可笑しくもあり、赤インキのペンのあとをながめて、思はず苦笑を禁じ得ませんでした。

私れ、あんな作でかれこれ有仰られちやア不本意なのよ、もつと近來の……本能發揮振りので十分御評が願ひたう御座んすわ、けれど先生は駄目、何でもかでも一言一句妙な意味にばかりおとりなすつて、變にお冷かしなさるんだもの。そりやア仰せの通り「小學教員なんか……」とは惡いことを申しました、すみません、が、私はまつたく「なんか」と思つてるんだから仕方がないでせう。どうしても鼻たらしエンセルのお守なんか御免ですわ、それはもうその中から未來の博士も出やう大將も出やう大臣も出やう、アドミラルやナイチンゲール女史の卵もおるでせう神聖な天職でございませう、とても功名心やヴアニチーの強いがり〳〵亡者にや我慢の出來んお役です、だから神聖なんでせう。肝な寄す、天下の小學教員諸君!!　御職務お大切にしつかり願ひますよ。

「一師範學校教育を受けるのはあだに月日を過すのですか。しからば婦人の青春は如何にして過すべきか、一寸伺ひたいのです……」との御反問、これには恐れ入りました。どうもまう逆襲されちや……お答へに困ります。否れ、先生はあまり正直過ぎますよ、潮風さんの口眞似するやうだけれどレトリツクと云つてれ、かはとか正確な數字の類でさへな

けれぱ多少大袈裟に云つた方が强い印象をあたへるから…白髪三千丈といひ、十萬と稱する、みんなこの筆法でせう。私だつて筆が辷つて思はぬ分心にもない事も書くし、法螺も吹きますわ。それを一々信じて了ふ先生はまだ〳〵初心ねえ。齢が淺い。未來は極樂往生うたがひなし。南無阿彌陀佛――なもわあみだぶつ……おや、失禮、つい口がすべつて。ホヽヽとにかくれ、お氣に障つたとこがあつたら勘忍して頂戴。また虛榮心の結晶が何を派手な熱吹いて居るかとお思ひになれば、別にお腹も立ちませんでせう。燕雀何ぞ大鵬の志を知らん……。

「靑春の折氣儘た教育せられた人が何でよき實を結ばん……」

と有仰つてれ、私は一種のデカメンですかられ、かくせざるべからざる内心の要求によつて働らくので……末はどうなる事やら、よき實なんぞ結ばなくともいゝわ。何でも自分の欲するまゝをやれるとこまでやつて生きて居られなくなつたら華嚴の瀧へでも飛び込んで了ふばかりよ。オホヽヽこんな女はまつたく亡國のもとですれ。實にけしからん……。先生のつちかひ給ふ大和撫子……の芽生からは夢にも、こんな女の出ぬやうに、婆心ながら祈り居ります。

「……あなたは戀を知らぬと云ふ評判だが……戀を知らぬなどはウソのウソ、君は皮をかぶつて今日社會をあざむいて居るのですか……云云」

先生、これは聞捨に出來んお言葉です。私が何で社會をあざむいて居ますか。先生は私が人を戀してると有仰るんでせう。それがどうしました、意志は自由だから人を戀ゆるは勝手です。戀を知らぬと云ふ評判―評判は他人が立てるんぢやありませんか。私の知つたこつちやないわ併し……先生の有仰る戀とはどんなのですか、よもや戀愛最後の墮落たる……肉體の戀のことを云つてらつしやるんぢやないでせうれ。

「結び髮のみだるゝはあたりまへサ、併しそのみだれぶりによつては十分……コトが出來る」

た何です、御自分の品性の程もおもやひられる。御自重遊ばせ、第二の國民を養成すべき……任務は重大で御座いませう。

「御父上が御在世ならあなたはまだ今日のあなたでなく、實に令孃風であつたらうと思はれる……」

おほゝゝそれこそあたりまへサ、萩香はこれでも一家の戸主ですから、親がゝりのお孃さん達の眞似はして居られません、あらねつぱさを疑はれるのもまつたく境遇上からです、先生だつて父が居ましたらまさかあんな……あんな事有仰りはしますまい。お轉婆にや誰がしました。

けれど先生。私も日本の新婦人です。どうぞ長い目で御覽下さいませ……。

中途ながら只今三時半のタイムが鳴りましたから。これで失禮致します。今日のお八つは栗饅頭……これから紅茶を入れますので……。私の立つたまゝに筆を執つてのみだれ書き、かず〳〵の過言、御寬容を願ひます。

萩香より

細谷大人

海外に於ける私の十年間

婦人裁縫師　鈴木濱子

京橋區南傳馬町三丁目九番地に婦人服及び小兒服の裁縫業を開店したる鈴木濱子女史は、先年佛國大博覽會の砌、妙齡十七歳の繊弱き身を以て渡航し、爾來十年間佛、英、米、和、白等の諸國を遍歴し最後に白耳義の首府ブラッセルに止り、女子裁縫專門學校に通ひて苦學を積み、優等の成績を以て卒業し、昨年歸朝したる婦人なり、其經歷に就いて同氏の語る所左の如し。

△裁縫が好き、音樂が嫌ひ

まだ開店した許りですから、何や角や忙しうムいまして、一人で月を廻して居るのでムいます、今日も午後から濱まで一寸參らねばならぬ樣な次第で、緩くりお話の出來ぬのは殘念でムいます、けれど未だ時間がございますから、雜とお咄し致しませう、まア何卒御掛け遊ばして下さいまし、先づ洋行前の履歴から申上ぐれば、私は小學校時代から父の意に從つて、畫を習ひに四條派の奥谷秋石先生の許に通つて居りました、で、號を秋華と申します、父の庄次郎は蒔繪師でムいましたから、私をも同じく蒔繪師にする積りだつたのです、それから高木千代子と申すお針の師匠に就いて裁縫を習ひました。私は幼少の時分から裁縫が好きで針を持つと一生懸命になりましたが、何う云ふものか音樂が嫌ひで、鳴物を聞くと耳を抑へた程でムいます母は私に踊を教へたり、琴三味線を習はせたり致しましたが、何うしても覺えませんでした、其に引替へ裁縫の方は根が好きなものですから、熱心に稽古致しました、それから刺繍はお友達の北村秋子と申す方から學びました、是は佛國に參るに就いて必要だといふので、速成的に習つたのでムいます。

△洋行の動機

渡航の動機と申した所で、別に六ヶ敷い理窟があつた譯でもなく、唯だ〳〵行きたくつて行きたくつて仕

様がなかつたものですから、好い機會があれかしと思つて居ました所、三十四年の春、私が十七歳の時でした、出品協會の人や親戚の者やお友達の方々が佛國巴里の萬國博覧會へ賣店を出しに行くと聞きまして、羨しくつて耐りません所から、私も仲間に入れて貰つて一緒に連れられて參つたのでムいます。私共の一行は十五人でムいましたが、女は北村秋子さんと私の二人限でムいました四月初旬に佛國船のラウス號に乘組んで、五月の末に巴里に着きました、それから私と秋子さんとは賣店の店番を致したのでムいますが、人の目に着く様に日本着物を着て呉ろとの注文でしたから、裾模様の三枚重に丸帯を締め、頭も高島田に結つて、御殿様然と店頭に坐り、手帕の刺繍を致しては即賣しましたが、私共の可憐な姿が呼物になつて、大層繁昌しました。博覧會が閉會になると直ぐに、同行の人々は歸朝されましたが、私と北村さんとは跡に殘つて手藝を研究する積りでしたから、他の方とはお別れして倫敦に參りました。倫敦には親戚の加藤と申す者が雜貨店を開いて居るので、其へ便つて行つて、希望を述べた所、然ういふ譯なら當分店を手傳つて呉ろと申されますので、此處でも日本の丸帯姿で手帕の刺繍をしながら、店番をしたのでムいます、すると珍らしがつて人がたかりますので、お陰で賣行が好いと言つて主人は喜んで呉ました。私は斯うして晝の間は店番を致し、夜分は加藤の奥さん(英人)に就いて英語を學びました、私は巴里の博覧會で御客に接して實地に佛蘭西語を練習して何うやら斯うやら咄せるやうになりました所へ、今またミセス、加藤より英語を敎はつたものですから、佛語と英語とが混淆になつて、皆から笑はれましたが、でもミセス加藤は親切に敎へて呉ました此店に一年許も厄介に成つて勉強致して居りました所突然郷里から直ぐ歸れ父大病との電報が來ましたので匆々行李を整へて歸朝の途に就いたのでムいます、かくて海上に三十六年の正月を迎へ、同じ月の二十日神戸に着いて、三年振りで京都の我家に歸つて見ると、父は三日前の十七日に死亡つたといふことで、僅かの

差異で父の死目に逢はれなかつたのは返す〳〵も殘念でムいました。父は私の歸朝を甚く待ちこがれて、未だ〳〵と言ひ續けて居つたが、到頭待ち切れないで呼吸を引取つて了つたといふ事を母から聞いた時は、父の死骸に縋つて泣き頽れたのでムいます。

△二度目の渡航

涙の中に父の葬送を終り、其年も過ぎて、翌三十七年の夏、米國聖路易大博覧會へ出品の人々に伴はれて再び渡航しましたが、此折は恰度日露の戦争で、常陸丸が撃沈れた評判が高い際なので、親族の人々は若しや航海中敵艦に遭遇でもしたら大變と、大層危險がつたのですけれど、私は大膽にも此等の異議を排して、乘船の手續をして貰ひ、一行の人々と共に無事に米國に渡つて、博覧會の賣店に勤めることになりました。所が日本軍の捷報が頻りに到るといふ際なので、日本品の賣行が宜しく出品人は莫大の利益を收め、私共も配當に預つて

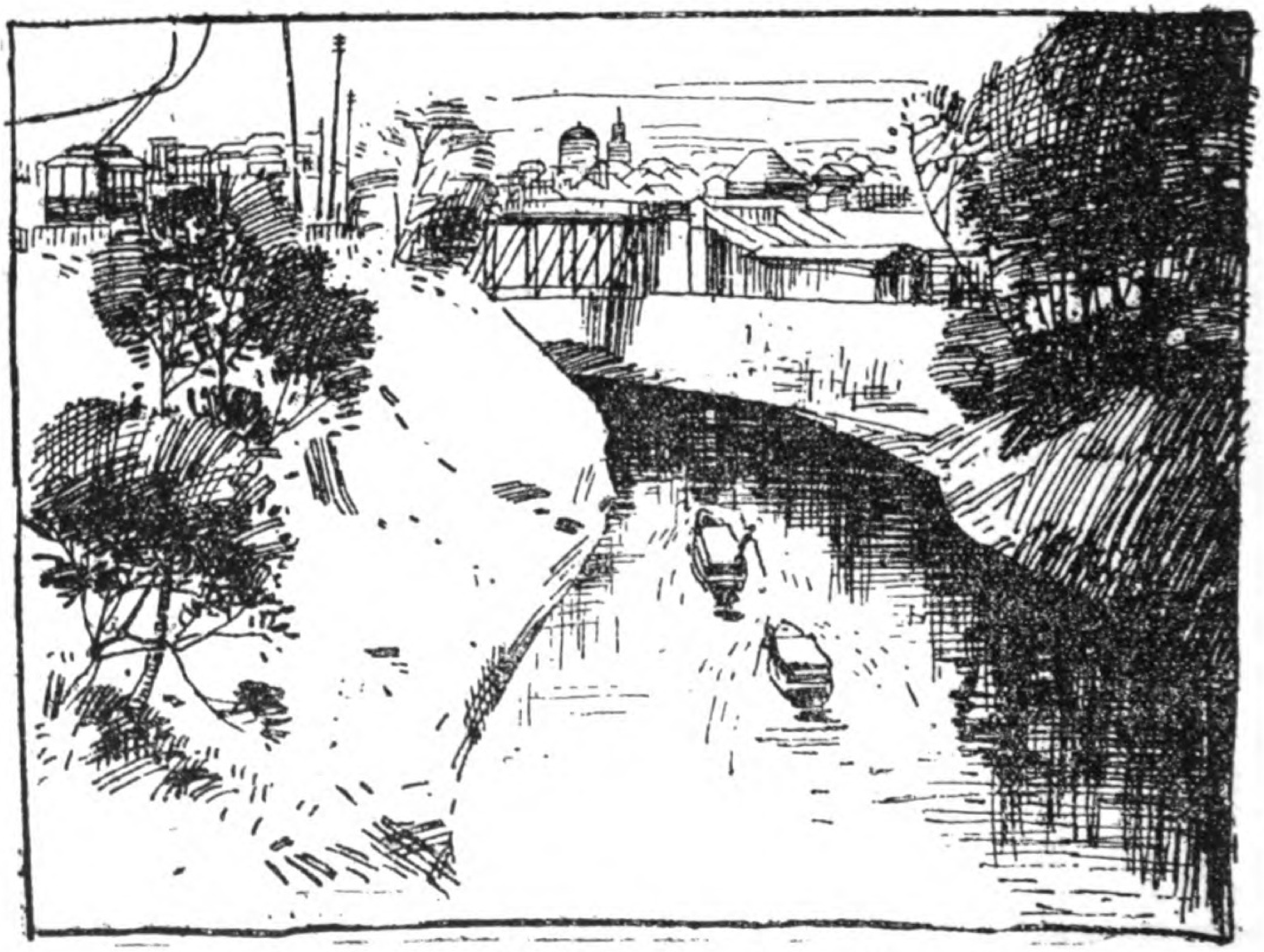

淺草公園の新綠

大喜びの中に軈て閉會になりましたから、翌年一行と共に大西洋を横斷して白耳義の博覽會に參り、こゝでも同じく日本品の賣店を開き、私も少々許の代物を郷里から取寄せて陳列して見たのですが、さう〳〵好い事ばかりは續かず、今度は運惡く散々の失敗に終つたものですから、同行の日本人は悄々の體で悉く歸朝されましたが、私は折角海外に踏み出し、而も裁縫の本場とも言ふべき白耳義に來ながら、何一つ習はずに歸朝するのは殘念と存じて、踏み止つて修業致さうと決心したのです、けれど其には學資を作らねばなりませんので、知己を便つて和蘭の首府のアムステルダムに參り、其人の世話でズル兄弟商會と申す食料品店に雇はれ、茶と珈琲の販賣係を勤めることになりました。此時も店の主人が日本着物を着て人の目を惹く樣にして呉ろと申すので、精々派手な着物を着て、丸帶を締め、店に出て居りました所、何にしても日本娘の番頭は振つてゐると云ふ樣な譯で、太く土地の人の好奇心を惹いたものですから、えらい繁昌で目が眩る程でムいました。斯うして此商會に六ヶ月程勤めて居た御蔭で、多少の貯金を得ましたので、白耳義のブラッセルに戻り、漸く志望通り私立裁縫女學校に入學致したのでムいます。

△晝は生徒、夜は番頭

入學した當座は同級生から彼女は支那人だ、穢らしいのと散々惡口を云はれて輕蔑されました、私も負けぬ氣象でムいますから、一心に勉強したので、二ヶ月目の小試驗には一等の成績を獲たものですから、曩に兎や角う惡口を言つた者も驚いて、それからは輕蔑もせずに却つて親んで呉ました。在學一年で、此校を卒業致しましたから、更らに公立の女子裁縫專門學校に轉じました。併し此時分は貯金も大方費消ひ盡して學費に窮したものですから、知人の世話でボール、ノール(演藝場)に賣店を出し、例の如く店番をしながら手帕の刺繍を致しては即賣をしたのでムいます、此ボール、ノールと申すのは娯樂場兼演藝場で、芝居もあ

り、飲食店もあり、また日用品の賣店もあつて、立派な紳士方や淑女方が集る所で厶いますから、上等の御客樣ばかりなので厶いますで、幕間になると見物の方が、私の店の前に遣つて來て、刺繡を致して居る私の姿と飾つてある代物とを見較べては、是は皆な貴孃が繡したのかと訊かれるのでハイ私が致したのですと言ふと、そんなら買はふと言つて價を問はずに喜んで買つて呉ました。學校の方は朝の八時から午後の六時まで稽古がありますので、六時に學校が終ると、一寸宿



新綠のお茶の水

へ歸つて直ぐ支度してポール、ノールに參つて、十時まで番頭を勤めるのですから、却々忙しくつて復習を致す暇が無いので厶います、時には店番をしながらノート、ブックを開いて復習ふこともありますが、何うしても刺繡を致して居りませぬと、顧客が來て呉れず、賣口が悪いものですから據ろなく刺繡の針を動かす樣な譯で、是には困りました。時には又た特別に注文される方もありますので、然う云ふ折には宿へ歸つてから徹夜し

て拵へる様な次第で、復習の時間を見出すに非常に困難を感じました。此公立女子裁縫専門學校は歐洲隨一の裁縫學校で、各國から婦人の留學生を送つて居りますが、日本人は私許りで、此學校始つて以來日本人の生徒は私が嚆矢なのでムいます。終業年限は四年でありますが、私は私立の方を卒業したので、いきなり本科三年級に編入されました。本科の科目は圖畫、裁ち方、縫ひ方、考案の四科目ですが、此他に隨意科として裁縫以外の手藝、音樂、語學等の敎場も在つて、何から何まで完備した學校でムいます。私は生徒と成つて本科の裁縫を學ぶ傍ら、敎師と成つて日本の刺繡を傳習致しましたので、是からも若干の報酬を得たのでムいます。

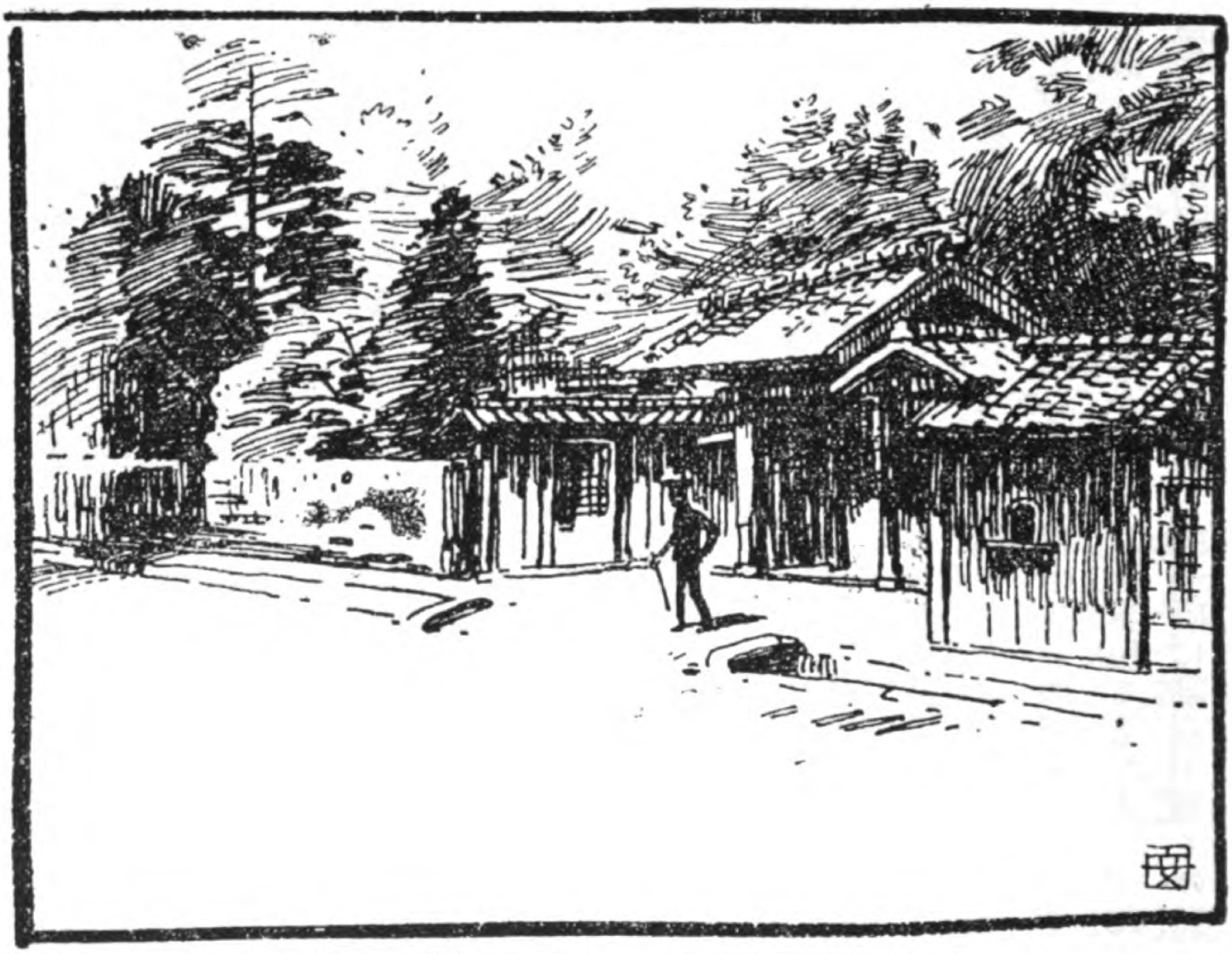
△月々の學費と收入

授業料はお安いもので、一ケ月五フラン(我が二圓)許りですが、下宿屋の間代が月々二十フラン(我が八圓)は取られます、賄つて貰ふと隨分かゝりますが、私は室丈借りて自炊しましたから、食料は知れたものですが、學校へ持つて參る布帛其他の材料に追ひ倒されますので、どんなに儉約しても月に五十圓はかゝります。其故些度でも多く内職から得やうと思ひまして、前申した、ボール、ノールの賣店及び刺繡の敎師の外に、手帕類の行商も致しました。行商と申した所で、別に其時間がある譯でムいませんから、學校の晝休み(十二時から二時まで)に宿に戻つて食事すると直ぐと籠を提げて、學友の家や賣店で懇意に成つた人の家を訪問して、買つて貰つたのでムいます。かうして二三軒歩いて二時までに學校に駈け着けるのですから隨分忙しい思ひを致しました。然し其や此やで月々百圓位の收入はムいましたので、學費に差支へずに修業を續ける事が出來ました。

△洗濯工場に於ける勞働

それから四十一年の二月に卒業試驗がありましたが此折も運好く優等の成績を得て、プロヘッサーと云ふ

稱號を貰ひました。裁縫にプロヘッサーは大仰でムいますが、彼地では師匠といふ位の意味に用ゐて居るのでムいます、私は卒業前から、序手に乾燥洗濯の方法をも覺えて歸らうと思ひましたから同市のローア洗濯工場に通ひたいと申出でた所、校長は、迚も女の織手に出來る仕事でない、それに劇藥を使用する危險の方法であるから、止した方が可からうと申されましたけれど、是非國への土產に覺えて歸りたいと强て望みましたので、校



植物園の新緑

長も私の熱心に動かされて、ローア工場の主任に私を紹介して賴んで吳ました。で、私は六ケ月間といふもの其工場に通つて男工共と一緒に立ち働いたのでムいます。こゝには男工許り二百五十人から居りますが、私は此等の職工に交つて、重い機械も動かせば劇藥も弄つて一生懸命でした。彼地は婦人を働はる風がありますので、私が重い物でも運んで居りますと男の職工は飛んで來て手傳つて上げませうと親切に言ふて吳るのです。け

れど手傳つて貰つては覺えられませんから、其厚意を斷つて、自分から態と苦しんで見たので厶います、それから又帽子商店に通つて帽子の裁縫法も習ひました、尙ほ洋服の緣飾に致すデテールの編み方も習はうと存じたのですけれど、鄕里の母からは歸つて來いと八釜しく言ふて來ますし、私も學校を卒業して見ると、歸心矢の如くとでも申しませうか、一日も早く歸りたいので、同地を辭して昨年の一月久々で歸朝したので厶います。

△嬉しかつた事と困つた事

私が在學中嬉しく思つた事は、一等の成績で卒業して先生方から讃辭を頂戴した時でした。それから困つた事は歸朝間際に買ひ貯めた公債や衣裳を殘らず宿の婦さんに盜まれて了つた事です。然し學校の先生方の心配で公債と現金は戾りましたが、衣類は行方が分らなくなつて了ひました。官に訴へると一年の日子を要するとの事ですし、それに歸朝の日が迫つて居ましたから、飛んだ災難と諦めて訴へもせずに出發致しました。其時校長から私が試驗の折縫つた夜會服を展覽會に出品せよとのお勸めが厶いましたので、是は歸朝土産に持つて參りますからと言つてお斷りしたところ、そんなら後で乾度送つて上げるからと強つて申されますので、お預けして參つたので厶います。すると歸朝後間も無く叮嚀に包裝して送り屆けて呉ました。唯今店頭に飾つてあります水淺黃の婦人服が其でして、是は鄕里から羽二重を取寄せ、彼地で染めて、私の體に合して仕立てたもので厶います。

△日本婦人向の洋服

歐洲では當今帶を胸高にして裾の長いのが流行つて居りますが、日本の婦人方には不向かと存じます、歐洲の婦人は御承知の通り丈が高く格幅も立派ですから裾の長いのが似合ひますけれど、丈の低い日本婦人が之を眞似るとなると、却つて體裁惡からうと思ひますから此一事に限らず總ての點に於いて相違が厶いますから

日本婦人には日本婦人に向く樣な仕立方を用ゐ、歐洲の流行を少しづゝ加味する事に致して、御注文に應ずる積りです、何しろ未だ開店して間が無い事でムいますから、何う云ふ物が皆樣の御氣に召すか、一向其等の樣子が分りませんから、追々御注文を承つて後、改めて復た嗜好や流行の事をお話し致しませう。

△白耳義婦人と犬

白耳義の婦人は犬を愛しまして、啻に家庭に居る時のみならず、買物に參るにも、公園を散歩するにも、必ず犬を抱いて行くのでムいます。其故電車も汽車も犬丈は特別扱ひで無料で乘せます。私も犬が好きですから、「キ、ー」「ヌ、ー」と云ふギル



ホン種の牝牡二頭を飼つて居りましたが。歸朝の際にも連れて戻りました。唯今店頭に居りますのが「キ、ー」で、牝の「ヌ、ー」は產褥に居りますから、御見えが出來ません。「キ、ー」やワン、御客樣に御挨拶をなさい。

◎習字を學ぶ心得

書道を女藝中の主要なものとした時代に比ますと今日の女子の書道は他の學藝の割に進歩して居ないやうでありますそれは勿論女子の修める學術技藝の科目が殖えて習字の時間の充分でない事が第一の原因ではありませうけれども學校で使つて居る習字の手本が刷物である事も肉筆と違つて習字の興味を減じて居るやうに思ひます、で極く幼年の中は別として稍や年長になり多少とも其人の特長が其人の筆に顯れて參りましたら家人は成る可く其特長を活用し得るやうな手本を與へる事が肝要で之れは單に習ふ者の苦痛の少ない許りでなく進歩の上にも非常の差があるやうであります。

内親王殿下の御事

本月六日朝香宮鳩彦王殿下と御成婚の御式典を擧げさせ給ひし宮允子内親王殿下の御平生を洩れ承はるに、殿下は平素深く衛生に御心を注がせられ、深宮の裡にお育ち遊ばされたお方とは思はれぬ程御快活に在らせられるさうであります。お居間の硝子戸などは大抵は明け放され、寒き冬の日といへども、煖爐はほんの形ばかり、お焚かせになりそれでお暇さへあればお庭に下り立ちて御運動遊ばされ、外氣に觸れることが非常にお好きださうでございます。されば御體格は勝れて宜しく在しまし、御身長五尺二寸五分、御體量十三貫六七匁はおあり遊ばすと申します。

御趣味はいと廣汎に渉らせられ、御學科は日々お忙はしく御勉強遊ばされ、多藝多能、何事にも秀でさせ給ふと伺ひます。漢文、倫理、東洋史等は市村博士が侍講として文章には古文眞寳、倫理に論説内訓等をお講義申上て居られしが、就中歴史に多く興味を有たせられ、御史論の穩當なのには侍講の人々が恐縮する程であると申します。國文は本居博士が國體の要義に據いて明倫歌集、枕の草紙のお講義をなし、御歌は坂正臣氏伺候しまつり、それに田島房子、伊藤玉子、其他女官の數々を召させられて毎週土曜日に御歌會をお催し遊ばされたさうですが、敷島の道は陛下の天稟を受け繼がせ給ふて、殊に御堪能にあらせられ、御題を奉れば、御默想遊ばさるゝも少しの間にて、立所に御詠あらせ給ふと申します。而かも御思案の糸は綿々として盡きず、御歌に顯る高調のもので、御詩材に富ませらるゝには、一同常に驚嘆すると承はります。

其他西洋史は堀江藤子、日本史は村田鶴枝、繪畫は跡見玉枝、音樂は杉浦千歌、佛語は赤松長勝、茶の湯は松田宗貞等の御用掛が御教授申上げ、外に御自修のお相手は御用掛が承はつて居りましたが、これらは皆一昨年七月中等學科をお終へになつてからの特殊の御研究に屬するのであります。音樂はピアノ、ソナタ、ソナチネ、琴の數々を遊ばさるゝが、取分け西洋音樂を好ませられ、繪畫も日本畫よりは西洋畫に興味を持たせ給ふ由にて、四季折々の御すさびに、さては御避暑、御避寒の御時に三脚椅子に倚らせ給ひ、庭園の風致や自然の妙景を巧みに彩管に揮はせられ、その繪葉書に遊ばされて皇孫殿下の御慰みとして御差送りになる事はしば〳〵あると申します。

御妹宮泰宮殿下との御友愛の情は洵にお美しくあらせられ御學科の中倫理、音樂、繪畫、茶の湯、御歌の諸學科は兩宮御同席にて御學びになり、御書齋は二室續きになつて、一方の方にお机を据ゑさせられ、御自修は何時も御一緒であつたさうでございます。御寝所も御一緒と伺ひました其他、皇太子殿下、妃殿下、高輪の兩内親王殿下へ對せられては、一層御友愛の情お美しく、取分け御孝心深く在しまして、お暇ある每に絶えず御機嫌伺ひに御參内遊ばさるゝやに承はります。

家庭の樂しみ

母のほこり

神戸　藤崎三枝

「吉井武雄サン」、とつめ襟の若い先生が笑みをふくんで呼ばれた一瞬時そばに付き添ふて居た私は、ヘツとしましたが、武雄が快活に「ハイ」と答へた時は、母親の胸には一種のほこりが漲つてゐました。

今日、始めて校門をくゞつてをど〳〵してゐる澤山の子供の中に、あの快活な聲が今の今まで「やんちやん」でした武雄のあの可愛らしい口からよくも出たものと思ふて、何となく嬉しい様な氣がしました。

それに小さいと思つて居た身體も、行つて見るとズツと大きな方なので妙に肩身が廣いやうに覺えました。（賞）

暖たかき一日

東京　さくら

ホカ〳〵と湧上る様なお天氣、見上る空にはとびが閑に輪をゑがいて居る。綿雲が二つ三つふわり浮いて動かない。洗濯物を乾し上て昨夜のとき物を持ち出して張物をした。一張り張つておいて姑様と二人さびしく晝飯をすます。まあ何ていゝお天氣なのだらう、五枚の張板が間に合はない程よくかわく。主人が丹精の朝顔も一寸許りのびた。こんな日には草も木も思ふ程のびられるのであらう。お縁に日を一ぱいあびて足袋つぎして居た姑様は、いつの間にかコクリ〳〵とかすかないびきさへ立てゝ寝入る。頬がカツ〳〵して何だか頭が重い。髷の油がとけて手柄がよごれやしないかと心配になる。姉さんかぶりを仕様かしらと思つたけれど、折角ふつくらとふくれたびんをつぶすのも惜しい。笑聲高らかに學校歸りの五六人がドヤ〳〵と通つたので、姑様は吃驚してお目覺になつた。（賞）

バナヽ嬢

牛込　紅露

パタ〳〵と小いさい足音が、障子の外にハタと止つて、「おつゆさん」と戸をあける。おてるちやんだなと思ふと、案の定、房々とした黒髪を襟元まで下げた可愛らしい顔が出た。先生のお嬢さんで今年五歳のいたいけ盛り。「てるちやん澄ました顔は」と云ふと、目を横にそらして口をチンとつぐむ。紅帯びた頬のホンノリした工合の愛らしさ、思はず抱きしめ、「リンゴの様れ」と云へば、これは以外、「いやだ、バナナの様よ」と答へる。バナナはてるちやんの好物なので。

妹に

備中　米子

玉ちやん、卒業したんですつてれ、本統に御目出度う。そして一番でしたつてれ、父さんや母さんはどんなに御よろこび遊ばしたでせう、こん度はいよ〳〵女學校行ですれ、そりや今まで優等ばかりの玉ちやんですから、屹度入學試驗は通るでせうが、よく〳〵勉強しなければいけませんよ、もし落第でもすると父さん母さんにすみませんから…何れ近い内に玉ちやんのすきな御ホーヒ持つて御よろこびに行きませう、

米國だより

芝　なでしこ

朝から絹糸の様な雨がじく／＼と降る。いやに氣がしみて滅入りさうな。眞人はお机にむかひしきりにほゝ笑んで居らつしやる。私もつい羨しくなつて「何ですか……」つておそばへ伺ふ。「おゝこれ御覽よ」とてお示し遊ばした一通のお手紙、見れば米國に入らつしやる田上様からので、英語まじりで金ペンの走りがき。最後の一言に「東京の山本兄から聞いたが、君のホームは平和プラス平和、過度の平和だそうだね、千里の海路をへだてゝひとり配所の月を眺めてゐる僕は實に羨しい。僕は永へに君の榮え行く事を祈る」と書いてあつた。私は眞人と顔見合せて思はず笑ひ崩れた。山本さんて隨分な方だ。

御産前の記

福岡　小百合

今日は御腹の工合が妙だ。頼んで置いた婆やが早く來てくれゝばいゝに。胡ぼつちの淋しさに赤坊の枕を作る可愛いゝ枕だと思ふ。蒲團を出して見る。代赭色の渦卷で、新流行を選んだ積り。小さい枕に、小さい蒲團、誠にうつりがいゝ。序に着物を出して蒲團の上に寢かして見る。手も足もない赤さんだ。こんな赤坊を産んだらどうしようと思ふ。縮緬、何時の間にか、夫の御歸り。後から見て居らしたので、はつとするほんとにきまりが惡るかつた。

盆石

麻布　こまどり

お化粧して居ると、お嬢様お盆石の先生がお見えになりました。」と富が來た。「ではおはなれに、そしてお茶とお煙草盆となれ。」大急ぎですませ、着物をきかへ姿見に立つて、初稽の心地よさにチヨと微笑んで見て、それから砂箱とお盆をさげてはなれに行く。先生どうもお待せ致しまして。」と一禮してお道具を並べる。鳥が啼く先生は羽根を手にしたまゝヂツと耳をすまされるやがて白の砂、黒の盆、銀のさじ實に幽雅なものが出來た。廊下に足音がして母様が、「オヽ結構でございますこと、先生、入賞なんぞに出來ますかしら。」

今日のは霞立ちこめた明石の景。

新婚の春

神戸　大島千代子

何だか夢でも見てゐるやうな心地で、結婚の式はすましたが、かうして丸髷に結つてゐるときまりがわるくて、此花の春を家に許り引つ込み勝ちで居る。けれども午後は芳子さんへの手紙をもつてポストまで出かけたら恰度學校から歸へる弟の文雄に遇つた。ほんとに何で中學生はあんなに意地が惡いのだらう。奥様なんて二度までも繰りかへして呼びかけるのだもの。弟だと思つても其時は眞赤になつた。

美はしき自然

琵琶を聴く

福岡　小百合

濤は轟々と、絶えず波の音がする。彼の廣き海の面は、白波に被はれ

て、かゝれる病人も、今宵は眠り就ぬるであらう。松の梢にかゝる銀盤の様な月は、青き光を投げて安く眠れと囁く様である向ひの傳染病室に通ふ看護婦の足音は、カラン、コロンと、冷たき世の空氣に通ふて、此の靜寂の世を猶靜なれと促がす様な心地がする。明かき月影はやがて灰色の雲に呑まれて暗くなり、何處やらに、腸にしみ渡るやうな琵琶の音が聞え出した。（賞）

善光寺

信濃　優梨子

夜明けの街燈がぼんやりついた大通りを、私はお祖母様の手をひいて上つた。卯月とは云へ、信濃路は、未だ朝の風が冷たく頰にあたる。白鳩の群がつて居る、仁王門の石段を登ると、大本願のお上人様が、朝のお勤めに上がられる處。燃える様な緋の御法衣が、いつもより一層氣高く見える。堂庭の櫻は今が眞盛り。風も無いのに二片三片散つた。本堂の高い階段を登りつめると、ブーンと香の薫りがした。（賞）

雨の江戸川

牛込　輝子

しと／＼と音もなう、しめやかに降る雨に、昨日まで咲きほこりし、江戸川べりの櫻、いかになりつらんと、心にかけつゝきて見れば、麗かなる日とは違ひて、往來の人もまれなるが、かへりて嬉し。

中の橋より、石切ばしのあたり眺むれば、枝垂柳の打烟りたるに、雪の如き櫻の、まじりたる其中より、銀糸の如き雨の、すう／＼と落つる様、得も云はれず美し。

淡路島の夕暮

神戸　三枝

遠く東の端から、闇の手が廣がつて來て、美しく紅に染めた夕雲がたしくも早薄らぎ初めた。千鳥通ふ淡路島は墨畫の一刷毛をながしたやうにボンヤリ浮んで、淡い夕靄が歸帆の數多を和らかに包んでゐる。須磨寺の夕鐘は長く／＼響いた。雲間をもれる月の光は、水をはなれた千鳥の翅を淡く紫に照してゐる。夕餉の煙は白く月光を浴びた渚ぎわの漁舟から立昇つて、高い空に灰色になつて消えてゆく。

田舎道

福井　伊藤愛子

細い森の道を抜け出ると、そこから長くまばらな松並木が續いてゐる美しい夕日が並木の間を洩れて、雨上りの赤土の街道に枝の影を長く引いてゐる。木の間からは向ふの細道を揺れながら走るガタ馬車が小さく見える。松並木の盡きやうとする處に古い一軒の茶屋がある。お休息所と新しく書いた旗が初夏の風にひるがへつてゐる。軒下に白い痩せた馬が繋がれて色の黒い馬子が緣臺に腰を掛けて休んでゐる。奥から女が來て馬子の前へ無愛想に茶盆を置いた。四邊はもう薄闇を掩ふた様になつて、雲雀の聲も消えてしまつた。

宇治の眺め

横濱　倭子

所々はげた黒ずんだ山の麓は朧ろに霞んで、桃か櫻か白い花がボーと見える。昔佐々木高綱が先陣のほまれ高かりし由緒深き宇治川はすぐ

前を流れてゐる深雲が初戀の甘きに醉ふたのも此ほとりであらう。こんな追憶にふけつて居ると何處からともなく、さびた追分が風に送られて聞えて來る。

小やかな紋波をゑがきつゝ濃き紫のパラソル開げた、美しい人乘せた小舟がすうと通つた。

雨の日の夕

四日市　通　子

目が疲れたので窓を開けて見ると、ズーと淡霧が立籠め、向ふの柳が靈に雨を含むで、其間にそゝぐ銀糸の樣な細い春雨が、靜かな溜水の面を打つて、絶えず小さい渦を畫く。でも此水溜は何時迄經つても水が增さない。兄樣の書齋では、敏子と道雄が居るのか、ドメン〳〵、時々大きな笑聲も聞える。

障子をしめて仕事にかゝつたが、何だか殘りをしい樣な心地がしたので、又一寸開けると、何處かで牛がモーと物憂い聲で鳴いた。

散る花

京都　延　子

珠數を片手に、一足每に念佛をとなへながら、石段を下りて來た隱居さんは、滾々と落つる音羽の瀧水を掬んで口漱ぎ、一きわ高く唱名をとなへた。未だ明るみはてぬ山櫻の梢からほろと離れた花瓣一つ、糸引く如き三すじの水をくゞつて池の中へと消えてしまつた。

乙女のすさび

妹からの手紙

芝　くに子

ながくまいた一通の手紙、見るだにうれしき妹の筆のあと、「小包正に到着、あすは新らしい姉さんが見えますから、お母樣は忙しいので、私が代筆いたしました、けつこうな前掛下され有がたう、おかげ樣で私は入學が出來ました、入學試驗は五月で、發表は六日、はいれたのが八十人ばかり、わたくしは五番でありました、御安心下さいませ、私は小學校で一等賞で、郡長さんからまきものをいたゞきました」、子供らしい手紙なれども、文意はよくわかるふまだ八つか九つの幼子の樣に思ふて居た妹が、早海老茶袴をはいてあのなつかしい校門をくゞる樣になつたかと思ふと、年たちし我身が急に悲しくなる。それにしても御ほう美は何がよからうかと考へたが、とに角あすのお花見のかへりに勸品館へ寄る事にきめた。（實）

宴の暇

大阪　月　江

强いられた琴をそとよけて緣に出た。あゝ花が散る。花が散る。草履穿う庭に降りたち、若草の上を踏んで四阿に行く。と「月樣」と不意に呼び掛けられて驚いた。うたげの暇をこゝ四阿に暫しといこふ高髷姿美くしき妙樣は、振の袂を胸に、夢見る樣な眼をあげて、散る花びらの行方をぢいつと見詰めて居られる。八千代樣の御手すさびか、絶えては續く

ヷァイオリンの柔らかい音色は、續々と花を洩れてひゞき。妙様はホッと上氣した頬を和風に吹かせつゝ散る花びらを掌にうけて、物思ひのやう。ヷァイオリンの音はハタと止んで、盛んな拍手がお座敷の方に起つた。（寛）

春の一日

大阪　操子

いゝお天氣だ、日向ぼつこをし乍ら本を讀んで居たが、心は野邊に浮れて居る、十八の春だものと勝手な理窟を付けて文ちやんを連れ出し花籠下げて裏に出た。霞がゆるく輪を描き、目高はせゝらぎに浮いて居る夢中で花を摘んで居る中に、菫やれんげ草やが籠一ぱいになつた。文ちやんを先に畔道を行くと、背の小さく肥えた姿が肉の塊見たいで可笑しくつて堪らなかつた。歸つてお父様にさう申し上げたら「是れでも今に誰かのやうに濟ますよ」つて頭を撫でゝゐらつしやつた。

鴨料理

讃岐　多涙女

卯月三日の夕、兄様は裏の田圃へ鴨繩を張つた。一羽位捕れるでせうかつて云つたら、三羽や四羽は捕つて御目にかけるつて大變な勢。丁度十時頃ガツツ〳〵と鴨のなき聲が段々近かよつて來た。「ソラ來た……靜に〳〵。」「オホヽヽ可笑な兄様、妾内に居るのに靜にだツて、」云つたら、大きな眼でにらまれた。少したつとバメ〳〵と大きな羽音がした。「〳〵たツ」と兄様は裏口から飛びだした。妾も首丈出して「捕れて？兄様」つて云つても返事が無い。暫らく〳〵して兄様は空手ですご〳〵と這入つて來た。あんなに威張つて居らしたくせに。

花を見ぬ記

三島　遠山雪子

今日は朝から少し曇つてはゐれど花曇りといふ時候でもあるし、よし雨が降り出したとて濡れて歸るもまた一層と、お父様からお花見の御發案、直に仕度にかゝるやうとのお母様のお心付けに、大分亂れた桃割れを久し振りで庇髪に結つて見やうと、大騒ぎして出來上がつたものゝ、扱氣に入らぬ。まゝよ矢張り平常から結ひ馴れた桃割れの方が似合ふからと、また解き崩して結直してゐると、憎くや雨がしと〳〵降つて來た。

悲しき日

滋賀　野崎みどり女

成績の掲示が出た、と誰かの聲。妾は編み掛けの菜を止めて小走りに控塲に行くと、早生徒の山。皆々眼を皿のやうにして見てゐる。妾の名は以外にも第二番、餘りの嬉しさにアッと叫ばうとした。此れで安心國へ歸つても大手が振れる、と昇天の心地で足も輕く早速寄宿舎に歸つて歸郷の支度　汽車の時間を調べて居ると、小使が電信を持つて來た。何の用かと震ふ手に開封すると、父の危篤。先日の手紙には大分快方とあつたが……。もう成績の嬉しさは何所へやら、ハラ〳〵と涙が落つる

よわき者

下谷　捨小舟

嗚呼、妾は何うしてこんな病に取りつかれたらう、それでもうぶ聲をあげた時は壯健だつたので、來る人每にマーお可愛らしい赤様です事とほめられ者であつたとよく祖母様が被仰る。それを聞くたんびに胸は一ぱいになる。自分位の方を見れば、私も身體さへ壯健ならなどゝつい愚

淚も出る。それからそれと空想にふける。神經は益々高くなつて人知れずまくら紙をぬらす事が度々ある。

嫁ぐ姉

野菊子

お〻姉樣は今夜限り岸樣の所に嫁つて、明日からは兄樣と妹と三人きりになるのだと思ふと、悲しくなつてそつと姉樣を見た。只さへ美いのに、今日を晴の姿、妹の私でさへついうつとりする位。上着は松竹梅の裾模樣、下着は白羽二重の三枚重、白茶地に舞鶴を織り出した帶を立矢の字に結んだ恰好よさ。髮は品よい高髷に結ばれ恥しいのか厚化粧した顔の邊りはほんのりとしてゐる。

友情の發露

五人の友垣

麻布　靜子

芳子さんは品川の里に樂しい月日を夢見つゝ、ある悲しみを慰めていらつしやる。富士樣はもう別れて六年になる、どこまでも親友で、何でも私に打ちあけて下さるが、去年からの胸の悶えにおからだでも損じやしないかとあんじられる。

治子樣は、西洋畫家の奥樣となつて、スヰートホームを造つて、私等の幸福を祈つてて下さるのだけれど、なか〳〵會によくなりさうにもない。

華さんは、可哀相に廿三日の朝無情の風に誘はれてしまつた。私等を殘して……。今頃は天國で花の露に醉ふていらつしやるだらう。

私は悲しい淋しい月日を送つてゐる。(賞)

都の友へ

豐前　田鶴子

哲子樣、先日は繪端書有難う。此頃は如何ですか。すきの道を奥深く研究遊ばす趣味は一入の御事とお察し致します。私なんか草深い田舍に……。お羨しいわ。時勢には後れ、高等學府にお進みの皆樣とは話も合はなくなるだらうとつく〴〵自分の身が悲しくなります。お別して早一年過去の追憶にのみ憧憬れて何だか夢見てゐる樣ですわ。けれど考へて見ると、淋しいけれど都に住めば雜念も崩さず、母の膝下に春秋を樂しく送つて何一つ不足のない私は幸福かも知れません、進歩とか退歩とかいつてもそれは自分の心掛一つでせうから……。私は大いに努力いたしませう。オホ……生意氣れ、自分勝手な事ばかり云つて、御免遊ばせ。

(賞)

同級會

三重　華野花子

山吹のいゝのがあつたので、朝の間に御花の稽古に行く。歸りにお先さんに逢つたが、大分世帶じみて見えた。夕方櫻木さんが來られた。今夜例の同級會を開かうとの事。會は七時から開かれた。蒸菓子もたべあき、編み物もそこへほり出し頰杖ついて居るのが千代さん。自分は一生懸命手袋をあむで居る。お茶を入れて居るのは激さん。學校時代の話、同級の誰かれがお嫁に行かれた事、吉岡さんさへ入學が出來たもの貴女

なら文科か技藝科へ、なんて話はそれからそれへとすゝむ。又しても腹の蟲がさわぎ出した。

三人よれば姦しいとか、隨分饒舌談や未來の想像などに時をうつして二人に送られながら歸宅したのは十時半。外には月が冴えて居た。

奈良より

大和　操子

もう猿澤池畔の櫻も丁度見頃で御座います。方々から花見がてらに浮かれ込む人は、一汽車毎に吐き出されます。清子樣、今週の土曜あたり如何？。古き都だけに又奥深い處も御座いますよ。大佛の鐘がゴーンと響いて、鹿の音、和する雨の夜は、昔に返つた樣な氣がします。朧に霞んだ月影が猿澤の底に沈む時、采女の社に追懐の涙を落すのも優で御座います。あの磨き上げた樣な若草山は初蕨を背にして待つて居ます。例のお手料理も大分上達しましたから是非ね。かしこ。

故郷の友へ

牛込　輝子

なつかしの故里に咲きし、ゆかしのすみれ草と共に御水室のあと給はり、嬉しく拜し候、幼かりし日、君と共に眺めし青葉山の岩つゝじ。るては互に先を爭ひて、摘み競ひし櫻草など、今を盛りの由承り、故郷戀しの思ひ絶えがたく、何故今年は歸省致さゞりしかと、そゞろに過ぎし春の、うらめしう覺え候、

草樹にも追々御年長のよし、菜畑に胡蝶追ひ給ふ後姿、うつとりと眺め居給ふ丸髷に赤き手がらの君、心にゑがきては御なつかしさいやまし候、來ん夏休みこそは必ず〳〵歸省致し久々にて御目もじ致すべく、今より樂しみ居り候、

輕井澤驛より

信濃　優梨子

今、輕井澤驛に着きました。信州に這入つた嬉しさと、都を離れた寂しさとが、交々に迫つて來ます。夕暮のせいか、淺間の煙りが一際色濃く見えて、美しき芙蓉の峰を眺めて居た眼には、何となく凄い樣に感じます。何がし夫人の銅像も、春の夕べの色に包まれて、淋しく其裾野に見えます「十五分停車！」と車掌の呼び歩く聲がしてから、もうゝ十分にもなりますので、皆の顏にはさも退屈さうな。ぢれつたさうな色が見えて居ます。

寫眞に添へて

奈良　富澤美穗子

都も鄙も花にうかれて、のどけき空に滿ち〳〵たる今日この頃、吉野山のほとりなる美しの君にはいかにか渡らせ給ふらん、み胸の綾こそうけ給はりたく候、爛漫たる櫻花幾千本の中に、浮き出でたる女神のごと神々しき君のみぞ思ひては中々に心はづかしう候ふも、堅き御約束の程違ふ罪もおそろしくて、みにくき姿御目にかけ候、ゆめ人には見せ玉はでよ。

玉川に遊ぶ

麻布　登美子

今日はクラスメート五人で玉川遊、向へ着くや否やポツリ〳〵と雨は

んとに人の心も知らないお天狗様だ、二子の渡を渡り、山へ登つて、風流にも木の下で御辨當の御辨當を開く。それから弁金で、雨みさけながら行善寺へ行つて、玉川を眼下に見る。川の流はまるで銀砂をひいた様今日はスケッチをよして、四時頃玉川を後に家に戻つた。

様々の觀察

露さんの見合

牛込　平塚白百合

「もうゐらつしやるでございませう、十一時といふお約束でございますもの、どうぞ次のあく程ごらん下さいまし。」私はかう云つてM様と夫と三人三越の二階をめぐつてゐた。M様は子クタイを直したり、眼鏡を氣にしたり、並べられた美しい物なんか眼にも入らぬらしい。私はフト自分の見合した時の事を考へて見た。やつぱりさうではなかつたかしら。しばらくすると來た〳〵と夫が小聲でおつしやつた。振りかへると、今段をシト〳〵とのぼつて來られたところ。切髮の叔母様と並んだ高島田の露さんは、スラリとした姿をすこしうつむかせて、どうやら若々しい頬には血がのどつてゐるらしい。M様のお眼はヂーと露さんにそゝがれて、露さんの顏は耳の根迄紅にそまつて下つてゆく。（賞）

摘草の歸り路

青山　やす子

籠一杯に芹がたまつたから、靜さんと菜の花畑麥畑の間を縫つて歸つてくると、雲雀は霞の中から下り、蝶々は舞ひながら今宵の宿を尋ねて居る。風がそよと吹くと、緑の波黄金の波が、ゆた〳〵起つて、えならぬ薫がぷんと香つてくる。二人は只もう恍惚となつて歩いてると、いつの間にか櫻の木の下の掛茶屋の前に來た疲れたのでそこの緣臺に腰を下すと、「被入つしやいまし」と言つてお茶を酌んでくれたお婆さんは何故か私の顏をつく〴〵と覗いてゐる。やがてそこを出やうとすると、お婆さんは「失禮ながら貴孃樣は死にました私の娘に、よく似てお出遊ばすのでお懐かしゆう存じます」といふので、何となく胸の塞がる思ひをした。（佳）

あの心持

小石川　てい子

日記をつけやうとすると墨みする手が鈍るし、筆を嚙んでゐると自然と涙がでる。何が悲しいのかと問はれても、自分ながらお答が出來ない窓の外を通る人は心よささうに噺して行く。笑つて通る。あゝ、もうあいふ心持ちになれないだらうか。いや〳〵自分にはまだ老いた母君がおはす。決して我まゝな事を思はれない。明日からはもつと〳〵閑のないやうに働かう。

轉宅の記

千葉　山口秋子

五衞の市に樂に積めた道具が、一年餘りの後には九臺にも成つて居た花散る濕つた二丁ばかりの路を行き歸へりして運び終つた時には、日も暮れ初めて、餅草摘みの影も見えなかつた。小山の下から清い水のわき出るのと、間ごとに押込の有るのは何より嬉しいが、何となく他人の家の様な心地がする。

年に何回も轉宅する人が有るが、經濟を重ずる人の餘りにする事ではないと思つた。私は事情のゆるすかぎり此家に永く住みたいと思ふ。

朧花

丹波　荒田時雨

昔の樂しい夢の跡を辿つて、蜜の様な甘い追憶に耽るのが此頃の癖なので、情趣に富んだ春の今宵を私は何の考もなく家を出た。下駄の音は町端れの土橋を渡つて、菜の花が金粉を散らしたやうに仄めいて居る小徑を、匂深ふ靜かな空氣を分け〱て進んだ。見上げると眞圓い月は、何時の間にやら薄藍色の中空に懸り、和かい眼光で下界を照して居る。白木の鳥居神々しい社の入口に職を守る常夜燈が、宵淺く油をぢゝと吸ひ上げて、明くなつたり暗くなつたりして居る下を通り越すと、其處からは境内の雪の様な白砂に並木の山櫻がはら〱はらと頻りに散つて居る。幽かに落花の音を聞いて、人生の行く春を惜まずには居られなかつた。

眠られぬ記

小石川　さくら

ボーンと一時をうつた。眠らうと思つてもどうも眠られない。どうやら母様もお休みになれない様子。もう世間はすつかり靜まつて、遠くに犬の聲がするばかり。アゝなつかしい母様のお側に寢るのも今夜限ぎり夫となる方はやさしい方だらうか。結婚後間もなくシヤトルに行かれねばならぬが、横濱から船でお別れする時はどんな心持だらう。暗の中に一道の光を得たやうな嬉しいやうな、心細いやうな。アゝ眠られない。

學生々活

東京　小森たけ子

七輪と土釜は春さんが賜ひに下すつた。氣の合ふた友の三人が自炊してから三日に成る。

今朝お米磨いだら、腕の根が痛む。英枝さんは水を汲んで掌に豆が出來たさうな。雪田鶴さんが來る。御琴合せて歌詠んで雜談に耽つてお歸りになつたは三時間の後。人參を臺所の隅へ積んで置いたら、ねづみが何時の間にか嚙つて了つて、どれも此れも穴だらけ。みな御腹抱へて笑ひころげた。夕方夏子さん牛肉買ひにゆく。小僧が「姉さん」と云つたとかで却々不機嫌だ。

波止場

對馬國　榮子

妹の立つのを送つて波止場に行く。靜かな寂しい此波止場も「福岡共進會の爲めなか〱賑はしい。岸にそふてすらりと立つてゐる人々は「互に別れを惜んで居る。私は多人數の間を押し分けて僅かに海をのぞく事が出來た。舟にはすき間もなく人が乘つて舷は四五寸しか水上に見えない。見てゐる内に彼の靜かな海をすべつて彼方へ次第に小さくなり、遂に本船の蔭に隱れた。やはらかな風が吹いて山の端から。沖から。白い雲が押寄せて來る。

溫泉日記

秋田　鈍谷ゆきの子

姉さんと湯に這入つてから。溫泉場特有の湯の香漂ふ上り下りの町を一廻りして來ると、もう八時半過ぎ。宿屋町はさすがに灯の數も多くて賑かである。やがて私は、たゝみ目の付いてゐる洗ひたての上敷をしいて貰つて姉さんと並んでゐた。「姉さん、赤さんはまだなの、もう六年ぢやありませんか」と云ふと「昔のやうに七年に子をなさずば離婚などゝ云ふ事はないのよ」と淋しく笑つてをられた。

讀者倶樂部

▲私は萩香様はかういふ方でせうと想像して居りますの、お色は少し淺黒く、御目元の涼やかな、まあ一體にひきしまつた御顔立、そしておぐしは大抵ひさし、それで御羽織のわきあきにかう御手をお入れになるのが御くせ、ホヽヽ、萩香様、的中でせう。(東京、百合香)

▲女學生の皆様、昨年實業家の夫人方々がお出でに成つたので、日本婦人を米國貴婦人に紹介する事が出來ました、此次はぜひ日本女學生米國漫遊會として御渡米あらんことを希望致します。(米國、ミサヲ)

▲京都同志社女學校の宮川しづ江様、私も貴女と同じ御神につかへて居ますが、弱くして罪の多いのを、いつも悲しんで居ります、どうか以後お交はりを願ひます、京都の加藤ふじ子様、貴女は京都女學校の本科にお通ひでせう、去年の夏までは同じクラスでしたわ。(京都府伏見町成田てい子)

▲誌友の皆様、何卒各地名所其他の繪ハガキの交換を願ひます、妾キツト御禮として大和々所の繪ハガキを送りますから。(奈良縣南葛城郡葛城村大字島井戸、幸田大次郎方、靜子)

▲深山のさくら子様、私は母人と共に玉造温泉に遊びました途中、汽車の中にて徒然なるまゝに愛する女學世界を見ました處、あなた様の「新橋で別れし友へ」の御文を拜見いたし、まだ見ぬ君ながら何となく御なつかしう存じました、住みなれし都をあとにはるばると御出でになりて後は、如何許り知らぬ他國に淋しさを初めて味ひ遊ばすのかと深く御察し申ます。(伯耆國境にて、わかば子)

▲皆さん御琴おけいこ遊ばしたお方たくさんおられませうが、其お方々は箏曲大意抄と云ふて女學世界より少しちひさい書物で、たしか上中下ありませう、其本の發行所及び實價を御敎へ下さいませんか、御願ひ致します。(佐賀縣、とく子)

▲妾は讀書やお裁縫物の間に畫筆を取るのを何よりの樂しみとして居ます、諸姉様、どうかなつかしい御自筆の繪端書が出來ましたなら、贈つて頂戴、妾きつと御返し致します。(大阪府、三島郡太田村、石田愛子)

▲靜香様に御答へ申上げます、仰せの通り私は横濱に居りました者に相違御座いませぬ、貴女様どなたでいらつしやいましたか、つい御見それ申しました、あの當時伯母の病氣の爲めに深川の方へ看護に參つて居りました、そしてもう快くなりましたから横濱に歸りまして、只今は岡野町に居ります、以後何卒御交際を願ます。(横濱、不美子)

▲私は本欄に各地の愛讀諸姉様に御交際願ひの投書致しました處、澤山に御手紙下さいまして、昔の淋しかりしに引かへて今は最も愉快に日を送つて居ります、殊に文學、音樂、及び和歌に趣味を御持ち遊ばしていらつしやる御方様を多數に得ましたのは非常に嬉しく存じて居ります、何卒御同志の御方様は御手紙下さいませ。(京都、神谷郁子)

▲土佐の白萩様、貴方と私とは同じ學校よ、そしてクラスも同じよ、私だれだか當てゝ御らん遊ばせ、それから誌友の皆様、誌上で御交際下さいまし。(土佐、ホワイトローズ)

▲ちぬの浦の美鈴女様、御交際を願ひます、此國でめづらしい事でもありましたらお知らせ申します。(米國、田岡ミサヲ (Misao Taoka 1740 Blake St. Denver, Colo.)

▲岡山の多賀子様、御說の通り内藤千代子様は決してうら若い少女ではありますまい、如何なる天性文才がおあり遊しても、僅か二九か二八の乙女にあれ丈の社會觀察が出來るでせうか、それに千代子様の御寫眞誌上にて拜見と熱望遊ばす諸姉方あるにもかゝはらず未だ掲載なきを

見てもわかるでせう、もしも記者様御説の如く二十歳を超ぬお嬢様であるなら、とつくに寫眞は掲げられて居りませう。（京都、芙蓉）

▲記者様、私は至つて貧しき家に生れまして、女學世界を買ふ事が出來ませんから、お友達のをかりてよんで居りますが、市内の愛讀者は皆私よりお進めいたしました。（尾道、愛讀者）

▲記者様、皆さま、私は恰度五年前からの愛讀者です、昨年學校を終へましてからは、尙更親しんで居り升、崇拜して居た元藤姉さんの音訪れが一寸も有りませんのネ、こひしくてなりません、内藤千代子様、貴女より私一つ年上ですが、貴女の筆力には口惜しいけれどもかなひません、種々着想を練つて上達を待て居りましたが、がまんがしきれなく成りました、私は生粹の江戸ッ子です、これからはドン／＼投書致します、出陣に臨んで一寸御一同様へ御近づきに、かしこ（濱町、露枝）

▲私は只今靜かな片田舍に木詩を友として日を送てをりますが、中々田舍にも捨てがたい風情が御座います、同じ月に對し花に向つても、皆都會に居りました頃より遙かに趣味を持ちます、何卒誌上にて御交り遊ばして下さいまし。（志谷郡在、あきはぎ）

▲岐阜かしくさま、岐阜のどのへんにお住みでございますか、ほんとにおなつかしう存じます、どーか末永く御交際を願ひます。（岐阜、中川靜香）

▲三月號に御投書あそばした伯耆の深山のさくら様、同國でおなつかしうございます、今後御交際をねがひます。（伯耆、香る梅）

▲遙く北米合衆國に居ます君よ、つたなき姿に有難き御言の葉。光子誠に嬉しく御禮申します（大阪市北區東梅田町二六九三　栗野光子）

▲私は草花が非常に好きで、數年前より色々の物を集めて培養して居りますが、今は數十種に達しまして年中花の絶ゆる事がございません、同好の方々も澤山ございませうが、御希望の方は實費として郵便切手五錢御送　下されば最も愛らしき和洋種數州御送り申上げます。（越後國南魚沼郡石打村大字大澤、橫澤ます子）

▲私は去年の春頃野崎さみどり女として投書致しました近江湖東の者です、今般都合あつて「さみどり」の「さ」を捨て「みどり女」と改めましたから左樣御承知下さい、記者樣一寸お尋ね致しますが文の方は短文、日記文、書簡文皆同封で宜しいでせうか。（近江湖東の一齒女みどり）差支ありません。

▲萩子様、深く御同情致します、私も不幸なる境遇に有つてあなたと同じ様な思ひをなして居ります、御差支なくば御住所御知らせ下さいませ、御手紙差しあげたう存じます。（奈良、田村靜子）

▲本郷のすみれ様、私今は此の様な田舍へ参つて居りますが、一昨年までは本郷に長らく暮して居りました者ですの、末長く御交際下さいませ、何卒お手紙下さい、そして共にお手紙で語り合ひませう。（北海道松前郡福山町、清水道子）

▲お懐つかしい妙香様、貴女きつと／＼末長く御手紙の通りにネ　貴女こそどうぞどし／＼お投書遊ばして頂戴、貴女の天然のお美しさと其文筆は全校羨望の的だつたのではありませんかお得意のをどし／＼お投書遊ばしてこの女學世界を花とかざつて頂戴よ。（野菊）

▲私は四の巣に住む者で、昔から女學世界を唯一の友として愛讀致して居ります者ですが、皆様何卒誌友の御仲間入させて下さいまし、私あのマダム振り面白く拜見致しましたが、文士の妻の所に至てなきました、私は文士の妻ではありませんけれども、同じく夫の操行になく者であります、この様な境遇に居ても、風吹けばと過させればならんものでせうか、ほんとに女ほどつまらぬ者はありませんねー、私をなぐさめてくれるのは女學世界のみです。（今樂平の妻）

▲桂川たか子様、私もね、ちよ子様はハイカラな方と思つてよ、そしてきつと此頃は日本がみ

よ、ほんとにあの方のお作はいつも〳〵感心するばかりですわネ、少女の戀……ほんとなのでせうか、もしほんとうしたらお可哀さうね、私御同情申上げるわ、あゝ私にも經驗があるが、今はもう泣いてもおひつかない(東京にて、ゆり子)

▲枯尾花樣、あなたは千代子樣の御友達ですの、御なつかしいですわ、私は梅で名高い月ヶ瀨の近くの田舍町に淋しく暮してる者でございます、どうぞあなた樣及び千代子樣の御ところを御知らせ下さいませんか、ほんとに一生の御ねがひで御座います。(伊賀上野、すみれ)

▲あはぢの佐藤樣、以後何卒誌上にて御交際下さいな、前には誠に嬉しいお思召を御示し被下感謝の言葉もムいません。(大阪府、愛讀女)

▲皆々樣の御內で、縮れ毛をおなほしなすつた方があるなら何卒誌上で如何してお癒しなさつたか教へて頂戴な。(仙臺、小春)

▲下野の松本通子さんの現住所御承知の方は誌上で御知らせを願ひます。(北海の花子)

▲すみれ會內房江樣、同情いたします、末ながく御交際を、(福島縣桑折北町六〇、三浦靜江)

▲御玉章下すつた諸姉上よ、都合によつてこれからは誌上でのみ御交際を願ひます。(京都にて井上芳子)

▲ふき上げの御姉樣、貴女は私を御忘れ遊ばして?、いゑ〳〵そんな事はあなたに限つて御座いますまい、過ぐる秋の宵月のかげ清らかなみ庭に立つて、ヴアイオリンを合奏し、夕陽山の端に入る野路の暮れ方、道の邊のすみれを爭そつた、一年のむかし、思へばそゞろになつかしさが身にしみます、姉樣よ、死すとも甦らしてふ誓ひを忘れ給ふな。(靜江)

▲北海道小百合子樣、御同情しますよ、私も母に別れ、友に別れ、淋しく日を送つて居りましたが、近頃はあるお宅で樂しく暮して居ます、今度貴女の御投書を拜見しまして、なんだかおなつかしくて〳〵なりません、何卒此後御交際を願ひます。(大阪　琴子)

▲御同情に富ませ給ふ誌友の諸子よ、萬一皆樣の中に稲井川上町の藤元津代子樣の最近の狀を御知りのお方は現住所と共に御手紙ながら御知らせ下さいませんか、何卒お願ひ申します。(遠州濱名郡芳川村大柳、太田美津子)

▲北海道の小百合樣、私はほんとにお同情いたします、私もあなたと同じく母もなく友もなく只々本誌を唯一の友として此片田舍に淋しい月日を送つてゐます、何卒以後友として御交り下さい。(備中、なでしこ)

▲スヰートホームの作者は案の條千代子樣でしたわね、どうも千代子樣獨特の御才筆だ・思つて居ました、それから皆樣私もこんど御仲間に入れて戴きます、不具々ですが、不具者つて、つんぼなので御座いますのよ、あはれと思し召して御交り下さいまし。(四谷、高林すゞ子)

▲私は京都の女學校を出まして、今は當地に居ります、不束者でございますが、毎日淋しく暮して居りますからどうぞ御手紙を頂きたう存じます、京都白梅女樣、私もそんなに思つては居りました、又私の故郷に御住居遊ばす御樣子で、ほんとに御なつかしう存じます、御處はどの邊でございますの。(大阪、紫葉)

▲私は二年前から女學世界の愛讀者です、末長く親密なる交際を願ひます、記者樣幾年になりましても誌友俱樂部を置いて戴く事が出來ますか。(京都にて、靜代)

▲神谷都子樣、御言葉に甘えまして御願ひ申します、私も二三年前より拔毛が多くて實に困つて居ります、何卒食療法を御教へ下され度幾重にも御願申し上げます。(埼玉縣北葛飾郡吉川村大字高久、深井ふさ子)

▲諸姉上樣　私は誠にお恥しいしだいですが、十歲の高等小學卒業後裁縫一二年にて最早十九歲の春をむかへ、誠にくやしくつてなりません、一度嚴重な御家庭にてたゞ三日間なり奉仕ふて

下さいませんか、決してつまらぬ御邪魔はかけません、身も心もつくしだいつくします、もし御同情なし下さいますれば、次號にて御住所御知せ下さいませ、何時にても參ります。(大和の名無草)

▲外國人と繪葉書の交換を致すは誠に樂しみ深いもので御座います、日本の事と聞けば夢中となる外人の事ですから、非常に喜んで交換して下さいます、繪葉書を出した日から返事の來る迄指折り數へて待たれます、今度日本の御婦人たちに交換したいと云ふ外國の婦人からの申込が御座いましたから、往復はがきで申込になれば御知らせ致します。(京都市上立賣通室町東入ル日本通信交換倶樂部)

▲あゝ、私も千代子様の様な文才があつたらどんなに嬉しいでせう。これもやはりヴアニチーの中なんでせうか、でも同じ虚榮の夢に憧がれでもこれは少し趣味がちがひますからいくらか罪も輕いだらうと存じます。(青葉の里にて、大和田花子)

▲皆様、私は愛讀者の一人となりました、何卒御交際下さいまし、岡山の長尾住野様、どうか御交際を、私し梅子様とは大の仲よしでございます、そしてあなたには一二度お目にかゝつた事がある様に存じます。(岡山、貞香)

▲大久保の妙香様、ちぬ浦の美鈴千様、本當に御懐しゆう御座います、以後誌上で小さき妹と思し召して御交際下さいまし、尚諸姉様方も御交際下さいまし。(相模の八重の)

▲私共は田舎住ゐの無學なものですが、此の度愛讀者の一人となりました、何卒あはれな妹と思し召して誌上の御交りを願ひます。(青森、うの花女、ほとゝぎす女)

▲房江子様、御なつかしゆう御座います、不束者ながら妹と御思召して末永く御交り下さいまし。(相州三浦郡葉山木一色、今せき八重野)

▲淺草の吉田貞子様、私も貴女と同姓同名で、しかも東京の方にて、如何にも御なつかしうてなりません、おまけに今年の春に母に別れ、女の姉妹なき身には、尚更らなつかしくて／＼、どうぞ來月の誌上へ、お住所御知らせ下さい、妹と思召してお手紙をおねがひいたします。(京都、吉田貞子)

▲大阪府下愛讀者様、私は大にあなた様の御意見に御同意いたします、ほんとに千代子様のは氣持のいゝお作れ、いつもよむたびに樂しい樂しい別天地へ行つた様な心地になつて暫時は何をしたやらさつぱり無中に……まるで覚醉剤の様れ、何しろ感心の至りですわ。(京都上の店市場、小野道子)

▲ちぬの浦美鈴女様、丸山操子様、佐々木光子様、吉田竹子様、私は至つて不束な少女でございますが、何卒御交際して下さいませ。(出雲國松江市紙屋町四拾四番地　佐藤八重子)

▲いつも目出度拝見するのは内藤千代子様の御筆の跡でて、意の到る處自由自在に御發表なさる御手腕には驚くの外ありません、今後記者様に口繪の内にでも諸友の面影を出す事を許して戴いて、千代子様始め皆々様のなつかしい御姿を拝見したうございます。(越後、希望女)

▲私は一番女學世界が好きで、學校にゆかないやうになつてからずつと愛讀してゐる者です、これからはお仲間に入れていたゞきますからどうぞお心安く御交際をねがひます。(大阪府下大和田、野の花より)

▲本郷のすみれ様、貴女はこれ迄にそんなに澤山大變な事に御遇ひなさいましたの、私同情してよ、以後は度々御手紙下さいませ、それから大和の堀島さよ子様、私れ名所繪葉書差上げましたが、戻つて參りました、如何したんでせうね。(石川縣金澤市長町七の六、咲山清子)

▲私も以前よりの愛讀者で、山清きふる郷をはなれてこゝむさし野にさすらひの身ですから、あはれと御思召して御交際を願ひます。(埼玉、近藤富士子)

▲諸姉様、私も愛讀者の一人となりましたから、何卒末ながく御教導を願ひます、殊に私は大の和歌狂ですから、御同好の諸姉様にはとりわけ御交際を。(淺草、綾方靜波)

▲愛讀者の諸姉様、私は第九卷第一號から愛讀してゐます、何卒誌上で御交際下さいまし、まことに不束ものですが。(岡山市、野菁薇)

▲私は、本欄の月に進んで盛になつて行きつゝあるを非常に喜んで居ます、會誌友の姉様方に一寸申し上げます。他事でございますが私も前月一日若い母となりました。(福岡縣浮羽郡江南村、竹石はるよ)

▲私は本年一月から愛讀者となりました、不束者ですが末永く御交際を願ひます、又すみれ會内房江様、田舎者ですが末永く御交り下さい。(佐渉郡河崎村大字河崎、角坂かつ子)

▲私に御はがき下さいました熊本の北太よし様私れすぐに御返事出したのに戻つて來たのよ、どうしたんでせう、それから野菊様はほんとに一番御上手でゐらつしやるのね、私あの方の文一番好きよ。(奈良、富澤美穗子)

▲ちぬの浦の美鈴女様、其後はとんだ失禮致しました三月號の本欄でおたづね下さいましてほんとに嬉しうございました、でも御想像よ、實の樣な物語など持つてる者とは大違ひよ、平々凡々の生活をしてゐる純粋の田舎娘ですわ、私ほんとに淺學といふより無學な者ですが、御見捨てなく御交際下さい、住所は左の所ですからおひまにはお手紙頂戴な。(淡路國室津村、内海千鳥子)

▲記者様及び誌友の皆様、私は經濟がどうしても旨く行かないので毎月末にはいつも〳〵困ります、それに次で皆様に伺ひますが、何か自宅で出來ます内職を御教へ下さいまし、編物等致して見たいと思ひますが、編物の内職をさして下さる所を御存じの御方はどうぞ此の誌上で御知らせ下さいまし。(東京にて、玉藻の浦)

▲京都同志社女學校の宮川しづ江様、御尋ね致しますが、貴女は神戸の女學院にゐらつしやいませんでしたか、私の姉も貴女を承知して居りますやうですのよ、なにとぞ次號にてお知らせ下さい。(韓國釜山、長谷場純子)

▲千葉の秋葉輝子様、先日はおはがきありがたう御ざいました、貴女様のお所がハッキリ分りませんでしたが、たぶん武射郡だらうと思ひましてすぐお返じ差上げましたが、届きましたでせうか、おはがきでお知らせ下さいませ、栃木縣の松浦ちづ子様、繪はがきの交換をおねがひ申します。(京都、小島か代)

▲和歌好きの諸姉様の御交際を願ひます、麥木詩の廣告により和歌研究の新潮歌壇へ加入しましたが、誠に懇切なる指導振りにて非常に速達するやうに思ひます、どうしたらば和歌が詠めるかと仰つしやいました千葉の靜江様に新潮歌壇を紹介いたします。(須磨の里にて、草村笑也子)

▲河岡潮風様、此頃は一寸も評判記おかき遊ばしませんのね、今迄おかきになつたの許りが女學校ではございませんわ、女學校はいくらも御座います、芝には棚橋女史を戴いてるホワイト、ラインもございます、御病氣御全快のあかつきは是非お書き下さいまし。(東京、櫻)

▲記者様始じめ皆様よ、私一號からの愛讀者ですが、以後ドシ〳〵投書致しますから宜しく願ひます、内藤千代子様陰ながらお慕ひ申して居ります。(室蘭、武藤榮子)

▲皆様私も愛讀者の一人となりました、私は男の兄弟ばかりで何の樂しみもありませんから、どうぞ今後姉妹のやうに御交際して下さい、皆さんの中で女學校卒業遊ばされた御方、どうぞ私も田舎の女學校の卒業生の一人ですが、一時的でなく末長く御文通して下さい、御手紙下されば早速御返事差上げます。住所は記者様に御聞き下さい。(栃木　初音子)

新刊紹介

新洋行土產　嚴谷小波著

曩に洋行土產二卷を著して多大の喝采を博したる小波山人は今回又渡米實業團に加はり物質的文明の最繁盛たる北米の四十八都を巡遊して觀光見學の所得頗る多かりしが、こゝに新洋行土產となりて溢るゝごとき其旅行鞄を開かれたり

上卷收むるところ於審破例日記、地洋日記實業團諸、米國の女と子供、東亞旅籠くらべ其他數項いづれも目新らしき事多くして多大の趣味な以て讀まれしが、就中およばれ日記は實業團一行が新橋出立より桑港歸着に至るまで漫遊一百日間に涉つて毎日の出來事を目睹耳聞し實際を例の諧謔輕妙なる文にておもしろく記されたれば讀者は居ながらにして彼の地に遊び、勞せずして彼の地の名邑大部を遊覽觀光するの思あり上卷定價一圓三十錢博文館發行

新撰名勝地誌　田山花袋編

△畿內の部△東海道西部、

旅行は生活の大なる慰安にして又廣き趣味眼を養ふ實際の學問なり、この故に世の繁劇に伴ひて旅行する人益々多く、名所古蹟の探討に趣味眼を飽かしめて追懷思慕の海を廣ふするは眞に意味ある旅行の目的といふべし本書は名勝地誌といふも實は旅行者の案內記なり、諸國名勝のガイドブックなり、著者は有名の旅行家にして足跡全國に普く、殊に趣味深き美文家なれば各地の風土民情勝概を記する他の旅行案內の如き平板無味に陥らざるのみならず又よく交通の難易と名所の順路とを詳しく記したれば名勝探討を目的として旅行する者には至大の便宜ある案內者なり價六十錢博文館

寫生旅行　魔宮殿見聞記　吉田博著

魔宮殿とは彼のアーピングの小說にて有名なる西班牙グレナダ市のアルハムブラの宮殿の事なり、アルハムブラは古代のアラビヤ建築と裝飾の遺物として世界に有名なるのみならず、其の建築工事に關しては不思議の傳說や迷信や怪談話を有し夙に歐米人の好奇心を飽かしめつゝある處なり、著者は畫筆を携へて世界漫遊を企てし時この迷信深き怪宮殿に數日間滯在して荒廢せる不思議の建築物を寫生すると共に其宮に關するあらゆる傳說を見聞したりといふ本書は即ちその感想を記し傳說を採錄せるものにして單にアルハムブラの案內記として見るも又中に趣味あるものなり價九十錢博文館

△心理學通信講話　同文館發行

元良博士の意志の修養、坪井博士の米國人種の裂作品の意匠、上對學士の眼の誤の話、其他無育教育、表情の話等を集めたるものなり心理學を通俗的に解說したるものにて何人にも解し易き書なり價四十錢

△諸名家孔子觀　孔子祭典會編

大聖孔子の人格は物質的文明の盛んなるに及んで益々其の光輝を放てり、是れ即ちこの大聖人の人格のいよ〳〵大なる所以にして又孔子の祭典が三面記事と相反映して新聞紙の重要なる記事となる所以なり、本書は孔子祭典會の發起より昨年に至る三回の講演を集めたるものにて加藤弘之、井上哲二郎　三宅雄次郎・重野安繹　澁澤榮一、坂谷芳郎等　江湖の宿儒名士の孔子觀なり定價八十錢博文館

佛遺教經講話　前田慧雲述

本書は佛教界に於て學識聲望一世に高き前田博士が專ら通俗を旨として一般求道者の爲めに講話せられたるものなれば何人にも解し易き事き佛の教へなり、元來は釋尊の遺教なれども專ら今日の日常生活に例を引いて說明されたれば家庭の讀物として修身齊家養心の爲め至大の益あるべし。價六十錢神戶市中山手通り靈光社發行

花嫁の準備と實務　東京婦人學會編

女子が結婚して眞妻たるべき心得を說きたるものにて嫁入の準備と結婚後の務を各方面に至りて記述し、れて嫁入先の區別と特種の注意を與へて、醫師、商家、裁判官、軍人、文士、政事家、官吏、會社員、學者、外交官、教師、新聞記者等を擧げ是等の人に嫁するには如何なる心掛を要するかを丁寧反覆に記述したれば未婚者の參考として益あるべし定價五十錢錦町二松堂發行

室內裝飾法　近藤正一著

衣食足りて禮節を知る人が趣味を高雅にすべきは勿論の事なり、水草を逐ふて轉居する野蠻人すら尙その座右を裝飾するの趣味を解するに於ておや本書は即ちこの趣味眼を以て高級美術と稱する室內裝飾の方法を各項に涉つて說明したるものにして四季の座敷かざり、器具の調度並に配置法、飾り方、茶室、食堂、客齋、應接間、玄關さては園遊會、撰雛店舖の飾り方まで詳しく說述したれば一般家庭、主婦の心得として切實なるものなり、家庭百科全書第二十六編なり、定價四十五錢博文館

△女子作文全書　大日本國民中學會編

女子に必要なる書簡文・日記文等の作法、文例其他詳細なる注意を記述したるものにして、此種の作文法の大體を會得するには一寸便利な書なり。定價金六拾五錢、神田區駿河臺袋町東京國民書院發行。

兄弟　田中貢波著

こは著者が、十九を一期として世を去りし令弟太一君を懷ふて、後のしのび草にもと、著者及び令弟の時をり稿せし篇を集めたるものなり布くも筆の到る處必ず詩あり風刺あり、なかなか趣味多き書なり　定價金參拾五錢、麴町區有樂町三丁目有樂社發行。

才媛文壇懸賞募集（六月十二日〆切）

▲美　文（二十字詰十五行以内）
▲日　記（二十字詰十五行以内）
▲書簡文（二十字詰十五行以内）
▲いろ〳〵の經驗（十五行以内）
▲和　歌（一人一首）
▲俳　句（一人一句）
▲笑話 ▲誌友倶樂部

△美文、日記、書簡文、いろ〳〵の經驗の四種は用紙は半紙の事△和歌、俳句、笑話、倶樂部は端書に限る、△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす△名宛は博文館内女學世界宛とし△原稿に文の種類及び住所氏名を明記する事

賞品

△美文△日記△書簡文
天賞壹圓五拾錢、地賞壹圓、人賞五拾錢
△和歌△俳句△笑話
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢
△いろ〳〵の經驗（賞壹圓以下）

毎月一回一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
定刊數…………十二冊
内 增刊四回：一、五、九、十一月價格同一

郵税 一冊 二錢

廣告料

廿四字詰	一行	四半頁	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	……	五十五圓
一等	……	……	廿三圓	四十五圓
二等	……	十圓	十九圓	三十八圓
三等	五十錢	七圓五十錢	十四圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十三年五月十一日印刷納本 第拾卷第七號

編輯發行人 松原岩五郎
印刷人 山田英二
印刷所 博文館印刷所 東京市小石川區久堅町百八番地

發行所 東京日本橋區本町三丁目 博文館

電話本局 三百三番 千十八番 二千六百二十番 三千二百二十九番

五月一日發行の弊館雜誌は發行元
全部賣切れと相成候間各地販賣店
より購讀下され度希上候

東京
本町　**博文館**



▽小説　ではどんなもの（古洞書）……塚原澁柿
▽脚本　カンデ井ダ（春江書）……中村春雨
▽小説　暗（春帆書）……長谷川時雨女史
▽小説　二つの悲劇（清方書）……廣津和郎
▽喜劇脚本　巧すぎる人（義德書）……金子紫草

以上は五月號の本欄にして、一讀三嘆に値せざるものなし、次に雜錄欄にては**演藝界**最も振ひ**岡鬼太郎**氏が、當座帳は、眞に折紙附の逸品と稱せらる、其他落語界、講談界、義太夫界等の趨勢を窺ひ得べきもの、本欄を措て他にあるべからず、尚ほ**活社會**　**長廣舌****忙中閑**等本誌獨得の讀物たるべく**百花園**にては在り**懸賞俳句**の選評を新派舊派の諸大家に依囑し、以て斯道研究者を滿足せしむる外、**狂句狂歌**の飄逸なる、**情歌端唄**の洒脫なる、**小品文**の簡潔なる、**一口噺**の輕妙なる、尚且**滑稽問答**に至つては、奇絕妙絕他に匹儔を見ず、最後の**雜題**の如きは每回新材料を提供して我が國文學遊戲のいかに多趣多樣なるかを示せり。

文藝倶樂部

第拾六巻第七號……五月一日發行　東京本町　博文舘

菊判本文三百廿頁　口繪精巧木版數十度刷錦繪
三色版寫眞版……婉麗花の如き者十數枚
正價貳拾五錢　郵税貳錢五厘

女（後付の一）

太陽

第十六卷 第六號

既成發行
正價金三十錢 郵稅三錢

洋裝四六倍判
紙數二百五十六頁
口繪光澤紙寫眞版
四頁三色刷二頁
並寫眞版十二頁

◉死後生活論……松波法學博士
◉英帝國の將來……末廣法學博士
◉法制上より見たる赤穗義學……三浦文學博士
◉醫師の修養（谷本文學博士）◉日米の間如何なる運命を有するか（中橋德五郎）
◉世界三時間◉生活費向上の問題◉近世の歌風（佐々木信綱）
◉國民政治思想の現狀及促進法
大隈伯、林伯、三宅博士、大石氏、長谷場衆議院長、竹越氏、鳩山春子氏、鎌田氏、牧野男諸氏談
◉彗星の話……新城理學博士
◉聖ジュリアン（森鷗外譯）◉愛と愛（廣津柳浪）
◉ポンペー埋沒談（箕作文學博士）◉國技館の技を永久に傳ふる道（野田理學博士）
◉ハレイ氏の傳（上野清）
◉南米の將來と今後の移民問題……浮田法學博士
◉政治上の劣等國民……淺田江村
◉推理上の滿足……長谷川天溪

販賣用電話 本局二六二〇番

東京本町 博文館

振替貯金口座 東京二四〇番

女（後付の二）

毎月二回

壹日 十五日 發行

第九巻第九號 既成發行

商工世界

太平洋

東京本町 博文館 發行

大判(四六判二倍大) 紙數……百十二頁 光澤紙寫眞版四頁

正價…金拾二錢 郵稅…壹錢五厘



●昨今の景氣は如何なる點まで恢復したるか

輸出入、海運、倉庫、株式、銀行、製造業、各方面の大家十數人

●國民讀本自作に對する大隈伯の大氣焔

||日本國民論●虛弱健忘の予が博士と成りし珍例、並に積極的身心鍛錬の衛生學(二木醫學博士)▲予がドルマン氏の家庭より觀たる米國觀(織田一君)▲工場法と武士道(浮田博士)▲福澤先生獨特の運動法(鎌田塾長)▲如何なる技術家が最も需要多きか(手島精一君)▲斯くの如き劣等店員の數多の實例あり(矢吹一郎君)▲職工たる予の米國職工觀(承前)▲名士十數人の園藝道樂(覆面冠者)●横濱、神戸、兩港の實業家對照評論(秋風郎)●石油成り金と石炭成り金

女(後付の三)

實業界の少年は來れ良友茲にあり

☞毎月一回一日發行◉四六二倍大判上等紙七十二頁印刷美麗
毎號寫眞版數十面入正價一册金十錢郵稅一册金壹錢







澁澤

實業少年

實業少年を讀みて心の養生を成さゞる人は必ず立身出世の機會を失ふ人なり





最近五月號の要目

◉日本銀行副總裁高橋是清氏の奴隷時代の慘狀
◉博士學者も知らぬ鈴蟲松蟲等養殖法
◉私を感心せしめた貧民學校生徒の心がけ　森村市左衛門
◉世界旅行者の各方面の貴い經驗話し
◉三十八年間勤續日本第一の新橋驛長

◎商店見世飾りの手本
◎繪にて報ずる雜報
◎日本の大發明家　手島校長
◎生來第一の愉快　柿沼社長
◎獨習欄（英語、算術、機械、地理、作文、電報文等、）
◎懸賞募集、手紙其他數件

（最珍口繪）
◎午前八時の高橋是清氏
◎うちは製造の順序
◎呂宋のマニラ見物
◎英國大商店の驚くべき設備
此他數十面の………精巧挿畫!!!

發兌元　東京本町　博文館

痛快天下無敵！腰拔は讀む可からず

冒險世界

既成發行

第三卷第六號

正價十五錢
郵税一錢五厘

◉斷崖千丈下の垂籠（油繪三色版）

死に損つた暗中の鐵橋――春吉蠻客と滿洲ゴロツキ――覆面の怪美人――獅子林に美しき生首――中村春吉女（後付の六）

大好評！大歡迎の冒險世界は、更に五月號より最新式の編輯法を取り、滿紙に一大光彩を放つ。冒險小說猛犬燈臺（押川春浪）は愉快なる完結を告げ。新出の讀物には險奇小說空中の奇遇（虎髯大尉）＝碧血飛ぶところ櫻花國健兒の猛闘（前田光世）＝千辛萬苦して滿洲に大金礦を發見せし經歷（中村春吉）＝星亨君の殺されたる時（井上敬次郎談）＝吾輩が此胸を刺された時（板垣伯談）＝支那軍艦を分捕らんとせし龍骨猛客の支那旅行＝（運動界大立物）三島彌彦物語＝吾輩が五たび死損つた話（押川春浪）＝地球最後の大悲劇（髯の少尉）＝覆面怪美人（荒野白衣）＝死を決して南米大河を渡りし日本青年（河岡潮風）＝明治奇骨傳（鐵血書生）＝エヂソン大發明計畫＝斷崖千丈下の奇異の垂籠（阿武天風）＝早大撰手の米國遠征中最も感激せし事（安部磯雄）＝その他書生界名物男＝尚武世界＝運動世界等壯絕快絕を極む。讀め！讀め！讀め！

東京本町 博文館 振替口座東京二四〇番

◉懸賞問題 現代各方面痛快男子十傑投票及び第一回得點披露！

ご覧下さい！



五月十日發行

中學世界

第拾參卷第六號

正價一册二十錢……郵税二錢

菊判本文紙數二百四十頁：每號外國語欄十餘頁

（口繪）…水彩畫、ペン畫、鉛筆畫、寫眞版……十數枚

所載概目

●評論……（栗原基）●書生時代の回顧……（清水法學博士）●ハイカラ學生と蠻的學生……（針塚專門學務局長）●商船學校學生の練習船航海談●巴里の美術學生々活……（藤島東京美術學校教授）●私の投書家時代……（青木法學士）●漢文の白文を容易に讀む法……（記者）●國運の發展と青年の努力……（栗原廣島高等學校教授）●小品數篇……（諸作家）●講話……（三好理學博士）●十七八の頃……（永井荷風）●上京苦學問題の解決……（奮鬪兒）●競爭試驗を受ける弟へ……（其の兄）●殺人國奇談……（軍艦阿蘇乘組 上田大尉）●水產講習所生活……（R生）●ロンドンタイムスの話（栗原文學士）



東京本町 博文館 振替口座東京二四〇番

女（後付の七）

女（後付の八）

農學博士稲垣乙丙君閲
工藤齋君著

新編 家庭の科學

抑も婦人の本務たる日常家事に於ける百般の事項は悉く科學の理に支配せられざるはなし然るに本邦婦人は概してその智識に乏しきが爲め往々妄説を信じ鑑別を過り識らず知らずの間に不經濟、不衛生の動作をなすことあるは痛歎に堪へざる所なり著者工藤齋君は高等女學校に教鞭を執るの傍ら理科と家事科とに連絡を付し兩者共通の資料を採て本邦の主婦たる人にその智識を授け以て婦人の本務を完全圓滿に盡さしめんことを欲したるもの即ち本書なり

全一册洋裝菊判
美本紙數四百四十二頁
正價金八十五錢
郵税十錢

今井柏浦君選
榊原蕉園女史口繪

古今女流俳句集

女流の俳句は、男子の俳句に較べて放膽豪宕の氣に乏しいが、纎細、優婉、温情自然に溢る、天眞流露の趣は、到底男子の遠く及ばぬ處がある、畢竟女子は男子に比べて、思想の緻密なると共に、感情の温柔なる處が多いから、俳句なり歌なり、女性的と男性的とは、歴然した區劃があつて、其觀察點も抒情の徑路も違つてゐる、即ち女性的俳句の特色は、男性的よりも多く同情に富める點にある。この書に蒐めた俳句は、古今を通じて女流の佳吟名什約三千其秀逸なるものに至つては優に男子を凌駕するものがある、俳句を學ばんとする婦女諸君は固より女性の俳句を究めんとする人は是非一本を備へねばならぬ。

全壹册
菊半截美本
貳百五十頁
正價卅五錢
郵税四錢

東京本町 博文館 振替口座東京二番

女學世界
（每月一回二十六日印刷納本）
明治四十三年五月十一日印刷納本 第拾卷第七號 （增刊 世渡り上手） 明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可